

柳川駅東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告 第2集

し も ひやく ちょう

下百町遺跡群Ⅱ

— 福岡県柳川市下百町所在遺跡の調査 —

柳川市文化財調査報告書 第12集

序

柳川市教育委員会では、平成 18 年度から平成 25 年度にわたって、柳川駅東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。本報告書は、平成 19 年度から平成 25 年度に発掘調査を行った、柳川市三橋町下百町地区に所在する 11 の調査区の発掘調査記録です。

下百町地区は矢部川支流の沖端川左岸の微高地に位置しています。今回の調査では、中・近世の集落跡や墓地を確認しました。何条もの溝の存在は、当時の人々が日々の生活をよりよく営むために、区画や排水を意図して掘削したことがうかがえます。溝で仕切られた敷地内からは、建物跡のほか多数の土坑や井戸も検出されました。こうした溝や土坑、井戸からは、供膳用の食器や日常雑器はもとより、中国から海を越えて渡ってきた輸入陶磁器も数多く出土し、当時の人々の暮らしぶりの豊かさを示してくれます。また、近世・近代の墓地からは、棺に使用された大甕や木桶も見つかっており、葬送の様子を知ることができました。このような発掘調査の成果は、地域の歴史を知る上で欠かすことのできない貴重な歴史資料であり、今後は多くの人々にとって大切な歴史的財産となることでしょう。

発掘調査から整理・報告書作成にいたるまで、関係諸機関や地元の方々をはじめ、多くの方々からご協力・御助言をいただきました。厚く感謝いたします。

平成 29 年 3 月 31 日

柳川市教育委員会
教育長 日高 良

例 言

- 1 本書は、柳川駅東部土地区画整理事業に伴い土地区画整理事業組合の委託を受けて柳川市が実施した、柳川市三橋町下百町所在遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は柳川市教育委員会が主体となり、柳川市教育委員会生涯学習課文化係 堤伴治・橋本清美、上田龍児、堤良行、立石真二、柳川市区画整理推進室臨時職員 原田智也が担当した。本書に掲載した遺跡及び調査年度は以下のとおりである。
 - 下百町児童遺跡第1次調査（平成19年度）
 - 下百町児童遺跡第2次調査（平成20年度）
 - 下百町児童遺跡第3次調査（平成21年度）
 - 下百町屋敷の内遺跡1次調査（平成20年度）
 - 下百町屋敷の内遺跡第2次調査（平成21年度）
 - 下百町屋敷の内遺跡第3次調査（平成21年度）
 - 下百町神の前遺跡第2次調査（1区）（平成22年度）
 - 下百町神の前遺跡第2次調査（2区）（平成22年度）
 - 下百町神の前遺跡第2次調査（3区）（平成22年度）
 - 下百町神の前遺跡第3次調査（平成23年度）
 - 下百町神の前遺跡第4次調査（平成24年度）
- 3 本書に掲載した遺構実測図の作成は調査担当者が行った。
- 4 本書に掲載した遺物の整理復元・実測図作成は橋本清美・西美智代・野口宏美・松本正子・湯川琴美・北山美穂・中村泰代が行った。
- 5 本書に掲載した空中写真撮影は東亜航空が、遺構写真撮影は各担当者が、遺物写真撮影は堤・橋本が行った。
- 6 遺構・遺物の製図は西・野口・湯川が行った。
- 7 出土遺物・写真・実測図は全て柳川市教育委員会において保管している。
- 8 本書遺構実測図の方位はすべて世界測地系に依っている。
- 9 本書の執筆・編集は橋本が行った。

本書遺構の略表記は次のとおりである。

SB…掘立柱建物、SK…土坑、SD…溝、ST…墓、SA…欄列、SX…不明遺構、SP…ピット

目 次

I	はじめに	1
	1 調査に至る経緯	1
	2 組織	2
II	位置と環境	6
III	調査の内容	11
	1 下百町鬼童遺跡第1次調査	11
	2 下百町鬼童遺跡第2次調査	22
	3 下百町鬼童遺跡第3次調査	67
	4 下百町屋敷の内遺跡第1次調査	75
	5 下百町屋敷の内遺跡第2次調査	103
	6 下百町屋敷の内遺跡第3次調査	134
	7 下百町神の前遺跡第2次調査	181
	8 下百町神の前遺跡第3次調査	202
	9 下百町神の前遺跡第4次調査	215
IV	その他の出土遺物	221
V	出土人骨の分析	228
VI	おわりに	235

図 版 目 次

図版 1	1. 下百町鬼童遺跡第1次調査区遠景(南上空から)
	2. 下百町鬼童遺跡第1次調査区全景(南上空から)
図版 2	1. 重機による表土掘削
	2. 西側表土掘削状況(北から)
	3. SK-7土層(西から)
図版 3	1. SK-7(西から)
	2. SK-8(西から)
	3. SK-22(北から)
図版 4	1. SK-23(北から)
	2. SK-24土層(北から)
	3. SD-1土層(東から)
図版 5	1. SD-4(北から)
	2. SD-9土層(南西から)
	3. SD-13土層(東から)
図版 6	1. SD-28(東から)
	2. SD-31土層(西から)
	3. SD-32土層(西から)

- 図版 7 1. 下百町鬼童遺跡第二次調査区全景(南上空から)
2. SK-1(北東から)
3. SK-2(東から)
- 図版 8 1. SK-6(北から)
2. SK-7(東から)
3. SK-9(北西から)
- 図版 9 1. SK-11(東から)
2. SK-14(北から)
3. SK-15(南から)
- 図版 10 1. SK-20(南から)
2. SK-25(北から)
3. SK-26(東から)
- 図版 11 1. SK-27(南から)
2. SK-28(南から)
3. SK-29(南から)
- 図版 12 1. SK-30(南から)
2. SK-34(東から)
3. SK-35(西から)
- 図版 13 1. SK-36(北から)
2. SK-38(南から)
3. SK-42(北から)
- 図版 14 1. SK-45(西から)
2. SK-51(東から)
3. SK-55(北から)
- 図版 15 1. SK-56(南から)
2. SK-57(東から)
3. SK-59(西から)
- 図版 16 1. SD-12(東から)
2. SD-12 土層(東から)
3. SD-18 土層(東から)
- 図版 17 1. SD-21 土層(東から)
2. SD-23・44(北から)
3. SD-44 土層(北から)
- 図版 18 1. SD-44 竪杵出土状況(南から)
2. SD-46 土層(北から)
3. SD-47 土層(西から)
- 図版 19 1. SD-53 土層(東から)
2. SA-43(南から)
- 図版 20 1. SA-43 礎石P-2
2. SA-43 礎石P-3
3. 中央区整地層獣骨出土状況(北西から)
- 図版 21 1. 下百町鬼童遺跡第3次調査区遠景(南上空から)
2. 下百町鬼童遺跡第3次調査区全景(南上空から)

- 図版 22 1. 調査区全景(西から)
2. SK-3(北から)
3. SD-1(北から)
- 図版 23 1. SD-4 土層(東から)
2. SD-4(北東から)
3. SD-6 土層(北から)
- 図版 24 1. 下百町屋敷の内遺跡第1次調査区全景(北上空から)
2. 下百町屋敷の内遺跡第1次調査区南側全景(北上空から)
- 図版 25 1. SK-7(南から)
2. SK-13(北から)
3. SK-14(北から)
- 図版 26 1. SK-16(南から)
2. SK-20(北から)
3. SK-21(北から)
- 図版 27 1. SK-22(北から)
2. SK-23(北から)
3. SD-6 土層(南東から)
- 図版 28 1. 下百町屋敷の内遺跡第2次調査区全景(西上空から)
2. 下百町屋敷の内遺跡第2次北調査区全景(東上空から)
- 図版 29 1. SK-4(北から)
2. SK-17(北から)
3. SK-27(東から)
- 図版 30 1. SK-31(東から)
2. SK-34(東から)
3. SK-46(南から)
- 図版 31 1. SK-48(南から)
2. SK-51(北東から)
3. SK-52(南から)
- 図版 32 1. SK-56(南から)
2. SK-69(南から)
3. SD-2 土層(東から)
- 図版 33 1. SD-2 五輪塔出土状況(南東から)
2. SD-15 土層(東から)
3. SD-33 土層断面(東から)
- 図版 34 1. SD-39 土層(北から)
2. SD-41 土層(東から)
3. SD-43 土層(東から)
- 図版 35 1. 下百町屋敷の内遺跡第3次調査区全景(北上空から)
2. 調査区全景(南西から)
3. 北隣近世・近代墓群(北から)
- 図版 36 1. SK-3(北から)
2. SK-15(西から)
3. SK-23(東から)

- 図版 37
1. SK-24 (北から)
 2. SK-26 (西から)
 3. SK-28 (西から)
- 図版 38
1. SD-1B区土層 (南東から)
 2. SD-1E区土層 (東から)
 3. SD-1F区土層 (西から)
- 図版 39
1. SD-20 土層 (西から)
 2. SD-30 土層 (東から)
 3. SD-30 石塔群出土状況
- 図版 40
1. 下百町神の前遺跡第2次調査第1区全景 (北上空から)
 2. 調査区全景 (北西から)
 3. SK-29 土層 (北から)
- 図版 41
1. SK-29 (北から)
 2. SK-46 (西から)
 3. SK-47 (東から)
- 図版 42
1. SK-51 (北から)
 2. SD-27 土層 (東から)
 3. SD-60 土層 (南から)
- 図版 43
1. 下百町神の前遺跡第2次調査区第2区全景 (南から)
 2. 下百町神の前遺跡第2次調査区第2区全景 (北から)
 3. SB-22-P-4 (東から)
- 図版 44
1. SB-22-P-5 (東から)
 2. SB-22-P-7 (東から)
 3. SK-7 土層 (北から)
- 図版 45
1. SK-16 (南西から)
 2. SK-20 (南から)
 3. SD-23・24 土層 (東から)
- 図版 46
1. 下百町神の前遺跡第2次調査第3調査区全景 (南東から)
 2. SE-16 検出状況 (南から)
 3. SE-16 (南から)
- 図版 47
1. SK-6 (北東から)
 2. SK-7 (北から)
 3. SK-13 (西から)
- 図版 48
1. 下百町神の前遺跡第3次調査区全景 (北上空から)
 2. 北側調査区全景 (南西から)
 3. 北側調査区全景 (北西から)
- 図版 49
1. SB-25 (西から)
 2. SB-25 P-22 (南から)
 3. SB-25 P-25 (北から)
- 図版 50
1. SK-5 (北から)
 2. SK-9 (東から)
 3. SK-17 (北から)

- 図版 51 1. SK-30 (西から)
2. SK-32・33 (西から)
3. SD-34 土層 (南西から)
- 図版 52 1. SD-47 土層 (西から)
2. ST-12 (北から)
3. ST-49 (南から)
- 図版 53 1. 下百町神の前遺跡第4次調査区全景 (東から)
2. 下百町神の前遺跡第4次調査区全景 (南上空から)
- 図版 54 1. 基本土層 (西から)
2. SK-5 (南から)
3. SK-14 (東から)
- 図版 55 下百町鬼童遺跡第1次調査区出土遺物①
- 図版 56 下百町鬼童遺跡第1次調査区出土遺物②
- 図版 57 下百町鬼童遺跡第1次調査区出土遺物③
- 図版 58 下百町鬼童遺跡第2次調査区出土遺物①
- 図版 59 下百町鬼童遺跡第2次調査区出土遺物②
- 図版 60 下百町鬼童遺跡第2次調査区出土遺物③
- 図版 61 下百町鬼童遺跡第2次調査区出土遺物④・下百町鬼童遺跡第3次調査区出土遺物①
- 図版 62 下百町鬼童遺跡第3次調査区出土遺物②
- 図版 63 下百町屋敷の内遺跡第1次調査区出土遺物①
- 図版 64 下百町屋敷の内遺跡第1次調査区出土遺物②
- 図版 65 下百町屋敷の内遺跡第1次調査区出土遺物③
- 図版 66 下百町屋敷の内遺跡第1次調査区出土遺物④
- 図版 67 下百町屋敷の内遺跡第2次調査区出土遺物①
- 図版 68 下百町屋敷の内遺跡第2次調査区出土遺物②
- 図版 69 下百町屋敷の内遺跡第2次調査区出土遺物③
- 図版 70 下百町屋敷の内遺跡第2次調査区出土遺物④・下百町屋敷の内遺跡第3次調査区出土遺物①
- 図版 71 下百町屋敷の内遺跡第3次調査区出土遺物②
- 図版 72 下百町屋敷の内遺跡第3次調査区出土遺物③
- 図版 73 下百町屋敷の内遺跡第3次調査区出土遺物④
- 図版 74 下百町屋敷の内遺跡第3次調査区出土遺物⑤
- 図版 75 下百町屋敷の内遺跡第3次調査区出土遺物⑥
- 図版 76 下百町神の前遺跡第2次調査第1区出土遺物①
- 図版 77 下百町神の前遺跡第2次調査第1区出土遺物②
- 図版 78 下百町神の前遺跡第2次調査第1区出土遺物③
- 図版 79 下百町神の前遺跡第2次調査第2区・第3区出土遺物・下百町神の前遺跡第3次調査区出土遺物
- 図版 80 下百町神の前遺跡第4次調査区出土遺物
- 図版 81 追補・試掘調査時出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図	柳川市位置図	1
第 2 図	柳川駅東部土地区画整理事業計画図・遺跡位置図(1/2,000)	5
第 3 図	周辺遺跡分布図(1/25,000)	9
第 4 図	下百町鬼童遺跡第 1 次調査区遺構配置図(1/300)	10
第 5 図	SK-7・8・21・22・23・24 実測図(1/40)	13
第 6 図	調査区南壁、SD-9・28・32 土層断面実測図(1/20、1/40)	14
第 7 図	SD-1・4・13 土層断面実測図(1/20)	15
第 8 図	SD-1・4・5 出土遺物実測図(1/3)	16
第 9 図	SD-9 出土遺物実測図①(1/3)	17
第 10 図	SD-9 出土遺物実測図②(1/3)	18
第 11 図	SK-24、SD-27・28・31・32 出土遺物実測図(1/3)	19
第 12 図	SD-9、その他出土遺物実測図(1/3、1/6)	19
第 13 図	下百町鬼童遺跡第 2 次調査区遺構配置図(1/250)	21
第 14 図	SK-1・2・3・4・6・7・8 実測図(1/40)	23
第 15 図	SK-1・2・3・8・9・10・11 出土遺物実測図(1/3)	24
第 16 図	SK-9・10・20 実測図(1/60)	25
第 17 図	SK-11・13・14・15・16・17 実測図(1/40)	27
第 18 図	SK-13・14・15・16・17・20 出土遺物実測図(1/3)	28
第 19 図	SK-24・25・26・27・28・29・30 実測図(1/40)	31
第 20 図	SK-24・25・30・33・34・36・37・38・39 出土遺物実測図(1/3)	33
第 21 図	SK-32・33・34・35・36 実測図(1/40)	34
第 22 図	SK-37・38・40・42・45・51 実測図(1/40)	36
第 23 図	SK-40・42 出土遺物実測図(1/3)	37
第 24 図	SK-45 出土遺物実測図(1/3、1/6)	39
第 25 図	SK-50・54・55・56・57・58・59・61・63・64 実測図(1/40)	40
第 26 図	SK-50・51・54・55・56・59 出土遺物実測図(1/3)	41
第 27 図	SD-12・18・21・22・23 土層断面実測図(1/40、1/60)	43
第 28 図	SD-12 出土遺物実測図①(1/3)	44
第 29 図	SD-12 出土遺物実測図②(1/3)	45
第 30 図	SD-12 出土遺物実測図③(1/3)	46
第 31 図	SD-12 出土遺物実測図④(1/3)	47
第 32 図	SD-12 出土遺物実測図⑤(1/3、1/6)	48
第 33 図	SD-12 出土遺物実測図⑥(1/3)	49
第 34 図	SD-18 出土遺物実測図①(1/3)	51
第 35 図	SD-18 出土遺物実測図②(1/3)	52
第 36 図	SD-21 出土遺物実測図(1/3)	53
第 37 図	SD-22・23 出土遺物実測図(1/3)	54
第 38 図	SD-44・46・47・48・52・53 土層断面実測図(1/40)	56
第 39 図	SD-44 出土遺物実測図①(1/3)	57
第 40 図	SD-44 出土遺物実測図②(1/3、1/6)	58
第 41 図	SD-44・48 出土遺物実測図(1/3)	59

第 42 図	SD-46・47・52 出土遺物実測図 (1/3)	60
第 43 図	SD-53 出土遺物実測図① (1/3)	61
第 44 図	SD-53 出土遺物実測図② (1/3)	62
第 45 図	SD-53 出土遺物実測図③ (1/3、1/4)	63
第 46 図	SA-43、SD-44 遺物出土状態実測図 (1/40)	64
第 47 図	その他出土遺物実測図 (1/3)	65
第 48 図	下百町児童遺跡第 3 次調査区遺構配置図 (1/200)	67
第 49 図	SK-3 実測図 (1/40)	68
第 50 図	SK-3 出土遺物実測図 (1/3)	68
第 51 図	SD-1・2・4・5・6 土層断面実測図 (1/20、1/40)	69
第 52 図	SD-1 出土遺物実測図 (1/3)	71
第 53 図	SD-4・6 出土遺物実測図 (1/3)	72
第 54 図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	73
第 55 図	下百町屋敷の内遺跡第 1 次調査区 (1/300)	74
第 56 図	調査区土層図 (1/40)	76
第 57 図	SK-2・3・4・7・13・14 実測図 (1/40)	78
第 58 図	SK-2・7・13・16 出土遺物実測図 (1/3)	79
第 59 図	SK-15・16・17・18・19 実測図 (1/40)	81
第 60 図	SK-17・18・19・21 出土遺物実測図 (1/3)	82
第 61 図	SK-20・21・22・23 実測図 (1/40)	84
第 62 図	SK-22・23 出土遺物実測図 (1/3)	86
第 63 図	SK-24・26・27・30 実測図 (1/40)	87
第 64 図	SK-24・26 出土遺物実測図 (1/3)	88
第 65 図	SK-27・29・30・31・32 出土遺物実測図 (1/3)	90
第 66 図	SK-28・29・31・32 実測図 (1/40)	91
第 67 図	SD-1・6・8 土層断面実測図 (1/20、1/40)	93
第 68 図	SD-6 出土遺物実測図 (1/3)	94
第 69 図	SD-8 出土遺物実測図① (1/3)	95
第 70 図	SD-8 出土遺物実測図② (1/3)	97
第 71 図	その他の出土遺物実測図① (1/3)	98
第 72 図	その他の出土遺物実測図② (1/3)	99
第 73 図	木製品実測図 (1/3)	100
第 74 図	下百町屋敷の内遺跡第 2 次調査区遺構配置図 (1/300)	102
第 75 図	SK-3・4・5・6・16 実測図 (1/40)	104
第 76 図	SK-3・4・6・16・18・27・32・34・35・42 出土遺物実測図 (1/3)	106
第 77 図	SK-17・18・23・27・29 実測図 (1/40)	108
第 78 図	SK-31・32・34・35・40 実測図 (1/40)	109
第 79 図	SK-42・45・46・47・49 実測図 (1/40)	111
第 80 図	SK-46・48・52・56・59・63 出土遺物実測図 (1/3)	112
第 81 図	SK-48・49・50・51・52 実測図 (1/40)	114
第 82 図	SK-53・55・56・58・59・62 実測図 (1/40)	116
第 83 図	SK-63・68・69 実測図 (1/40)	118
第 84 図	SK-66・67・68・69・70 出土遺物実測図 (1/3)	120

第85図	SK-71・72・73・75 出土遺物実測図(1/3)	121
第86図	SD-2・15・25・26・33・39・43 土層断面実測図(1/20)	122
第87図	SD-2 五輪塔出土状態実測図(1/10)	123
第88図	SD-2・15・25・39 出土遺物実測図(1/3)	124
第89図	SD-30・41 土層断面実測図(1/40)	125
第90図	SD-41 出土遺物実測図(1/3)	126
第91図	SD-43 出土遺物実測図(1/3)	127
第92図	その他の出土遺物実測図(1/3)	128
第93図	下百町屋敷の内遺跡第2次北調査区遺構配置図(1/200)	130
第94図	調査区北壁土層図(1/20)	130
第95図	SK-1・2・3・4・5 実測図(1/40)	131
第96図	下百町屋敷の内遺跡第3次調査区遺構配置図(1/300)	133
第97図	SK-3・4・5・6・7・8 実測図(1/40)	135
第98図	SK-3・5・9 出土遺物実測図(1/3)	136
第99図	SK-9・12・15 実測図(1/40)	138
第100図	SK-12・15・17 出土遺物実測図(1/3)	139
第101図	SK-17・18・19 実測図(1/40)	140
第102図	SK-18・23・24・26・27・28 出土遺物実測図(1/3)	142
第103図	SK-22・23・24・26・27・28 実測図(1/40)	143
第104図	SD-1・30 土層断面実測図(1/40)	145
第105図	SD-1B区出土遺物実測図①(1/3)	147
第106図	SD-1B区出土遺物実測図②(1/3)	148
第107図	SD-1B区出土遺物実測図③(1/3)	149
第108図	SD-1B区出土遺物実測図④(1/3)	150
第109図	SD-1B区出土遺物実測図⑤(1/3)	151
第110図	SD-1C区出土遺物実測図①(1/3)	153
第111図	SD-1C区出土遺物実測図②(1/3)	154
第112図	SD-1C区出土遺物実測図③(1/3)	155
第113図	SD-1C区出土遺物実測図④(1/3)	156
第114図	SD-1D区出土遺物実測図(1/3)	157
第115図	SD-1E区出土遺物実測図①(1/3)	158
第116図	SD-1E区出土遺物実測図②(1/3)	159
第117図	SD-1F区出土遺物実測図①(1/3)	161
第118図	SD-1F区出土遺物実測図②(1/3)	162
第119図	SD-1F区出土遺物実測図③(1/3)	163
第120図	SD-1 出土遺物実測図①(1/3)	165
第121図	SD-1 出土遺物実測図②(1/3)	166
第122図	SD-1 出土遺物実測図③(1/3)	167
第123図	SD-2・10・11・20・25 土層断面実測図(1/20)	168
第124図	SD-10 出土遺物実測図(1/3)	169
第125図	SD-11・20・25 出土遺物実測図(1/3)	171
第126図	SD-30 出土遺物実測図①(1/3)	172
第127図	SD-30 出土遺物実測図②(1/3)	173

第 128 図	SD-30 出土遺物実測図③(1/3)	174
第 129 図	その他の出土遺物実測図①(1/3)	177
第 130 図	その他の出土遺物実測図②(1/3)	178
第 131 図	石製品・土製品・木製品実測図(1/3)	179
第 132 図	下百町神の前遺跡第 2 次調査第 1 区遺構配置図(1/300)	182
第 133 図	SK-29・46・51・53 実測図(1/20)	183
第 134 図	SK-29・47・51・53 出土遺物実測図(1/3)	184
第 135 図	SK-47 実測図(1/30)	184
第 136 図	SD-27・28・55・60・61 土層断面実測図(1/20)	185
第 137 図	SD-27 出土遺物実測図(1/3)	187
第 138 図	SD-48・57・58・59・64 断面実測図(1/40)	188
第 139 図	SD-48・58・59、その他の出土遺物実測図(1/3)	190
第 140 図	下百町神の前遺跡第 2 次調査第 2 区遺構配置図(1/200)	192
第 141 図	SB-22 実測図(1/60)	193
第 142 図	SK-7・11・16・20 実測図(1/40)	194
第 143 図	SD-23・24 断面実測図(1/40)	195
第 144 図	SD-23・24 出土遺物実測図(1/3)	195
第 145 図	下百町神の前遺跡第 2 次調査第 3 区遺構配置図(1/200)	197
第 146 図	SE-16 実測図(1/20)	198
第 147 図	SK-6・7・10・13 実測図(1/40)	199
第 148 図	SK-6・7・10・13 出土遺物実測図(1/3)	200
第 149 図	下百町神の前遺跡第 3 次調査区遺構配置図(1/300)	201
第 150 図	SB-25 実測図(1/40)	203
第 151 図	SK-5・8・9・10 実測図(1/40)	204
第 152 図	SK-5・9、SD-16・34、その他出土遺物実測図(1/3)	205
第 153 図	SK-17・18・30・32・33・41・42 実測図(1/40)	207
第 154 図	SD-1・16・30・34・35・37・38・39・47 断面実測図(1/40、1/60)	210
第 155 図	近世・近代墓群実測図(1/40)	211
第 156 図	ST-14・20・44・49・50 実測図(1/20)	212
第 157 図	下百町神の前遺跡第 4 次調査区遺構配置図(1/100)	214
第 158 図	基本土層図(1/40)	215
第 159 図	SK-5 実測図(1/40)	216
第 160 図	SK-5・14・16 出土遺物実測図(1/3)	217
第 161 図	SK-14・16 実測図(1/40)	217
第 162 図	SD-1・2 土層断面実測図(1/40)	218
第 163 図	SD-1・2 出土遺物実測図(1/3)	219
第 164 図	その他の出土遺物実測図(1/2、1/3)	219
第 165 図	大型甕実測図(1/8)	221
第 166 図	石製品実測図①(1/6)	222
第 167 図	石製品実測図②(1/6)	223
第 168 図	石製品実測図③(1/6)	224
第 169 図	石製品実測図④(1/6)	225
第 170 図	石製品実測図⑤(1/6)	226

第 171 図	追補・試掘調査時出土遺物実測図(1/3)	227
---------	----------------------------	-----

表 目 次

第 1 表	柳川駅東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査一覧	2
-------	----------------------------------	---

I はじめに

1 調査に至る経緯

柳川市は、福岡県の南部、有明海に面した筑後平野に位置する人口約7万6,000人、総面積約77km²の、県南部の中心都市の一つである。

西日本鉄道大牟田線柳川駅周辺は、柳川市の商業が集積する中心地であり、東部に隣接する柳川駅東部地区は、北側を国道443号、西側を西鉄大牟田線、南側を1級河川矢部川水系塩塚川、東側をクリークに囲まれ、面積は約26.4haの地区である。従来、当該地区の幹線道路は地区北部を東西に走る国道443号だけであり、その他の道路は従来からの農道を整備したもので、宅地へのアクセスに不便をきたしていた。また水路としては、地区を縦横に通るクリークが数条存在し、農業用水路として使用される一方、家庭用雑排水が無秩序に流入している状況であった。

柳川市ではこの地区を都市計画マスタープランの中心市街地ゾーン及び開発促進ゾーンに位置付け、柳川の中心市街地にふさわしい場所として公共施設の整備および住・商各ゾーンの分離による良好な居住環境の確保及び商店街の活性化を図るため、土地区画整理事業を平成14年から実施している。三橋京町通り線沿線と柳川駅東口駅前広場周辺を商業ゾーン、その他のゾーンについては一般住宅地として整備する計画である。

当事業に係る埋蔵文化財の取扱いについては、その事業計画に基づき当初から柳川市教育委員会生涯学習課と柳川市区画整理推進室との間で協議を進めてきた。平成18年6月には事業地内の試掘調査を実施し、中世の遺構が確認されたことを受け、同年7月24日に埋蔵文化財の取扱いに関する協議を両者で行い、教育委員会では本調査の必要性を説明し、今後のスケジュールの確認を調整した。その結果、三橋筑紫橋線にあたる地点については平成18年10月から発掘調査を実施することとなった(蒲船津西ノ内遺跡第1次)。また、それ以外の地点については、区画整理事業の進捗にあわせて平成19年度以降に発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成18年10月から平成25年5月まで実施した。調査地点は20地点に及ぶ。遺跡名及び場所は第1表、第2図のとおりである。



第1図 柳川市位置図

第1表 柳川駅東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査一覧

調査年度	遺跡名	遺跡略号	調査期間	報告年度	
18	蒲船津西ノ内遺跡第1次	KNU1	H18.10.02～H18.12.21	27	
	蒲船津西ノ内遺跡第2次	KNU2	H19.05.14～H19.06.29		
19	蒲船津西古賀遺跡第1次	KNK1	H19.07.18～H19.09.22	28	
	下百町鬼童遺跡第1次	SOD1	H19.08.25～H20.01.24		
	下百町鬼童遺跡第2次	SOD2	H20.11.09～H20.11.26		
20	蒲船津西ノ内遺跡第3次	KNU3	H20.05.02～H20.07.29	27	
	蒲船津西ノ内遺跡第4次	KNU4	H20.07.24～H20.08.20		
	蒲船津西ノ内遺跡第5次	KNU5	H20.10.14～H20.11.05		
	蒲船津西ノ内遺跡第6次	KNU6	H20.11.06～H21.02.17		
	蒲船津西ノ内遺跡第7次	KNU7	H20.11.17～H20.12.10		
	蒲船津西ノ内遺跡第8次	KNU8	H21.01.26～H21.02.06		
	下百町屋敷の内遺跡第1次	SYU1	H20.08.25～H20.10.10		
21	下百町鬼童遺跡第3次	SOD3	H21.05.28～H21.06.25	28	
	下百町屋敷の内遺跡第2次	SYU2	H21.07.09～H22.01.04		
	下百町屋敷の内遺跡第3次	SYU3	H21.10.01～H21.03.01		
22	下百町神の前遺跡2次(1区)	SKA2-1	H22.07.01～H22.11.30		
	下百町神の前遺跡2次(2区)	SKA2-2	H22.11.18～H22.12.03		
	下百町神の前遺跡2次(3区)	SKA2-3	H22.12.01～H23.02.04		
23	下百町神の前遺跡第3次	SKA3	H23.08.05～H23.12.01		
24	下百町神の前遺跡第4次	SKA4	H25.03.06～H25.05.30		

2 組織

下百町遺跡群Ⅱの発掘調査の関係者は次のとおりである。

平成19年度

柳川市教育委員会	教育長	上村 好生
	教育部長	佐藤 健二
	生涯学習課長	中村 典幸
	生涯学習課長補佐	大石 涼子
	文化係長	袖崎 朋洋
柳川市区画整理推進室	文化係	堤 伴治(発掘調査担当)
	室長	稲又 義輝
	室長補佐	野田 栄作
	補償換地係長	中川 万喜雄
	工務係長	田島 正志
	嘱託職員	原田 智也(発掘調査担当)

平成20年度

柳川市教育委員会	教育長	上村 好生
	教育部長	佐藤 健二
	生涯学習課長	籠 英樹

	生涯学習課長補佐	大石 涼子
	文化係長	袖崎 朋洋
	文化係	堤 伴治 (発掘調査担当)
柳川市区画整理推進室	室長	目野 稔男
	室長補佐	野田 栄作
	補償換地係長	政次 寛
	工務係長	田島 正志
	嘱託職員	原田 智也 (発掘調査担当)

平成 21 年度

柳川市教育委員会	教育長	上村 好生
	教育部長	高田 厚
	生涯学習課長	田中 利光
	生涯学習課長補佐	武松 直紀
	文化係長	鳥添 守男
	文化係	堤 伴治 (発掘調査担当)
柳川市区画整理推進室	室長	目野 稔男
	室長補佐	野田 栄作
	補償換地係長	政次 寛
	工務係長	田島 正志
	嘱託職員	原田 智也 (発掘調査担当)

平成 22 年度

柳川市教育委員会	教育長	北川 満
	教育部長	高田 厚
	生涯学習課長	田中 利光
	生涯学習課長補佐	鳥添 守男
	文化係長	松尾 強
	文化係	堤 伴治 (発掘調査担当)
柳川市区画整理推進室	室長	野田 栄作
	補償換地係長	政次 寛
	工務係長	田島 正志
	嘱託職員	丸尾 弘介 (発掘調査担当)

平成 23 年度

柳川市教育委員会	教育長	北川 満
	教育部長	高田 厚
	生涯学習課長	石橋 正次
	生涯学習課長補佐	鳥添 守男
	文化係長	松尾 強

柳川市区画整理推進室	文化係	堤 伴治 (発掘調査担当)
	室長	野田 栄作
	室長補佐	政次 寛
	補償換地係長	政次 寛
	工務係長	田島 正志
	嘱託職員	立石 真二 (発掘調査担当)

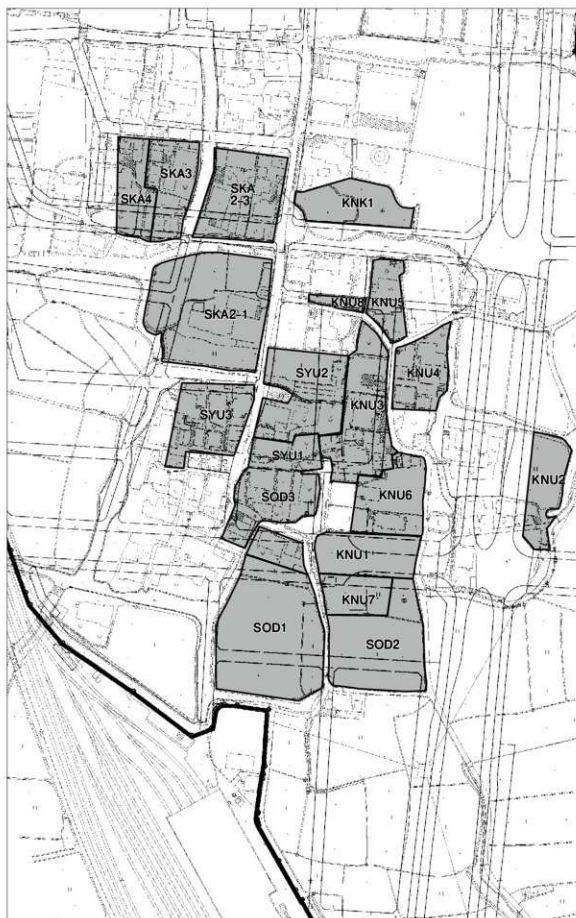
平成 24 年度

柳川市教育委員会	教育長	北川 満	
	教育部長	高田 厚	
	生涯学習課長	石橋 正次	
	生涯学習課長補佐	松尾 強	
	文化係長	堤 伴治	
	文化係	橋本 清美 (発掘調査担当)	
	柳川市区画整理推進室	室長	野田 栄作
		室長補佐	田島 正志
		補償換地係長	石川 時宗
		工務係長	田島 正志 (兼)
嘱託職員	堤 良行 (文化財担当)		

平成 28 年度

柳川市教育委員会	教育長	日高 良	
	教育部長	樽見 孝則	
	生涯学習課長	袖崎 朋洋	
	生涯学習課長補佐	堤 英幸	
	文化財保護係長	堤 伴治	
	文化財保護係	橋本 清美 (整理・報告書作成担当)	
	柳川市区画整理推進室	室長	由衛 和博
		室長補佐	新開 文隆
		補償換地係長	新開 文隆 (兼)
		工務係長	新開 文隆 (兼)
嘱託職員	池邊 元明 (文化財担当)		

なお、発掘調査及び報告書の作成期間中、大変多くの方々のご指導ご協力をいただきました。感謝の意を表します。



第2図 柳川駅東部土地区画整理事業計画図・遺跡位置図(1/2,000)

II 位置と環境

柳川市は福岡県南西部の筑後平野に位置する。平成17年2月5日に旧柳川市・三橋町・大和町が合併し、現柳川市となった。総面積77km²、人口約7万6,000人、県南部を代表する市の一つである。北は矢部川水系花宗川、太田川およびクリーク等を境に大川市・三瀬郡大木町・筑後市に接する。東は矢部川を境にみやま市、西は筑後川を境として佐賀県と接し、南は有明海に面する。

筑紫平野は筑後川・矢部川その他の諸河川が運搬してきた土砂で埋められ、一部人工の干拓も加わってできた福岡・佐賀両県にまたがる九州最大の平野であり、福岡県側を一般に筑後平野と称し、また矢部川流域の南部平野部分を南筑後平野とも称する。有明海沿岸部については、大小の干拓地が鱗状に展開していて、日本の代表的海面干拓地帯である。また、それぞれの河口部には干潟が発達する。

柳川市域についても、矢部川およびその支流である沖端川・塩塚川による大量の土砂の堆積に有明海の潮汐による大きな干満差が加わって形成された沖積地と、非常に広大な範囲が近世初頭以降干拓によって造成された土地からなる。完新統の沖積低地を構成するのは、非海成層の蓮池層と海成層の有明粘土層である。有明粘土層は極めて軟弱な地層で、海棲貝類の貝殻片を混入するのが特徴である。その形成時期は完新世、高海面期である縄文海進のピーク時期の前後と考えられ、有明海干潟や海底部分では現在もその形成が続いている。蓮池層は、筑紫平野の汽水域から淡水域で形成された非海成の沖積層の総称で、低地の表層に広く分布し、層序関係は有明粘土層と同時異相関係にある。市域の標高は1から6m程度と低地な平地で、水田地帯が広がっており、水田の用排水路の機能を果たすクリークが網の目のようにはりめぐらされて部分もあり、当地方の景観を特徴づけている。

柳川市を最も印象付けるのは、城下町を縦横に流れる堀割と、その堀割を小舟で巡る川下りである。柳川出身の詩人・北原白秋が詩情を育んだこの風景は、平成27年に「水郷柳河」として国の名勝に指定された。また、初節句を祝って壇壇のまわりに飾られる「さげもん」は柳川の雰囲気と相俟って落ち着いた華やかさがあり、2月から4月にかけて行われる「柳川雛祭りさげもんめぐり」は多くの観光客で賑わう。市の花は藤で、中山地区の大藤は福岡県の天然記念物に指定されている。市の木は柳で、堀割沿いのしなやかにびく姿は城下町としての風情を醸出している。

本遺跡の所在する柳川市蒲船津は、柳川市の中心部近く、標高3m前後の低平な集落および水田地帯に位置している。福岡市中心部の天神と県南端の大牟田市とを結ぶ、西鉄大牟田線の柳川駅が西隣にあり、柳川駅西部は早くから市の商業地として開けていた一方で、この東部地区は駅裏としてそれほど開発が及んでおらず、古くからの農村景観を保っていた地域である。

現在のところ、柳川市及び近隣地域で最も古い時期に遡る遺跡は、筑後川左岸に形成された自然堤防上に立地する大川市下林西田遺跡である。ここでは弥生時代前期前半から中期中頃の土坑が確認されており、刻目突帯文土器や彩文土器の他、朝鮮系無文土器と思われる土器片や猪牙製裝飾付腕輪といった注目すべき遺物も出土している。なお、この遺跡からは古代・中世の土坑や近世墓も多数見つまっている。またこの時期頃から大川市一帯では貝塚の形成が進んだようで、同市酒見貝塚でも前期の土器片が採集されている。柳川市内では、徳益八枝遺跡から弥生時代前期から中期

頭にかけての遺構が見ついている。柱が軟弱な地盤に沈み込まないように礎板を敷いた掘立柱建物の他、同時期の井戸が検出された。

弥生時代中期になると、遺跡数は大幅に増加する。柳川市域でも北部に位置する蒲池地区には多くの遺跡が確認されており、広い範囲にわたって散布地や貝塚が確認されている。西蒲池地区の扇ノ内遺跡では支石墓の上石と見られる巨石と甍棺墓の存在が確認されており、また三島神社樓門前の石橋に使用されている一枚岩も、支石墓に使用された上石と言われている。

市西部では、平成16・17年度に発掘調査を実施した、柳川市三橋町磯島の磯鳥フケ遺跡が挙げられる。ここでは弥生時代中期後半にはほぼ限定される時期の土坑、井戸、礎板を据えた掘立柱建物が確認され、この遺跡の発掘調査が端緒となって当地域の当該期の集落様相がかなり明確となった。近年の調査では、平成21・22年度に発掘調査が行われた柳川市西蒲池の西蒲池池淵遺跡で、中期の土坑や溝がまとめて確認された。この遺跡では他に弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の礎板敷き掘立柱建物、土坑、古墳時代～古代の土坑、中世の土坑、溝があわせて検出された。平成20年に発掘調査が行われた東蒲池蓮池遺跡でもやはり弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の溝が確認されている。また、平成25・26年度に柳川市が発掘調査を実施した柳川市東蒲池の蓮池遺跡でも、弥生時代中期初頭から中期後半の土坑や溝が確認された。ここでも弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土坑、古墳時代後期の土坑、9世紀の土坑、中世の土坑、溝が検出されており、やはり遺存状態の良い遺物が多数出土している。蒲池地区一帯は弥生時代中期から集落形成が開始され、以降断続的に集落が営まれたものとみて良いようである。

古墳時代、柳川地域は古代豪族水沼氏の勢力下にあったものと思われる。この水沼氏は海上交易を生業の基盤とし、宗像神を祭り、本拠を現在の久留米市三瀧地区に構えていたとされ、久留米市大善寺にある5世紀代の首長墳、御塚・権現塚古墳がその奥津城に比定されている。従来、柳川市域には古墳はもとより古墳時代の遺跡自体、ほとんど知られていなかったが、近年の発掘調査の進展により当時の様相が急速に明らかになりつつある。先述の遺跡の他にも、平成17～19年度に発掘調査が行われた、蒲船津江頭遺跡がある。ここでは弥生時代後期末から古墳時代前期初頭を中心に、古墳時代終末期までの時期の礎板敷き掘立柱建物、土坑、溝が数多く確認された。掘立柱建物は確認された数だけで140棟を数え、出土遺物も遺存状態が良く数も非常に多い。ここでもやはり古代から中世の遺構が確認されている。

律令制下では柳川市北部が三瀧郡に、南・東部が山門郡に属していた。平安時代末期には三瀧郡域を中心に三瀧庄、山門郡域を中心に瀬高庄が成立する。「和名抄」の郷としては、筑後国下妻郡の中に鹿待郷があり、これが旧三瀧郡の蒲池に通ずるとされる。この時期、市内では先述の遺跡の他、平成15年度に発掘調査が行われた東蒲池榎町遺跡で8・9世紀の土坑、溝が確認されている。他に若干の弥生時代中期や13世紀の遺構、遺物も見つかっている。

中世、鎌倉後期の永仁4年(1296)注進の「玉垂宮並大善寺仏神事次第写」(御船文書)の中に見える三瀧荘関係の村の中に蒲池村、築川村などが見える。この築川村が「やながわ」の史料上の初見である。また、柳川市蒲池を本拠とする在地領主蒲池氏が、戦国期にはいわゆる筑後の国人15人衆の旗頭として南筑後地方に勢力を振るった。蒲池氏の系譜については諸説ありはっきりしたことは分かっていない。戦国期の後半、蒲池氏は2家に分かれ、蒲池鑑盛が築川に築城して下蒲池を称した。この築川城が近世柳川城の先駆をなすものである。

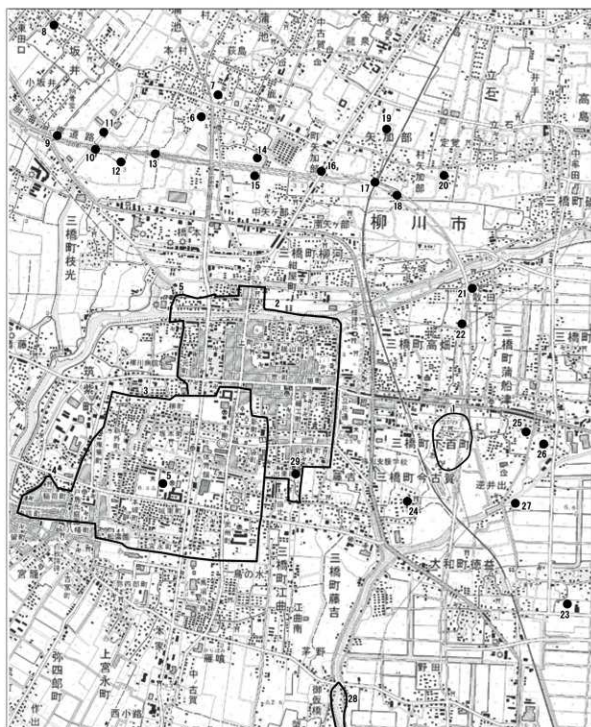
天正8年(1580)、肥前の竜造寺隆信は蒲池鑑盛の子、鎮並を築川城に攻めたが、要害堅固のために落城せず和平に及んだ。しかし鎮並は島津氏との内通が露顕して翌9年佐賀に誘殺され、そのあと柳川城は竜造寺氏の手に属すこととなった。

中世前期の遺跡は、先述の下林西田遺跡、西蒲池池淵遺跡、蓮池遺跡で比較的まとまって確認されている他、平成17年度に発掘調査が行われた、柳川市東蒲池の東蒲池大内曲り遺跡がある。この遺跡では11世紀後半から13世紀の土坑が確認され、他に古墳時代前期や後期の遺物も若干出土している。中世後期の遺跡は、やはり蒲池氏の隆盛に伴ってか遺跡数が多く、平成18・21・22年度に発掘調査が行われた柳川市東蒲池、西蒲池の東蒲池門前遺跡をはじめ、西蒲池池田遺跡、矢加部南屋敷遺跡、矢加部五反田遺跡などがある。どの遺跡も土坑と溝が検出遺構の中心で、比較的まとまった遺物の出土がみられる。

豊臣政権下の天正15年から慶長5年(1600)まで、柳川は立花宗茂の城下だったが、関ヶ原の合戦で立花氏は改易となり、代わって慶長6年から徳川氏により田中吉政の居城となった。田中氏が2代で断絶後、元和7年(1621)からは奥州棚倉に在った立花宗茂が再び旧領柳川に復讐せられ、以後、明治維新まで柳川藩立花氏の城下として発展した。柳川城は田中吉政により本格的な近世城郭として修築され、城の外周30町50間、5層の本丸天守閣のほか、8つの曲輪と7つの矢倉を備え、城内には約300戸の侍屋敷が配置された。元禄10年(1697)3代藩主鑑虎は城内の南西隅に茶屋(別邸)を営み、元文元年(1736)以降、藩主一家はここに住むようになった。これを通称花島といい、これが今日「お花」として知られる旧立花伯爵邸である。また柳川城下は柳川城を中心に武家が居住する「城内」と、町人の居住区である「沖端町」「柳河町」の三地区に大別される。

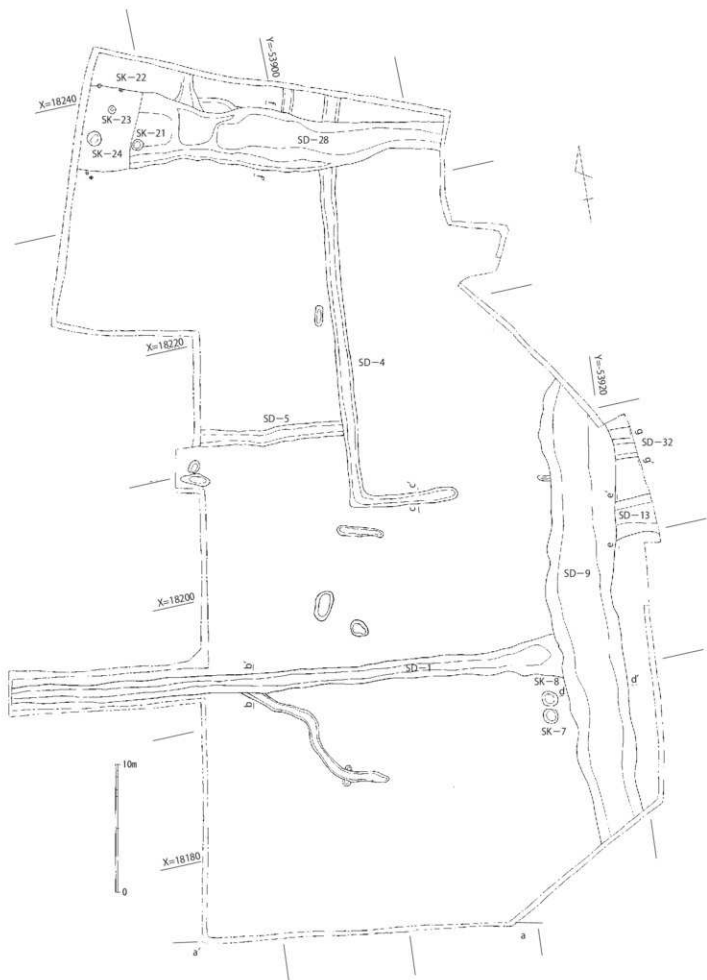
元和7年(1621)の郡村帳には下百町村の名前が見られ、玄蕃高138石余、新田高7石余、小物成は山手米6斗とあり、旧高旧領取調帳では高235石余。寛永年間には矢島主水正の知行地で、高300石であった。明治22年(1889)には近村合併して宮の内村となった。この年の戸数は44戸、人口は282人とある。

近年、柳川市では開発事業に伴って柳川城郭跡内各地区の発掘調査が進んでいる。平成20年に発掘調査を実施した柳川市京町の京町遺跡では、地割りを示す溝や石列、杭列、丸土基礎が検出された。遺物は18世紀代を中心に、一部17世紀台にまで遡るものもみられた。平成22年度に発掘調査を実施した上町遺跡では、地割りに沿った溝や石組遺構、竹製導水管や土坑が検出され、17世紀から幕末までの遺物の出土をみた。城外地区では有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴い平成16・18・19年度に発掘調査が実施された、柳川市蒲船津の矢加部町屋敷遺跡がある。ここでは17世紀中葉以降、特に18世紀中葉以降の遺構、遺物が数多く見つかり、当時の街道沿いの町屋跡の様相が明確になった。特に鑄造関連遺物の出土は注目される。近年の発掘調査成果の整理、報告書刊行が進めば、近世柳川城郭の様相も徐々に明らかになってくるであろう。



1. 下百町遺跡群 2. 柳河(城下町) 3. 御家中(武家地内部)(御家中) 4. 沖堀(城下町港町)
5. 柳川城址 6. 瀬池遺跡 7. 西門前遺跡 8. 園田遺跡 9. 西藩池古塚遺跡
10. 西藩池村監坊遺跡 11. 西藩池古津遺跡 12. 扇ノ内遺跡 13. 西藩池下里遺跡
14. 東藩池大内曲り遺跡 15. 東藩池榎町遺跡 16. 矢ヶ部町屋敷遺跡 17. 矢ヶ部五反田遺跡
18. 矢ヶ部遺跡南屋敷遺跡 19. 玉皇命神社遺跡 20. 阿弥陀屋敷遺跡 21. 蒲船津江頭遺跡
22. 蒲船津水町遺跡 23. 徳益八ヶ枝遺跡 24. 今古賀城 25. 蒲船津城跡
26. 浮島天神遺跡 27. 逆井出遺跡 28. 慶長木土居 29. 出来町遺跡

第3図 周辺遺跡分布図(1/25,000)



第4图 下百町鬼童遺跡第1次調査区遺構配置図(1/300)

Ⅲ 調査の内容

1 下百町鬼童遺跡第1次調査

下百町鬼童遺跡(略称SOD)は、今回の区画整理事業地の南部に位置する。事業の進捗と調査範囲に対応して、3箇所の調査を実施したため、第1次調査、第2次調査、第3次調査と呼称することとした。

下百町鬼童遺跡第1次調査は、平成19年8月25日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、平成20年1月24日に機材を撤収して現地での作業を終了した。

調査区は東西50m、南北68mに及ぶ。現在の区画に沿って調査区を設定したため、歪な形状となる。また、SD-1は延伸に沿って調査区を拡張したため、この部分だけが長く突き出た形となっている。遺構の密度は低く、数条の溝と数基の土坑の他、大半は空白地である。遺構面の標高は1.9m～2.2mである。調査面積は2,570㎡。検出した主な遺構は、土坑6基、溝9条である。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器、日常雑器、石製品である。

1) 基本層序(第6図)

第6図は調査区南壁の土層である。最上層には褐色を呈した耕作土(表土)がある。その下の第2層には灰褐色土が堆積する。この層中には褐色、黄褐色粒を多く含んでいる。第3層は白灰色粘土である。やはり褐色の粒を含む。第4層は粘性の高い青灰色粘土である。不純物等を含まない層であり、この層の上面を遺構面とした。

2) 土坑

SK-7(図版2・図版3、第5図)

調査区南東側で検出した土坑である。一辺1.1mのやや歪つな隅丸方形を呈す。深さは0.4mで、壁の立ち上がりは緩やかな傾斜となる。覆土は下層に暗青灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-8(図版3、第5図)

調査区南東側で検出した土坑である。SK-7の北側に隣接して位置する。長軸1.2m、短軸1.1mの楕円形を呈しており、形状は異なるが規模はSK-7と同程度である。深さは0.5mで、壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は下層に明青灰色粘土、中層に淡灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-21(第5図)

調査区北西側で検出した土坑である。径80～90cmの円形を呈しており、深さは50cmを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は下層に青灰色粘土、中層に灰白色粘土、上層に青灰色粘土が堆積する。図示できる遺物は出土しなかった。

SK-22 (図版3、第5図)

調査区北西側で検出した土坑で、SK-21から4m北側に位置する。径30cm程の円形を呈し、深さは20cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は暗青灰色粘土、白灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-23 (図版4、第5図)

調査区北西側で検出した土坑で、SK-22から2m南西側に位置する。径60cmの円形を呈し、深さは50cmを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は下層に暗青灰色粘土、上層に暗青灰色粘土と白灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-24 (図版4、第5図)

調査区北西側で検出した土坑で、SK-23から3m南西側に位置する。径1.2mの円形を呈し、深さは0.7mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は下層に暗青灰色粘土、上層に青灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第11図)

38は土師質焼成で、鍋の口縁部か。丸みを帯びた三角形を呈し、上端は面をなす。調整は全面ナデ調整を行っており、口縁部下には炭化物が付着する。

3) 溝

SD-1 (図版4、第7図)

調査区中央付近で検出した溝である。東西に直線的に伸びており、東側はSD-9に切られている。西側は調査区を拡張して延伸を確認した。検出した範囲で長さ33mを測る。幅は1.5m、深さは0.5mで、壁の立ち上がりは直線的に緩やかに傾斜している。溝の底部は面をなさず、断面は逆三角形状を呈す。覆土は下層に青灰色粘土、中・上層に白灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版55、第8図)

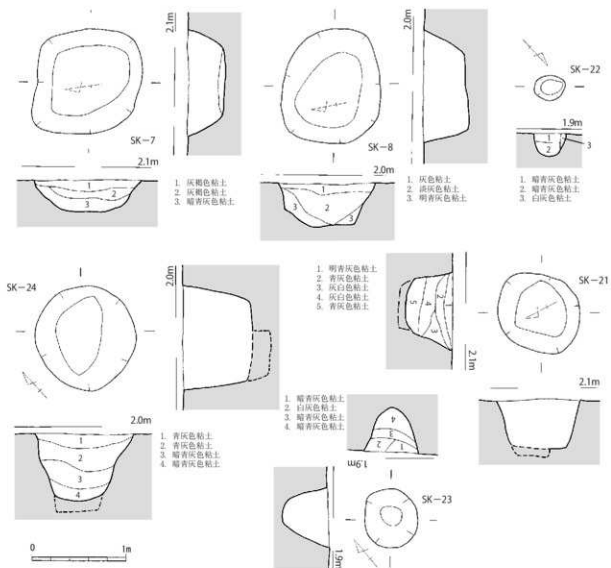
1は土師器小皿である。底部と体部の境は明瞭で、体部はやや長く伸びるため深みのある器形となる。口径7.4cm、器高2.2cm、底径4.8cm。2は土師器坏である。底径10.8cm。3は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚し、上端部は面をなす。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。4は軽石である。長さ12.0cm、幅6.3cm、厚さ4.4cm。

SD-4 (図版5、第7図)

調査区北側から中央付近にかけて検出した溝である。南北方向に32mの長さで伸びる南北溝と、南北溝の南端から東側に直角に折れて8.5mほど伸びる東西溝からなる。幅85cm、深さ20cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に明青灰色粘土、中・上層に灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (第8図)

5は土師器坏である。体部はあまり開かず伸びており、深みのある器形となる。底径8.8cm。



第5図 SK-7・8・21・22・23・24 実測図 (1/40)

SD-5 (第4図)

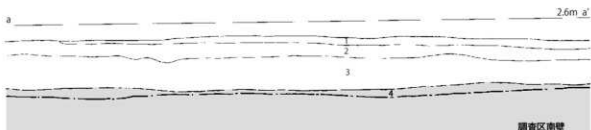
調査区中央付近で検出した溝である。東西に直線的に伸びており、東端はSD-4に接続し、西端は調査区外へと続いている。長さは11mを測る。

出土遺物 (図版55、第8図)

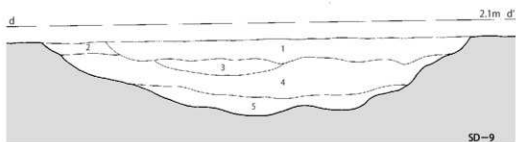
6は須恵器の蓋である。撮部は扁平な宝珠状を呈しており、中央が高く尖っている。外面には自然釉がかかる。撮部径3.4cm。

SD-9 (図版5、第6図)

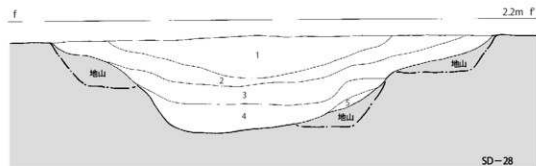
調査区東側に位置する溝である。南北方向に直線的に伸びており、両端が調査区外へと続いている。検出した範囲で長さ36mを測る。幅は4.6m、深さは0.8mを測り、壁は緩やかに傾斜している。覆土は下・中層に暗灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。



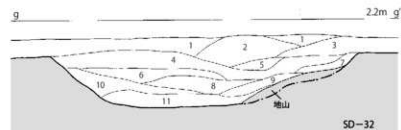
1. 棕色土 (表土)
2. 灰棕色粘土
3. 白灰色粘土
4. 青灰色粘土



1. 灰棕色粘土
2. 灰棕色粘土
3. 灰色粘土
4. 暗灰色粘土
5. 暗灰色粘土

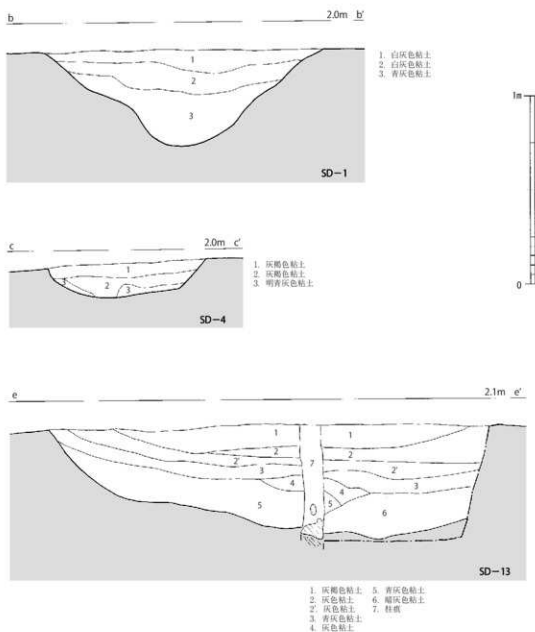


1. 灰棕色粘土
2. 灰棕色粘土
3. 灰色粘土
4. 暗灰色粘土
5. 暗灰色粘土



1. 灰色粘土
2. 白灰色粘土
3. 白灰色粘土
4. 灰色粘土
5. 白灰色粘土
6. 灰色粘土
7. 白灰色粘土
8. 灰色粘土
9. 灰色粘土
10. 暗灰色粘土
11. 暗灰色粘土

第6图 调查区南壁、SD-9·28·32土层断面实测图 (1/20, 1/40)

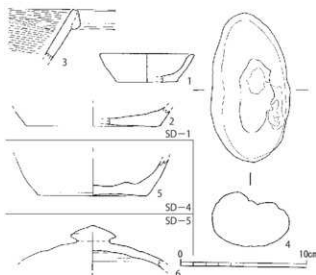


第7図 SD-1・4・13土層断面実測図(1/20)

出土遺物 (図版55～図版57、第9図・第10図・第12図)

7・8は土師器坏である。どちらも器壁が比較的薄く、底部と体部の境は明瞭である。7は底径7.2cm。8は体部が直線的に伸びており、深みのある器形となる。口径11.3cm、器高3.9cm、底径5.9cm。9～11は白磁である。9は白磁碗。丸みを帯びた深みのある体部で、口縁部は若干外反する。10は白磁皿か。口縁部はわずかに外反し、反転部外面には稜を有す。11は白磁碗である。丸みの少ない器形で内外面無文。外面には轆轤目の稜線が目立つ。口径14.8cm。12～19は青磁である。12は内面見込みに草文を施文する。高台径5.4cm。13・14は無文。14は高台外端部から内側にかけて無袖である。高台径5.5cm。15は内面見込みに草文を施文する。高台外端部から内側にかけて露胎。径5.4cm。16は皿の口縁部であろう。大きく外反しており、端部は花卉状を呈す。

17は皿である。口径12.4cm。18は外面に細蓮弁を巡らせる青磁碗。口径11.6cm。19は高台が低い青磁碗である。高台径6.2cm。20は外面に草花文を描く染付碗である。21は瓦質焼成の搦鉢である。口縁部は素口縁で、端部は丸みを有す。22・23は瓦質焼成の釜である。22は肩が大きく張った器形で、口縁部は短く直立する。肩部周辺には沈線と印刻による施文を行う。口径14.6cm。23もやはり口縁部が直立し、端部は面をなす。肩部には印刻が見られる。口径20.0cm。24は体部片である。25・26は瓦質焼成の火鉢である。25は口縁部付近の器壁が若干厚くなっており、口縁部外側には



第8図 SD-1・4・5出土遺物実測図(1/3)

は大きめの突帯を巡らせる。口縁部は水平面をなす。口縁部下には2条の低い突帯があり、その間には印刻も行われる。26は底部片。平底で、内面には細かいハケ目が残る。27は搦鉢である。底部と体部の境には明瞭な稜を有しており、その上には指痕も見られる。28～32は素口縁となる鍋である。28・29は土師質焼成である。端部を若干窪ませており、内外面にハケ目が見られる。30は瓦質に近い焼成となる。内面と外面でハケ目の幅が異なる。31は土師質焼成である。体部下半と上半の境目に不明瞭な段を有し、上半は直線的に伸びている。口縁部は水平面をなす。口径30.3cm。32も土師質焼成である。口縁部下に鈎部を有し、その上には円孔を穿孔する。口縁部は水平面をなす。33～37は外端部が肥厚して玉縁状を呈す土師質焼成の鍋である。33は内外面横ナデ調整を行う。34は体部下半と上半の境には不明瞭な段を有し、口縁部上端は面をなす。口径32.8cm。35は口縁外端部に強い横ナデを加えて明瞭な稜を形成する。外面にはハケ目は認められない。36は内外面ナデ調整を行う。37は口縁端部の肥厚が薄い。55は五輪塔の空風輪である。端部は丸みを有しており、空輪部はやや扁平である。長さ23.3cm、最大径15.1cm。

SD-13 (図版5、第7図)

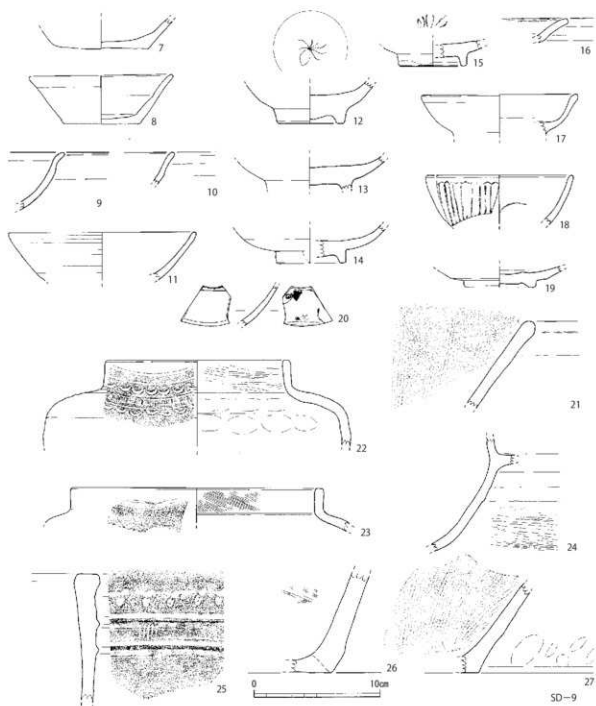
調査区東端で検出した、東西方向に伸びる溝である。西側をSD-9に切られており、また東側は調査区外へと続いているため、検出できた長さは4m程度である。幅2.3m、深さは55cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に青灰色粘土と暗灰色粘土、上層に灰色粘土、灰褐色粘土が堆積する。土層図中の第7層は柱杭の痕跡で、底部には柱根が遺存していた。

図示できる遺物は出土しなかった。

SD-27

出土遺物 (図版57、第11図)

39は青磁皿である。口縁部は若干反気味に伸びており、端部を外側につまみ出した形状となる内面には二重の圏線が巡り、外面には釉垂れが見られる。高台部内面にまで施釉される。口径10.4cm、器高3.0cm、高台径4.4cm。



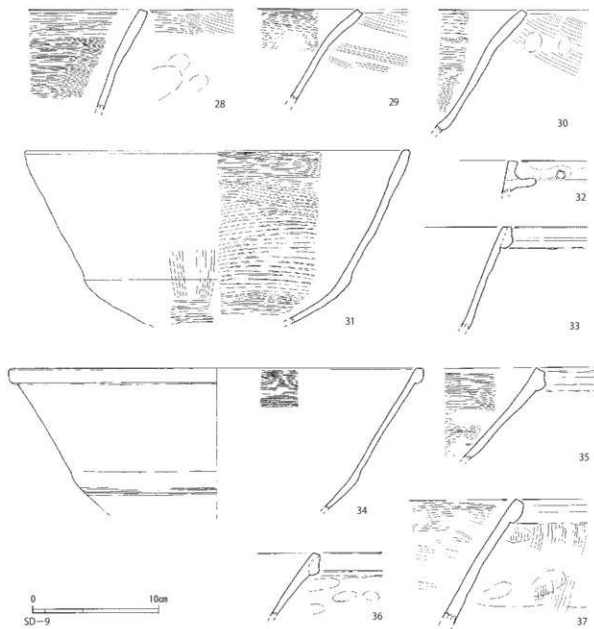
第9図 SD-9 出土遺物実測図① (1/3)

SD-28 (図版6、第6図)

調査区北端に位置する溝である。東西方向に伸びており、両端は調査区外へと続く。検出した範囲で長さ28mを測る。幅4.8m、深さ1.0mを測り、壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

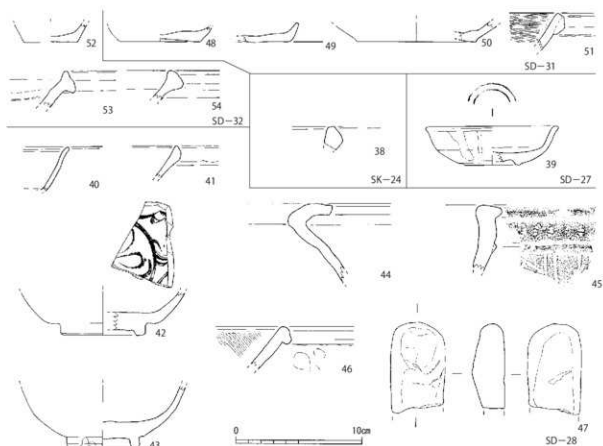
出土遺物 (図版57、第11図)

40は白磁皿である。器壁は薄く、体部から口縁部にかけて直線的に伸びている。41は玉縁の白

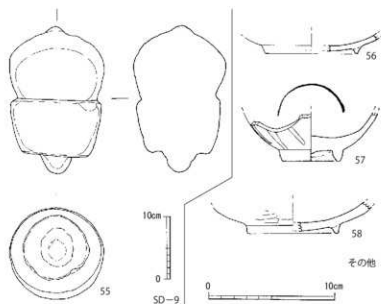


第10図 SD-9出土遺物実測図②(1/3)

磁碗である。42は内面に草花文を彫る青磁碗である。高台径6.6cm。43は無文の青磁碗。高台外端部から内側は露胎となる。高台径5.2cm。44は須恵質焼成の甕である。口縁部は強く外反し、丸みを帯びて伸びる。器壁の残りが悪いため不明瞭だが、外面口縁部下は格子タタキか。45は瓦質焼成の火鉢である。口縁部付近はわずかに内傾しており、口縁部外側とその下に丸みを帯びた三角突帯を巡らせ、その間には印刻を施文する。46は土師質焼成の鍋である。口縁部にはやや垂下した肥厚を有す。内面は斜ハケ目、外面はナデ調整を行う。47は砂岩製砥石である。長さ6.8cm、幅4.3cm、厚さ2.1cm。



第11図 SK-24、SD-27・28・31・32出土遺物実測図(1/3)



第12図 SD-9、その他出土遺物実測図(1/3、1/6)

SD-31 (図版6)

出土遺物 (第11図)

48・49は土師器小皿である。48は底径6.6cm。50は土師器坏である。底部と体部の境には明瞭な稜を有す。底径9.4cm。51は土師質焼成の鍋である。口縁部外側には低い肥厚を巡らせる。内面横ハケ目、外面ナデ。

SD-32 (図版6、第6図)

調査区東端に位置する溝である。SD-13から4m北側に位置しており、これと並走している。西端はSD-9に切られており、東端は調査区外へと続くため、検出した長さは2mほどに過ぎない。幅3.2m、深さ0.6mを測り、壁は緩やかに傾斜している。覆土は下層に暗青灰色粘土、中・上層に灰色、白灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第11図)

52は土師器小皿である。底径4.3cm。53は備前系の鉢であろう。口縁外端部は垂下した三角状を呈す。54も備前系の鉢か。丸く内外に肥厚したような口縁部形状を呈す。

4) その他の出土遺物 (図版57、第12図)

56は瓦器碗である。器壁は薄く、高台も低平である。高台径7.6cm。57は青磁碗である。外面には幅の広い凹線が見られる。内面見込みには1条の沈線を巡らせる。高台径4.5cm。58は瓦器碗である。低くて丸みを帯びた高台となる。高台径7.4cm。

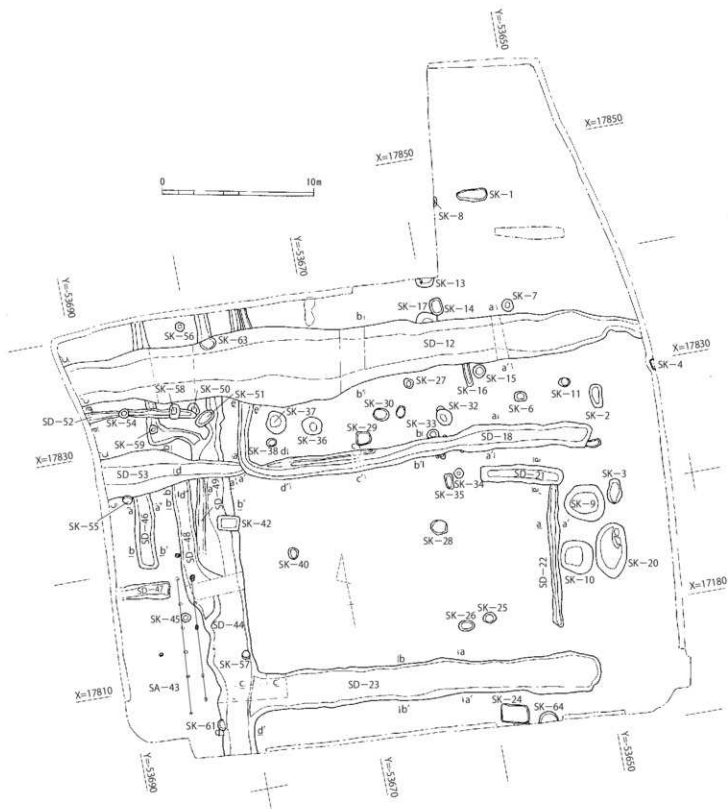
5) 小結

下百町鬼童遺跡第1次調査では、主な遺構として土坑6基、溝9条を検出した。

土坑は規模も小さく、出土遺物も非常に少なかったため、性格を判断する材料に乏しい。SK-7とSK-8は区画の隅を意識して営まれたものと思われる。この二つの土坑は近い位置にあり、同程度の規模で形状も類似する。性格は不明だが、掘り直されたものとみて良いだろう。同様にSK-21、23、24も掘り直しによるものかもしれない。この三つの土坑はSD-28を切っており、少なくともこの溝より新しく位置づけられるものである。

溝のうち、大型の溝であるSD-9やSD-28は幅も広く深さもあり、南北方向や東西方向に直線的に伸びているため、土地を大きく区画する大区画溝としての機能を有しているものと思われる。また、それ以外の溝の大半は、やはり南北方向や東西方向に直線的に伸びているため、区画内をさらに細かく区切る小区画溝と理解して良いだろう。

溝出土遺物のうち、SD-5から出土した須恵器は古代に属するものであり、他の遺物とは大きく時期が異なる。恐らく混入品であろうが、近くに古代の遺跡の存在を予想させる資料でもある。SD-9からは比較的まとまりのある遺物が出土した。青磁には外面に細蓮弁、内面見込みに花文をスタンプする龍泉窯系青磁碗が見られ、無文の白磁碗が伴う。土師器は体部が直線的に開き、深みのある器形となるものである。雑器類には瓦質焼成の釜や火鉢、播鉢があり、鍋は口縁端部が素口縁のものとして肥厚して玉縁状を呈したものとがある。これらは概ね15世紀後半を中心とした時期のものである。他の溝からは13世紀代の青磁碗や瓦器碗と、15世紀頃の青磁碗等があり、遺跡の時期は大きくこの二つに分かれるとみてよいだろう。SD-28を切って営まれたSK-21、23、24は15世紀以降に属すると理解することができる。



第 13 图 下百町鬼童遺跡第 2 次調査区遺構配置図 (1/250)

2 下百町鬼童遺跡第2次調査

下百町鬼童遺跡第2次調査は、平成20年11月9日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、11月26日に機材を撤収して現地での作業を終了した。

調査区は東西54m、南北59mを測る。東西54m、南北40mの長方形の北東隅に、東西15m、南北20mの張り出しが付いた形状となる。遺構密度はそれほど高くなく、中央付近と北東の張り出し部分は比較的低い。遺構面の標高は1.8～2.2mである。調査面積は約2,460㎡。

検出した主な遺構は、土坑45基、溝10条、柵列2条である。出土遺物は中世の土師器、陶磁器、日常雑器、土製品、石製品、木製品である。

1) 土坑

SK-1 (図版7、第14図)

調査区北東に位置する土坑である。長軸260cm、短軸100cmの不整長方形を呈し、深さは10cmを測る。覆土は下層に白灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に黒灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第15図)

1は土師器小皿である。底部はわずかに上げ底となり、底端部は明瞭な稜をなす。口径9.1cm、器高1.7cm、底径6.9cm。2は土師器坏である。端部は不明瞭な稜をなす。

SK-2 (図版7、第14図)

調査区東側にあり、SK-1から19m南東に位置する土坑である。長軸200cm、短軸100cmの不整長方形を呈し、深さは20cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に白灰色粘土、中層に白灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第15図)

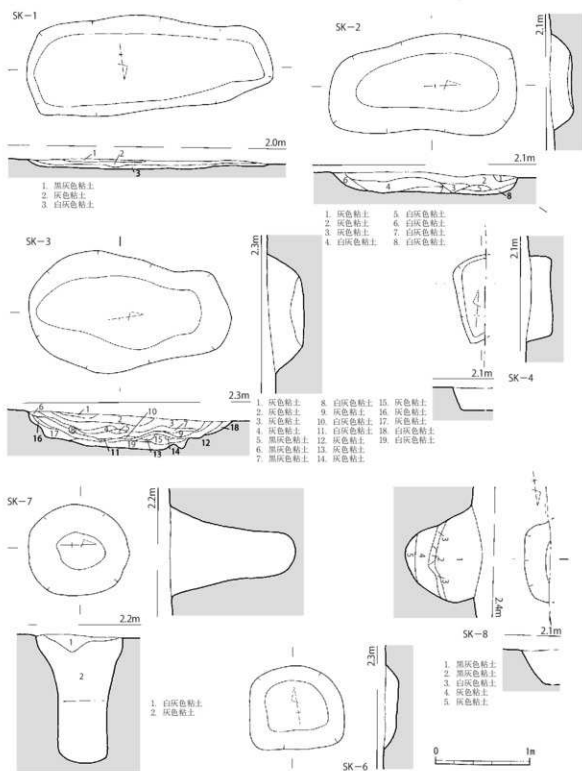
3～5は土師器坏である。3は底部が肥厚したような形状となる。口縁部はわずかに外反する。口径12.0cm、器高3.2cm、底径7.2cm。4の底部は3と同様の形状となる。底径9.6cm。5は底径9.0cm。

SK-3 (第14図)

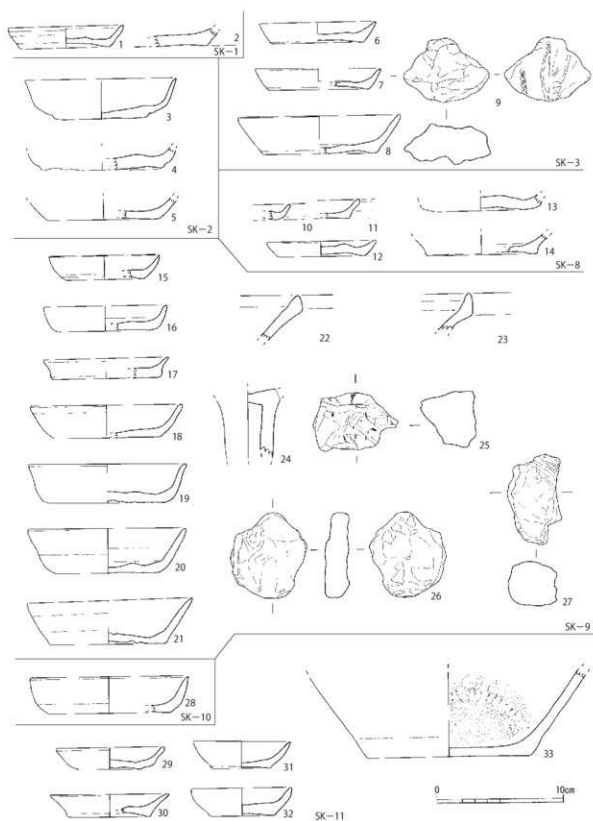
調査区東側にあり、SK-2から7m南側に位置する土坑である。長軸210cm、短軸130cmの不整楕円形を呈し、深さは35cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に白灰色粘土、中層に灰色粘土、黒灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第15図)

6・7は土師器小皿である。どちらも口縁部付近の器壁が薄くなる。6は口径9.1cm、器高1.7cm、底径7.2cm。7は口径9.8cm、器高2.2cm、底径8.0cm。8は土師器坏である。体部は直線的に開く。口径12.6cm、器高3.1cm、底径9.0cm。9はスサの入った粘土塊である。淡黄灰色を呈す。長さ6.8cm、幅5.9cm、厚さ3.0cm。

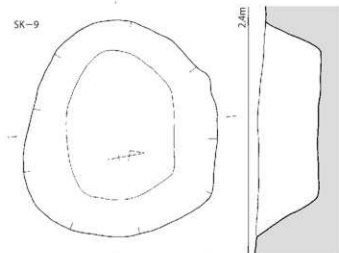


第 14 图 SK-1·2·3·4·6·7·8 实测图 (1/40)

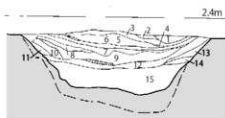


第15图 SK-1·2·3·8·9·10·11出土遺物実測図(1/3)

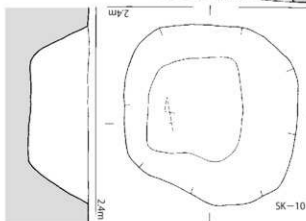
SK-9



- | | | |
|----------|----------|------------|
| 1. 白灰色粘土 | 6. 白灰色粘土 | 11. 白灰色粘土 |
| 2. 灰色粘土 | 7. 白灰色粘土 | 12. 暗青灰色粘土 |
| 3. 灰色粘土 | 8. 灰褐色粘土 | 13. 暗青灰色粘土 |
| 4. 灰色粘土 | 9. 灰色粘土 | |
| 5. 灰色粘土 | 10. 灰色粘土 | |



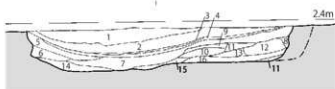
- | | | |
|----------|----------|------------|
| 1. 白灰色粘土 | 6. 灰色粘土 | 11. 灰色粘土 |
| 2. 灰色粘土 | 7. 黑灰色粘土 | 12. 灰色粘土 |
| 3. 灰色粘土 | 8. 灰色粘土 | 13. 灰色粘土 |
| 4. 灰色粘土 | 9. 灰褐色粘土 | 14. 灰色粘土 |
| 5. 灰色粘土 | 10. 灰色粘土 | 15. 暗青灰色粘土 |



0 2m



- | | | |
|----------|-----------|------------|
| 1. 黑灰色粘土 | 8. 黑灰色粘土 | 15. 灰色粘土 |
| 2. 黑灰色粘土 | 9. 黑灰色粘土 | 16. 暗灰色粘土 |
| 3. 黑灰色粘土 | 10. 黑灰色粘土 | 17. 青灰色粘土 |
| 4. 黑灰色粘土 | 11. 白灰色粘土 | 18. 暗青灰色粘土 |
| 5. 灰色粘土 | 12. 黑灰色粘土 | 19. 暗青灰色粘土 |
| 6. 黑灰色粘土 | 13. 灰褐色粘土 | 20. 暗青灰色粘土 |
| 7. 灰白色粘土 | 14. 暗灰色粘土 | |



第 16 图 SK-9·10·20 实测图 (1/60)

SK-4 (第14図)

調査区北東にあり、SK-2から5m東側に位置する土坑である。東側が調査区外へと続いており、検出した範囲で長軸100cm、短軸40cmを測る。深さは20cmで、壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-6 (図版8、第14図)

調査区東側にあり、SK-2から6m西側に位置する土坑である。長軸100cm、短軸90cmの不整楕円形を呈し、深さは15cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-7 (図版8、第14図)

調査区北東にあり、SK-1から10m南側に位置する土坑である。直径100cmの円形を呈し、深さは130cmを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は中層に灰色粘土、上層に白灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-8 (第14図)

調査区北東にあり、SK-1から2m西側に位置する土坑である。西側が調査区外へと続いており、検出した範囲で長軸80cm、短軸25cmを測る。深さは80cmを測り、壁の立ち上がりは比較的緩やかな傾斜となる。覆土は下層に灰色粘土、中層に白灰色粘土、上層に黒灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第15図)

10～12は土師器小皿である。10は底端部が丸みを帯びる。11は底端部が稜をなす。12は底部が若干上げ底となり、端部は明瞭な稜を有す。口径8.6cm、器高1.2cm、底径6.8cm。13・14は土師器坏である。13は底端部が稜をなさず、体部は丸味を帯びて立ち上がる。底径7.6cm。14は底部がわずかに上げ底となり、端部は明瞭な稜を有す。底径8.8cm。

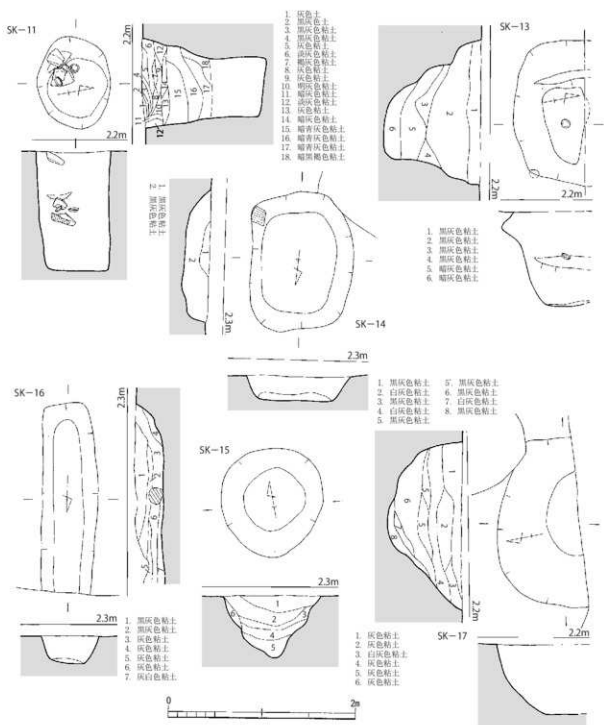
SK-9 (図版8、第16図)

調査区東側にあり、SK-3の西側に隣接する位置にある土坑である。長軸230cm、短軸200cmの楕円形を呈し、深さは65cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は下層に暗青灰色粘土、中層に灰色粘土、淡灰褐色粘土、上層に灰色粘土、白灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第15図)

15～17は土師器小皿である。15は口径8.8cm。16は口径9.6cm、17は口縁部が短く、器壁が薄くなる。口径9.8cm。18～21は土師器坏である。18は口径11.8cm、器高2.6cm、底径8.4cm。19は体部があまり開かず立ち上がる。口径12.4cm、器高3.1cm、底径10.2cm。20・21は体部が直線的に立ち上がる。20は口径12.4cm、器高3.5cm、底径8.0cm。21は口径13.1cm、器高3.5cm、底径9.3cm。

22・23は須恵質焼成の鉢である。22は口縁端面が三角形状になる。23は短く上方に立ち上



第17図 SK-11・13・14・15・16・17実測図(1/40)

がる。24は土師器高坏の脚柱部である。25～27はササ入り粘土塊である。25は長さ6.7cm、26は長さ6.8cm、27は長さ7.2cm。

SK-10 (第16図)

調査区東側にあり、SK-9から2m南側に位置する土坑である。長軸190cm、短軸180cmの不整形方形を呈し、深さは60cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかに傾斜する。覆土は下層に暗

青灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に白灰色粘土、灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第15図)

28は土師器環である。体部は丸味を帯びる。口径12.6cm、器高2.9cm、底径9.6cm。

SK-11 (図版9、第17図)

調査区東側にあり、SK-6から3m東側に位置する土坑である。長軸100cm、短軸80cmの楕円形を呈し、深さは125cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は中層に暗灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積し、中層から遺物がまとめて出土した。

出土遺物 (図版58、第15図)

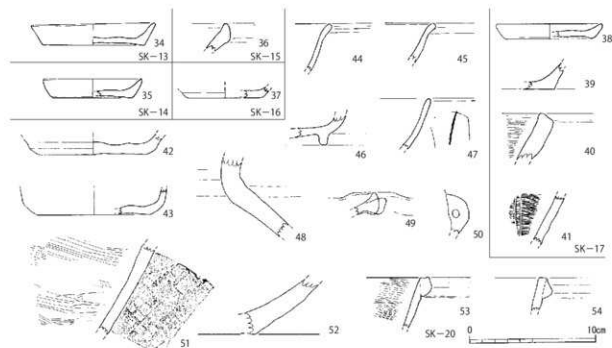
29~32は土師器小皿である。29は口径8.5cm。30は体部が外反し、長めに伸びる。口径9.4cm。31は口縁端部の器壁が薄くなる。口径7.6cm。32は口径7.9cm。33は土師質に近い瓦質焼成の播鉢である。内面には播目の工具痕が残る。底径12.6cm。

SK-13 (第17図)

調査区北東端にあり、SK-7から8m北西に位置する土坑である。北側が調査区外へと続いており、検出した範囲で長軸150cm、短軸80cmを測る不整形を呈す。深さは100cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかな段を有して傾斜している。覆土は下層に暗灰色粘土、中・上層に黒灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第18図)

34は土師器小皿である。底部は若干上げ底になり、端部は明瞭な稜を有す。口径9.7cm、器高1.8cm、底径7.9cm。



第18図 SK-13・14・15・16・17・20出土遺物実測図(1/3)

SK-14 (図版9、第17図)

調査区北東側にあり、SK-13から2m東に位置する土坑である。長軸145cm、短軸110cmの長方形を呈し、深さは25cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は黒灰色粘土である。

出土遺物 (第18図)

35は土師器小皿である。口径7.8cm、器高1.5cm、底径6.2cm。

SK-15 (図版9、第17図)

調査区中央付近にあり、SK-14から6m南東に位置する土坑である。直径110～120cmの円形を呈し、深さは65cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、土坑底面に向かって播鉢状に傾斜している。覆土は灰色粘土が大半を占める。

出土遺物 (第18図)

36は須恵質焼成の鉢である。口縁部は断面三角形に肥厚し、端部は上方を向く。

SK-16 (第17図)

調査区中央付近にあり、SK-15の西側に隣接して位置する土坑である。北側がSD-12に切られており、現状で長軸200cm、短軸60cmを測る。深さは30cmを測り、壁の立ち上がりは比較的緩やかな傾斜である。覆土は下層に灰色粘土、上層に黒灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第18図)

37は土師器小皿である。底径5.9cm。

SK-17 (第17図)

調査区北東にあり、SK-14の南西側に隣接する土坑である。SD-12と重複しており、これに切られる。現状で長軸180cm、短軸90cmを測る。深さは70cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。覆土は下層に黒灰色粘土、中層に白灰色粘土、上層に黒灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第18図)

38は土師器小皿である。口径8.4cm、器高1.2cm、底径7.0cm。39は土師器坏である。底部と体部の境目には明瞭な稜を有す。40は瓦質焼成の火鉢である。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。41は陶器播鉢である。内面には播目に先行する横ハケ目が行われる。外面は粗い縦ハケ目後にナデ消しを行う。

SK-20 (図版10、第16図)

調査区東側にあり、SK-10の東側に接した位置にある土坑である。長軸320cm、短軸180cmの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。土坑北東側が長軸120cm、短軸50cmの規模で若干深くなっており、この場所で深さ50cmを測る。壁の立ち上がりは階段状に傾斜している。覆土は下層に暗青灰色粘土、中・上層に黒灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第18図)

42・43は土師器坏である。42は底径8.4cm。43は底径9.2cm。44・45は口縁部が外反する青磁碗である。46は青磁碗の高台部片である。高台部は畳付まで施釉される。47は外面に蓮弁文を描

く青磁碗である。48は備前焼甕の肩部片である。49は須恵質焼成の片口鉢である。50は瓦質焼成の釜の把手部である。51は瓦質焼成で甕か。内面横ハケ目、外面格子タタキ。52は陶器鉢の底部片か。53・54は土師質焼成の鍋である。口縁部は丸く肥厚し、端部はつまみ出される。53は内面横ハケ目調整。54は内面ナデ調整。

SK-24 (第19図)

調査区南端に位置する土坑である。長軸235cm、短軸150cmの方形を呈し、深さは65cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は中・下層に青灰色粘土、上層に白灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第20図)

55・56は土師器小皿である。どちらも体部があまり開かず、短く立ち上がる。55は底径8.4cm。56は口径10.4cm、器高1.7cm、底径9.9cm。

SK-25 (図版10、第19図)

調査区南側にあり、SK-24から7m北側に位置する土坑である。長軸110cm、短軸100cmの不整形円形を呈し、深さは150cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。

出土遺物 (第20図)

57は土師器小皿である。口縁部は器壁がやや薄くなる。口径10.5cm、器高1.9cm、底径8.3cm。58は小皿または坏の底部片である。

SK-26 (図版10、第19図)

調査区南側にあり、SK-25から1m西側に位置する土坑である。長軸140cm、短軸90cmの楕円形を呈し、深さは110cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い急な傾斜となる。土坑内の下層から丸太状の木製品が検出された。覆土は中・下層に暗青灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-27 (図版11、第19図)

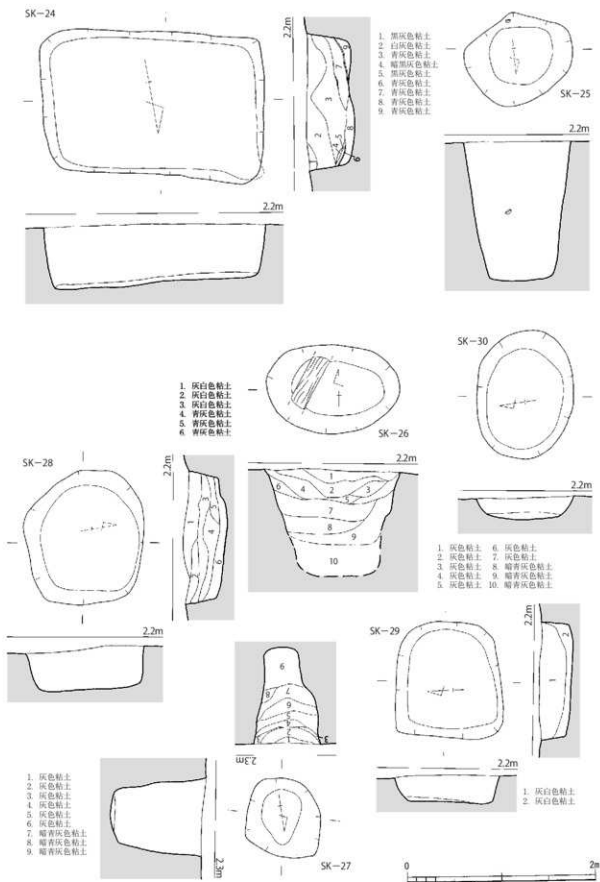
調査区中央付近にあり、SK-6から9m西側に位置する土坑である。直径80cm～90cmの不整形円形を呈し、深さは100cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は下層に暗青灰色粘土、中・上層に灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-28 (図版11、第19図)

調査区中央付近にあり、SK-26から8m北側に位置する土坑である。長軸140cm、短軸120cmの不整形円形を呈し、深さは45cmを測る。覆土は下層に青灰色粘土、上層に灰白色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。



第 19 图 SK-24·25·26·27·28·29·30 实测图 (1/40)

SK-29 (図版 11、第 19 図)

調査区中央付近にあり、SK-28 から 9m 北東に位置する土坑である。長軸 120cm、短軸 110cm の不整形を呈し、深さは 30cm を測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は灰白色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-30 (図版 12、第 19 図)

調査区中央付近にあり、SK-29 から 2m 北側に位置する土坑である。長軸 135cm、短軸 100cm、深さ 20cm を測る。壁は比較的緩やかに傾斜する。

出土遺物 (第 20 図)

59 は土師器小皿である。口径 8.2cm、器高 1.3cm、底径 7.0cm。60 は土師器坏である。体部中に不明瞭な稜を有す。口径 15.0cm、器高 3.6cm、底径 11.8cm。

SK-32 (第 21 図)

調査区中央付近にあり、SK-30 から 5m 東側に位置する土坑である。長軸 150cm、短軸 120cm の楕円形を呈し、深さは 150cm を測る。壁は急角度で傾斜しており、下層と中層の境に不明瞭な段を有している。覆土は下層に黒灰色粘土、中・上層に灰色粘土、白灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-33 (第 21 図)

調査区中央付近にあり、SK-32 から 1m 南西に位置する土坑である。長軸 105cm、短軸 90cm の楕円形を呈し、深さは 165cm を測る。壁の立ち上がりは、下層はほぼ垂直、上層は急角度で傾斜する。覆土は下層に青灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に黒灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第 20 図)

61 は土師器坏である。体部はあまり湾曲せずに開く。口径 13.1cm、器高 3.8cm、底径 8.2cm。62 はササの入った粘土塊である。長さ 6.6cm、幅 5.2cm、厚さ 4.2cm。

SK-34 (図版 12、第 21 図)

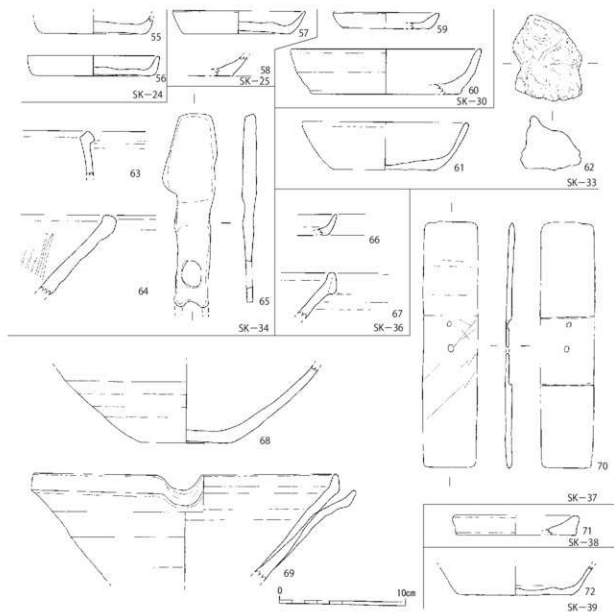
調査区中央付近にあり、SK-33 から 4m 南東に位置する土坑である。直径 80cm の円形を呈し、深さは 140cm を測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に淡灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (第 20 図)

63 は陶器甕の口縁部である。口縁部は断面四角形状に肥厚しており、端部は明瞭な稜を有す。64 は櫛前焼の播鉢である。口縁部は若干肥厚し、内端部が内側にわずかに伸びている。65 は板状の木製品で、下部に楕円形の穿孔がある。端部は欠損するが、二股状に分かれているようである。

SK-35 (図版 12、第 21 図)

調査区中央付近にあり、SK-34 から 1m 西側に位置する土坑である。長軸 140cm、短軸 70cm



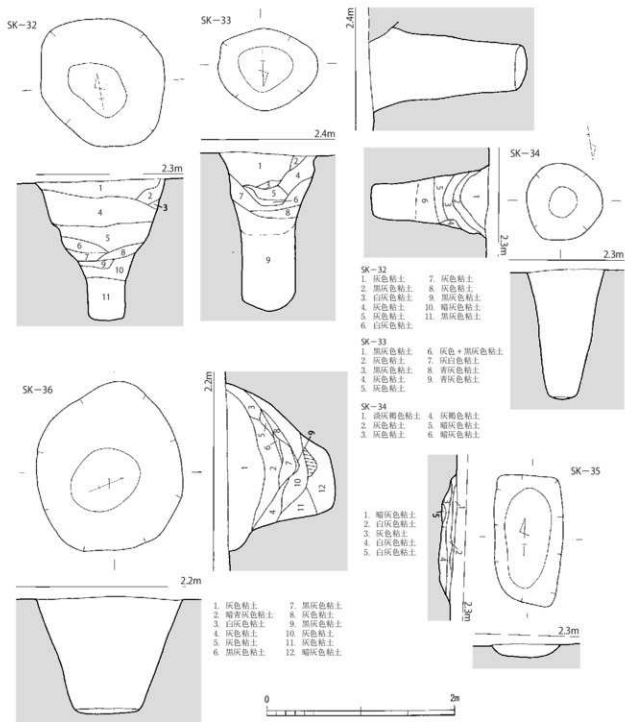
第20図 SK-24・25・30・33・34・36・37・38・39 出土遺物実測図(1/3)

の不整長方形を呈し、深さは15cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に白灰色粘土、中層に白灰色粘土と灰色粘土、上層に暗灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-36 (図版13、第21図)

調査区中央付近にあり、SK-30から5m西側に位置する土坑である。長軸180cm、短軸150cmの楕円形を呈し、深さは125cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に灰色粘土、黒灰色粘土、白灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。



第 21 図 SK-32・33・34・35・36 実測図 (1/40)

出土遺物 (第 20 図)

66 は土師器小皿である。体部の立ち上がりは短い。67 は須恵質焼成の鉢である。口縁部は断面三角形に肥厚し、上端部は小さな水平面をなす。

SK-37 (第22図)

調査区中央付近にあり、SK-36から2m西側に位置する土坑である。短軸175cm、長軸200cmの楕円形を呈し、深さは160cmを測る。壁の立ち上がりは、下層は垂直に近く、上層はやや緩やかな傾斜となる。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に暗青灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積し、上層付近は細かな堆積となる。

出土遺物 (第20図)

68・69は須恵質焼成の鉢で同一個体か。68は底部と体部の境目が不明瞭で、体部はあまり湾曲せず大きく開く。底径6.2cm。69は片口となる。口縁部はほとんど肥厚せず、端部は上方に立ち上がる。口径24.0cm。70は板状の木製品である。片面の中央付近に割り込みを入れており、その部分に二つの穿孔がある。他の部材と組み合わせて使用したものである。長さ19.4cm、幅4.3cm、厚さ0.5cm。

SK-38 (図版13、第22図)

調査区中央付近にあり、SK-37から1m南側に位置する土坑である。長軸85cm、短軸70cmの楕円形を呈し、深さは85cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。土坑内の深さ40cmのところにテラス状の段がある。覆土は下層に暗灰色粘土、中・上層は灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第20図)

71は土師器小皿である。体部は立ち上がるというよりも厚く肥厚する、といった様相である。口径10.0cm、器高1.6cm、底径9.4cm。

SK-39

出土遺物 (第20図)

72は土師器坏である。全体的に器壁が薄く、体部は外反気味に立ち上がる。底径9.2cm。

SK-40 (第22図)

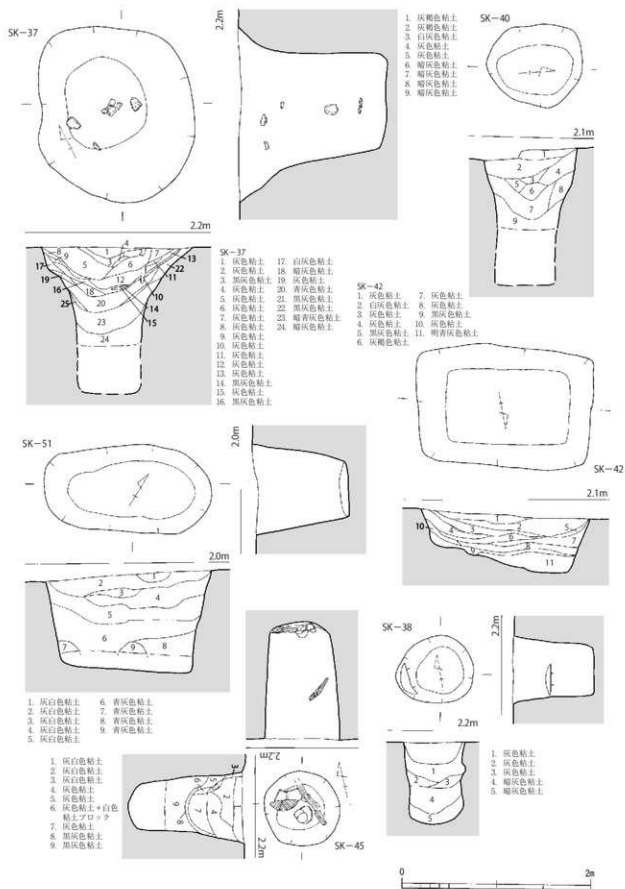
調査区中央付近にあり、SK-38から10m南側に位置する土坑である。長軸100cm、短軸90cmの楕円形を呈し、深さは145cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に灰色粘土、白灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (第23図)

73は土師器坏の底部片である。74は白磁碗の底部片である。体部は丸味を帯びて大きく開いている。高台径4.0cm。75は瓦質焼成の火鉢である。口縁部外側とその下部に各1条の三角突帯が巡り、その間に印刻を巡らせる。76は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚し、上端部は凹面をなす。内外面ハケ目調整を行う。

SK-42 (図版13、第22図)

調査区西側にあり、SK-40から7m西側に位置する土坑である。SD-49を切って営まれる。長軸180cm、短軸125cmの長方形を呈し、底面は西側に深く傾斜しており深さは60cmを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は下層に明青灰色粘土、中・上層に灰色粘土が堆積する。



第22图 SK-37·38·40·42·45·51 实测图 (1/40)

出土遺物 (図版 58、第 23 図)

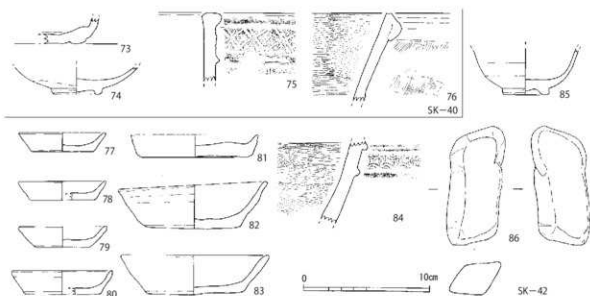
77～81 は土師器小皿である。77 は体部が直線的に開く。口径 6.9cm、器高 1.6cm、底径 4.8cm。78 は口径 7.0cm。79 は口径 7.0cm。80 は口径 8.0cm。81 は体部があまり開かず、短く上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味になる。口径 10.0cm、器高 1.3cm、底径 8.4cm。82・83 は土師器杯である。82 は口径 11.8cm、器高 3.1cm、底径 7.5cm。83 は口径 11.6cm、器高 3.1cm、底径 7.5cm。84 は瓦質焼成の火鉢である。体部はやや傾斜しており、2 条の丸い突帯が見られる。突帯の間には印刻を巡らせる。内面ハケ目、外面横ナデ。85 は白磁碗である。体部は丸味を帯びた深い器形となる。高台径 3.4cm。86 は砥石である。4 面使用している。長さ 8.7cm、幅 4.1cm、厚さ 2.5cm。

SK-45 (図版 14、第 22 図)

調査区西側にあり、SK-42 から 8m 南西に位置する土坑である。直径 80cm の円形を呈し、深さは 125cm を測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。土坑内の底面付近からは石製品が、中層付近からは木片が出土した。覆土は下層に黒灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に灰白色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版 58、第 24 図)

87 は瓦質焼成の釜である。肩が強く張った器形で、口縁部は短く内傾している。口縁端部は面をなす。鐙部は短い。口縁部内面のみハケ目が見られ、それ以外はナデ調整を行う。口径 15.0cm。88 は瓦質焼成で、風炉か。体部は直線的に立ち上がっており、口縁部付近は若干内傾している。口縁端部は内側に短く伸び、上面は水平面をなす。口縁部下には低い三角突帯が見られ、縦方向の突帯は開口部になるようである。内外面ハケ目調整。口径 27.8cm。89 は五輪塔の空風輪である。空輪部は高さがあり、頂部はやや尖っている。高さ 18.6cm、空輪径 13.8cm。90 は石臼である。現存で長さ 28.0cm、幅 13.4cm、厚さ 3.9cm。



第 23 図 SK-40・42 出土遺物実測図 (1/3)

SK-50 (第25図)

調査区西側にあり、SK-37から7m西側に位置する土坑である。SD-52と重複しており、これに切られている。長軸100cm、短軸90cmの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、底面と側面の境は陵をなさない。覆土は下層に灰色粘土、上層に白灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第26図)

91は青磁碗の底部片である。釉は高台畳付まで施釉される。高台径7.0cm。

SK-51 (図版14、第22図)

調査区中央付近にあり、SK-37から6m西側に位置する土坑である。長軸180cm、短軸90cmの楕円形を呈し、深さは100cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は下層に青灰色粘土、上層に灰白色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版58、第26図)

92・93は土師器小皿である。92は体部がやや長く伸びる。口径7.0cm、器高2.4cm、底径4.0cm。93は体部が外反気味に長く伸びる。口径7.4cm、器高2.0cm、底径4.2cm。94は土師器坏である。底径5.5cm。95は瓦質焼成の釜である。丸みを帯びた器形で、鐔は上面が水平に、下面は上方を向く。内面ハケ目、外面は上半にハケ目調整を行う。外面の肩部には印刻を行う。鐔部径28.0cm。96は須恵質焼成の播鉢である。口縁部付近は若干肥厚し、端部は面をなす。97は瓦質焼成の火鉢である。口縁部は直立しており、外面には2条を一単位とする突帯が巡る。突帯間には印刻を巡らせる。内面ハケ目、外面ナデ調整を行う。98は備前焼甕の底部片であろう。

SK-54 (第25図)

調査区西側にあり、SK-51から7m西側に位置する土坑である。SD-52と重複しており、これを切って営まれる。直径90cmの円形を呈し、深さは90cmを測る。

壁の立ち上がりは垂直に近い急な傾斜となる。

出土遺物 (第26図)

99は青磁碗である。外面に蓮弁文が見られる。

SK-55 (図版14、第25図)

調査区西側にあり、SK-54から7m南側に位置する土坑である。直径90cmの円形を呈し、深さは95cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近く、一部はオーバーハングする。覆土は下層に暗青灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (第26図)

100は土師器小皿である。口径10.8cm、器高1.9cm、底径8.7cm。101は青磁碗である。外面に蓮弁が見られる。102は土師質焼成の播鉢である。口縁部付近は肥厚し、上端部は水平面をなす。内面には播目に先行する細かい横ハケ目が見られる。

SK-56 (図版 15、第 25 図)

調査区北西側にあり、SK-54 から 9m 北東に位置する土坑である。直径 80cm の円形を呈し、深さは 70cm を測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となり、底面と側面の境には稜をなさず描鉢状に傾斜している。覆土は下層に暗灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

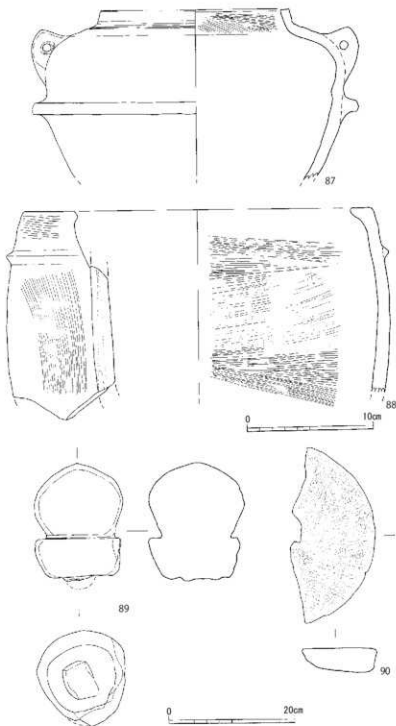
出土遺物 (第 26 図)

103・104 は土師器小皿である。どちらも体部の立ち上がりが短く、あまり開かない。103 は口径 10.0cm、器高 1.7cm、底径 9.2cm。104 は口径 11.0cm、器高 1.6cm、底径 9.2cm。105 は土師器坏である。体部は直線的に開く。口径 13.8cm、器高 2.9cm、底径 9.2cm。

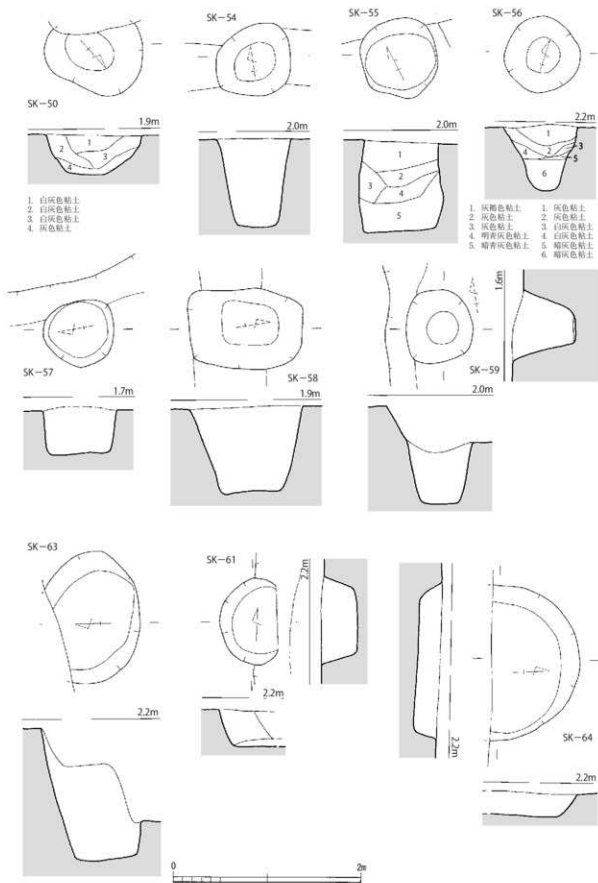
SK-57 (図版 15、第 25 図)

調査区南西にあり、SK-40 から 10m 南西側に位置する土坑である。SD-44 と重複しており、これに切られる。直径 80cm の円形を呈し、深さは 50cm を測る。壁の立ち上がりは垂直に近い急な角度で傾斜する。

図示できる出土遺物はない。



第 24 図 SK-45 出土遺物実測図 (1/3、1/6)



第25图 SK-50·54·55·56·57·58·59·61·63·64实测图(1/40)

SK-58 (第25図)

調査区西側にあり、SK-50から2m西側に位置する土坑である。SD-52と重複しており、これを切って営まれる。長軸120cm、短軸85cmの方形を呈し、深さは90cmを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

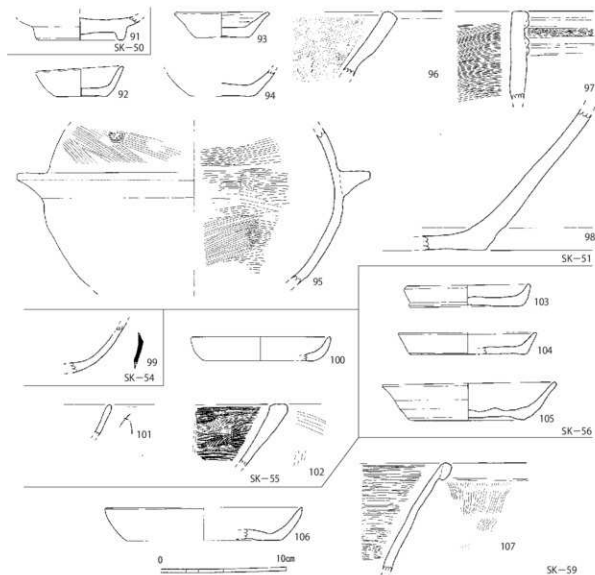
図示できる出土遺物はない。

SK-59 (図版15、第25図)

調査区西側にあり、SK-58から2m南西に位置する土坑である。直径80cmの円形を呈し、深さは65cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い急な傾斜となる。

出土遺物 (第26図)

106は土師器坏である。口径15.5cm、器高2.6cm、底径12.2cm。107は土師質焼成の鍋である。体部は外反気味に開き、端部は丸く肥厚する。内面横ハケ目、外面縦ハケ目調整を行う。



第26図 SK-50・51・54・55・56・59出土遺物実測図(1/3)

SK-61 (第25図)

調査区南端にあり、SK-57から6m南西に位置する土坑である。SD-44と重複しており、東側は大きくこれに切られている。長軸90cm、短軸60cmの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

図示できる出土遺物はない。

SK-63 (第25図)

調査区北側にあり、SK-56から3m南東側に位置する土坑である。SD-12と重複しており、北西側は大きくこれに切られている。長軸140cm、短軸110cmの楕円形を呈し、深さは140cmを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

図示できる出土遺物はない。

SK-64 (第25図)

調査区南端にあり、SK-24から1m東側に位置する土坑である。南側が調査区外へと続いており、検出した範囲で長軸165cm、短軸90cmを測る。深さは25cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

図示できる出土遺物はない。

2) 溝

SD-12 (図版16、第27図)

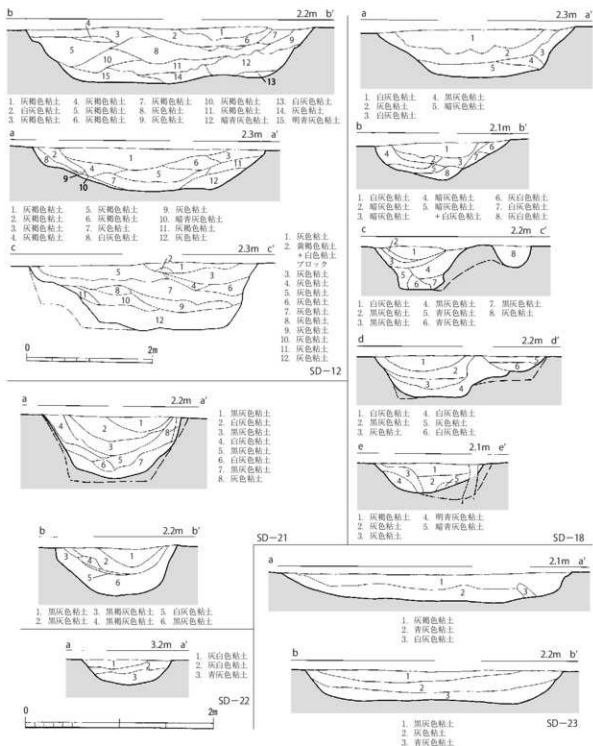
調査区中央付近に位置する溝である。東西方向に直線的に伸びており、両端は調査区外へと続く。検出した範囲で長さ51m、幅は最大7mを測る。深さは70～100cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。覆土は下層に灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版59、第28図～第33図)

108～120は土師器小皿である。108や111は口縁部付近の器壁が薄くなり、端部が尖り気味になる。108は口径7.8cm、器高1.7cm、底径6.8cm。109は口径8.6cm、器高1.4cm、底径7.0cm。115や116は径が小さい。116は口径6.0cm、器高2.2cm、底径2.0cm。117、118は深い器形となる。117は口径7.4cm、器高2.2cm、底径4.6cm。120は口径7.6cm、器高2.2cm、底径4.8cm。121～128は土師器坏である。122、123は体部が外反気味に開く。122は口径10.7cm、器高3.0cm、底径4.8cm。123は口径10.3cm、器高2.9cm、底径5.2cm。125、127は体部があまり開かず、立ち上がる。127は口径11.8cm、器高2.8cm、底径8.4cm。128は体部があまり開かず、深い器形となる。

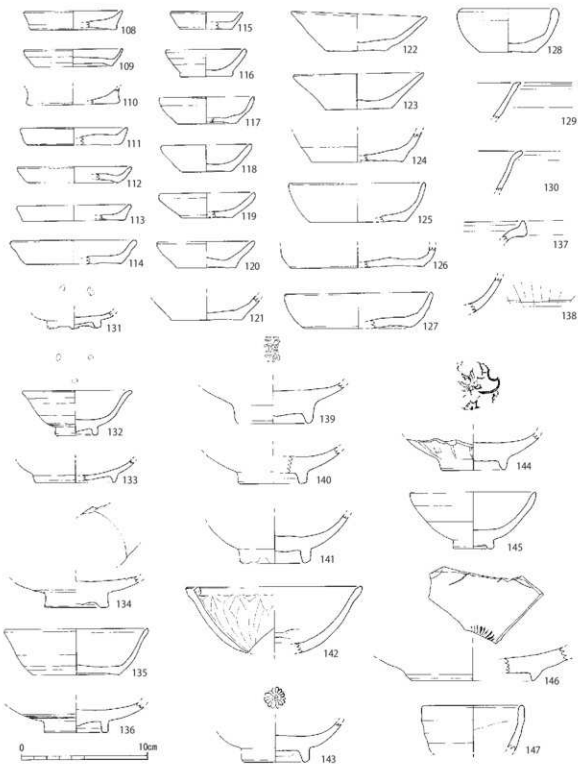
129～135は白磁である。129は端部が外側に尖る碗の口縁部である。130は碗の口縁部片である。口縁端部がやや外反している。131は高台に挟りを入れる。内面には目跡が残る。高台径4.2cm。132は白磁小碗である。内面見込みには3ヶ所の目跡が残る。口径8.7cm、器高3.5cm、高台径3.2cm。133は白磁碗である。器壁が薄い。高台径6.2cm。134は白磁碗である。内面には一条の沈線が巡る。高台径5.0cm。135は白磁皿である。口径11.4cm、器高3.6cm、底径6.7cm。

136・137は青磁皿である。136は外面に3条の沈線が巡る。高台径5.0cm。137は皿の口縁部



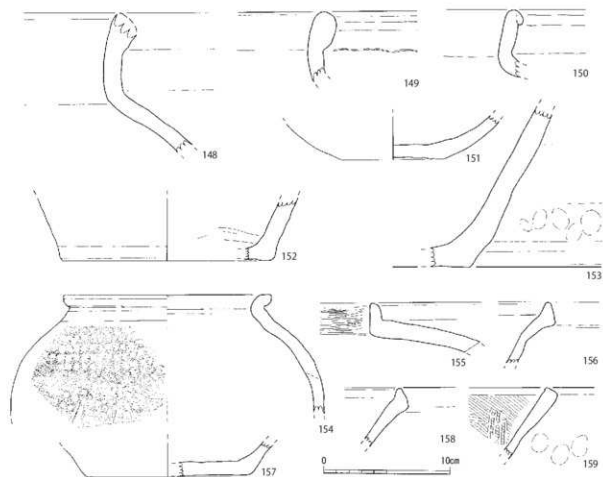
第 27 図 SD-12・18・21・22・23 土層断面実測図 (1/40、1/60)

である。口縁部付近が開き、端部が上方に立ち上がる。138～144は青磁碗である。138は外面に蓮弁を巡らせる。139は内面見込みに吉祥文を印刻する。高台径6.0cm。140は高台径5.4cm。141は高台径5.6cm。142は蓮瓣弁を巡らせる。口径14.0cm。143は内面見込みに菊花文を印刻



第28図 SD-12出土遺物実測図①(1/3)

する。高台径5.2cm。144は外面に蓮弁を巡らせ、内面見込みに花文を印刻する。高台径5.2cm。145は青磁小碗である。口径10.0cm、器高4.5cm、高台径3.4cm。146は内面見込みに菊花文を印刻しており、青磁皿であろう。高台径9.6cm。147は体部があまり開かず深い器形となる。香炉か。



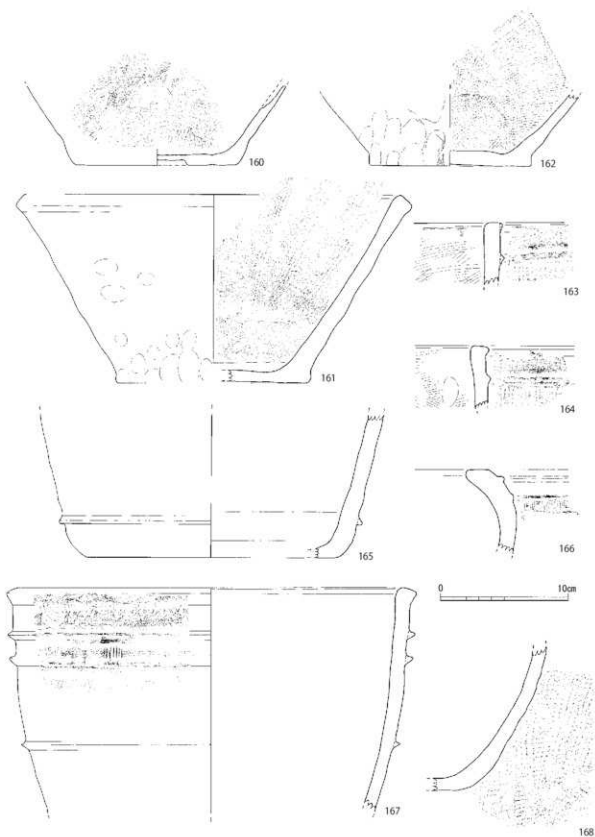
第 29 図 SD-12 出土遺物実測図② (1/3)

口径 8.0cm。

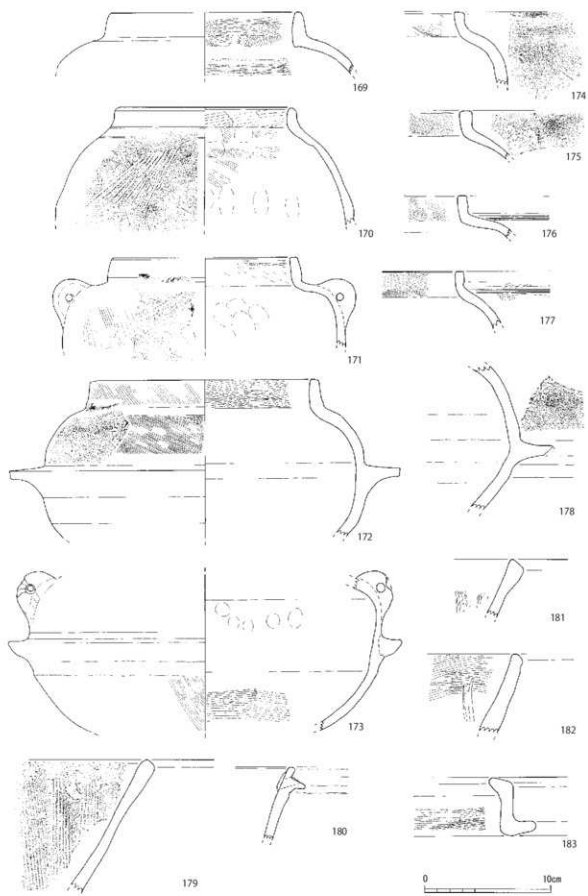
148 は陶器甕の口縁部片である。頸部は直立し、口縁端部は欠損するが丸く肥厚するであろう。149・150 も陶器甕の口縁部片である。口縁部は直立し、端部は外側に丸く小さく肥厚する。151 は陶器鉢であろう。体部は丸味を帯びて大きく開く。底径 18.1cm。152 は備前焼の甕であろうか。底径 16.6cm。153 は陶器甕の底部である。体部下半に指圧痕が残る。154 は備前焼の甕である。口縁部は短く外反し、上端部は面をなす。外面は格子タタキを行う。口径 16.4cm。155 は須恵質焼成で、備前焼の短頸壺か。肩は丸く張り、口縁部は短く直立する。156・158 は須恵質焼成の鉢口縁部である。口縁端部は断面三角形状に肥厚する。157 は須恵質焼成の鉢底部である。底径 12.6cm。159 は須恵質焼成の播鉢である。口縁部付近の器壁がやや厚くなり、端部は面をなす。内面は播目に先行するハケ目が見られる。

160～162 は瓦質焼成の播鉢である。160 は底径 12.9cm。161 の体部はあまり開かず長く伸び、口縁端部は外傾する面をなす。内面の播目は 8 条。口径 31.2cm、器高 14.9cm、底径 15.2cm。162 は体部下端に立ち上がりが見られる。外面には指圧痕が多い。底径 12.6cm。

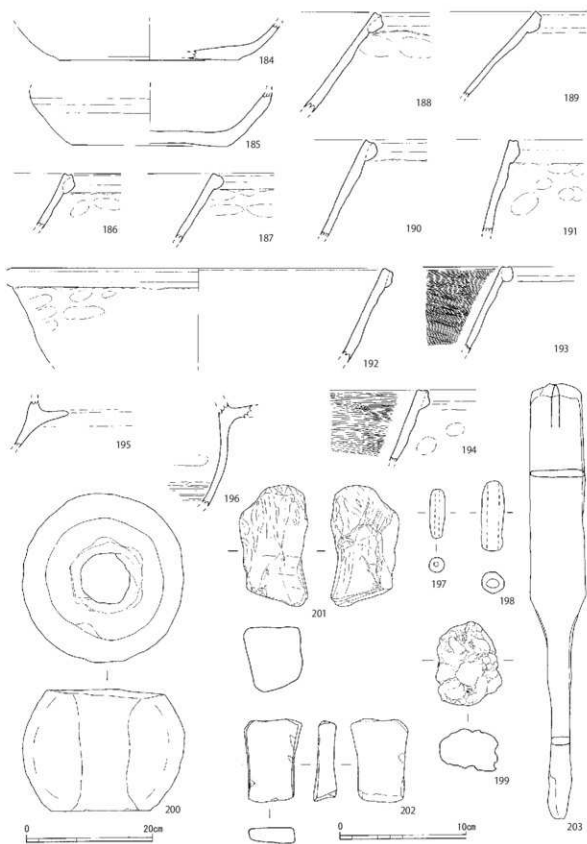
163～167 は瓦質焼成の火鉢である。163・164 は口縁部が直立し、外面の口縁端部とその下に突帯を巡らせ、その間に印刻を巡らせる。165 は体部下半に 1 条の突帯を巡らせる。底径 19.4cm。



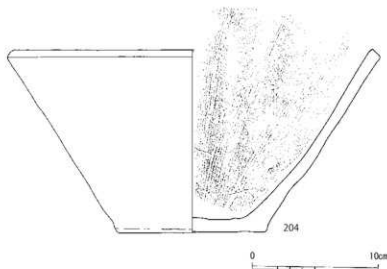
第 30 图 SD-12 出土遺物実測図③ (1/3)



第31图 SD-12出土遺物実測図④(1/3)



第 32 图 SD-12 出土遗物实测图⑤ (1/3、1/6)



第 33 図 SD-12 出土遺物実測図⑥ (1/3)

166の口縁部は強く内傾し、上端部は水平面をなす。外面口縁部下に2条の突帯を巡らせ、その間に印刻を巡らせる。167は体部上半がやや開いた器形で、数条の突帯を巡らせる。口縁部下には印刻を巡らせる。口径32.0cm。168は瓦質焼成で、甕の底部か。外面には格子タタキ目が見られる。

169～178は瓦質焼成の釜である。169は口縁部が短く直立し、内面の肩部との境は陵をなす。口径15.0cm。170は肩があまり張らず、頸部から口縁部へもなだらかに移行する。口縁部は短く直立し、端部は丸味を帯びる。口径13.4cm。171は肩が強く張り、口縁部はやや内傾する。口径14.6cm。172は頸部があまり締まらず、口縁部は直立し端部は水平面をなす。鈿部は水平にやや長く伸びる。口径18.2cm、鈿部径30.8cm。173は肩が張った器形で、鈿部はやや上方を向き短く伸びる。鈿部径31.0cm。174は口縁部が内傾し、上端は水平面をなす。外面の肩部には印刻を行う。175・176もやはり上端部が水平面をなす。177は器壁がやや薄い。178はやや上方に伸びる鈿部を有し、肩部には菊花文の印刻を行う。

179は瓦質焼成の播鉢である。口縁部付近の器壁が若干厚くなり、端部は不明瞭な外傾する面をなす。180は瓦質の鍋か。口縁部下には鈿があり、その上方に穿孔が行われる。181・182は瓦質焼成の播鉢である。182の器壁は厚く、口縁部は丸味を帯びる。内面には播目に先行する横ハケ目が見られる。183は瓦質焼成で、低い器台のようなものか。上端部は内側に短く伸び、下端部は折れてやや上方に伸びている。内面には横ハケ目が見られる。

184・185は土師質焼成の鍋の底部である。どちらも底端部が不明瞭な稜を有す。184は底径14.0cm。185は底径12.2cm。186～194は土師質焼成の鍋口縁部である。口縁部は丸く肥厚し、玉縁状を呈す。外端部をつまみ出して明瞭な稜を有すものもある。192は口径30.8cm。193・194は内面に細かい横ハケ目を行う。

195・196は土師質焼成の釜である。195は水平方向に短く伸びる鈿部を有す。196は内面の下方に横ハケ目を行う。

197・198は管状土錘である。197は長さ3.9cm、径1.2cm、孔径0.4cm。198は長さ5.5cm、径1.8cm、孔径0.7～1.0cm。199はササ入り粘土塊である。長さ6.7cm、幅5.1cm、厚さ3.2cm。

200は五輪塔の水輪か。中央の孔は貫通している。高さ19.5cm、径25.9cm、孔径8.0cm。201は暗灰色の石材を使用した砥石である。4面使用する。長さ9.6cm、幅5.4cm、厚さ5.2cm。202は砂岩砥石である。4面を砥面として使用する。長さ6.3cm、幅4.4cm、厚さ2.1cm。203はヘラ状の木製品である。長さ34.7cm、幅4.5cm、柄部幅1.5cm、厚さ0.7cm。

204は完形に復元できる瓦質焼成の播鉢である。体部は直線的に開き、口縁部はやや肥厚する。端部は外傾する面をなす。口径31.2cm、器高14.9cm、底径15.2cm。内面の描目は8条を数える。

SD-18 (図版16、第27図)

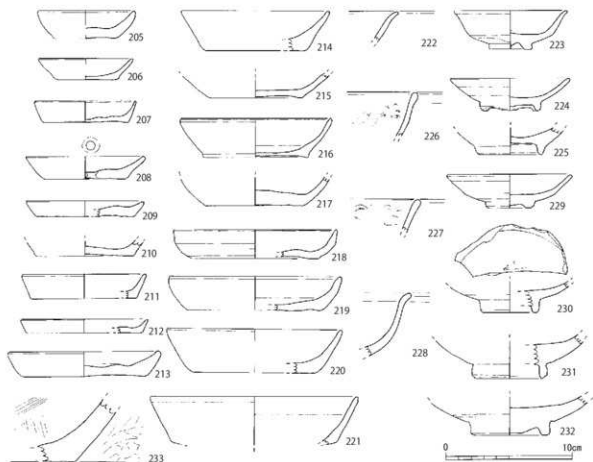
調査区中央付近に位置する溝である。SD-12と重複しており、これに切られる。東西方向に直線的に伸びる東西溝と、南北方向に直線的に伸びる南北溝からなり、両者はほぼ垂直に折れている。東西溝は長さ29m、幅2m、南北溝は長さ14m、幅1.5mを測る。壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。覆土は灰白色粘土が多く堆積する。

出土遺物 (図版59、第34図～第35図)

205～213は土師器小皿である。205は器壁が厚く、深みのある器形となる。口径7.6cm、器高2.1cm、底径5.0cm。206は器壁が薄い。口径7.4cm、器高1.7cm、底径5.0cm。208は底部に穿孔がある。207・211・212は体部が直線的にあまり開かず立ち上がる。207は口径8.0cm、器高1.7cm、底径6.6cm。208は口径9.5cm、器高1.8cm、底径6.5cm。211は口径9.8cm、器高1.9cm、底径8.4cm。212は口径10.1cm、器高1.1cm、底径9.2cm。213はやや口径が大きく坏に近い。口径11.7cm、器高2.0cm、底径9.6cm。214～221は土師器坏である。214は体部があまり開かず立ち上がる。口径11.6cm、器高3.2cm、底径8.0cm。216は口径12.0cm、器高3.1cm、底径8.4cm。218は体部下半が丸みを帯びて立ち上がる。口径13.0cm、器高2.3cm、底径10.0cm。219は口径13.4cm、器高2.7cm、底径10.5cm。220は口径13.8cm、器高3.5cm、底径10.0cm。221は口径がやや大きな器形となる。口径16.4cm。

222は白磁碗または皿の口縁部である。口縁端部は口禿となる。223は白磁皿である。口径9.0cm、器高3.1cm、高台径3.2cm。224は高台に挟り込みを入れる。口径9.5cm、器高2.6cm、高台径4.8cm。225は碗かもしれない。高台径5.2cm。226・227は内面に草花文を描く青磁碗または皿の口縁部である。228は体部が無文となる青磁碗である。230・231は青磁碗である。230は内面見込みに吉祥文を印刻する。高台径4.4cm。231は高台径5.2cm。232は白磁碗の底部である。高台径6.3cm。233は陶器甕の底部片である。

234は須恵質焼成の播鉢である。口縁部は丸味を帯びており、片口となる。235は須恵質焼成の播鉢である。口縁端部は丸味を帯びる。236は瓦質焼成の釜である。鈿部は水平方向に長く伸びる。237は瓦質焼成の火鉢である。口縁部は強く内傾し、上端部は水平面をなす。外面の突帯間には印刻を巡らせる。238は瓦質焼成の火鉢である。外面には2条の突帯があり、間に印刻を巡らせる。内面にはハケ目が見られる。239は瓦質焼成の播鉢である。底径12.0cm。240は瓦質焼成の火鉢である。底部には三ヶ所に脚が付き、体部下半は直線的に開く。上半は強く内傾するようである。体部中位に2条の突帯があり、印刻を巡らせる。底部径37.8cm。241は土師質焼成の播鉢である。内面には5条の描目が認められる。242～244は土師質焼成の鍋である。口縁部は丸く肥厚する。244は内面には細かい横ハケ目が見られる。245は弥生時代終末～古墳時代前期の土師器で



第34図 SD-18 出土遺物実測図①(1/3)

ある。底部は尖り気味で、内面にハケ目が見られる。

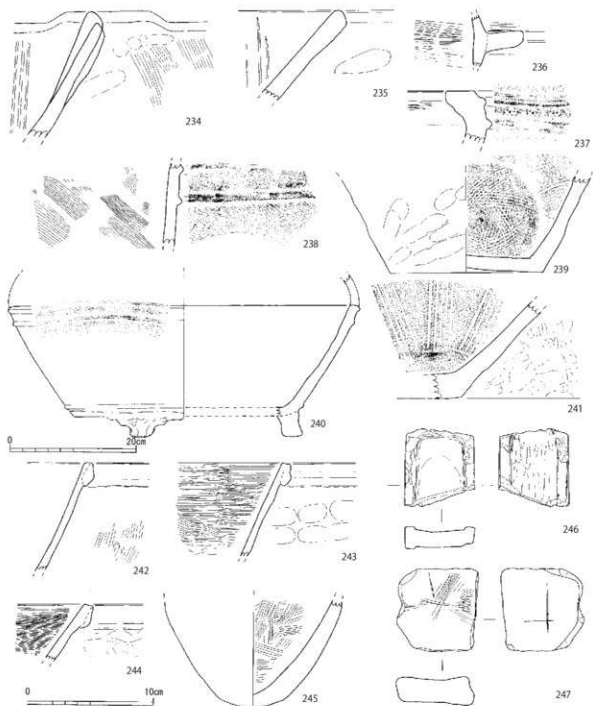
246は石製硯である。長さ6.2cm、幅5.5cm、厚さ1.8cm。247は砥石である。4面使用する。長さ6.2cm、幅6.1cm、厚さ2.3cm。

SD-21 (図版17、第27図)

調査区東側に位置する溝である。東西方向に7mの長さで直線的に伸びており、幅は1.5m、深さは50～65cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は下層に黒灰色粘土、中層に白灰色粘土、上層に黒灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版60、第36図)

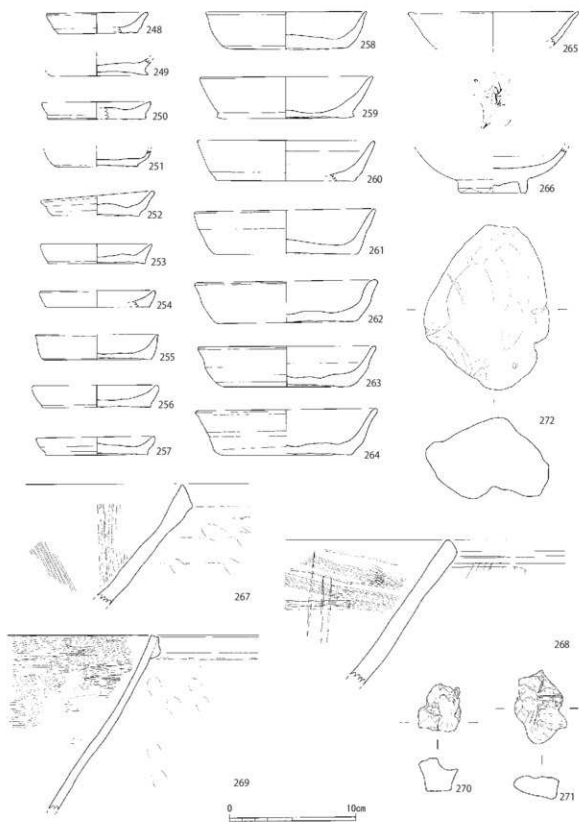
248～257は土師器小皿である。底部と体部の境には明瞭な稜を有し、体部は短く開く。体部の器壁は厚く、端部は丸味を帯びる。248は口径8.0cm、器高1.7cm、底径6.0cm。253は口径8.6cm、器高1.6cm、底径7.6cm。256は口径10.0cm、器高1.8cm、底径8.7cm。257は口径9.3cm、器高1.5cm、底径8.1cm。258～265は土師器杯である。258は口径12.5cm、器高3.0cm、底径10.0cm。259は底部と体部の境が明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。口径13.5cm、器高3.3cm、底径10.8cm。262は口径14.4cm、器高3.3cm、底径10.8cm。263は底部と体部の境が丸



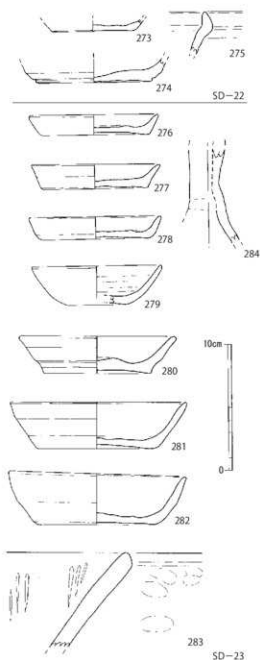
第35図 SD-18 出土遺物実測図②(1/3)

みを帯び、不明瞭である。口径13.8cm、器高3.2cm、底径10.0cm。264は口縁部がわずかに外反する。口径14.2cm、器高3.9cm、底径10.4cm。265は器壁が比較的薄い。口径13.2cm。

266は青磁碗である。内面見込みには一条の沈線を巡らせ、中央に花文を印刻する。外面の高台外端部にまで施釉する。高台径5.1cm。267は備前焼の播鉢である。口縁部は若干肥厚し、端部は上方に尖る。268は瓦質焼成の播鉢である。口縁部は外傾する面をなし、内端部が上方を向く。内



第36图 SD-21出土遺物実測図(1/3)



第 37 図 SD-22・23 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (図版 60、第 37 図)

276～278 は土師器小皿である。体部が短く直線的に伸びる器形となる。276 は口径 10.1cm、器高 1.7cm、底径 8.3cm。277 は口径 10.1cm、器高 2.0cm、底径 8.1cm。278 は口径 10.5cm、器高 1.8cm、底径 8.4cm。279～282 は土師器杯である。279 は底部が小さく、体部はやや内傾しながら長く伸びる。口径 10.3cm、器高 3.1cm、底径 4.6cm。280 は底部と体部の境に明瞭な稜を有し、体部は外反気味に開く。口径 12.4cm、器高 3.0cm、底径 8.4cm。282 は底部と体部の境が丸く不明瞭で、体部は内湾気味にあまり開かず伸びる。口径 14.0cm、器高 4.2cm、底径 9.2cm。283 は瓦質焼成の挿鉢である。口縁端部は丸味を帯びる。

面には挿目に先行する横ハケ目が見られる。269 は土師質焼成の鍋である。体部は直線的に伸びており、口縁部外端部に粘土帯を貼り付けて玉縁状にする。外端部を強くナデて明瞭な稜をなす。内面は横ハケ目、外面はナデ調整を行い、指圧痕が多く残る。270・271 はスサ入り粘土塊である。270 は長さ 3.7cm、幅 2.9cm、厚さ 2.7cm。271 は長さ 5.9cm、幅 3.7cm、厚さ 1.8cm。272 は軽石である。長さ 13.1cm、幅 9.8cm、厚さ 5.8cm。

SD-22 (第 27 図)

調査区東側に位置する溝である。南北方向に 12m の長さで直線的に伸びており、北端は SD-21 と直角に接続している。幅は 1m、深さは 25cm を測る。壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。覆土は下層に青灰色粘土、上層に灰白色粘土が堆積する。

出土遺物 (第 37 図)

273 は土師器小皿である。底径 6.4cm。274 は土師器杯である。底径 9.2cm。275 は須恵質焼成の鉢である。小片であり傾きに不安が残る。口縁部は屈曲して上方を向いている。

SD-23 (図版 17、第 27 図)

調査区南側に位置する溝である。東西方向に 29m の長さで直線的に伸びており、西端は SD-44 に直角に接続している。幅は 3.5m を測る。深さは 25～35cm を測り、壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。覆土は下層に青灰色粘土、上層に黒灰色粘土が堆積する。

SD-44 (図版 17・図版 18、第 38 図)

調査区西側に位置する溝である。南北方向に 38m の長さで直線的に伸びており、北側は枝分かれしている。また南側では SD-23 と直角に接続している。幅 2.7m、深さ 65cm を測る。断面の形状は逆台形状をなし、壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。覆土は下層に青灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に黒灰色粘土と白灰色粘土が堆積する。覆土中層からは第 46 図の状態で木製片が出土した。

出土遺物 (図版 60、第 39 図～第 41 図)

284～299、309・310 は土師器小皿である。284 は底部と体部の境に明瞭な稜を有し、体部は直線的に伸びる。口径 7.5cm、器高 1.6cm、底径 5.2cm。285 は体部の器壁が厚く口縁部が丸くなる。286～288 は器壁が薄い。290 は口径 9.0cm、器高 1.6cm、底径 7.8cm。291・292 は器壁が薄い。293 は底部と体部の境が丸く稜をなさない。口径 9.6cm、器高 1.8cm、底径 7.5cm。296 は体部があまり開かず立ち上がる。口径 9.7cm、器高 1.8cm、底径 9.0cm。298 は口径 10.5cm、器高 1.6cm、底径 8.8cm。300～308、311 は土師器杯である。300 は体部が外反気味に伸びる。口径 10.6cm、器高 2.4cm、底径 8.0cm。303 は体部があまり開かず立ち上がる。305 は体部が直線的に大きく開いて伸びる。口径 13.0cm、器高 3.7cm、底径 6.7cm。311 は口径がやや大きく、鉢と称した方が良いか。口径 16.2cm、器高 4.6cm、底径 7.0cm。

312 は白磁碗の底部片である。高台は高く伸びる。高台径 6.4cm。313 は青磁碗の口縁部片である。口縁端部は若干外反する。314 は備前焼の甕である。頸部は直立し、口縁部は幅広く肥厚している。端部は丸い。315 は須恵質焼成の甕である。頸部は強く外反し、端部は面をなす。口径 25.8cm。316 は瓦質焼成の火入れであろう。外面口縁部下には印刻を巡らせる。口径 13.8cm。317 は瓦質焼成の片口播鉢である。318 も瓦質焼成の播鉢で、口縁端部は丸味を帯びる。319 は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚し、外端部に強い横ナデを加えて稜をなす。体部には沈線状の段を有す。320 は滑石製石鍋の口縁部である。321 はスサ入り粘土塊である。長さ 7.1cm、幅 5.5cm、厚さ 4.8cm。322 は堅杵である。長さ 98.2cm、径 7.3cm。

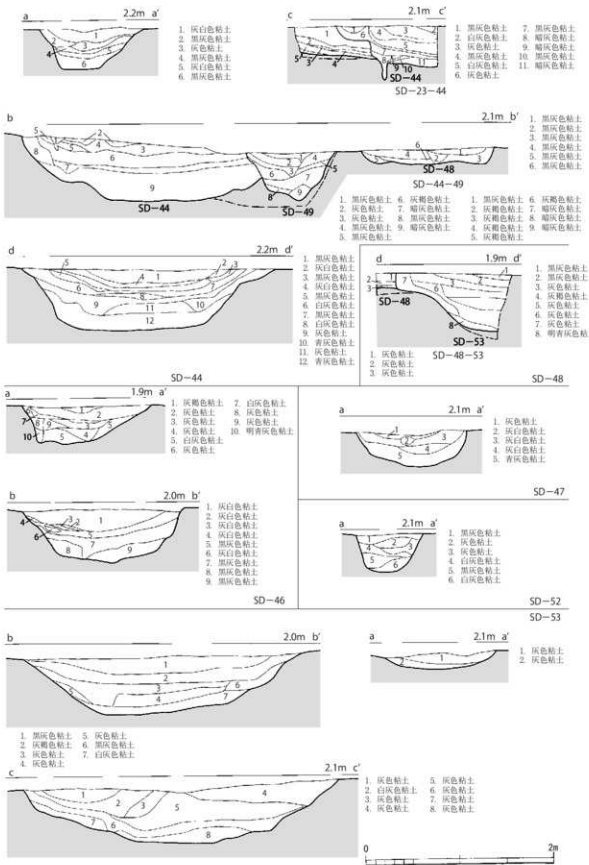
323～343 は SD-44・48 として取り上げを行った遺物である。323～335 は土師器小皿である。323 は口径 7.8cm、器高 1.4cm、底径 5.7cm。326 は底部の器壁が薄い。329 は口縁部付近の器壁が薄くなる。口径 8.9cm、器高 1.6cm、底径 7.9cm。332 は器壁が厚い。口径 10.5cm、器高 1.7cm、底径 9.1cm。335 は口径 10.5cm、器高 1.4cm、底径 7.9cm。336～340 は土師器杯である。327 は口径 12.0cm、器高 3.6cm、底径 8.8cm。340 は口径 13.2cm、器高 2.4cm、底径 11.2cm。

341 は須恵質焼成の播鉢である。端部は面をなす。342 は土師質焼成の鉢であろう。底径 11.8cm。343 はスサ入り粘土塊である。長さ 8.0cm、幅 5.3cm、厚さ 6.1cm。

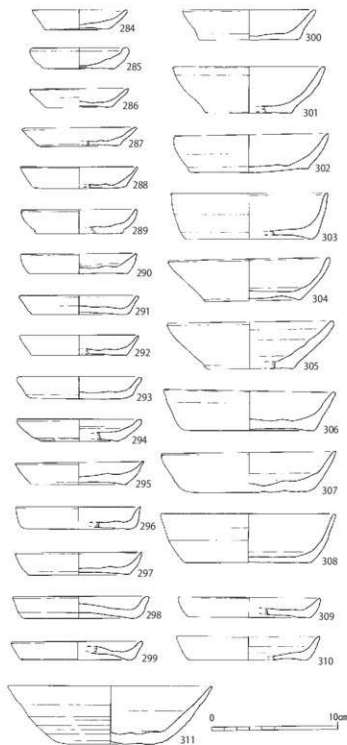
344～349 は SD-48 出土遺物である。344～347 は土師器小皿である。344 は口径 9.0cm、器高 1.7cm、底径 7.1cm。345 は口径 9.6cm、器高 1.7cm、底径 7.7cm。346 は口径 10.0cm、器高 1.8cm、底径 7.6cm。348・349 は青磁皿である。348 の体部は大きく外反する。口径 12.2cm、器高 3.6cm、高台径 6.7cm。349 は口径 13.4cm、器高 3.5cm、高台径 7.4cm。

SD-46 (図版 18、第 38 図)

調査区西側で検出した溝である。南北方向に 6m の長さで直線的に伸びており、北側は SD-53



第 38 图 SD-44·46·47·48·52·53 土层断面实测图 (1/40)



第 39 図 SD-44 出土遺物実測図① (1/3)

を帯びる。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。357は須恵質に近い瓦質焼成の擂鉢である。口縁部は面をなし、端部は上方に尖る。

に接続している。幅 1.7m、深さは 60cm を測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかに傾斜する。覆土は下層に黒灰色粘土、上層に灰白色粘土が堆積する。

出土遺物 (第 42 図)

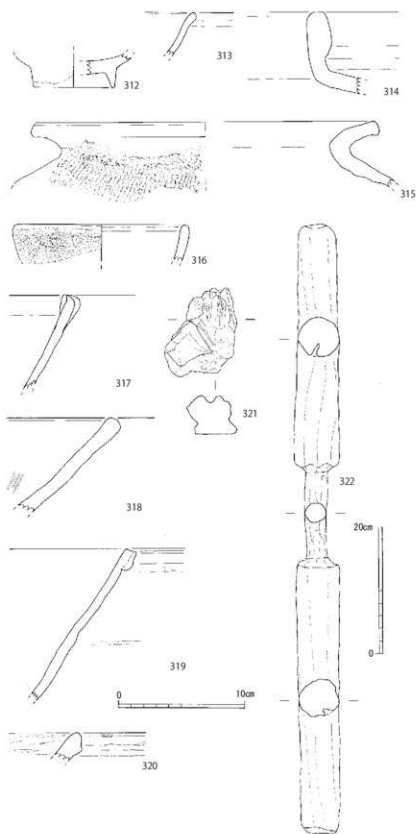
350・351は土師器杯である。底部と体部の境には稜をなさず丸みを帯びている。351は底径 8.0cm。352～354は瓦質焼成の擂鉢である。352の口縁部は丸味を帯び、端部は上方を向く。353は端部が水平面をなす。354は口縁部が若干丸く肥厚し、端部は上方に尖る。

SD-47 (図版 18、第 38 図)

調査区西側に位置する溝である。東西方向に 4.2m の長さで直線的に伸びており、西側は調査区外へと続いている。幅 1.2m、深さ 40cm を測る。底面と側面の境には稜を有さず、壁の立ち上がりは緩やかに傾斜している。覆土は下層に青灰色粘土、中層に灰白色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第 42 図)

355・356は瓦質焼成の釜である。355の口縁部は内傾し、肩部との間に稜をもたない。口縁端部は水平面をなす。口縁部は内外面ともハケ目調整を行い、肩部外面には印刻を巡らす。356は口縁部が直立し、端部は丸味



第40図 SD-44 出土遺物実測図② (1/3、1/6)

SD-52 (第38図)

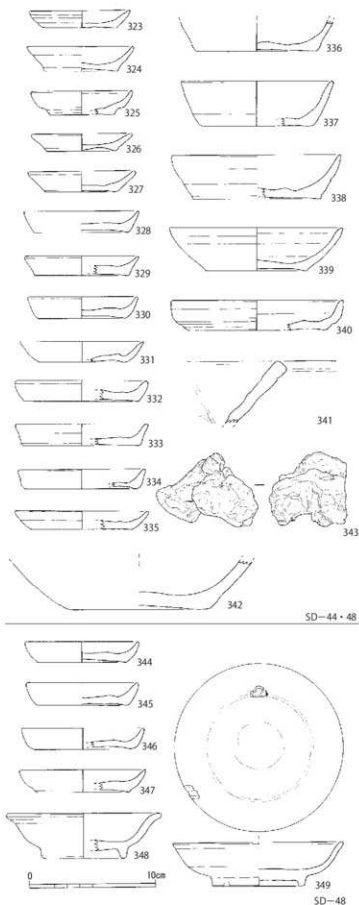
調査区西側に位置する溝である。東西方向に9.5mの長さで直線的に伸びており、西側は調査区外へと続いている。SK-54、58と重複しており、これらに切られている。溝の幅は70cm、深さは40cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は下層に白灰色粘土、中層に黒灰色粘土、白灰色粘土、上層に灰色粘土、黒灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第42図)

358は土師器環である。底径7.9cm。359は青磁碗の口縁部片である。口縁部は外反している。360は青磁碗である。口縁部はやはり外反している。口径14.1cm。361は瓦質焼成の播鉢である。口縁部は肥厚し、端部は上方を向く。

SD-53 (図版19、第38図)

調査区西側に位置する溝である。東西方向に13mの長さで伸びており、東端はSD-18に接続している。最大で幅3.4m、深さ60cmを測る。溝の底面と側面の境には稜を有さず、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に白灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に黒灰色粘土が堆積する。

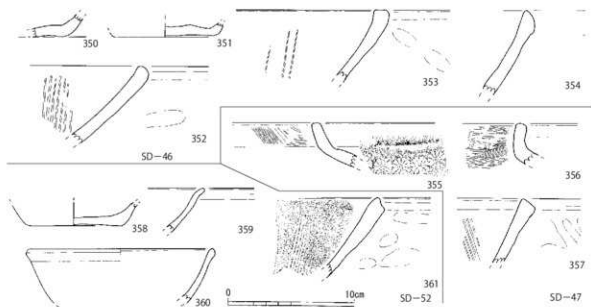


第41図 SD-44・48 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (図版60・図版61、
第43図～第45図)

362～371は土師器小皿である。底部と体部の境に明瞭な稜を有し、体部は直線的に伸びるものが多い。362は口径7.4cm、器高1.8cm、底径4.8cm。368は口径8.0cm、器高1.9cm、底径5.2cm。371は口径9.0cm、器高2.1cm、底径6.2cm。372～392は土師器坏である。小皿同様、底部と体部の境に明瞭な稜を有し、体部は直線的に伸びるものが多い。372は口径11.2cm、器高2.6cm、底径7.5cm。378は口径11.2cm、器高3.2cm、底径7.0cm。379は体部が大きく開く。口径12.4cm、器高3.1cm、底径7.2cm。383は口径11.4cm、器高3.0cm、底径6.6cm。388は口径12.6cm、器高3.7cm、底径6.8cm。389は体部が直線的に大きく開き、内面には轆轤目が明瞭に見られる。口径12.3cm、器高2.9cm、底径7.0cm。392は口径15.2cm、器高4.1cm、底径10.0cm。

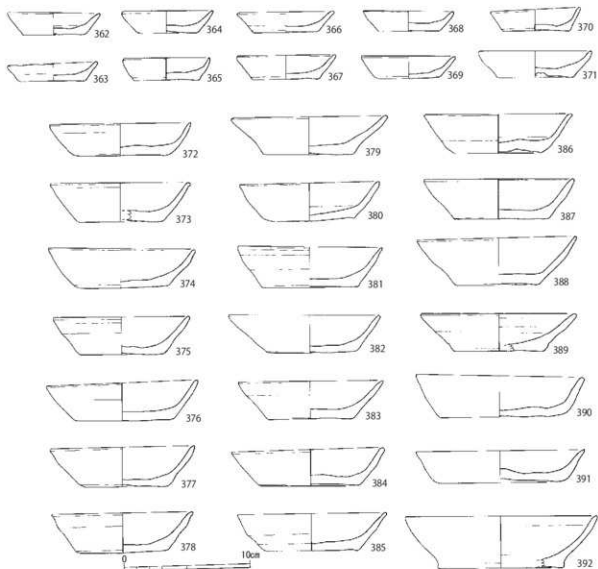
393は白磁小碗である。体部は深みを有し、口縁部は外反する。外面の高台内には墨書が見られるが書かれている文字は不明。軸は体部下半にまで施釉される。口径9.6cm、器高4.6cm、高台径3.9cm。394は白磁皿で



第42図 SD-46・47・52出土遺物実測図(1/3)

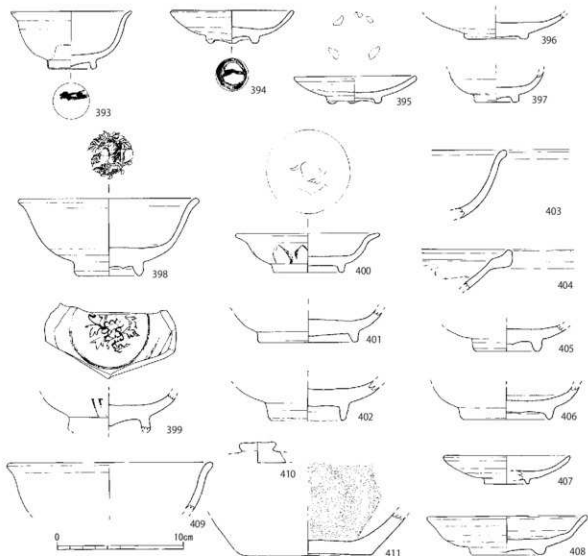
ある。体部は丸味を有して大きく開き、高台部には挟りを入れる。口径9.8cm、器高2.6cm、高台径4.2cm。395は白磁皿である。体部は内湾しながら大きく開く。内面見込みには目跡が残る。口径9.6cm、器高2.2cm、高台径4.3cm。396は白磁碗の底部であろう。低平な高台部を有し、体部は大きく開く。高台径5.1cm。397は白磁小碗である。体部は丸味を帯びる。高台径3.2cm。398は完形に復元できる青磁碗である。体部は深みを有し、口縁部は短く緩やかに外反する。内面見込みには花文を印刻する。軸は高台外面にまで施軸される。口径14.3cm、器高6.1cm、高台径5.0cm。399は青磁碗である。外面には蓮弁、内面見込みには沈線と花文の印刻を行う。400は青磁皿である。体部上半は大きく外反する。外面には蓮弁、内面見込みには双魚の印刻がみられる。口径11.2cm、器高3.1cm、高台径5.7cm。401・402は白磁碗の底部片である。401の軸は高台内面にまで施軸される。高台径7.8cm。402はやや高い高台となり、端部の外側を削って接地面を小さくしている。高台径5.6cm。403は青磁碗の口縁部片である。体部は深みを有した丸い器形で、口縁部付近は若干外反する。内外面無文。404は青磁皿の口縁部片である。口縁部は外側に屈曲し、端部は上方を向く。405は青磁碗の底部片である。高台径5.4cm。406は青磁碗である。高台部は端部が尖り、接地面が狭い。高台径7.2cm。407は白磁皿である。体部は若干内湾しながら大きく開く。口径10.0cm、器高2.2cm、高台径3.6cm。408は青磁皿である。高台は低平で、体部は大きく開き、中位に不明瞭な稜線を有す。口縁部はやや外反する。口径12.7cm、器高3.1cm、高台径6.0cm。409は青磁碗である。口縁部は短く外反する。内外面無文。口径14.8cm。410は古代の須恵器坏蓋の撮部である。径2.9cm。411は須恵質焼成の播鉢である。底径10.5cm。

412～414は土師質焼成の鍋である。412は口径30.4cm。413はほぼ完形に復元できる。底部は丸く、体部との境が稜をなさず不明瞭である。口径32.2cm、器高15.3cm。414は体部が直線的に伸びており、中位に不明瞭な段を有す。口縁部は玉縁状に肥厚し、上端部が凹面をなす。内面横



第 43 図 SD-53 出土遺物実測図① (1/3)

ハケ目、外面は横ハケ目後にナデ消しを行っている。口径 34.0cm。415 は須恵質焼成で甕であろうか。底部は平底で、体部はあまり開かず伸びるようである。内面はハケ目、外面は格子タタキが見える。底径 23.0cm。416 は瓦質焼成の釜である。体部は球形に近く、口縁部は直立する。口縁端部は水平面をなす。内面は横ハケ目、外面はナデ調整を行う。口径 16.6cm。417 は瓦質焼成の片口播鉢である。底部は端部が張り出しており、体部は直線的に開く。口縁端部は面をなす。外面はハケ目後にナデ消しを行っており、横方向の稜線が残る。内面の播目は 4 条。口径 28.2cm、器高 11.2cm、底径 12.8cm。418～421 は土師質焼成の鍋である。いずれも口縁端部が玉縁状に肥厚し、外端部に強い横ナデを加えて明瞭な稜を形成する。418 は口径 28.7cm。422 は古墳時代から古代の土師器甔の把手であろう。調整は指ナデによる。



第44図 SD-53 出土遺物実測図②(1/3)

3) 柵列

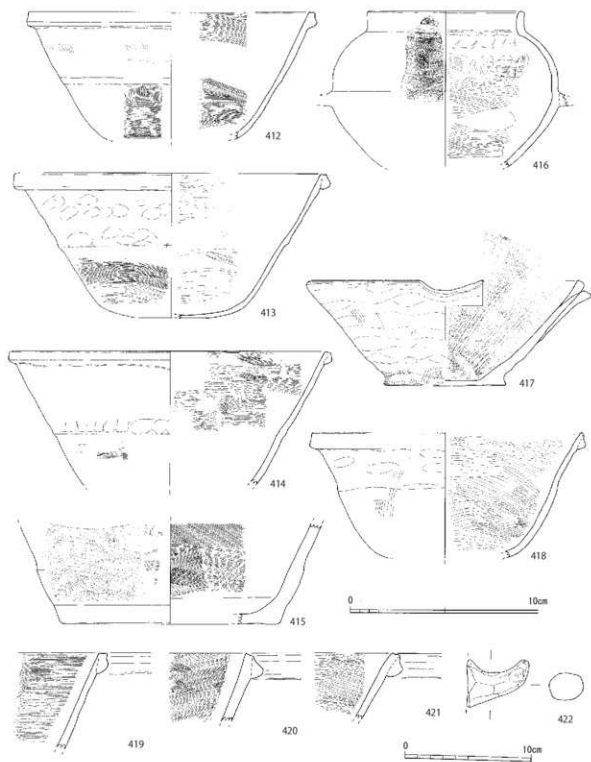
SA-43 (図版19・図版20、第46図)

調査区南西側に位置する柱列群である。2列の柱列からなり、現状では建物として復元できなかったため、柵列として報告する。直線的に並ぶP1～P6と、60cm離れて並列するP7～P11からなり、P7・P9以外に礎石が遺存する。礎石は10～15cmの扁平な石を使用している。P1～P5の各柱間は100cmで等間隔だが、P5～P6間は160cmを測る。同様にP7～P9と、P10～P11の各柱間は100cmで等間隔である。

図示できる遺物は出土しなかった。

4) その他の遺物 (図版61、第47図)

423～428は北東部の遺構検出時に出土した遺物である。423・424は土師器小皿である。423は口径7.8cm、器高2.2cm、底径5.4cm。424は口径7.8cm、器高1.7cm、底径5.6cm。425は土師



第45図 SD-53出土遺物実測図③(1/3、1/4)

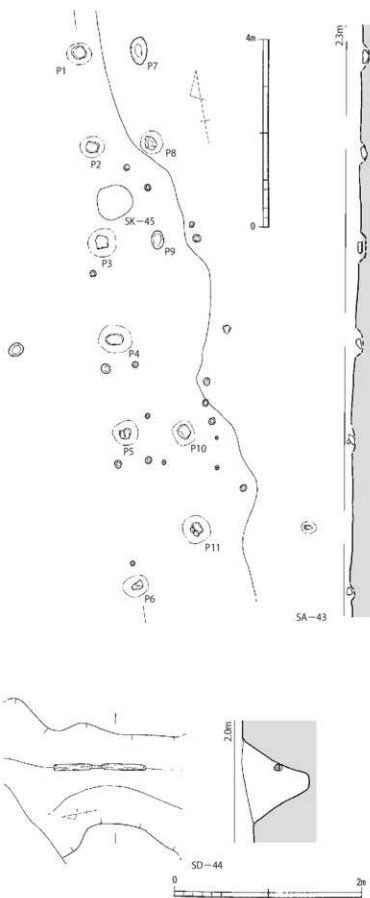
器坏である。口径12.4cm、器高3.1cm、底径10.2cm。426は外面に蓮弁を配した青磁碗である。427は滑石製石臼の口縁部片。428は瓦質焼成の播鉢である。体部は直線的に開き、口縁部は丸くおさめる。口径32.8cm。

429～442は貝層から出土した遺物である。429は土師器小皿である。口径8.2cm、器高1.2cm、底径6.6cm。430～439は土師器坏である。430は口径11.6cm、器高2.7cm、底径8.6cm。438は口径13.2cm、器高2.8cm、底径9.0cm。439は内面見込みに線状の擦痕がある。口径12.4cm、器高2.9cm、底径10.0cm。440・441は須恵質焼成の鉢の口縁部である。440の口縁部は断面三角形形状に肥厚し、端部は上方に尖る。441は440と比べると丸みを帯びる。442は滑石製石鍋の口縁部である。罅部は短く、複数の穿孔が見られる。

5) 小結

下百町鬼童遺跡第2次調査では、土坑45基、溝10条、欄列2条を検出した。

土坑のうち、SK-7、11、25、32～34、36、37、38、40、45、54、55など、平面形が円形に近く壁が垂直に立ち上がり深みのある形状のものは、恐らく貯水用の井戸として営まれたものであろう。また、SK-3、9、10、14、17、20など楕円形であり深さのない土坑については、廃棄土坑などの用途が想定される。SK-24、42は角の明瞭な長方形を呈しており、廃棄土坑などとは異なる目的で営まれたものかもしれないがよく分からない。

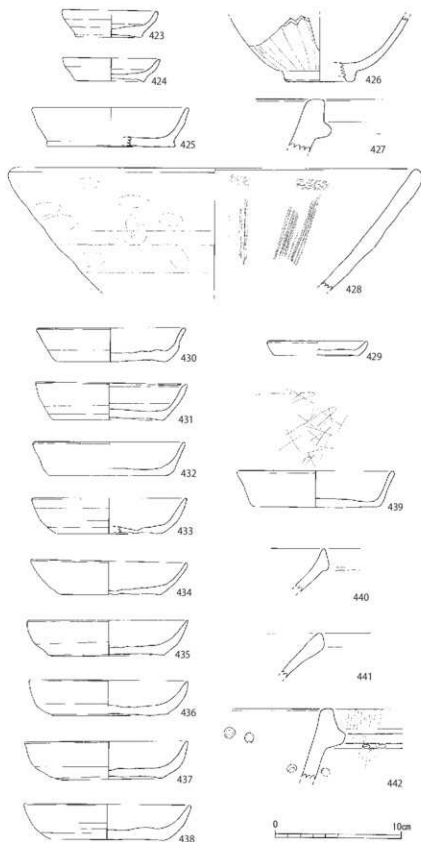


第46図 SA-43、SD-44 遺物出土状態実測図 (1/40)

SK-9とSK-10、SK-25とSK-26、SK-36とSK-37などは、近い位置にある同規模同形状の土坑であり、恐らく掘り直しが行われたものであろう。

東西、南北方向に直線的に伸びる溝のうち、SD-12、18、23、44は規模も大きく、外郭の区画溝として掘削されたものと思われる。それ以外の溝は幅が狭くて短いものが多く、小区画溝として良いだろう。切り合い関係だけで見ると、古い順にSD-23・44-SD-53-SD-18-SD-12、と4つの時期が認められる。このうち、SD-53とSD-18は同一線上に位置しており、ほとんど時期差はないものと考えられるため、大きく3つの時期に分けられるとしてよさそうである。

土坑のうち、SK-9出土品は土師器小皿が口径8.8~9.8cm、坏が11.8~13.1cmで、14世紀前半頃のものか。SK-42の土師器小皿は口径6.9~8.0cm、坏は11.6~11.8cmで、底部と体部の境



第47図 その他出土遺物実測図(1/3)

目に稜を有し体部が直線的に伸びる器形のもので占められる。供伴する白磁碗からみても15世紀代として良いだろう。SK-45は日常雑器以外の出土品に恵まれなかったが、概ね同じ頃のものと思われる。土坑出土遺物にはあまり恵まれなかったが、溝からは比較的豊富な遺物が出土している。

SD-12から出土した土師器小皿は、底部と体部の境が明瞭で体部が直線的に伸びるもので占められ、器形が浅いものと深みのあるものとに分けられる。浅いものは口径7.8～8.6cm、深いものは口径6.0～7.6cmの間に収まる。坏は体部が直線的に伸びるものと丸みを帯びるものがあり、前者は口径10.3cmと10.7cm、後者は11.8cmを測る。供伴する白磁には高台に抉りを有した皿や内面見込みに目跡を有した小碗、器壁が薄く低い高台の皿などがある。青磁には内面見込みに花文を印刻し外面に蓮弁を配した碗や無文の小碗、皿などがある。他に備前焼の甕、東播磨の鉢、瓦質焼成の播鉢、瓦質焼成の火鉢、釜、玉縁状口縁の土師質鍋などの日常雑器が伴っている。これらは15世紀代におさまるものである。

SD-18から出土した土師器小皿は口径7.6～10.1cm、坏は口径11.6cm～13.8cmとややばらつきがある。供伴する白磁には口禿の口縁部片など13世紀代に遡る遺物もあるが、高台に抉りのある皿は15世紀代として良く、時期幅があるようである。SD-21出土遺物のうち、土師器小皿は口径8.0～9.3cm、坏は口径12.5～14.2cmを測り、内面見込みに花文を印刻する青磁碗や備前焼播鉢、瓦質播鉢、土師質鍋が伴っている。14世紀後半を中心とする時期として良いか。SD-53から出土した土師器小皿は体部が直線的に伸びるものが多く、口径7.4～9.0cm、土師器坏もやはり体部が直線的なものが多く、口径11.2～12.3cmと比較的形が揃う。白磁には口縁部が外反する小碗、高台部に抉りのある皿、青磁には内面見込みに花文を印刻する碗や、見込みに双魚を印刻し外面に蓮弁を配した皿、口縁部が屈折する盤などがあり、14世紀後半から15世紀前半として良いだろう。日常雑器には口縁部が玉縁状に肥厚する土師質鍋や瓦質播鉢、釜がある。これら溝から出土した遺物には時期幅があるようだが、器種も豊富で数も多く、良好な資料である。

3 下百町鬼童遺跡第3次調査

下百町鬼童遺跡第3次調査は、平成21年5月28日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、6月25日に機材を撤収して現地での作業を終了した。

調査区は東西27m、南北16mを測り、東西に長い形状となる。遺構の密度は低い。遺構面の標高は1.8m前後である。調査面積は400㎡。

検出した主な遺構は、土坑1基、溝5条である。出土遺物は土師器、陶磁器、日常雑器、土製品、石製品である。

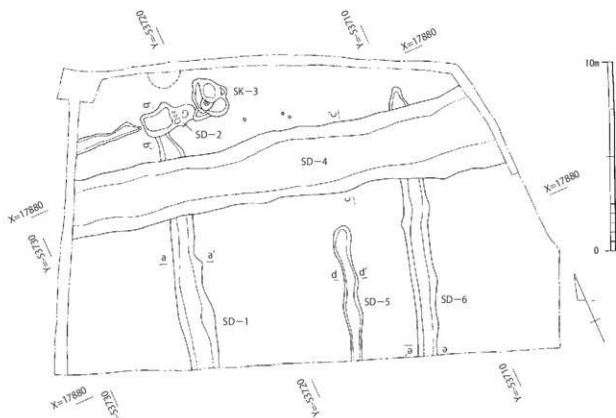
1) 土坑

SK-3 (図版22、第49図)

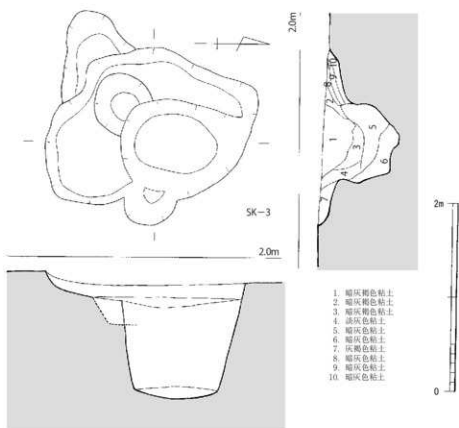
調査区北側で検出した土坑である。SD-2と重複しており、これを切っている。長軸2.4m、短軸2.3mの不整形を呈しており、土坑の東側が楕円状に深くなっている。この箇所、長軸1.3m、短軸1.1m、深さ1.2mを測る。覆土は下層に暗灰色粘土、上層に暗灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版61、第50図)

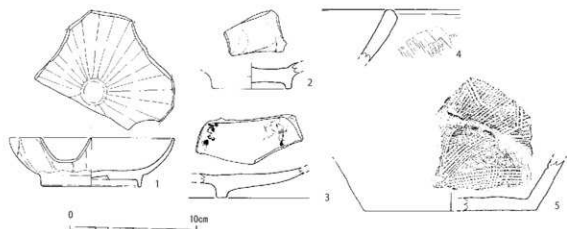
1は内外面に花卉を表した白磁皿である。高台部内面は蛇ノ目状に軸剥ぎを行う。口径13.0cm、器高3.9cm、高台径7.8cm。2は青磁碗である。内面には細線で花文を片彫りする。高台径6.4cm。3は中型の染付皿であろう。内面には草花状の文様が見える。4は瓦質焼成の鍋であろう。口縁部は素口縁で上端部に小さな面を形成する。5は備前焼の播鉢である。底径13.8cm。



第48図 下百町鬼童遺跡第3次調査区遺構配置図(1/200)



第49図 SK-3実測図(1/40)

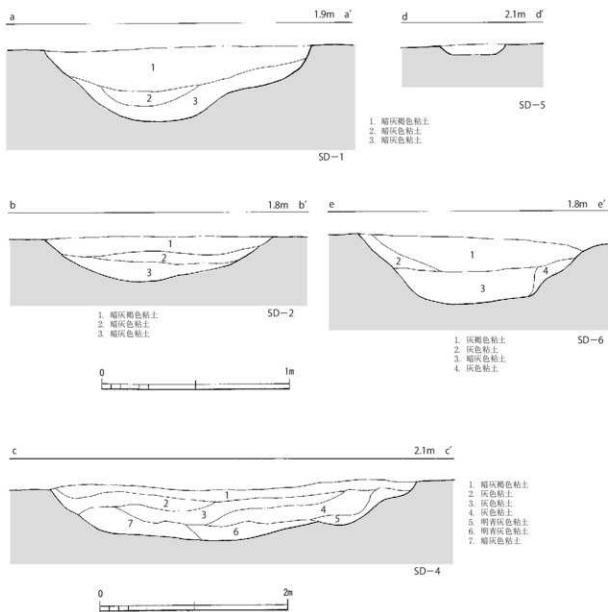


第50図 SK-3出土遺物実測図(1/3)

2) 溝

SD-1 (図版 22、第 51 図)

調査区西側で検出した溝である。後述するSD-2、SD-4と重複しており、これらに切られてい



第51図 SD-1・2・4・5・6土層断面実測図(1/20, 1/40)

る。南北方向に直線的に伸びており、長さは12mを測る。幅は1.4m、深さは0.4mを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に暗灰色粘土、上層に暗灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物(図版61・図版62、第52図)

6は土師器坏である。底部と体部の境は丸味を帯びて不明瞭である。体部はあまり開かず立ち上がり、口縁端部は欠損する。

7・9は白磁皿である。7は器壁が薄く、体部は直線的に大きく開く。口径9.0cm、器高2.4cm、高台径4.4cm。8は青磁皿で体部中位から緩やかに外反する器形となるようである。高台置付は内側を削っている。高台径4.0cm。9は花卉形の皿である。口径12.4cm、器高3.1cm、高台径7.0cm。10は青磁碗の口縁部片である。体部はあまり開かない深みのある器形で、口縁端部はわずかに外反する。内外面無文。

11～18は染付磁器である。11・12は筒形の碗。11は口縁部内面に二条の圏線を巡らせ、外面中位には渦文等の文様を描く。12もやはり内面口縁部下に二条の圏線を巡らせ、屈曲部内面にも一条の圏線を巡らせる。外面には線描の文様を描く。13は小型の碗で、外面口縁部下に斜格子文を描く。口径6.6cm。14は口径8.4cm。外面に小さく草文状の施文を行うが、発色が悪い。15・16は外面に文様を描く碗である。15は口径10.6cm、器高4.8cm、高台径4.0cm。17・18は皿である。17は丸みを帯びた器形の小型の皿。口径10.0cm。18は口縁部付近が上方に立ち上がる浅い器形の皿である。口径12.0cm。19～21は陶器である。19・20は埴である。19は体部下半に屈曲部を有し体部が直線的に立ち上がる筒状の碗。全体に透明色の釉を塗布しており、鉄絵による施文を行う。高台径4.2cm。20は高台径5.2cm。21は口縁部が外反する中型の皿で、白色釉でハケ目の文様を描く。

22は土師器高坏の脚部であろうか。器表の剥落が著しく詳細不明。23は口縁部が丸く肥厚する鉄軸の鉢である。24・25は鉄軸の無頸壺である。口縁部は上面が浅く窪んだ面をなし、肩が丸く張った器形となる。底部は上げ底になる。26は甕の底部か。高台は外端部を削り取る。内面には部分的に薬灰釉が見られる。高台径12.6cm。27・28は播鉢である。27は器壁が薄く、口縁部を玉縁状に肥厚させる。内面の播目は線が細くシャープであり、一本一本の間隔が広い。28は備前焼の播鉢である。29は瓦質焼成の鍋である。口縁部下には三角形の低い突帯びを巡らせ、体部との境目には段を有す。内面横ハケ目、外面斜ハケ目後ナデ調整を行う。30は土師質焼成の鍋で、器壁が薄く大きく開いた形状をなす。口縁部は丸く肥厚する。31は瓦質焼成の火鉢か。器壁が厚く、口縁部付近は肥厚しており上端部は水平面をなす。外面にはハケ目が認められる。32も瓦質焼成の火鉢か。上端部はわずかに窪んだ面をなす。33は硯である。34は白磁製で円盤状をなす。恐らく引き戸の滑車であろう。

SD-2 (第51図)

調査区北端に位置する溝である。西側に4mの長さで直線的に伸びる部分と、東側に3mの長さで伸びる土坑状の部分からなり、両者は主軸を揃えているが接続はしていない。東側の部分で幅1.2m、深さ25cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に暗灰色粘土、上層に暗灰褐色粘土が堆積する。

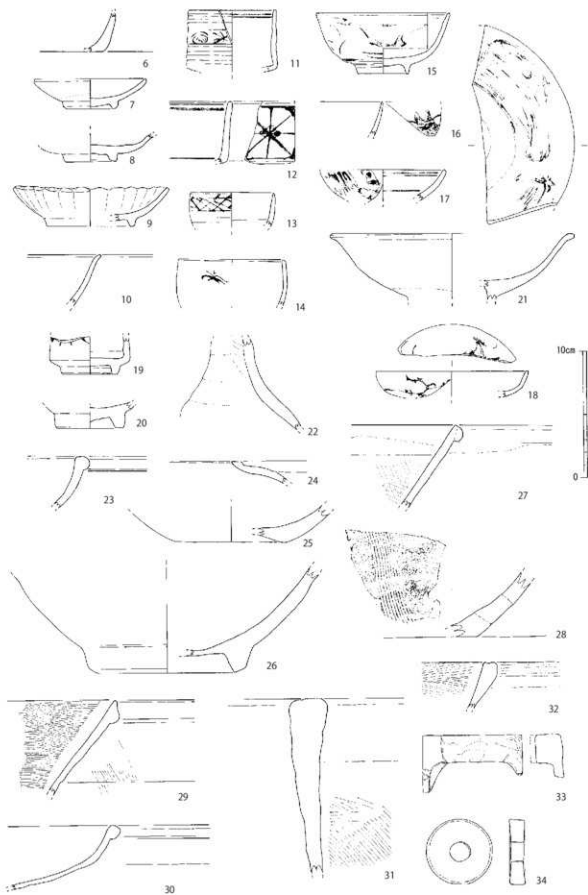
図示できる遺物は出土しなかった。

SD-4 (図版23、第51図)

調査区中央付近を東西に貫通する溝である。東西両端は調査区外へと伸びており、検出した範囲で長さ23mを測る。SD-1、SD-6と重複しており、これらを切っている。幅3.9m、深さ0.5mを測り、壁の立ち上がりは緩やかな角度で傾斜する。覆土は下層に暗灰色粘土と明青灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に暗灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版62、第53図)

35・36は土師器小皿である。35は体部があまり開かず深みのある器形となる。口径6.6cm、器高2.4cm、底径4.4cm。36は図上で復元したため径に不安が残る。口径9.4cm、器高1.4cm、底径8.0cm。37～39は土師器坏である。37は底径7.6cm。38は器壁がやや厚い。口径14.4cm、器高



第52图 SD-1出土遺物実測図(1/3)

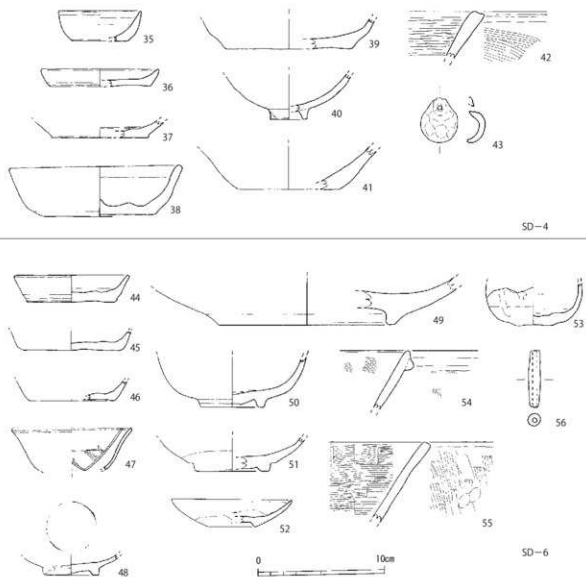
4.1cm、底径8.8cm。39は底径10.0cm。40は青磁碗であろう。図上で復元したため径に不安が残る。高台径3.0cm。41は須恵質焼成の鉢である。底径8.0cm。42は瓦質焼成の鍋であろう。口縁部は若干肥厚しており、端部はわずかに窪んでいる。内外面横ハケ目調整を行う。43は土鈴である。径5.0cm。

SD-6 (図版 23、第 51 図)

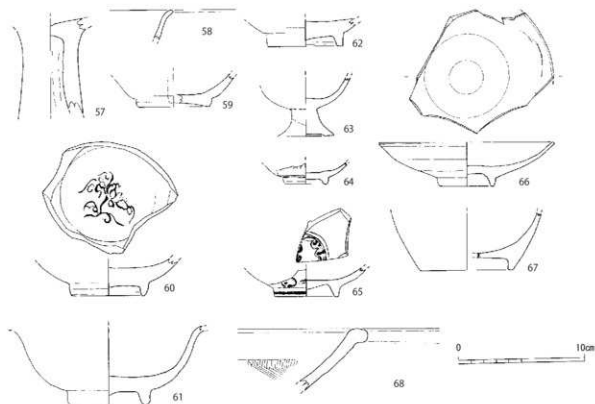
調査区東側で検出した溝である。南北方向に直線的に伸びており、南側は調査区外へと続く。またSD-4と重複しており、これに切られている。長さ15m、幅1.2m、深さ0.4mを測る。覆土は下層に暗灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版 62、第 53 図)

44～46は土師器小皿である。44は底部と体部の境に明瞭な稜を有す。口径9.2cm、器高2.2cm、底径7.2cm。45は底径7.6cm。46は底径6.6cm。47・48は白磁である。47は内面に細線で文様



第 53 図 SD-4・6 出土遺物実測図 (1/3)



第54図 その他の出土遺物実測図(1/3)

を描く小碗。口径9.6cm。48は内面の軸を輪状に削り取る。高台径4.4cm。49・50は青磁である。49は盤。高台径14.0cm。50は碗である。高台径5.0cm。51も碗だが、青白磁か。高台径6.0cm。52は染付皿である。内面には圈線を巡らせる。口径9.6cm、器高2.2cm、高台径3.6cm。53は陶器で小型の壺となろうか。体部下半が膨らんだ形状となる。外面には部分的に軸垂れが見られるが、多くは露胎となる。底径3.0cm。54・55は土師質焼成の鍋である。54は口縁部に三角状の突帯を巡らせる。55は素口縁で端部は丸みを帯びた面をなす。内面横ハケ目、外面縦ハケ目調整を行う。56は土師質焼成の管状土錘である。長さ4.5cm、径1.0cm、孔径0.4cm。

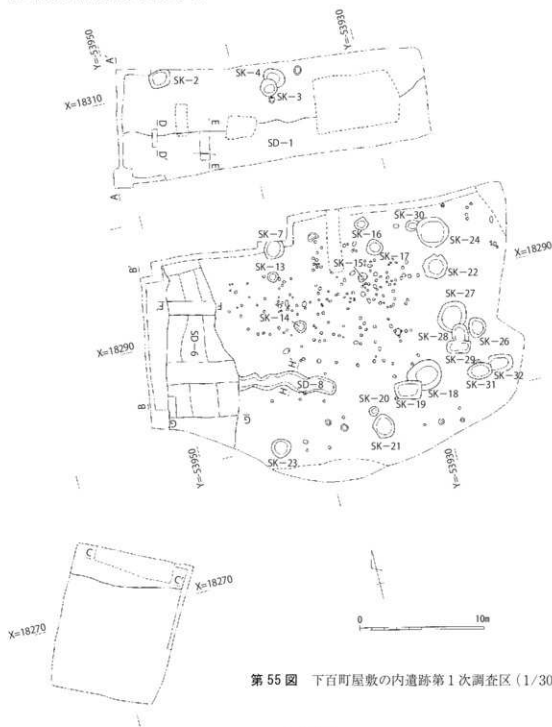
4) その他の出土遺物(図版62、第54図)

57は土師器高坏の脚柱部である。攪乱から出土。58～61は青磁碗である。58は外反する口縁部片。遺構検出時に出土。59は小碗か。高台径6.0cm。側溝掘削時に出土。60は内面に草花文様を描く碗である。高台径5.8cm。61は無文の碗である。高台内面のみ無軸となる。高台径6.6cm。62・63は白磁である。ともに側溝掘削時に出土。62は碗。高台径6.0cm。63は白磁の仏飯具である。裾部径4.4cm。64～66は染付磁器である。64は小坏で高台径2.8cm。側溝掘削時出土。65は内面見込みと外面に文様を描く碗。高台径5.0cm。66は器壁の薄い皿である。内面見込みは蛇ノ目状に軸剥ぎを行う。口径14.0cm、器高3.5cm、高台径4.4cm。側溝掘削時出土。67・68は陶器である。67は褐色釉を施軸する壺か。高台径7.2cm。側溝掘削時出土。68は口縁端部が短く外反する挿鉢。口縁部内外および体部外面には鉄釉を施軸する。

5) 小結

下百町鬼童遺跡第3次調査で検出した遺構は、土坑1基、溝5条と少なく、遺構密度も低いものであった。土坑はSK-3の1基のみだが、溝として扱ったSD-2も土坑と称した方が相応しいものである。

溝のうち、SD-1、5、6は規模が類似し方位も揃っており、同時期のものとして良いだろう。SD-4はこれらを切る形で営まれており、切り合い関係からみると二つの時期があることが分かる。出土遺物のうち、SD-1から出土した遺物は15世紀後半頃の白磁皿や、16世紀以降の型打成形の菊花文皿をはじめ、中世後期から近世の遺物が混じっているようである。SD-4・6出土遺物は近世まで下るものではなく、そうすると切り合い関係と齟齬が生じることとなる。恐らくSD-1には近世の遺物が混入したのであろう。



第55図 下百町屋敷の内遺跡第1次調査区(1/300)

4 下百町屋敷の内遺跡第1次調査

下百町屋敷の内遺跡(略称SYU)は、今回の区画整理事業地の中央付近に位置する。事業の進捗と調査範囲に即して、3箇所の調査を実施したため、第1次調査、第2次調査、第3次調査と呼称することとした。

下百町屋敷の内遺跡第1次調査は、平成20年8月25日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、10月10日に機材を撤収して現地での作業を終了した。

調査区は大きく北側と南側とに分かれる。北側の調査区で東西25m、南北8mを測り、東西に長い長方形を呈す。遺構の分布は散漫であり、南側からは調査区壁に沿って、SD-1とした大規模な溝が検出された。遺構面の標高は1.8m前後である。南側の調査区は北側調査区から約5m南側に位置する。調査区の形状は東西30m、南北22mの不整形長方形を呈している。遺構密度はそれほど高くないが、調査区全体に遺構が分布する。調査区西端には大型の溝であるSD-6が南北方向にあり、調査区の中央付近には小規模なピット群が、東側には土坑群が位置している。遺構面の標高は2.0m~2.2mである。

また、南側の調査区の南西側にもう一つ調査区を設定して表土掘削を行ったが、ここについては、遺構は全く確認されなかった。

調査に際しては、各調査区を区分せずに取扱い、遺構番号も一連のものとした。北側、南側調査区全体で、調査区の範囲は東西31m、南北35mを測る。調査面積は合計で965㎡である。

検出した主な遺構は、土坑23基、溝3条である。出土遺物は土師器、陶磁器、石製品である。

1) 基本土層(第56図)

第56図は調査区壁面の土層図である。A-A'は調査区北側西壁の土層図である。最上層には後世の水田床土である明褐色土が厚く堆積し、その下層には白灰色粘土や青灰色粘土が複雑な堆積状況を示す。この範囲は大規模な溝SD-1の上層に相当し、数度の掘削や堆積を繰り返したためであろうと思われる。図の右端の下方には安定した基盤層を確認しており、その上層には暗青灰色粘土や白灰色粘土が水平に堆積する。

B-B'は調査区南側西壁の土層図である。最上層には客土であるバラスがあり、その下層には褐色土が水平に厚く堆積する。これらは若干の遺物を包含する。褐色土層の下には安定した基盤層があり、この上面が遺構検出面となる。地表面から遺構面までの深さは約90cm。

C-C'は南側調査区北壁の土層図である。上層には褐色粘土が、下層には淡灰色粘土や暗青灰色粘土が堆積する。水平ではなく西側にやや傾いた堆積状況を示す。

4) 土坑

SK-2(第57図)

調査区北端で検出した土坑である。長軸1.7m、短軸1.4mの比較的形状の整った隅丸長方形プランを呈す。深さは40cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかな傾斜となる。

出土遺物(図版63、第58図)

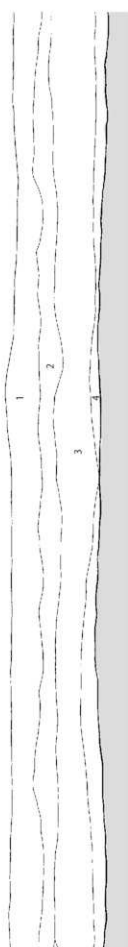
1・2は染付碗である。1は外面に点文、内面に圏線が巡る。2は直立する低い高台で、外面に3

2.5m A



- | | | |
|---------|----------|-----------|
| 1. 褐色砂土 | 7. 白色粘土 | 13. 褐色粘土 |
| 2. 褐色砂土 | 8. 灰褐色粘土 | 14. 白色粘土 |
| 3. 褐色粘土 | 9. 褐色粘土 | 15. 灰褐色粘土 |
| 4. 褐色粘土 | 10. 褐色粘土 | 16. 褐色粘土 |
| 5. 褐色粘土 | 11. 褐色粘土 | 17. 褐色粘土 |
| 6. 白色粘土 | 12. 褐色粘土 | |

2.5m B



- | |
|----------|
| 1. 褐色砂土 |
| 2. 褐色砂土 |
| 3. 褐色砂土 |
| 4. 灰褐色粘土 |

2.4m C



- | |
|----------|
| 1. 褐色粘土 |
| 2. 褐色粘土 |
| 3. 灰褐色粘土 |
| 4. 褐色粘土 |
| 5. 褐色粘土 |



第 56 圖 調査区土層図 (1/40)

条の圏線が巡る。3は陶器皿である。前面黄褐色の釉を施釉し、内面には白色釉を使用した刷毛施文を行う。内面見込みは輪状に釉剥ぎ。外面は高台部のみ露胎となる。口径17.5cm。4は土製の人形である。風化が進んでおりモチーフは分からない。側面には型合わせの接合痕が見られる。高さ6.3cm。

SK-3 (第57図)

調査区北端で検出した土坑である。SK-4と重複しており、これを切っている。直径1.5mの円形プランで、深さは1.6mを測る。壁の立ち上がりは急角度で傾斜する。

図示できる出土遺物はない。

SK-4 (第57図)

調査区北端で検出した土坑である。SK-3と重複しており、南西側をこれに切られる。直径1.8m、深さ1.0mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。

図示できる出土遺物はない。

SK-7 (図版25、第57図)

調査区中央付近で検出した土坑である。北端が調査区外へと続いているが、全体の形状は概ね把握できる。直径1.5mの円形プランを呈し、深さは1.7m、壁は垂直に近い急な角度で傾斜する。

出土遺物 (図版63、第58図)

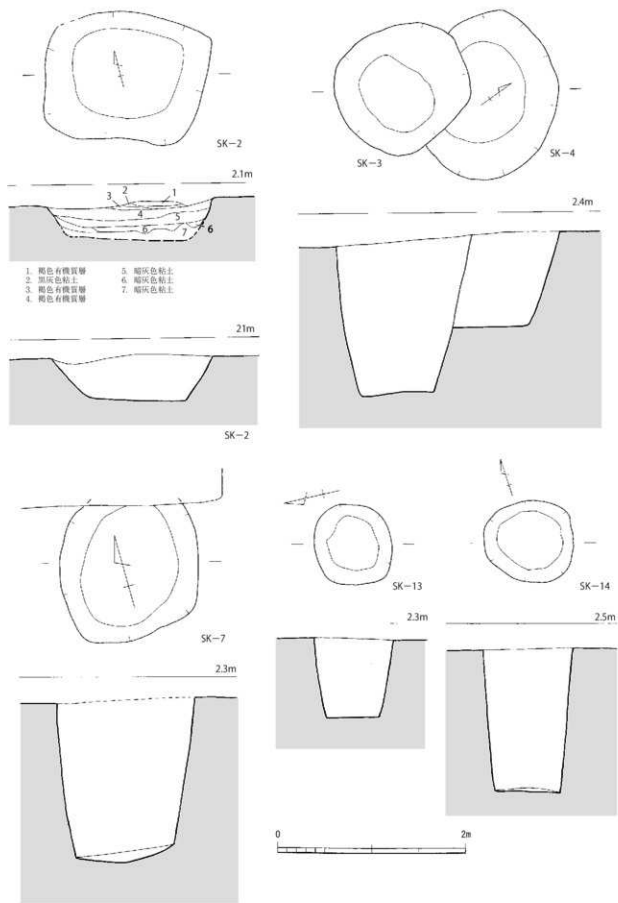
5は土師器坏である。底径7.4cm。6は青磁碗である。内面見込みには文様があるようだが不鮮明。外面には進弁がわずかに残る。外面高台部から内側は露胎となる。高台径4.8cm。7は土師質焼成の灯明皿である。底部は糸切りでわずかに上げ底となる。銜部径9.0cm。8は瓦質焼成の火鉢である。体部上半はわずかに開きながら立ち上がっており、口縁部付近は器壁が厚くなる。口縁部上端は水平面をなし、内端はわずかにつまみ出している。外面口縁部下には2条の小さな三角突帯を巡らせる。内面横ハケ目、外面ナデ。口径32.4cm。

SK-13 (図版25、第57図)

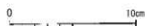
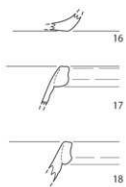
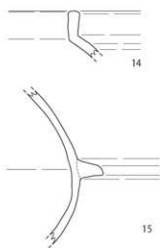
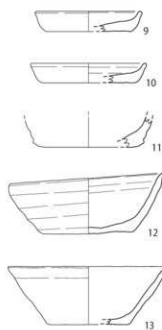
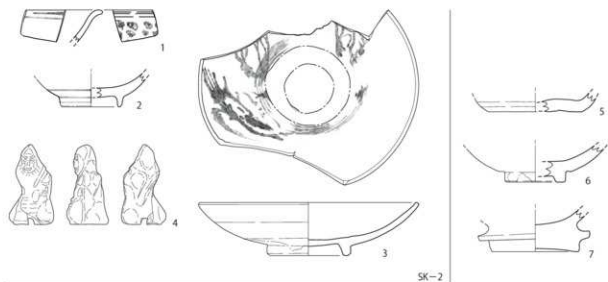
調査区の中央付近、SK-7から1.5m南側に位置する土坑である。直径80cmの円形プランを呈し、深さは85cm、壁の立ち上がりは垂直に近い傾斜となる。

出土遺物 (図版63、第58図)

9・10は土師器小皿である。9は口径8.5cm、器高1.6cm、底径7.0cm。10は口径9.2cm、器高1.6cm、底径7.8cm。11～13は土師器坏である。11は底径8.8cm。12はわずかに内湾する体部となる。口縁端部は薄く尖る。口径12.1cm、器高4.4cm、底径7.1cm。13は底部が小さく、体部は直線的に開く。口径12.8cm、器高4.6cm、底径6.8cm。14・15は土師質焼成の釜で、接合しないが同一個体であろう。14は口縁部が短く直立し、端部は丸みを帯びた水平面をなす。体部の銜はやや下方に向かって短く伸びる。



第 57 图 SK-2·3·4·7·13·14 实测图 (1/40)



第58图 SK-2·7·13·16出土遺物実測図(1/3)

SK-14 (図版 25、第 57 図)

調査区の中央付近で検出した土坑で、SK-13 から 8m 南東に位置する。直径 90cm の円形プランを呈し、深さは 1.5m を測る。壁の立ち上がりは垂直に近い傾斜となる。

図示できる出土遺物はない。

SK-15 (第 59 図)

調査区中央付近で検出した土坑で、SK-14 から 6m 北東に位置する。長軸 80cm、短軸 60cm の楕円形プランで、深さは 50cm、壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。

図示できる出土遺物はない。

SK-16 (図版 26、第 59 図)

調査区中央付近で検出した土坑で、SK-15 から 4m 北側に位置する。長軸 1.1m、短軸 0.9m の不整楕円形プランを呈し、深さは 1.1m、壁の立ち上がりは急な傾斜となる。

出土遺物 (第 58 図)

16 は土師器環の底部片である。17・18 は土師質焼成の鍋である。どちらも口縁端部外面を玉縁状に肥厚させており、上端に強い横ナデを加えて凹面を形成する。上端部は丸みを帯びた面をなす。

SK-17 (第 59 図)

調査区中央付近で検出した土坑で、SK-16 から 1m 南東に位置する。長軸 1.4m、短軸 1.2m の楕円形プランを呈し、深さは 1.6m、壁の立ち上がりは急な傾斜となる。

出土遺物 (第 60 図)

19 は白磁皿である。器壁が薄く、小型品であろう。内面に 1 条の沈線が巡る。20 は瓦質焼成の鉢である。口縁部は素口縁で面をなす。内面斜ハケ目、外面横ナデ調整を行う。

SK-18 (第 59 図)

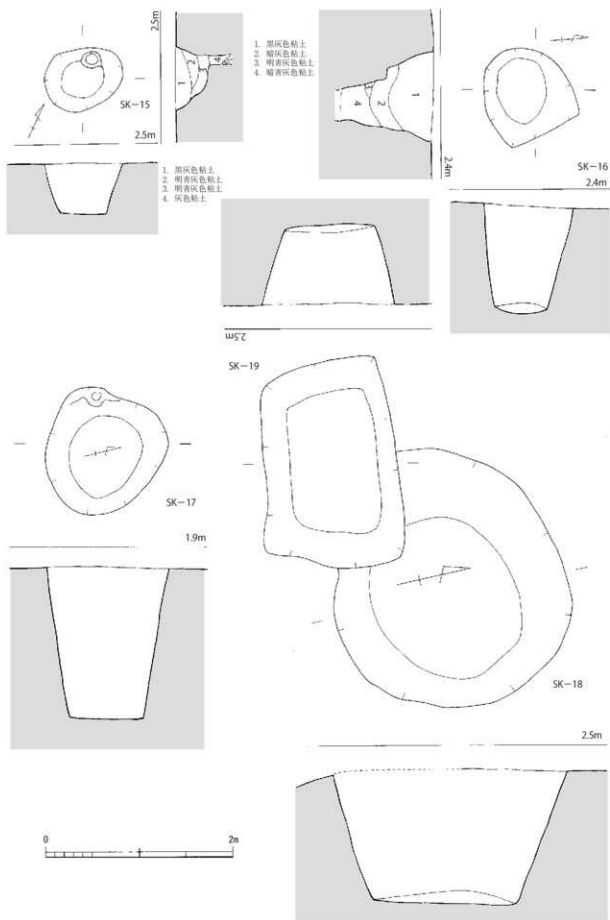
調査区南東側で検出した土坑である。SK-19 と重複しており、南東側をこれに切られている。長軸 2.8m、短軸 2.5m の楕円形プランを呈し、深さは 1.5m、底面はほぼ水平である。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。

出土遺物 (図版 63、第 60 図)

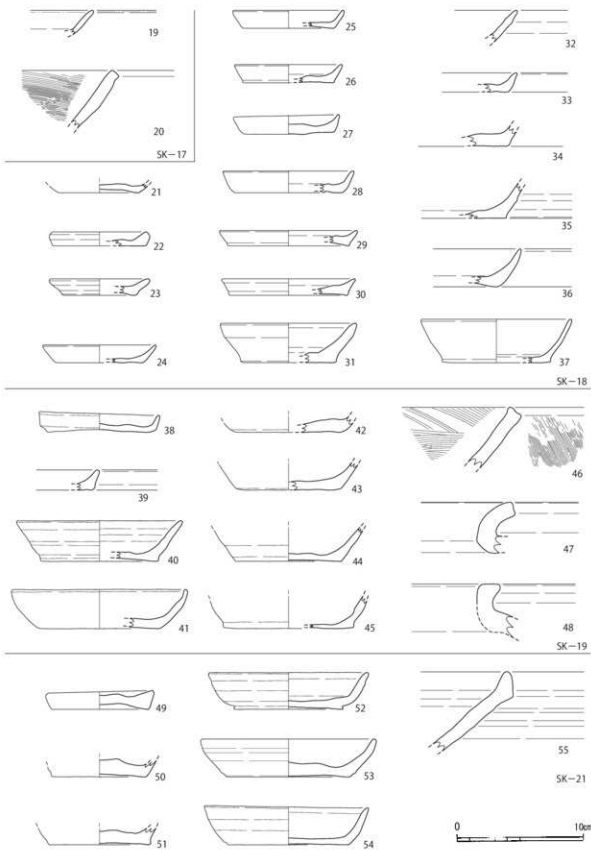
21～30 は土師器小皿である。22 は体部の立ち上がりが短く、底部に対して器壁が厚い。端部は丸みを帯びる。口径 7.4cm、器高 1.1cm、底径 7.4cm。24・25 は器壁が薄い。27 は口縁端部が薄く尖る。口径 8.8cm、器高 1.5cm、底径 7.0cm。28 は口径 10.4cm、器高 2.2cm、底径 8.6cm。29・30 は小片から口径を復元したもので、径に不安が残る。31～37 は土師器環である。31 は器壁が厚く、体部は直線的に立ち上がる。口径 10.8cm、器高 3.1cm、底径 7.6cm。33 は小皿と思われる。37 は器壁が薄く、体部は内湾気味に立ち上がる。口径 12.0cm、器高 3.5cm、底径 8.6cm。

SK-19 (第 59 図)

調査区南東側で検出した土坑である。SK-18 と重複しており、これを切っている。長軸 2.2m、



第59图 SK-15·16·17·18·19实测图(1/40)



第60图 SK-17·18·19·21出土遺物実測図(1/3)

短軸 1.4mの比較的形狀の整った長方形プランである。深さは80cmで、底面はほぼ水平となる。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

出土遺物 (第60図)

38・39は土師器小皿である。38は器壁が薄く、底部と体部の境目は不明瞭である。体部は上方に短く立ち上がる。口径9.4cm、器高1.6cm、底径8.2cm。40～45は土師器坏である。40は体部が直線的に開いた器形となる。口径13.2cm、器高3.2cm、底径9.4cm。41は体部中位が丸みを帯びて内湾した形となる。口径14.0cm。42・43は底部と体部の境が稜をなさない。44・45は底部と体部の境が明瞭な稜を有す。44は底径8.4cm。46は瓦質焼成の鉢である。内端部は弱くつまみ出される。内外面ハケ目調整を行う。47は須恵質焼成の甕である。口縁部は短く強く外反し、端部は面をなす。48は瓦質焼成の甕である。口縁部は短く直立し、端部は外側に短く伸びる。上端部は水平面をなす。

SK-20 (図版26、第61図)

調査区南側で検出した土坑で、SK-19から2m南西に位置する。直径80cmの円形プランを呈し、深さは1.1mを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い傾斜となる。覆土は上層に灰色土、中層に暗灰色土が堆積する。

図示できる出土遺物はない。

SK-21 (図版26、第61図)

調査区南側で検出した土坑で、SK-20の北東に隣接する位置にある。長軸2.0m、短軸1.6mの楕円形プランを呈し、深さは1.7mを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い急傾斜となる。覆土は黒灰色を基調とし、部分的に白灰色が挟まれるように堆積する。

出土遺物 (図版63、第60図)

49～51は土師器小皿である。49は器壁が厚く、体部の立ち上がりは短い。口径8.6cm、器高1.5cm、底径7.6cm。50は底径7.6cm。51は底径8.0cm。

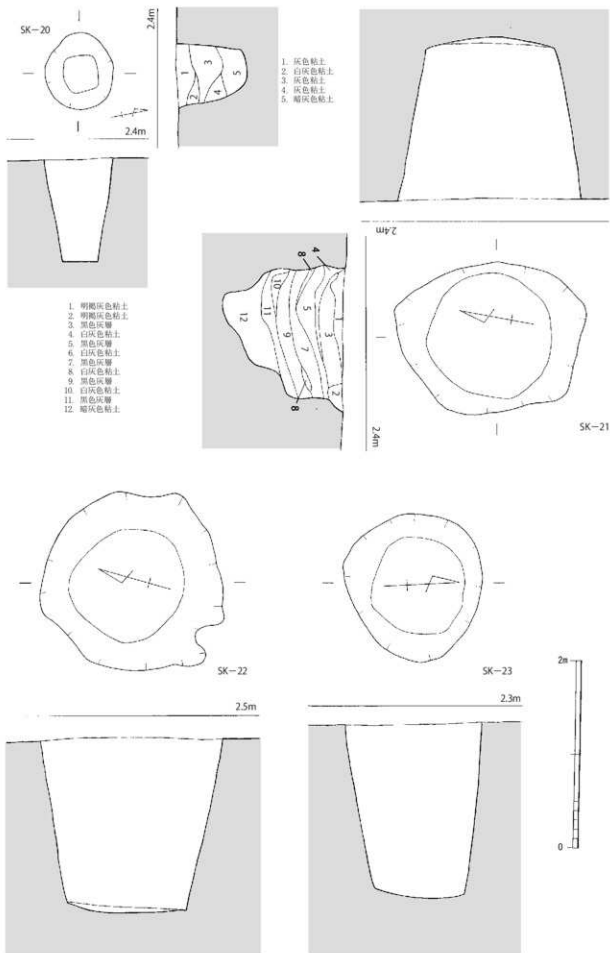
52～54は土師器坏である。体部が丸みを帯びて内湾した形となる。52は口径12.6cm、器高2.9cm、底径8.6cm。53は器壁がやや厚い。口径14.0cm、器高3.0cm、底径9.8cm。54は口径13.4cm、器高3.1cm、底径9.6cm。55は須恵質焼成の鉢である。口縁部は断面三角形に肥厚し、端部は上方を向く。

SK-22 (図版27、第61図)

調査区東側で検出した土坑で、SK-17から4m南東に位置する。直径1.9m前後の不整形プランで、深さは1.9mを測る。壁は垂直に近い急な傾斜となる。

出土遺物 (図版63、第62図)

56は土師器小皿である。器壁は薄く、体部は直線的に短く開く。口径9.8cm、器高1.6cm、底径7.4cm。57・58は土師器坏である。57は体部が若干内湾しながら長く伸びる。口径12.2cm、器高3.6cm、底径7.4cm。58は器壁がやや厚く、口縁端部は丸く仕上げられる。口径13.0cm、器高3.0cm、底径9.6cm。59は鎗蓮弁の青磁碗である。小片から口径を復元したもので、径に不安が残る。60



第 61 图 SK-20·21·22·23 实测图 (1/40)

は瓦質焼成の鉢または甕の底部であろう。体部は大きく開いており、底部との境目には稜が見られる。内面ハケ目、外面格子タタキ調整が見られる。

SK-23 (図版 27、第 61 図)

調査区南端で検出した土坑で、SK-21 から 7m 西側に位置する。長軸 1.6m、短軸 1.4m の比較的形の整った楕円形を呈す。深さは 1.8m を測り、壁の傾斜は垂直に近い。

出土遺物 (図版 63、第 62 図)

61 は瓦質焼成の鉢である。端部は丸みを帯びる。内面横ハケ目、外面ナデ調整。62 は土師質焼成の鈴である。高さ 3.4cm。63 は肌理の細かな泥岩製砥石である。二面使用しており、比較的よく使い込まれている。

SK-24 (第 63 図)

調査区東端で検出した土坑で、SK-22 から 1m 北側に位置する。直径 2.5m の比較的形の整った円形を呈す。深さは 1.0m を測り、底面は中央が若干窪んだ形状となる。底面の平面形は一辺 1.7m の隅丸方形を呈す。壁の立ち上がりはあまり急な傾斜ではない。

出土遺物 (図版 64、第 64 図)

64～72 は土師器小皿である。64～66 は底部と体部の境目に明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。64 は口径 8.0cm、器高 1.3cm、底径 6.6cm。66 は口径 8.4cm、器高 2.3cm、底径 6.0cm。67～69 は底部と体部の境目が不明瞭で体部は内湾気味に開く。67 は口径 9.6cm、器高 1.6cm、底径 8.2cm。68 は口径 9.0cm、器高 1.8cm、底径 6.0cm。69 は口縁部の器壁が薄くなる。口径 9.0cm、器高 1.8cm、底径 6.6cm。73～78 は土師器坏である。どれも底部と体部の境目が明瞭な稜を有す。75 は底部の器壁が薄く、若干上げ底となる。底径 8.4cm。76 は体部があまり開かない。底径 10.0cm。77 は底径 10.0cm。78 は体部が直線的に開き、口縁端部は丸くおさめる。口径 14.6cm、器高 3.8cm、底径 9.6cm。

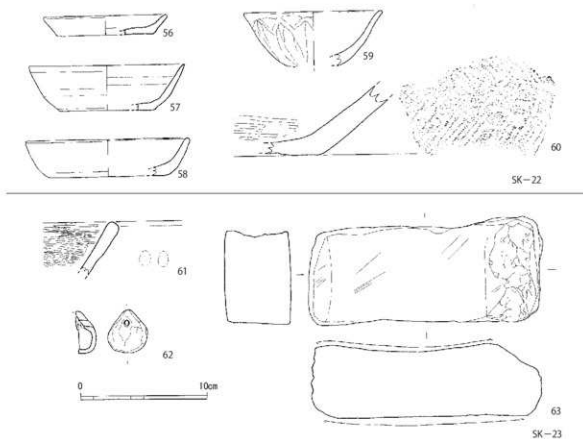
79・80 は青磁碗である。79 は内外面無文で、口縁端部が外反する。口径 14.4cm。80 は外面に鎗蓮弁を配す。81 は瓦質焼成の摺鉢である。器壁が厚く、口縁端部は面をなす。内面に横ハケ目を施した後に、6本一単位の摺目を施文する。82～85 は口縁部に玉縁状に肥厚させた鍋である。82 は瓦質焼成である。83・84 は外端部に強い横ナデを加えて明瞭な稜線をつくる。83 は内面に横ハケ目を行う。85 は外端部の稜が不明瞭である。86 は瓦質焼成の釜である。口縁部は短くわずかに内傾し、端部は水平面をなす。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。

SK-26 (第 63 図)

調査区東端で検出した土坑で、SK-22 から 4m 南東に位置する。長軸 1.6m、短軸 1.3m の長方形に近い楕円形を呈す。深さは 35cm で、壁の立ち上がりはやや緩やかである。覆土は黒灰色土によって多くを占められ、下層の壁際付近には白灰色土が堆積する。

出土遺物 (第 64 図)

87～91 は土師器小皿である。87 は底部と体部の境目に明瞭な稜を有す。87 は口径 9.0cm、器高 1.9cm、底径 7.4cm。88 は底部と体部の境目が丸みを帯び、体部の立ち上がりは短い。口径



第 62 図 SK-22・23 出土遺物実測図 (1/3)

8.8cm、器高 1.3cm、底径 8.2cm。92～96 は土師器坏である。93 は口径 12.8cm。94 は口縁部付近が上方を向く。口径 13.2cm、器高 2.9cm、底径 8.6cm。95 は底部と体部の境目が丸みを帯びる。口径 13.4cm、器高 3.1cm、底径 8.0cm。96 は体部が直線的に開く。口径 14.4cm、器高 2.9cm、底径 9.6cm。

SK-27 (第 63 図)

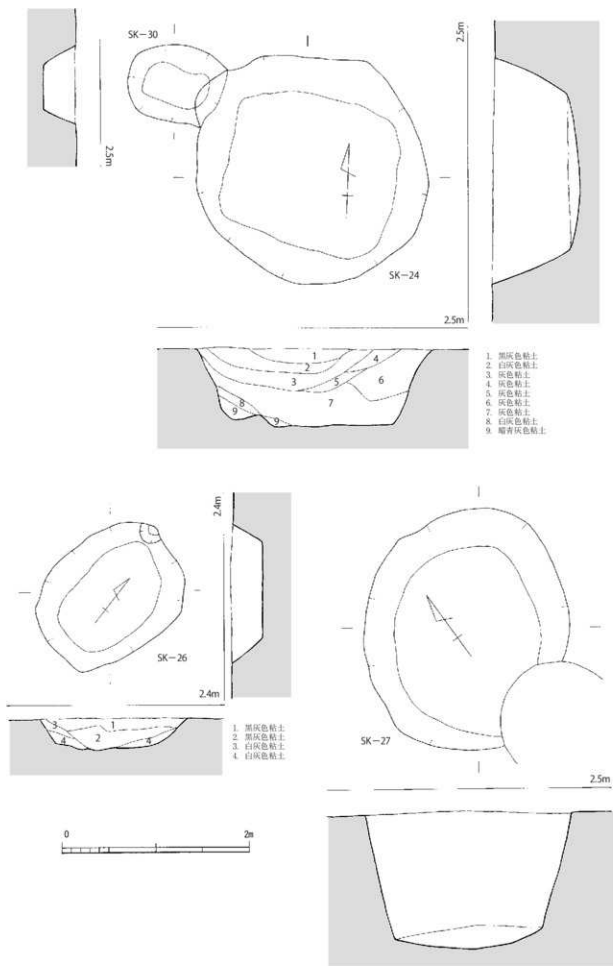
調査区東端で検出した土坑で、SK-26 から 1m 北西に位置する。SK-28 と重複しており、南側をこれに切られる。直径 2.3m の円形を呈しており、深さは 1.5m を測る。底面は中央付近が若干深くなっている。壁の立ち上がりは急角度で傾斜する。

出土遺物 (図版 64、第 65 図)

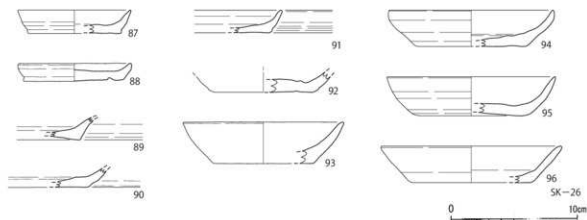
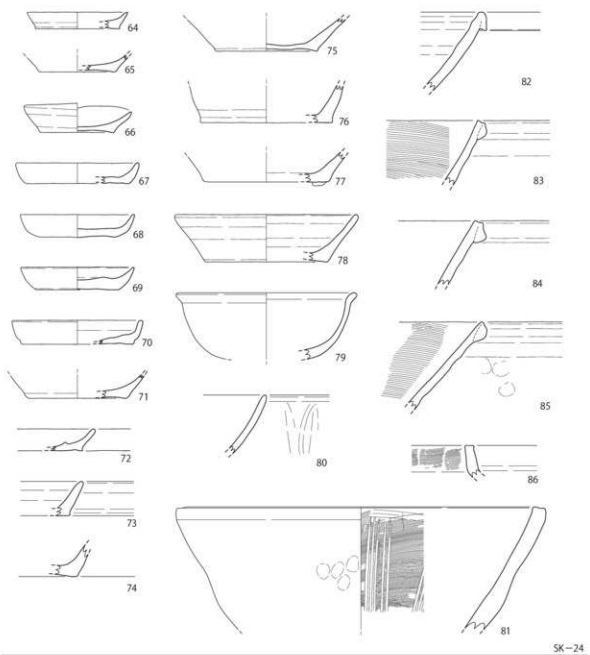
97・98 は土師器小皿である。97 は口径 10.2cm、器高 1.2cm、底径 6.6cm。98 は底径 7.2cm。

SK-28 (第 66 図)

調査区東端で検出した土坑である。SK-27、SK-29 と重複しており、SK-27 を切って管まれ、また SK-29 からは南側を大きく切られる。長軸は現状で 1.4m、短軸は 1.1m を測り、楕円形プランであったと思われる。深さは 50cm を測り、底面はほぼ水平である。壁の立ち上がりはそれほど



第 63 图 SK-24·26·27·30 实测图 (1/40)



第 64 図 SK-24・26 出土遺物実測図 (1/3)

急傾斜ではない。

出土遺物 (図版 64、第 65 図)

99～101 は土師器小皿である。99 は底径 6.0cm。100 は底部の器壁が薄く、若干上げ底となる。底部と体部の境目には明瞭な稜を有す。口径 8.6cm、器高 1.5cm、底径 7.2cm。102～108 は土師器杯である。103 は底径 8.6cm。104・105 は底部と体部の境が不明瞭である。104 は口径 11.8cm、器高 3.2cm、底径 7.4cm。105 は底径 9.6cm。106 は底部と体部の境に明瞭な稜を有す。底径 8.8cm。109 は外面に蓮弁を配す青磁碗である。

SK-29 (第 66 図)

調査区東端で検出した土坑である。SK-28 と重複しており、これを切って営まれる。長軸 1.8m、短軸 1.0m の隅丸長方形プランで、深さは 95cm を測る。壁の立ち上がりは急角度で傾斜する。覆土は上層に灰色粘土、中層に白灰色粘土、下層に暗青灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版 64、第 65 図)

110 は土師器小皿である。口径 9.0cm、器高 1.6cm、底径 8.2cm。111 は小型の杯で、端部が薄く尖る。口径 11.8cm、器高 2.4cm、底径 10.0cm。112 は瓦質焼成の鉢である。内面には細かな横ハケ目調整を行う。113 は須恵質焼成の鉢である。口縁部は肥厚し、端部が上方を向く。114 は瓦質焼成の火鉢である。上端部は水平面をなし、外面口縁部下の突帯間に印刻を行う。

SK-30 (第 63 図)

調査区東側で検出した土坑である。SK-24 と東側が接しており、先後関係は把握できなかった。長軸 1.0m、短軸 80cm の楕円形プランで、深さは 35cm を測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。

出土遺物 (図版 64、第 65 図)

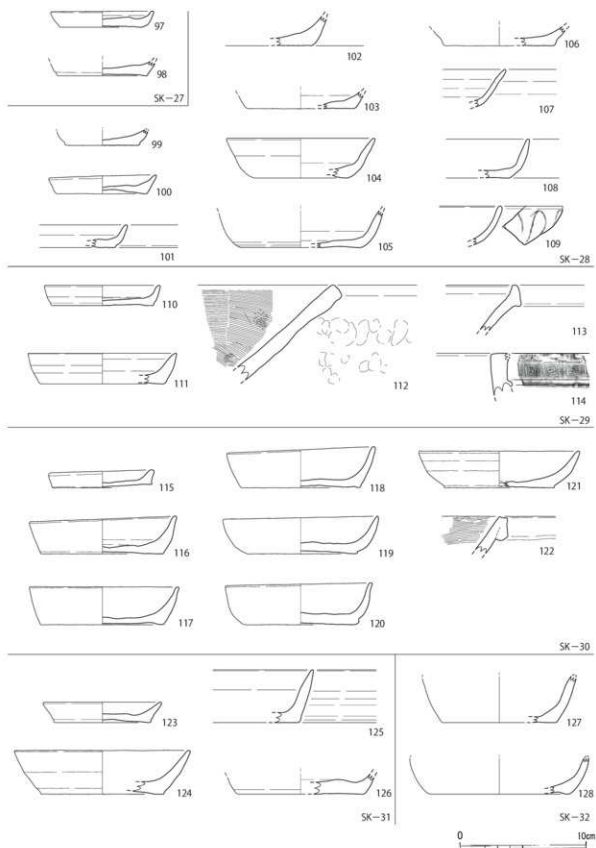
115 は土師器小皿である。底部の器壁は薄く、体部は厚く短く立ち上がる。口径 8.6cm、器高 1.4cm、底径 8.0cm。116～121 は土師器杯である。底部と体部の境目には量を有し、体部は内湾気味に立ち上がる。116 は口径 11.6cm、器高 3.0cm、底径 9.6cm。121 は口径 12.8cm、器高 2.9cm、底径 8.6cm。122 は土師質焼成の鍋である。口縁部は肥厚し、外端部に強い横ナデを加えて明瞭な稜を有す。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。

SK-31 (第 66 図)

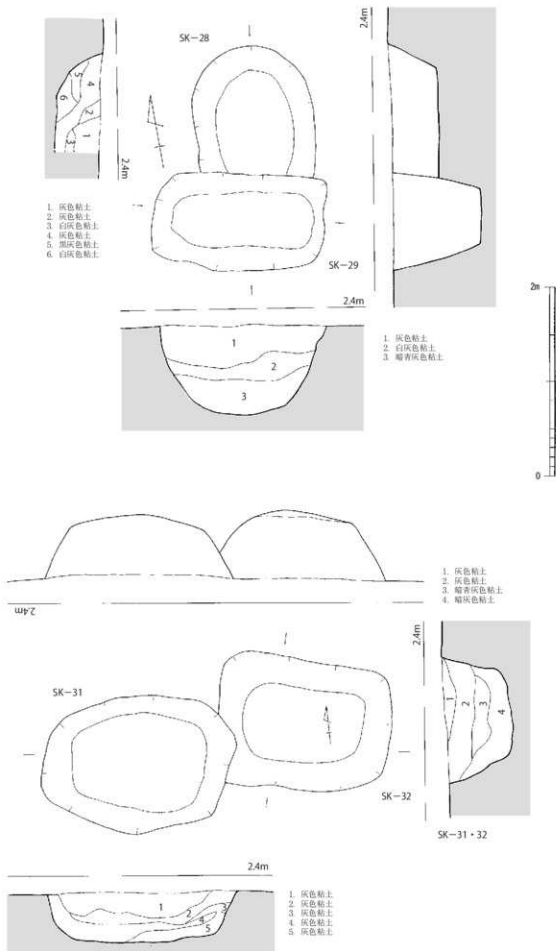
調査区南東端で検出した土坑である。SK-32 と重複しており、これを切って営まれる。長軸 2.1m、短軸 1.5m の楕円形に近い長方形プランで、深さは 60cm を測る。底面は中央付近が若干深くなる。壁の立ち上がりはやや緩やかな傾斜となる。覆土は灰色粘土によって占められ、上層には白灰色ブロック、下層には明青灰色ブロックを含む。

出土遺物 (第 65 図)

123 は土師器小皿である。口径 9.4cm、器高 1.6cm、底径 7.6cm。124～126 は土師器杯である。124 は口径 14.0cm、器高 3.5cm、底径 9.6cm。125 は体部があまり開かず直線的に立ち上がり、口縁部は薄く尖る。126 は底径 10.0cm。



第 65 图 SK-27·29·30·31·32 出土遗物实测图 (1/3)



第 66 图 SK-28-29-31-32 实测图 (1/40)

SK-32 (第66図)

調査区南東端で検出した土坑である。SK-31と重複しており、これに切られる。長軸1.9m、短軸1.4mの隅丸長方形プランで、深さは70cmを測る。底面は中央付近が若干深くなる。壁の立ち上がりはやや緩やかな傾斜となる。規模、形状ともにSK-31に類似する。覆土は上層に灰色粘土、下層に暗灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第65図)

127・128は土師器坏である。127は底径9.0cm。128は底部と体部の境が丸みを帯びる。底径10.8cm。

5) 溝

SD-1 (第67図)

調査区北側で検出した溝である。北側調査区の壁に沿って東西に直線的に伸びており、東西長25mを測る。南側の溝の肩を検出していないので幅は不明だが、少なくとも4mを超える大規模な溝であったことがわかる。D-D'は西側トレンチの土層である。上層には黄灰色粘土、その下層には灰色粘土が堆積しており、急な角度で傾斜する。灰褐色土は地山層である。E-E'は東側トレンチの土層である。上層には黄灰色粘土、その下層には灰色粘土が堆積し、壁際付近には黒灰色粘土が厚く堆積する。壁面はやはり急角度で傾斜する。

図示できる遺物はない。

SD-6 (図版27、第67図)

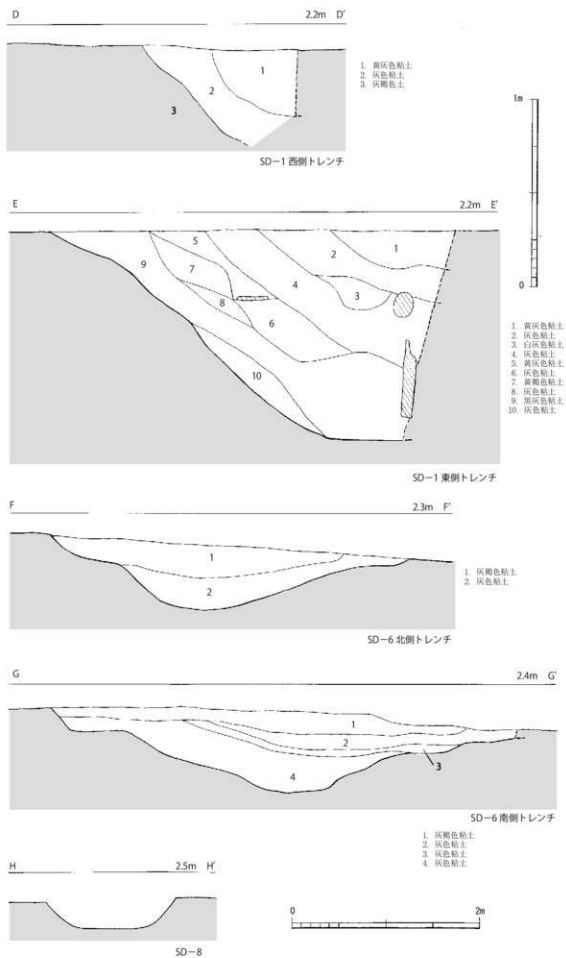
調査区南西端で検出した溝である。西壁に沿って南北方向に不整形に伸びており、確認した範囲で長さ13m、幅3～6mを測る。規模や位置関係から、おそらくSD-1と共に区画溝として機能したものであるが、SD-1と比べて深さは浅い。F-F'は北側トレンチの土層図である。壁面の立ち上がりは緩やかで、壁と底との境も明確ではない。この部分での深さは70cmに過ぎない。上層には灰褐色粘土、下層には灰色粘土が堆積する。G-G'は南側トレンチの土層図である。やはり壁の立ち上がりは緩やかで壁と底との境も明瞭ではない。上層には灰褐色粘土、中・下層には灰色粘土が堆積しており、深さは90cmとそれほど深くない。

出土遺物 (図版64・図版65、第68図)

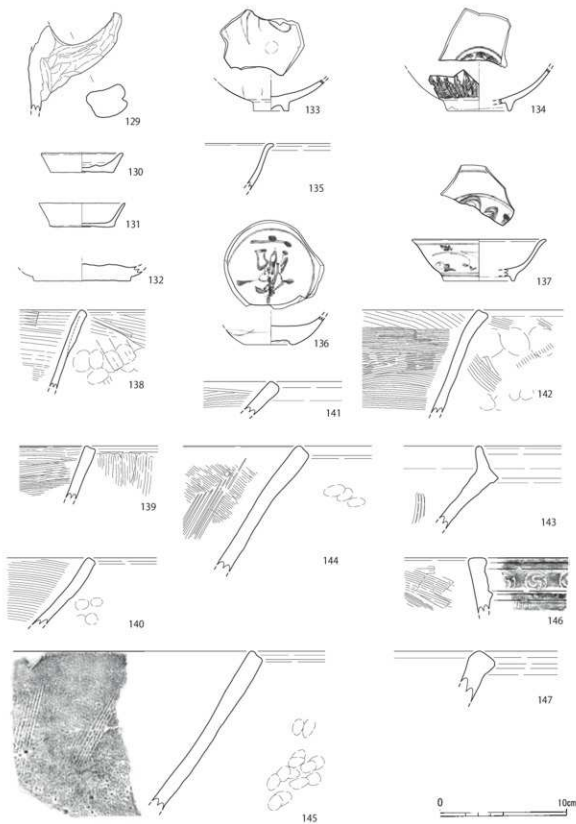
129は古墳時代の土師器甕の把手である。牛角状に細長く斜め上方に伸びており、断面は扁平である。調整は指整形による。

130・131は土師器小皿である。どちらも底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に伸びる。130は口径6.4cm、器高1.5cm、底径5.0cm。131は口径6.8cm、器高1.9cm、底径5.2cm。132は土師器坏である。底径7.6cm。133は内面見込みに草花文のある青磁碗である。高台は径が小さく垂直に立ち上がる。高台径2.8cm。134・135は染付碗である。134は内面見込みと外面体部下半に施文のある蓮子碗である。高台径5.0cm。135は口縁部が短く外反し、端部に褐色釉を施軸する。136・137は染付皿である。136は萁筒底の小皿で、内面に吉祥字と圏線を施文する。137は体部上半が緩く外反する皿である。内面見込みと外面に草花文を施文する。

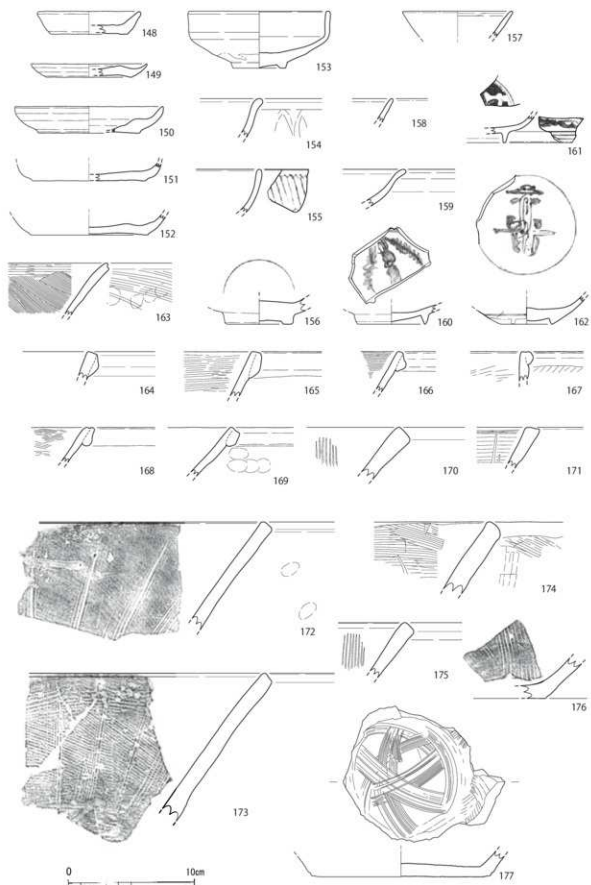
138～142は鍋である。138は土師質焼成の鍋で、口縁部は薄く肥厚する。内外面に粗いハケ目



第 67 図 SD-1・6・8 土層断面実測図 (1/20、1/40)



第68图 SD-6出土遗物实测图(1/3)



第 69 图 SD-8 出土遗物实测图① (1/3)

調整を行う。139～142は瓦質焼成で端部は面をなす。139は内面横ハケ目、外面縦ハケ目調整を行う。140・141は内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。142は口縁部付近が緩やかに外反している。内面には横ハケ目を行い、口縁部付近には先行する斜ハケ目が見られる。外面には部分的にハケ目が見られる。143～145は播鉢である。143は備前焼の播鉢で、口縁部は上方に立ち上がり、外面の屈曲部は明瞭な稜を有す。144・145は瓦質焼成の播鉢で、端部はわずかに窪んだ面をなす。144は8条の播目を入れ、先行する斜ハケ目が見られる。145もやはり8本一単位の播目を入れる。146・147は瓦質焼成の火鉢である。146は口縁部が内傾し、口縁端部とその下部に低い三角突帯を巡らせる。口縁部下と体部突帯下に印刻を施文する。内面には斜ハケ目調整を行う。147は外傾する口縁部で、端部外面に三角突帯を巡らせる。

SD-8 (第67図)

調査区南側で検出した溝である。やや蛇行しながら東西方向に伸びており、確認した範囲で長さ8m、幅は70cmを測る。深さは15cmと浅い。小区画溝として機能したものと思われる。

出土遺物 (図版65・66、第69図・第70図)

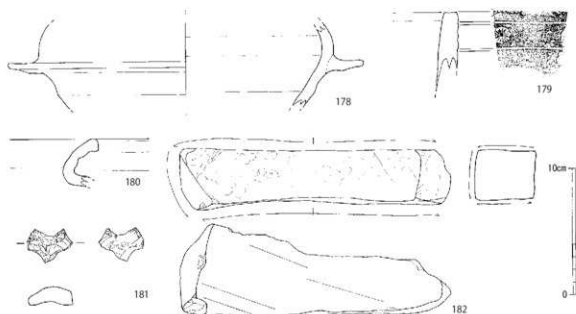
出土遺物の注記にはSD-9とあるが、恐らく錯誤であると思われるため、SD-8の遺物として報告を行う。

148・149は土師器小皿である。148は器壁が厚い。口径8.2cm、器高1.8cm、底径6.2cm。149は体部の開きが大きく、口縁部付近の器壁が薄くなる。口径9.2cm、器高1.1cm、底径6.8cm。150～152は土師器杯である。150は口径11.8cm、器高2.1cm、底径8.0cm。151は底径9.0cm。152は8.4cm。153は陶器碗である。体部中位で屈曲し、上半は直立する。高台付近以外の全面に灰色釉を施軸する。口径11.4cm、器高4.5cm、高台径4.2cm。154～156は青磁碗である。154は外面に鎬のない蓮弁を配す。155は細い蓮弁を配す。156は高台が低く、底部の器壁は厚くなる。内面には一条の沈線が巡る。高台径5.4cm。157～162は白磁または染付である。157は小皿であろう。口縁部は釉剥ぎを行う。口径8.8cm。158は157と同様である。159は口縁部が緩やかに外反している。貫入が顕著である。160・161は染付碗である。160は断面三角形の高台となる。内面には草花文を描く。高台径5.2cm。161は断面台形の高い高台となる。内面見込みと外面に文様を描く。162は碁笥底の皿である。内面には吉祥字を描く。高台径4.0cm。

163～169は鍋である。163は瓦質焼成で器壁が薄い。口縁端部は浅く窪ませている。内外面ハケ目調整を行う。164～169は口縁端部を肥厚させる。調整はハケ目またはナデ。170～177は播鉢である。175は須恵質、他は瓦質焼成である。内面に播目に先行するハケ目を残すものもある。178は瓦質焼成の釜である。鈿部は水平方向にやや長く伸びる。鈿部径28.1cm。179は瓦質火鉢である。口縁部は上端が水平面をなし、外面には2条の沈線の間に菊花文の印刻が見られる。180は瓦質焼成で甕か。器壁は比較的薄く、口縁部は若干肥厚する。調整は全面ナデ調整。181は赤褐色の珪質岩剥片。長さ3.7cm。182は砂岩砥石で、三面使用している。長さ21.4cm。

6) その他の出土遺物 (図版66、第71図・第72図)

183～188は土師器小皿である。183は器壁が薄い。口径8.4cm、器高1.4cm、底径7.0cm。184は口径8.0cm、器高1.15cm、底径6.0cm。廃土から採集。185はやや深い器形となる。口径

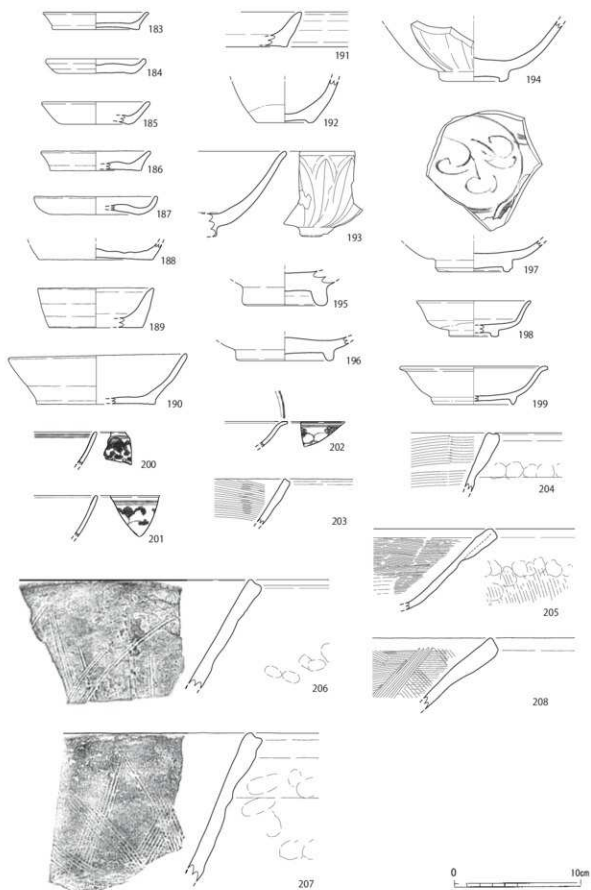


第70図 SD-8出土遺物実測図②(1/3)

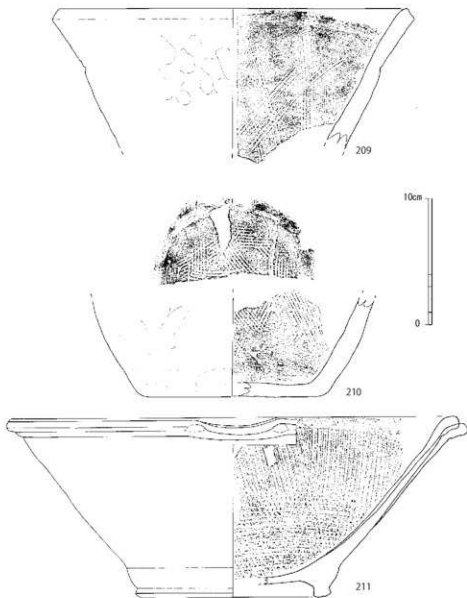
8.6cm、器高1.75cm、底径5.6cm。186は底部と体部の境目に明瞭な稜を有す。口径8.8cm、器高1.55cm、底径7.2cm。187は底部と体部の境が丸く不明瞭である。口径9.8cm、器高1.4cm、底径6.8cm。188は底径9.0cm。遺構検出時に出土。189～191は土師器坏である。189は体部があまり開かない器形となる。口縁端部は薄く仕上げる。口径9.2cm、器高3.2cm、底径7.4cm。190は体部が開き長く伸びた器形となる。口径14.0cm、器高4.0cm、底径9.4cm。191は器壁がやや厚く、底部と体部の境目に稜を有す。

192は灰色釉を施した陶器小塊である。外面体部と高台部の境がなく、体部下半から高台部内側は露胎となる。高台径4.4cm。193～197は青磁碗である。193・194は外面に蓮弁を配す。193は出土。194は高台径5.6cm。遺構検出時出土。195は器壁が厚く、高台内側まで施釉される。高台径6.8cm。廃土から採集。196は高台径7.8cm。釉は高台内側まで施釉される。197は内面見込みに草花文を施文する。高台外側まで施釉される。高台径6.0cm。廃土から採集。198・199は白磁皿である。198は体部下半で屈折し、口縁部は外反する。口径9.0cm、器高2.9cm、高台径4.0cm。廃土から採集。199は高台が断面三角形になる。口径11.8cm、器高3.1cm、高台径6.2cm。200～202は染付碗である。どれも外面に草花文を描く。

203～205は鍋である。203は土師質焼成で、器壁が薄く口縁端部は面をなす。内面横ハケ目、外面ナデ。204・205は瓦質焼成で、どちらも口縁部付近が若干肥厚し端部は面をなす。204は内面横ハケ目、外面ナデ。205は内面横ハケ目、外面縦ハケ目が見られる。206～211は摺鉢である。206・207は瓦質焼成で口縁端部は浅く窪んでいる。208・209は瓦質焼成で口縁端部が面をなす。209は口径28.6cm。210は同じく瓦質焼成で外面体部下端に横方向のヘラケズリを行う。底径14.0cm。211は陶器摺鉢である。口縁部はわずかに肥厚し、端部は丸くおさめる。口径36.0cm、器高14.2cm、高台径14.4cm。高台部畳付以外の前面に褐色釉が施釉される。遺構検出時に出土。



第71図 その他の出土遺物実測図①(1/3)



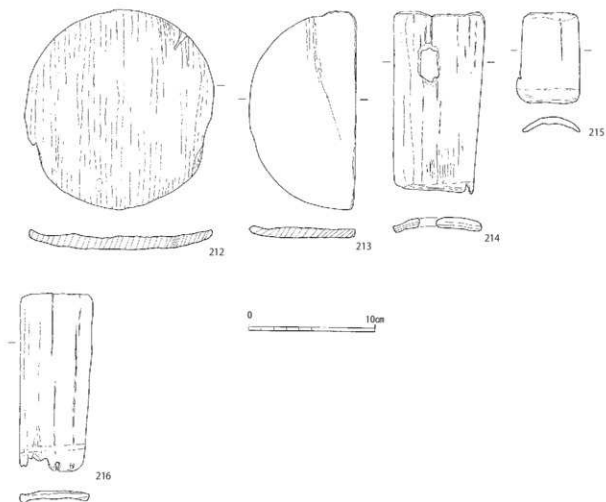
第72図 その他の出土遺物実測図②(1/3)

木製品(第73図)

212・213は桶の底部である。212は径15.0cm、厚さ1.1cm。213は大きく欠損するが、径15.8cmを測る。厚さは0.8cm。214～216は桶の側板である。214は把手部の穿孔がある。長さ14.3cm、幅7.2cm、厚さ0.7cm。215は小型品であろうか、強く反っている。長さ7.2cm、幅5.0cm、厚さ0.5cm。216は底部近くに底板が接合した痕跡があり、その下部には二つの穿孔がみられる。長さ14.1cm、幅5.7cm、厚さ0.7cm。

7) 小結

下百町屋敷の内遺跡第1次調査では、土坑23基と溝3条を検出した。土坑は大きく北端部、東部、南東部の三ヶ所に分かれており、規模や主軸方位から判断すると、SK-3・4、SK-18・19、



第73図 木製品実測図(1/3)

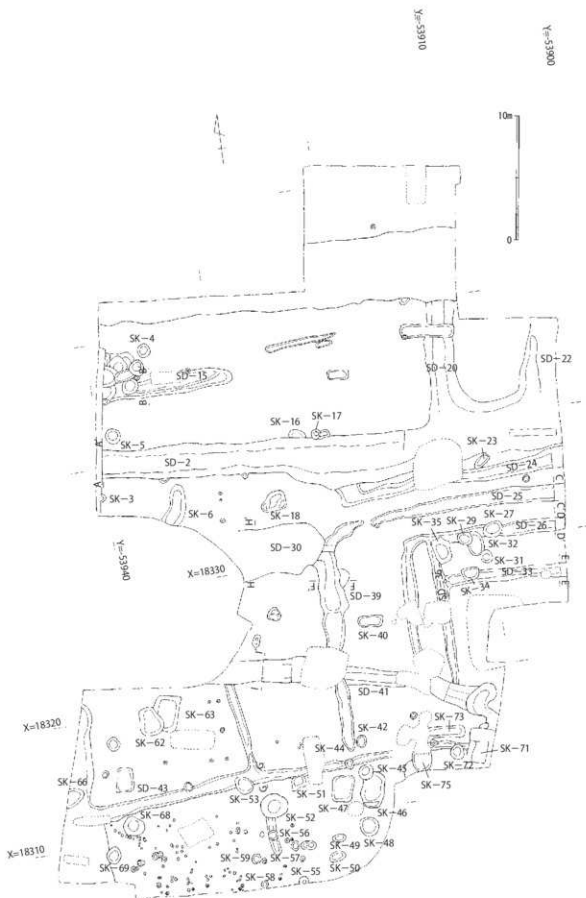
SK-22・24、SK-26・28、SK-31・32などは同じ目的によって掘り直されたものと解釈することができるだろう。円形プランで深さが深いものは、恐らく井戸として使用されたものだろう。円形プランで浅い土坑や長方形プランの土坑は廃棄土坑等に利用されたものと思われるが明確な根拠はない。

溝のなかで、SD-1とSD-6は規模も大きく、区画溝として掘削されたものと思われる。調査区中央付近には土坑は少なく、小ピット群が多数あるが、この範囲が居住空間として使用されたものと思われるが、建物を抽出するまでには至らなかった。

出土品のうち、SK-2出土遺物は17世紀にまで下るものである。SK-7から出土した灯明皿も近世のものであろう。SK-18や19から出土した土師器小皿や坏は14世紀のものと思われる。SK-21からは東播系の鉢が出土しており、土師器坏の形状も考慮すると若干古相を示すようだが、あまり時期差はないようである。SK-22の鎬蓮弁文青磁碗や土師器坏も同様である。SK-24からは無文の青磁碗、鎬蓮弁の青磁碗が出土しており、他の供伴遺物からみても14世紀代として良いだろう。土師器小皿、坏は体部が直線のなものと丸みを帯びたものが混在する。これらの小皿、坏の様相は、SK-26、28、29、30、31、32などと大差なく、概ね同時期のものと思われる。

SD-6からは16世紀の明染付磁器が複数出土しており、遺構の時期もこの頃として良い。供伴する土師器は底部と体部の境が明瞭で、体部が直線的に伸び、口径が小さなものである。他に素口縁の土師質鍋、備前焼播鉢、瓦質播鉢、火鉢がある。SD-8からも明染付磁器が出土しており、153の陶器皿や155の細蓮弁青磁碗、157の白磁皿も同時期として良いだろう。一方で、154の蓮弁文青磁碗は14世紀代のものであり、遺物の主体は16世紀だが混入もあるようである。

そうすると、土坑の時期と溝の時期に差があるということになる。東側から南東側にかけて分布する土坑群は14世紀に営まれ、SD-1・6は16世紀、SK-2やSK-7など北側に分布する土坑は17世紀になって営まれた、ということになる。



第74図 下百町屋敷の内遺跡第2次調査区遺構配置図(1/300)

5 下百町屋敷の内遺跡第2次調査

下百町屋敷の内遺跡第2次調査は、平成21年7月9日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、平成22年1月4日に機材を撤収して現地での作業を終了した。

調査区は現在の土地利用の状況もあって複雑な形状である。東西37m、南北57mを測る。遺構の分布は北半部の密度は低く、南半部は比較的高い。東西方向に伸びる溝が多く見られ、土坑は全体的に南半部に分布している。ピットは南端に偏在する。遺構面の標高は2.0～2.3mである。

検出した主な遺構は、土坑34基、溝9条である。

また、この調査区から若干離れた位置に小規模な調査区があり、ここは第2次調査区第2区と呼称した。調査区は東西12m、南北12mの方形を呈す。遺構密度は散漫で、小規模な土坑5基しか検出していない。遺構面の標高は2.0m前後である。調査面積は両方の調査区を併せて1,690㎡である。

出土遺物は、土師器、陶磁器、日常雑器、土製品、石製品である。

1) 土坑

SK-3 (第75図)

調査区西端で検出した土坑である。多くが調査区外に伸びており、検出した範囲で直径80cmの円形を呈す。深さは60cmを測り、壁の立ち上がりは垂直に近い急な傾斜となる。

出土遺物 (第76図)

1は土師器坏である。口径13.0cm、器高2.7cm、底径9.6cm。

SK-4 (図版29、第75図)

調査区西側で検出した土坑である。SK-3から12m北東に位置する。直径1.1mの円形プランを呈し、深さは50cm、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版67、第76図)

2は陶器鉢である。口縁部は肥厚しており、上端部は面をなす。褐色地に白色釉を重ね掛けており、上端部は露胎となる。3は青磁碗である。外面には蓮弁を配し、内面見込みには花文を印刷する。高台径5.2cm。4は染付碗である。高台外側には三重の圈線を巡らせる。高台径3.0cm。

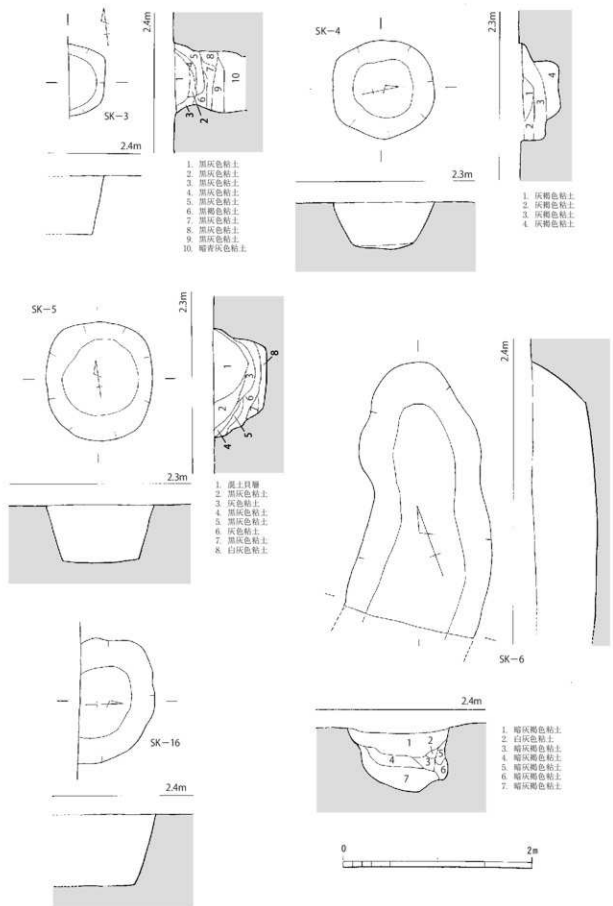
SK-5 (第75図)

調査区西端で検出した土坑である。SK-4から7m南西に位置する。直径1.3mの円形プランを呈し、深さは60cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-6 (第75図)

調査区西側で検出した土坑である。SK-3から5m東に位置する。南側が調査区外へと伸びるため全体の形状は把握できないが、現状で長軸3.0m、短軸1.4mの不整楕円形を呈す。深さは70cmで、壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は暗灰褐色粘土。



第 75 图 SK-3·4·5·6·16 实测图 (1/40)

出土遺物 (第76図)

5は土師器小皿である。口径8.6cm、器高1.3cm、底径6.8cm。

SK-16 (第75図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-5から14m東側に位置する。SD-2と重複しており、南半部をSD-2に大きく切られているが、概ね直径1.3mの円形プランに復元される。深さは75cmで、壁の立ち上がりは急角度で傾斜する。

出土遺物 (第76図)

6・7は土師質焼成の鍋である。端部は面をなしており、7は口縁部付近が若干肥厚する。内面横ハケ目、外面横ナデ。

SK-17 (図版29、第77図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-16から1m東側に位置する。SD-2と重複しており、これを切って営まれる。直径80cmの円形プランで、深さは75cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がっており、土坑底面の径が小さいため断面が描鉢状を呈している。

図示できる遺物はない。

SK-18 (第77図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-17から5m南西にあり、周囲には土坑はなく単独で位置する。長軸2.0m、短軸1.5mの不整形プランを呈す。土坑内面には東西両側にそれぞれ深さ20cm～40cmのテラス状の段を有している。土坑底面までの深さは1.5mを測る。壁は比較的急な角度で傾斜する。

出土遺物 (第76図)

8は土師器小皿である。底部はわずかに上げ底となる。底径6.8cm。9は土師器坏である。口縁部付近の器壁は薄くなる。10は土師質焼成の描鉢である。口縁部付近はわずかに肥厚し、上端部は尖り気味になる。

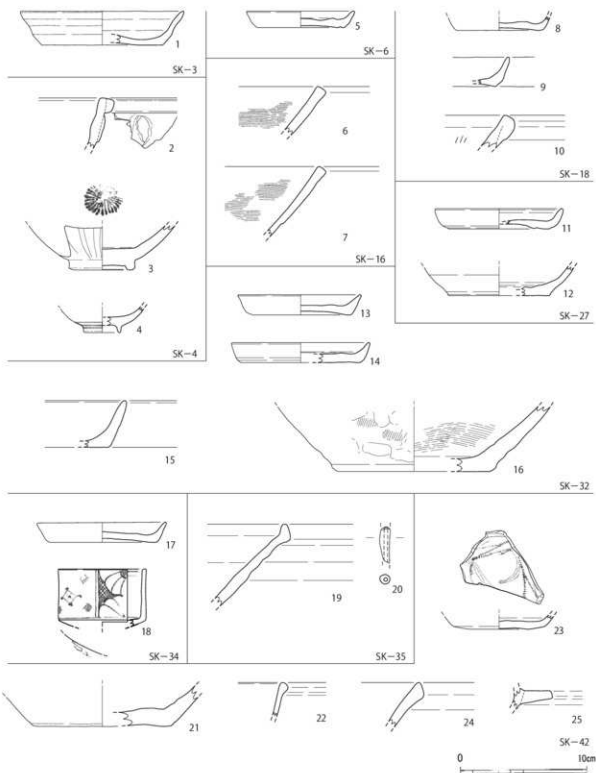
SK-23 (第77図)

調査区東側で検出した土坑である。周囲には土坑はなく、単独で位置する。長軸1.4m、短軸70cmの方形に近い楕円形を呈す。底面は東側から西側へと大きく傾斜しており、東端で50cm、西端で80cmを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

図示できる遺物はない。

SK-27 (図版29、第77図)

調査区東端で検出した土坑である。SK-23から5m南側に位置する。SD-26と重複しており、これを切って営まれる。長軸1.6m、短軸1.3mの方形に近い楕円形を呈し、深さは60cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は上層に黒灰色粘土、下層に暗灰色粘土が堆積する。



第76図 SK-3・4・6・16・18・27・32・34・35・42 出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第76図)

11は土師器小皿である。底部は若干上げ底となり、口縁部の立ち上がりは短い。口径10.2cm、器高1.6cm、底径8.0cm。12は土師器坏である。底部と体部の境目には明瞭な稜を有す。底径8.0cm。

SK-29 (第77図)

調査区東側で検出した土坑である。SK-27から2m西側に位置する。SK-32、SD-26と重複しており、これらを切って営まれる。長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形プランで、深さは50cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

図示できる遺物はない。

SK-31 (図版30、第78図)

調査区東側で検出した土坑である。SK-29から2m南東に位置する。SK-32と重複しており、これを切って営まれる。直径1.0mの円形プランで、深さは1.3mを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

図示できる遺物はない。

SK-32 (第78図)

調査区東側で検出した土坑である。SK-29、31と重複しており、双方から切られる。またSD-26とも重複しており、これを切って営まれる。長軸2.0m、短軸1.3mの楕円形プランを呈し、深さは50cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急傾斜である。

出土遺物 (図版67、第76図)

13・14は土師器小皿である。どちらも口縁部は器壁が薄く、端部は尖り気味に仕上げる。13は口径10.0cm、器高1.6cm、底径7.4cm。14は口径11.0cm、器高1.6cm、底径9.4cm。15は土師器坏である。体部は直線的に伸びており、あまり開かない。16は瓦質焼成の鉢である。内面横ハケ目、外面縦ハケ目が見られる。底径12.0cm。

SK-34 (図版30、第78図)

調査区東側で検出した土坑である。SK-32から2m南西に位置する。SD-33と重複しており、これを切って営まれる。長軸1.3m、短軸1.0mの不整楕円形プランで、深さは40cmを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

出土遺物 (図版67、第76図)

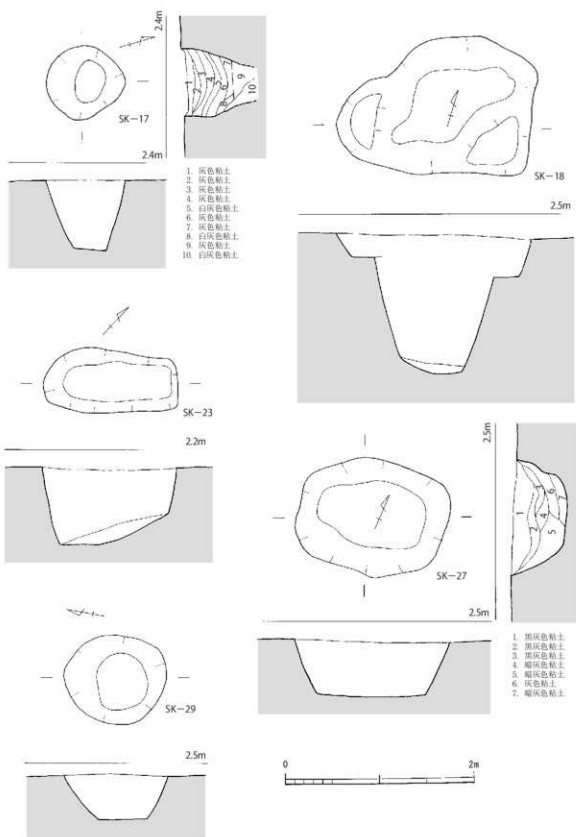
17は土師器小皿である。底部はわずかに上げ底となる。口径10.4cm、器高1.6cm、底径8.4cm。18は筒形の染付碗である。底部と体部の境は明瞭に屈曲する。口径7.0cm。

SK-35 (第78図)

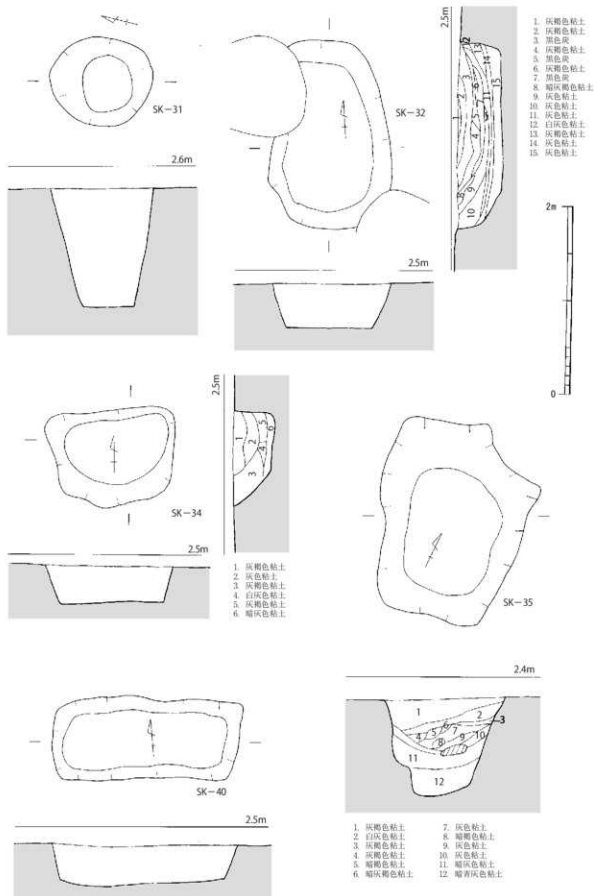
調査区東側で検出した土坑である。SK-29から1m西側に位置する。SD-26、36と重複しており、これらを切って営まれる。北東壁面が崩れており、現状では長軸2.1m、短軸1.6mの不整形プランだが、本来は幅1.3m程度の方形プランであったことが推測される。深さは1.1mを測り、壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は上層に灰褐色粘土、中層に灰色粘土や暗灰色粘土、下層に暗青灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版67、第76図)

19は瓦質焼成の鉢である。体部は直線的に大きく開き、口縁部は玉縁状に肥厚し端部は上方に



第 77 图 SK-17·18·23·27·29 实测图 (1/40)



第78图 SK-31·32·34·35·40 实测图 (1/40)

立ち上がる。外面には轆轤整形時の稜が明瞭である。20は土師質焼成の管状土錘である。長さ2.8cm、径0.9cm、孔径0.3cm。

SK-40 (第78図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-35から7m南西に位置しており、周囲には他に土坑はなく単独で営まれる。長軸2.0m、短軸80cm、深さは40cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。

図示できる遺物はない。

SK-42 (第79図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-40から9m南側に位置する。直径80cmの円形プランで、深さは1.3mを測り、小規模な平面形に対してかなり深い形状となる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物 (図版67、第76図)

21は土師器坏であろう。底径10.6cm。22は青磁碗か。器壁が薄く、口縁部は丸く肥厚する。23は青磁皿である。内面には櫛状工具による施文を行う。底径5.6cm。24は須恵質焼成の鉢である。口縁端部は外側に面をなす。25は瓦質焼成の釜の髑部である。水平に短く伸びている。

SK-44 (第74図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-42から2m南西に位置する。SD-43と重複しており、これを切って営まれる。長軸80cm、短軸60cmの不整楕円形プランで、深さは20cmほどしかない。壁の立ち上がりは比較的緩やかに傾斜する。

図示できる遺物はない。

SK-45 (第79図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-44から2m南東に位置する。SK-46と重複しており、これを切って営まれる。直径1.2mの円形プランで、深さは1.1mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。

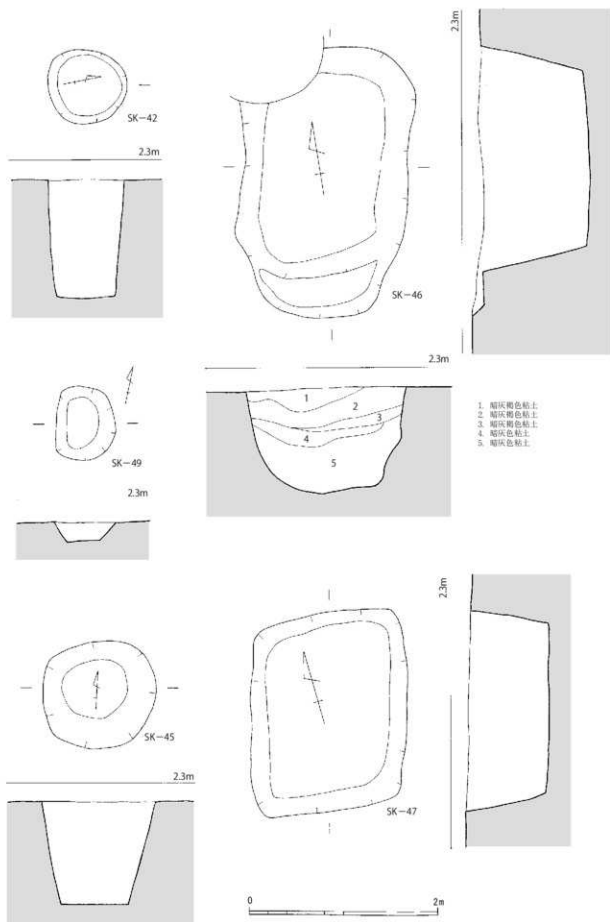
図示できる遺物はない。

SK-46 (図版30、第79図)

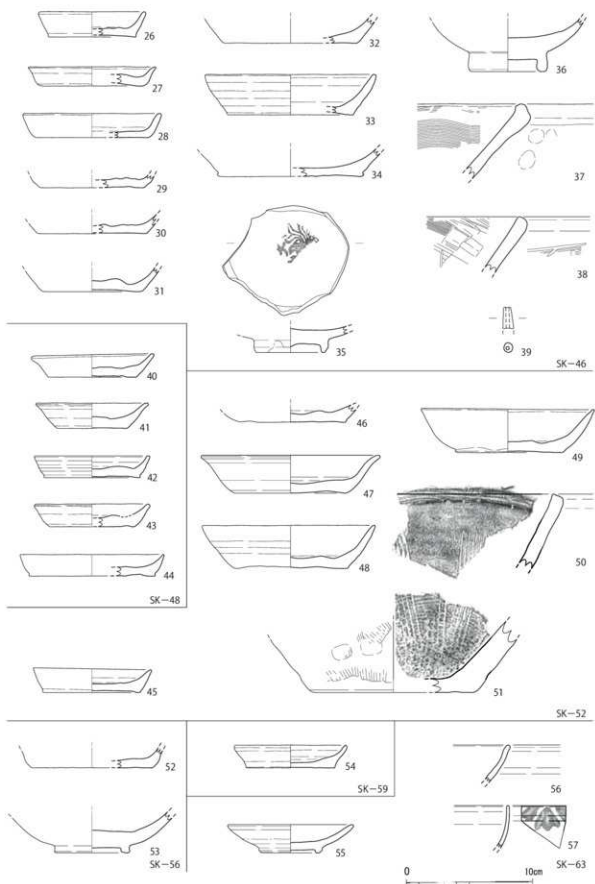
調査区南側で検出した土坑である。SK-45と重複しており、これに切られる。長軸2.9m、短軸1.7mの隅丸長方形プランを呈す。土坑内の南側には深さ10cmのテラス状の段がある。土坑底面はほぼ水平で、深さは1.1mを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

出土遺物 (図版67、第80図)

26～31は土師器小皿である。26は底部と体部の境目に明瞭な稜を有す。口径8.6cm、器高2.0cm、底径7.0cm。27は体部が短く、口縁部付近は若干外反する。口径10.2cm、器高1.5cm、底径8.0cm。28は口径11.0cm、器高1.9cm、底径9.0cm。29は底径8.2cm。30は底径8.8cm。31



第 79 图 SK-42·45·46·47·49 实测图 (1/40)



第 80 図 SK-46・48・52・56・59・63 出土遺物実測図 (1/3)

は底径8.0cm。32～34は土師器坏である。32は底径10.6cm。33は口径13.4cm、器高3.2cm、底径10.0cm。34は底径11.6cm。35・36は青磁碗である。35は内面見込みに印刻を行う。高台径5.4cm。36は高台部が丸味を帯びる。高台径6.2cm。37は瓦質焼成の鉢である。口縁部は若干肥厚し上方を向く。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。38は素口緑の瓦質焼成播鉢である。内面には摺目に先行する斜ハケ目が見られる。39は土師質焼成の管状土錘である。欠損しており長さ1.7cmのみ遺存する。径0.9cm、孔径0.2cm。

SK-47 (第79図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-46から1m西側に位置し、規模、形状ともにSK-46と相似する。長軸2.2m、短軸1.6mの長方形プランで、深さは90cmを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

図示できる遺物はない。

SK-48 (図版31、第81図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-47から2m南東側に位置する。直径1.6mの整った円形プランを呈し、深さは1.4mを測る。壁の立ち上がりは、上方は急傾斜で、下方は垂直に立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積する。

出土遺物 (図版67、第80図)

40～44は土師器小皿である。いずれも底部と体部の境目に明瞭な稜を有す。40・41は体部が開いた器形となる。40は口径9.8cm、器高1.9cm、底径7.0cm。41は体部が若干長く伸びる。口径9.0cm、器高2.0cm、底径5.6cm。42は底部の器壁がやや厚い。口径9.2cm、器高1.7cm、底径7.6cm。43は口径9.2cm、器高1.8cm、底径6.8cm。44は他と比べて口径が大きいが、小片を復元したため不安が残る。口径11.4cm、器高1.7cm、底径10.0cm。

SK-49 (第81図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-48から2m西側に位置する。長軸1.1m、短軸0.6mの楕円形プランを呈し、深さは20cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。

図示できる遺物はない。

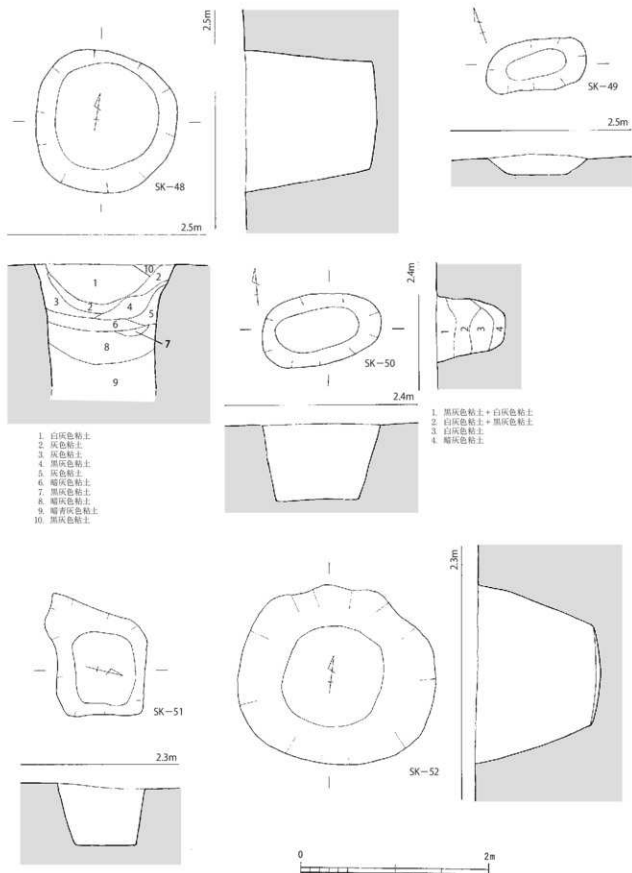
SK-50 (第81図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-49から1m南側に位置する。長軸1.3m、短軸0.8mの楕円形プランを呈し、SK-49よりも一回り大きいがよく似た形状である。深さは0.8mで、壁の立ち上がりは急傾斜である。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に白灰色粘土、上層に白灰色粘土と黒灰色粘土がブロック状に混入した層が堆積する。

図示できる遺物はない。

SK-51 (図版31、第81図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-47から3m西側に位置する。長軸1.4m、短軸0.9mの



不整形プランを呈す。深さは0.7mを測り、壁の立ち上がりは垂直に近い。

図示できる遺物はない。

SK-52 (図版31、第81図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-51から2m南西側に位置する。長軸2.1m、短軸2.0mを測り、比較的形状の整った円形を呈す。深さは1.3mを測り、壁の立ち上がりはやや緩やかである。底面はほぼ水平である。

出土遺物 (第80図)

45は土師器小皿である。体部は直線的に短く開き、端部は薄く尖る。口径9.4cm、器高1.9cm、底径7.8cm。46～49は土師器杯である。46は底径8.0cm。47は体部が若干外反する。口径14.2cm、器高3.0cm、底径9.0cm。48は口径14.0cm、器高3.4cm、底径9.0cm。49は口径13.8cm、器高3.5cm、底径8.0cm。50・51は瓦質焼成の播鉢である。50の口縁部は内端が尖る。51の内面には播目に先行する横ハケ目が見られる。底径12.6cm。

SK-53 (第82図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-52から1m北西側に位置する。長軸1.6m、短軸1.2mの楕円形を呈す。深さは1.4mを測り、壁は完掘時には垂直に近い立ち上がりとなっているが、土層図では直線的ではなくいびつな形状であったようである。覆土は黒灰色粘土がレンズ状に堆積する。

図示できる遺物はない。

SK-55 (第82図)

調査区南端で検出した土坑である。SK-50から3m南西側に位置する。南半部が調査区外へと続いているが、概ね直径0.7m程度の円形を呈していたと思われる。深さは0.6mを測り、壁は若干の起伏を有して急角度で傾斜する。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に黒灰色粘土、上層に黒灰色粘土と白灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物はない。

SK-56 (図版32、第82図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-52から2m南側に位置する。直径0.7mの円形プランを呈し、深さは1.4mと深い。壁は垂直に立ち上がる。

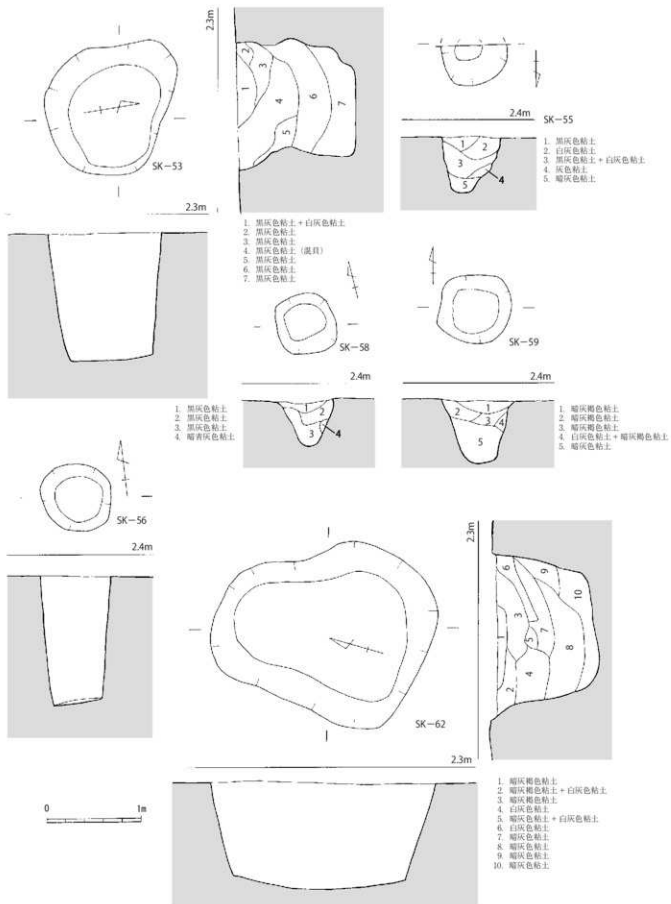
出土遺物 (第80図)

52は土師器杯である。底径9.6cm。53は低い高台の青磁碗である。高台径6.0cm。

SK-58 (第82図)

調査区南端で検出した土坑である。SK-55から3m西側に位置する。直径0.6mの円形プランを呈し、SK-56よりも若干径が小さい。深さは0.5mを測り、壁は検出面から底面に向かって播鉢状に傾斜する。覆土は黒灰色粘土からなる。

図示できる遺物はない。



第 82 图 SK-53·55·56·58·59·62 实测图 (1/40)

SK-59 (第82図)

調査区南側で検出した土坑である。SK-58から2m北側に位置する。直径0.8mの円形プランを呈し、SK-56よりも若干径が大きい。深さは0.7mを測り、SK-55やSK-58とあまり変わらない。壁は検出面から底面に向かって播鉢状に傾斜する。覆土は暗灰色、暗灰褐色粘土からなる。

出土遺物 (第80図)

54は土師器小皿である。底部と体部の境目には明瞭な稜を有す。口径9.0cm、器高1.8cm、底径7.0cm。

SK-62 (第82図)

調査区南西側で検出した土坑である。SK-53から9m北西に位置する。SK-63と重複しており、これを切って営まれる。長軸2.4m、短軸2.0mの不整形プランを呈す。深さは1.1mを測る。壁の立ち上がりは急な傾斜となる。覆土は下層に暗灰色粘土、上層に暗灰褐色粘土が堆積する。

図示できる遺物はない。

SK-63 (第83図)

調査区南西側で検出した土坑である。SK-62と重複しており、これに切られている。長軸2.8m、短軸2.0mを測り、比較的形整った長方形を呈す。深さは1.1mを測り、壁の立ち上がりは急な傾斜となる。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に灰色粘土および暗青灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版68、第80図)

55は白磁皿である。高台は低く、体部はほとんど内湾せず大きく開く。口径10.0cm、器高2.2cm、高台径4.6cm。56・57は陶器埴である。56は口縁部がわずかに外反する。釉色は透明。57は口縁部が上方に立ち上がる。器壁は薄い。釉は透明釉を全面に施釉し、外面には鮮緑色の釉で文様を描く。

SK-66

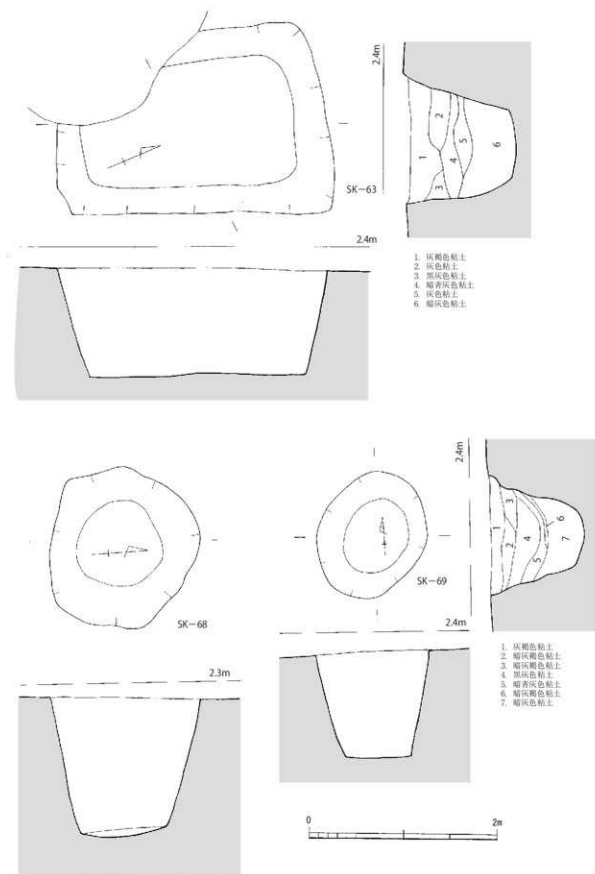
出土遺物 (図版68、第84図)

58は焼締の陶器である。器壁が薄く胎土も緻密で精良である。内面には7条を一単位とする播目が入る。茶入の類か。底径3.0cm。59は陶器皿である。体部下半は内湾し、口縁部は反転して外反する。高台径4.6cm。60は染付磁器碗である。口径10.0cm。61は内面に白色釉で刷毛目文様を施文する陶器皿である。口縁部は外折する。62は瓦質焼成の火鉢口縁部か。内面にハケ目が見える。63は釜の鐙部である。

SK-67

出土遺物 (図版68、第84図)

64は土師器小皿である。口径7.4cm。65は白磁碗の底部である。高台径5.0cm。66は陶器皿の口縁部である。内面には灰白色釉で刷毛目文様を施文し、外面には灰緑色釉を施釉する。67は白磁香炉の蓋部である。口径4.6cm。68は瓦質焼成の鍋口縁部であろう。69は土師質焼成の鍋で、



第 83 图 SK-63·68·69 实测图 (1/40)

口縁部が玉縁状に肥厚する。70は備前焼の播鉢である。71は瓦質焼成の釜である。口縁部は若干肥厚しており、上端部が水平面をなす。72は瓦質焼成で、釜か。傾きに不安が残る。

SK-68 (第83図)

調査区南西側で検出した土坑である。SK-62から7m南側に位置する。長軸1.7m、短軸1.4mを測り、比較的形の整った楕円形プランを呈す。深さは1.5mを測り、壁の立ち上がりは急な傾斜となる。

出土遺物 (図版68、第84図)

73は外面に蓮弁を配した青磁碗である。74は白磁碗の底部片である。高台径6.0cm。75は陶器皿であろう。高台は低く、端部は丸くおさまられる。内面には灰色釉、外面には鉄釉を塗布する。高台径8.6cm。76は瓦質焼成の釜であろう。口縁部は若干内傾し、端部は面をなす。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。

SK-69 (図版32、第83図)

調査区南西端で検出した土坑である。SK-68から2m南西側に位置する。長軸1.4m、短軸1.1mを測り、比較的形の整った楕円形プランを呈す。深さは1.2mを測り、壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は下層に暗灰色、中層に暗青灰色および黒灰色、上層に灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (第84図)

77は瓦質焼成の鍋である。体部から口縁部にかけて直線的に開き、端部は面をなす。内外面ナデ調整を行う。

SK-70

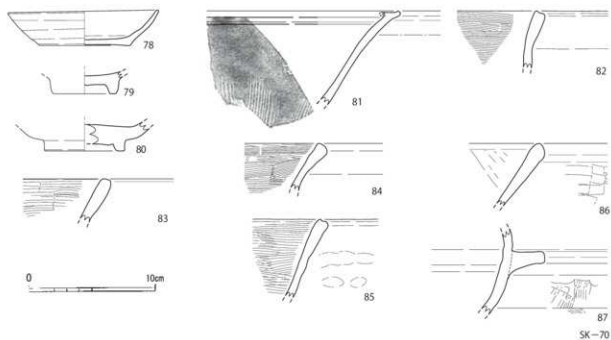
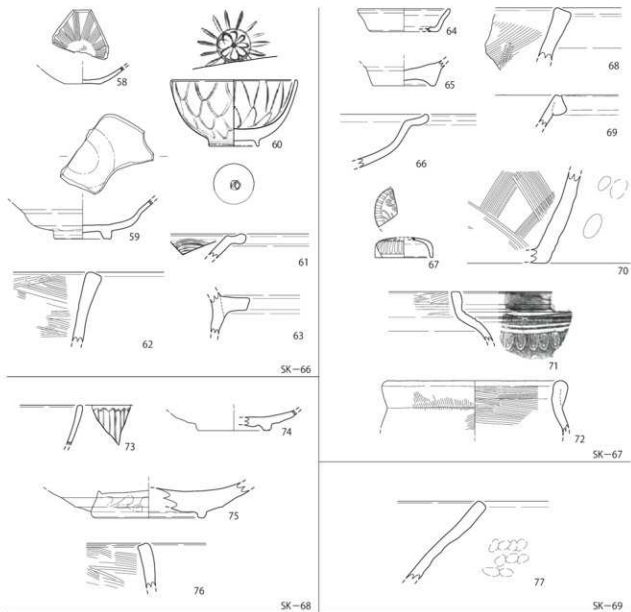
出土遺物 (図版68、第84図)

78は土師器坏である。器壁は薄く、体部は若干内湾しながら開く。口径12.2cm、器高2.8cm、底径7.2cm。79は陶器碗の底部片である。釉は灰色釉を全面に塗布し、高台端部には砂が付着する。高台径5.0cm。80は青磁碗である。高台径6.4cmで高台内面は露胎となる。81は陶器播鉢である。口縁部は鋤先状に短く伸びており、内面にもわずかに伸びる。口縁部付近のみ藁灰釉を施す。82～86は瓦質焼成の鉢である。82は小片を図化したため傾きにやや不安が残る。口縁部は内端部をつまみ出した形状となる。内面は横ハケ目。83は端部を丸くおさめる。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。84は口縁端部付近が若干肥厚し、端部は面をなす。内面横ハケ目、外面ナデ調整。85もやはり口縁部付近が若干肥厚し、端部は内端部を若干つまみ出す。内面横ハケ目、外面ナデ。86は端部が若干肥厚し、丸く仕上げる。外面には横方向のヘラナデを行う。87は瓦質焼成の釜である。鈎は短く水平に伸びており、端部は面をなす。外面鈎部下にはハケ目が見られる。

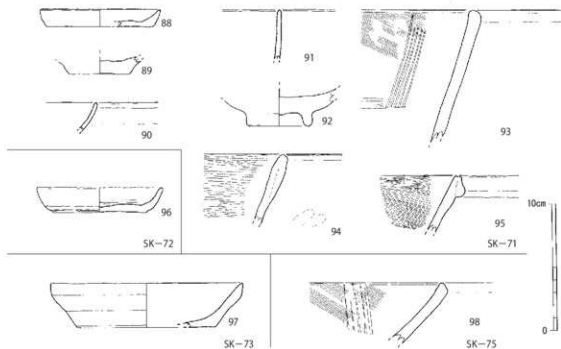
SK-71 (第74図)

出土遺物 (第85図)

88・89は土師器小皿である。88は口径9.4cm、器高1.4cm、底径8.2cm。89は底径4.8cm。90



第 84 图 SK-66·67·68·69·70 出土遗物实测图 (1/3)



第 85 図 SK-71・72・73・75 出土遺物実測図 (1/3)

は瓦器塚である。器壁が非常に薄い。91・92は青磁である。91は碗の口縁部か。口縁部は直立しており、表面には貫入が多い。92は碗の底部である。高台内側まで施軸され、端部は丸みを帯びる。高台径5.2cm。93は瓦質焼成の播鉢である。体部はあまり開かず、口縁端部はわずかに内側につまみ出している。内面には播目に先行するハケ目が見られる。94は瓦質焼成の鍋である。口縁部は若干肥厚しており、端部は丸くおさめる。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。95は土師質の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚し、上端部は面をなす。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。

SK-72 (第74図)

出土遺物 (第85図)

96は土師器坏である。底部と体部の境は明瞭な稜を有し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。口径15.2cm、器高3.5cm、底径11.0cm。

SK-73

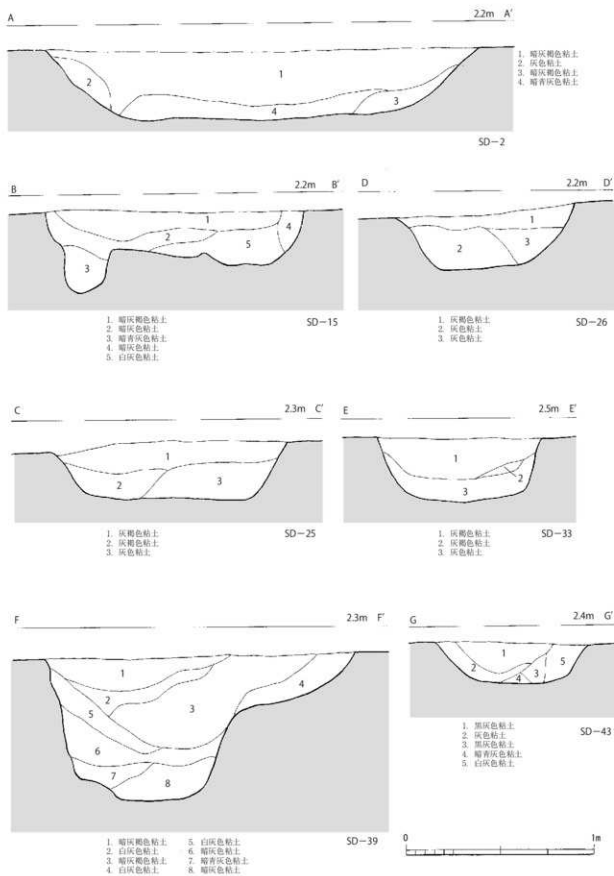
出土遺物 (第85図)

96は土師器坏である。底部と体部の境目には明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。口縁部は端部が薄く尖り気味に仕上げる。口径15.2cm、器高3.5cm、底径11.0cm。

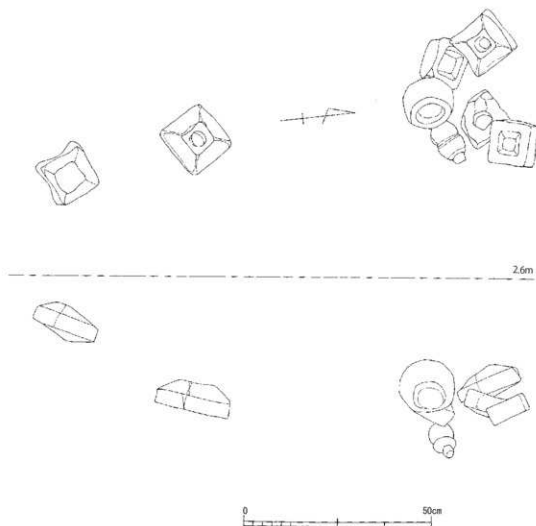
SK-75 (第74図)

出土遺物 (第85図)

98は瓦質焼成の播鉢である。体部は大きく開き、端部は面をなす。内面には播目に先行する斜ハケ目が見られる。外面はナデ調整を行う。



第 86 图 SD-2·15·25·26·33·39·43 土层断面实测图 (1/20)



第 87 図 SD-2 五輪塔出土状態実測図 (1/10)

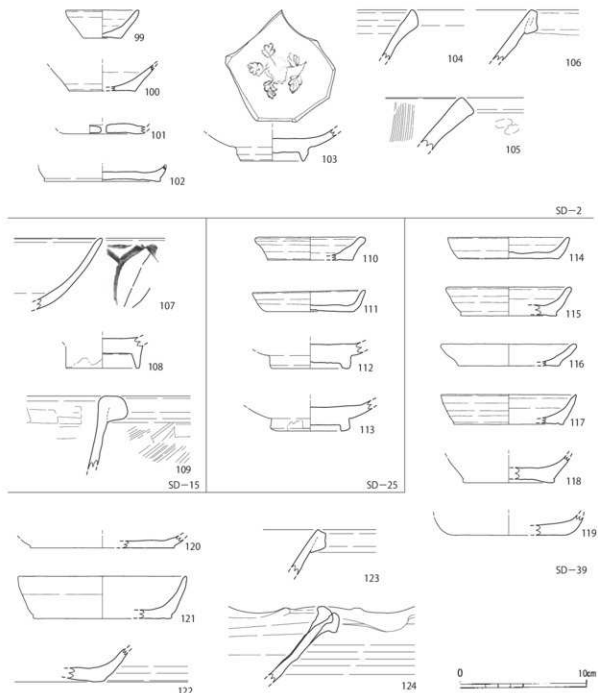
2) 溝

SD-2 (図版 32・図版 33、第 86 図・第 87 図)

調査区北側で検出した溝である。東西方向に 37m の長さで直線的に伸びており、東西両端は調査区外へと続いている。SD-20・22 とは溝の東側で直交し、SD-24 は溝の東側で並走する。幅は 2~4m、深さ 0.3~0.5m を測り、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に暗青灰色土、上層に暗灰褐色土が堆積する。溝の中央付近からは、第 87 図のように五輪塔の部材がかたまって出土した。

出土遺物 (図版 68、第 88 図)

99~101 は土師器小皿である。99 は径が小さく、体部はあまり開かず長く伸びる。口径 5.8cm、器高 2.2cm、底径 3.0cm。100 は底部と体部の境が明瞭である。底径 5.4cm。101 は底部中央に穿孔を行う。102 は土師器杯の底部片である。底径 9.2cm。103 は青磁碗である。内面には花文を印刻し、高台は端部外側を削って尖り気味にする。高台径 5.0cm。104・105 は播鉢である。104 は須恵質焼成の鉢で、口径端部は上方を向く。105 は瓦質焼成で端部は面をなす。106 は土師

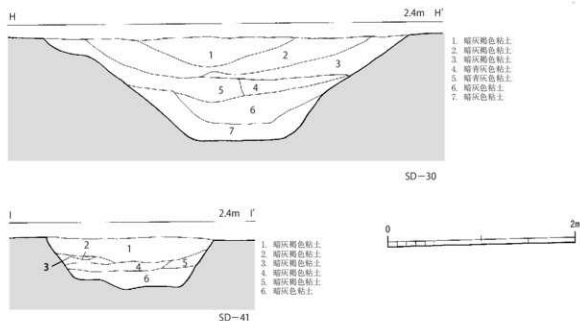


第 88 図 SD-2・15・25・39 出土遺物実測図 (1/3)

質焼成の鍋である。口縁端部は玉縁状に肥厚し、上端部は面をなす。

SD-15 (図版 33、第 86 図)

調査区北側で検出した溝である。東西方向に 11m 伸びており、西側は調査区外へと続いている。幅 1.4m、深さ 0.3~0.45m を測り、壁は緩やかな立ち上がりとなる。覆土は下層に白灰色粘土および暗灰褐色粘土、中層、上層には暗灰褐色粘土が堆積する。



第 89 図 SD-30・41 土層断面実測図 (1/40)

出土遺物 (図版 69、第 88 図)

107 は外面に鋤蓮弁を配した青磁碗である。108 は白磁碗の底部片である。高台は器壁が薄く、長く伸びる。高台径 5.8cm。109 は土師貫焼成の鍋である。口縁部は大きく肥厚し、上端部には縄の押圧による文様を施文する。内面はヘラ状工具による横ナデ、外面口縁部下は斜め方向のナデを行う。

SD-25 (第 86 図)

調査区東側で検出した溝である。東西方向に 16m 直線的に伸びており、東側は調査区外へと続く。また SD-39 とは直交する位置関係にあり、西側は接続していないものの本来は一連の遺構であったと思われる。東端で幅 1.2m、深さ 0.3m を測り、壁の立ち上がりは緩やかな傾斜となる。覆粘土は下層に灰色粘土および灰褐色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

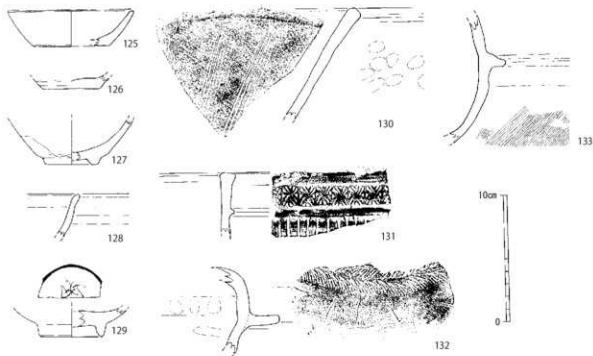
出土遺物 (第 88 図)

110・111 は土師器小皿である。110 は体部の器壁が厚く、端部は丸くおさめる。口径 8.8cm、器高 1.8cm、底径 6.8cm。111 は口径 9.2cm、器高 1.7cm、底径 7.0cm。112・113 は青磁碗である。112 は高台径 6.2cm、113 も高台径 6.2cm。

SD-26 (第 86 図)

調査区東側で検出した溝である。13m 伸びる東西溝と、10m 伸びる南北溝からなり、南西隅で直角に折れた形状となる。東西溝は SD-33 と、南北溝は SD-36 とそれぞれ並行している。東西溝東端で幅 0.95m、深さ 0.3m を測り、壁の立ち上がりは緩やかな傾斜となる。覆土は下層に灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

図示できる遺物はない。



第90図 SD-41 出土遺物実測図 (1/3)

SD-30 (第89図)

調査区中央付近で検出した溝である。東西方向に8mほど伸びており、西側は調査区外へと続いている。幅4m、深さ1.2mを測り、壁は緩やかに直線的に傾斜し、断面は逆台形状を呈す。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に暗青灰色粘土、上層に暗灰褐色粘土が堆積する。

図示できる遺物はない。

SD-33 (図版33、第86図)

調査区東側で検出した溝である。東西方向に10m伸びており、東側は調査区外へと続き、西側はSD-36と接続する。SD-26とは3m離れて並走する。西端で幅0.85m、深さ0.3mを測り、壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は下層に灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

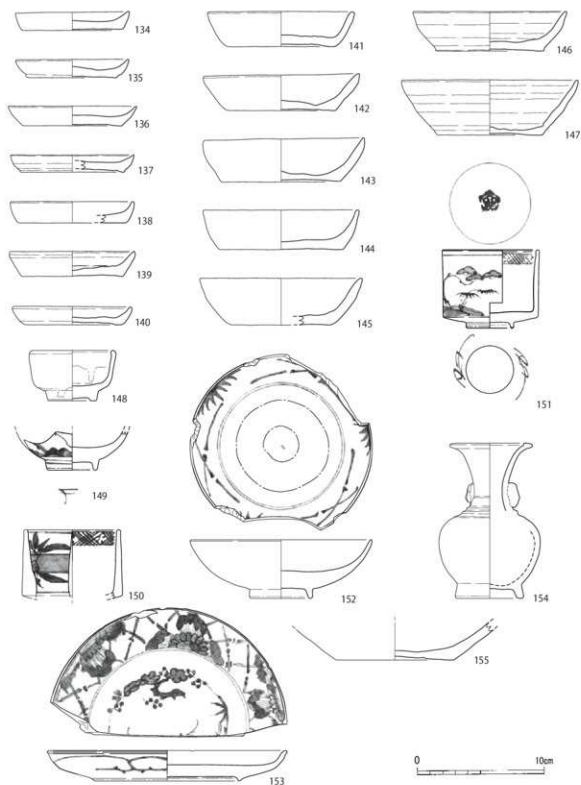
図示できる遺物はない。

SD-39 (図版34、第86図)

調査区中央付近で検出した溝である。南北方向に11m直線的に伸びており、北端は緩やかに東側へと湾曲している。本来はSD-25と接続していたものと思われる。幅は1.0～1.6m、深さは土層図の箇所でも0.8mを測り、壁の立ち上がりは西側で垂直に近い、東側で緩やかな傾斜となる。覆土は下層に暗灰色粘土、上層に暗灰褐色粘土および白灰色粘土が堆積する。

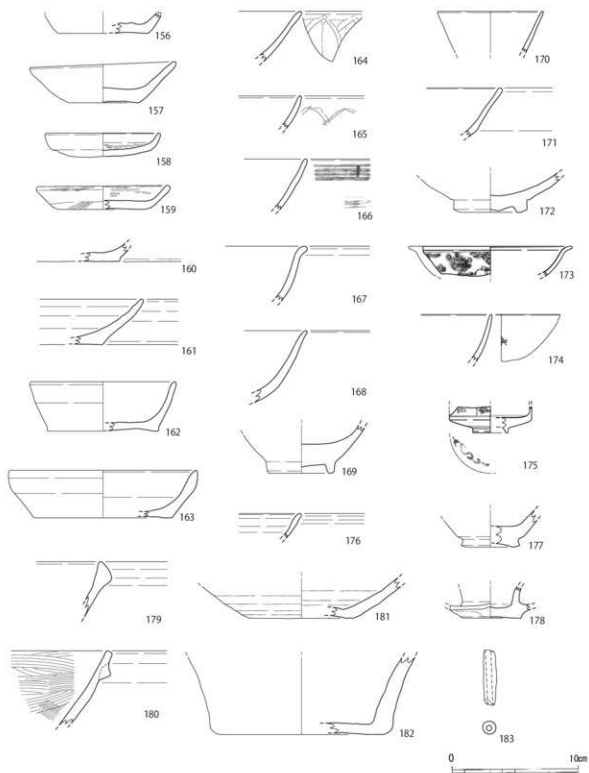
出土遺物 (図版69、第88図)

114～117は土師器小皿である。114は口径9.6cm、器高1.7cm、底径7.8cm。115は器壁が厚い。口径10.0cm、器高2.3cm、底径7.6cm。116は口径10.8cm、器高1.7cm、底径8.0cm。117は口径10.6cm、器高2.3cm、底径8.6cm。118～122は土師器坏である。118は底部が若干上げ底



第91図 SD-43出土遺物実測図(1/3)

となる。底径7.2cm。119は底径9.6cm。120は底径11.4cm。121は口径13.4cm、器高3.4cm、底径11.0cm。122は若干上げ底となるようである。123は土師質焼成の鍋である。口縁端部は玉縁状に肥厚し、上端部は面をなす。124は須恵質焼成の片口鉢である。口縁部は玉縁状に肥厚する。



第 92 図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

SD-41 (図版 34、第 89 図)

調査区中央付近で検出した溝である。東西方向に 23mほど伸びているが直線的ではなく、東側が緩やかな弧を描いている。東端、西端ともに調査区外へと続いている。西側部分で幅 1.8m、深

さ0.6mを測り、壁は緩やかに直線的に傾斜しており、土層の断面が逆台形状を呈す。覆土は下層に暗灰色、中層、上層には暗灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版69、第90図)

125・126は土師器小皿である。125は体部があまり開かず長く伸びる。口径10.0cm、器高2.9cm、底径5.8cm。126は底径4.4cm。127は陶器碗である。外面には灰色釉を施軸する。高台径4.2cm。128・129は青磁碗である。128は口縁端部が若干外反する。129は内面に花文を印刻し、体部との境には一条の沈線を巡らせる。高台は断面三角形に内端部を削る。高台径4.8cm。130は瓦質焼成の播鉢である。体部は直線的に伸びており、端部は丸みを帯びる。131は瓦質焼成の火鉢である。口縁部は垂直に立ち上がっており、外端部とその下に低い突帯を巡らせる。上端部は面をなし、外面には印刻を施文する。132・133は瓦質焼成の釜である。132は鈎部が水平にやや長く伸びる。133の鈎部は短く、やや下がり気味に伸びている。

SD-43 (図版34、第86図)

調査区南側で検出した溝である。東西方向に30mほど直線的に伸びており、東端は調査区外へと続き、西端は地形が下降した谷部へと続いている。中央付近で幅0.8m、深さ0.2mを測り、壁の立ち上がりは緩やかな傾斜となる。覆土は灰色粘土および黒灰色粘土が大半を占める。

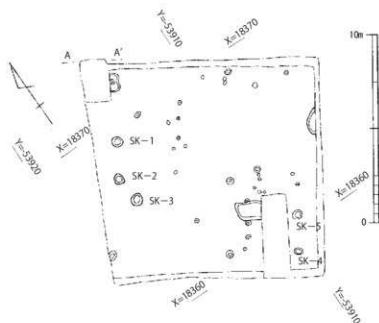
出土遺物 (図版69・70、第91図)

134～140は土師器小皿である。134は器壁が厚く口縁部は薄く尖り気味になる。口径9.0cm、器高1.5cm、底径8.0cm。135～137は口縁部が薄く尖るが、138～140は口縁部が丸みを帯びる。140は口径9.4cm、器高1.4cm、底径7.6cm。141～147は土師器坏である。141は口縁端部が丸い。口径11.6cm、器高2.8cm、底径8.4cm。143は口縁端部が薄く尖る。147は器壁が薄く、体部が直線的にやや長く伸びる。口径14.0cm、器高4.4cm、底径8.2cm。

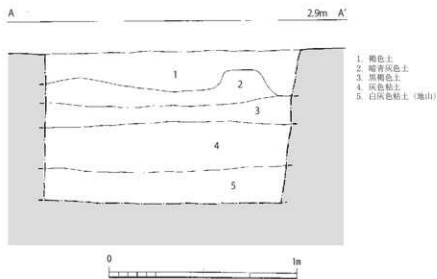
148は陶器小碗である。高台付近は器壁が厚く、体部は直立気味に立ち上がる。口縁端部は内側に若干内湾する。口径6.8cm、器高4.0cm、高台径3.8cm。149～151は染付碗である。149は丸い器形の碗で、高台畳付は軸測ぎを行う。高台径3.8cm。150・151は筒形の碗である。150は口径7.8cm。151は口径7.4cm、器高6.2cm、高台径3.8cm。152・153は染付皿である。152は内面見込みと高台畳付の軸を測ぎ取る。口径14.4cm、器高4.6cm、高台径5.0cm。153は体部の立ち上がりが短く、端部はわずかに外反する。高台部は径が大きく低い。口径19.0cm、器高2.4cm、高台径11.4cm。154は鉄軸を施軸した陶器瓶である。口縁部は小さな鋤先状を呈し、頭部には二つの耳が付く。口径6.4cm、器高12.2cm、体部径8.0cm、高台径5.6cm。

3) その他の出土遺物 (図版70、第92図)

156・157は土師器小皿である。156は底径7.0cm。157は器壁が厚く、体部が直線的に開く。口径11.6cm、器高3.2cm、底径5.4cm。158・159は瓦器小皿である。158は体部があまり開かない器形となる。口径9.2cm、器高2.0cm、底径5.0cm。159は体部が直線的に開き、端部は丸くおさめる。口径10.6cm、器高1.9cm、底径7.0cm。160～163は土師器坏である。160・161は底部と体部の境目に明瞭な稜を有す。162は体部があまり開かず、深い器形となる。口径11.6cm、器高3.9cm、底径9.0cm。163は端部を尖り気味に仕上げる。口径14.4cm、器高3.7cm、底径11.0cm。



第93図 下百町屋敷の内遺跡第2次北調査区遺構配置図(1/200)



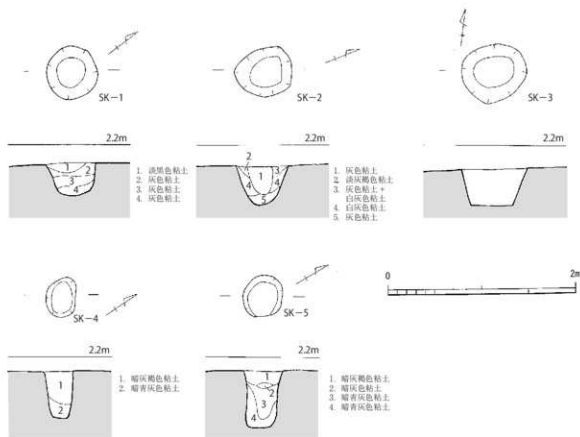
第94図 調査区北壁土層図(1/20)

1. 褐色土
2. 暗青灰色土
3. 黒褐色土
4. 灰色粘土
5. 白灰色粘土(堆土)

る。高台径4.8cm。178は鉄軸を施軸する灯明皿である。

179は瓦質焼成の鉢で、口縁部は肥厚し端部は上方を向く。180は土師質焼成の鍋である。口縁端部は面をなし、外面の口縁端部からやや下がった位置が三角突帯状に肥厚する。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。181は土師質焼成で、鍋または鉢の底部である。底径8.0cm。182は備前焼の壺底部であろう。底径14.4cm。183は土師質焼成の管状土錘である。長さ4.4cm、径1.0cm、孔径0.4cm。

164～169は青磁碗である。164は鍋蓮弁、165は蓮弁を外面に配す。166は口縁部外面に横ハケ目状の文様が見える。167は口縁端部が短く外反する。168は口縁端部がわずかに外反し、器壁は薄く尖る。169は底部の器壁が厚く、高台内側まで施軸される。高台径5.2cm。170～172は白磁である。170は小型の碗か小坏であろう。体部は直線的に伸びており、器壁は薄い。口径8.4cm。171は貫入が多く入る。172は体部下半から露胎となる。高台径5.6cm。173～175は染付磁器である。173は小皿か。体部が開き、口縁端部は外反する。口径13.0cm。174は丸い器形となるようである。175は筒状の小碗か。高台径2.8cm。177は陶器碗の口縁部片であろう。軸は無色釉である。177は天目碗であ



第95図 SK-1・2・3・4・5実測図(1/40)

4) 北調査区

基本層序(第94図)

第94図は第2区北壁の土層図である。最上層に褐色土、その下層に暗青灰色土、その下層に黒褐色土が堆積する。さらにその下層には灰色粘土が30cmの厚さで厚く堆積している。最下層にあるのは白灰色粘土層で、この層には遺物は含まれていないため、この層の上面を遺構検出面とした。

5) 土坑

SK-1(第95図)

調査区西側で検出した土坑である。直径0.5mの円形プランを呈し、深さは0.4mを測る。壁の立ち上がりは比較的急である。覆土は上層に淡黒灰色粘土、中層および下層に灰色粘土が堆積する。

図示できる出土遺物はない。

SK-2(第95図)

調査区西側で検出した土坑である。SK-1から2m南側に位置する。長軸0.6m、短軸0.5mの楕円形を呈し、深さは0.4mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は中央付近に灰色が確認され、あるいはこの層が柱痕である可能性もある。その周辺には淡茶褐色粘土が堆積する。図示できる出土遺物はない。

SK-3 (第95図)

調査区西側で検出した土坑である。SK-2から1m南東側に位置する。長軸0.7m、短軸0.6mの楕円形を呈し、深さは0.4mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。

図示できる出土遺物はない。

SK-4 (第95図)

調査区南東端で検出した土坑である。長軸0.4m、短軸0.3mの楕円形を呈し、深さは0.5mを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に暗灰褐色粘土、下層に暗青灰色粘土が堆積する。

図示できる出土遺物はない。

SK-5 (第95図)

調査区南東側で検出した土坑で、SK-4から2m北側に位置する。径0.5mの円形プランを呈し、深さは0.6mを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に暗灰褐色粘土、中・下層に暗青灰色粘土が堆積する。

図示できる出土遺物はない。

6) 小結

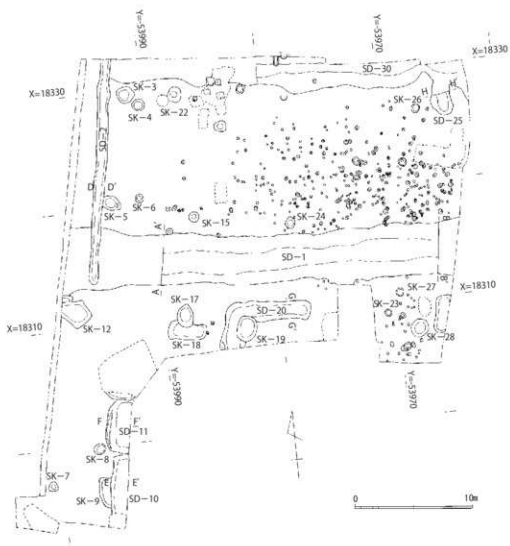
下百町屋敷の内遺跡第2次調査の第2区を除く範囲では、土坑34基、溝9条を検出した。土坑は調査区全体に及ぶが特に南端に集中する。当調査区では小型の土坑が多く、深さも浅いものが多い。整った円形プランで深い土坑については井戸として利用されたものと思われるが、それ以外については性格等を判断する決め手に欠ける。

溝は東西、南北方向に直線的に伸びるものが多く、中でもSD-2は規模も大きく、外側の区画溝として掘削されたものと思われる。SD-25・26・33・36・39は、併行して複数掘削される溝であり、区画の隅部を構成しているようである。

土坑出土遺物を見ると、例えばSK-4やSK-34からは近世の染付、SK-23からは同安窯系青磁皿が出土しており、かなり時期幅があるようである。また、若干の混入も見られる。SK-46は14世紀代の一括として良いだろう。SK-63は15世紀頃と思われる白磁皿に、陶器碗が伴っている。SK-66は近世でもかなり時期が下りそうな染付碗などが見られる。

溝出土遺物のうち、SD-15から出土した遺物は、明瞭な鎗蓮弁の青磁碗、高台部の高い白磁碗、口縁上端部に縄目を押圧する土師質鍋が出土しており、他よりも時期が遡る13世紀代のものである。SD-2やSD-39は14世紀頃か。SD-41からは陶器碗と内面見込みに印花文のある青磁碗があり、15世紀頃であろうか。SD-43には中世後期の土師器小皿、坏と18世紀後半～19世紀前半の染付磁器や陶器があり、混入が見られる。

遺跡の時期としては13世紀から18世紀の幅があり、13世紀代の遺構はSD-15やSK-23など主に北側に分布し、南側の土坑群は14・15世紀を中心とする時期で、その後やや時期が下って18世紀後半から19世紀前半にも一部遺構が見られる、ということになる。



第 96 図 下百町屋敷の内遺跡第 3 次調査区遺構配置図 (1/300)

6 下百町屋敷の内遺跡第3次調査

下百町屋敷の内遺跡第3次調査は、平成21年10月1日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、平成21年3月1日に機材を撤収して現地での作業を終了した。

調査区は東西40m、南北34mを測り、逆L字状を呈す。遺構は中央をSD-1とした大型の溝が東西方向に伸びる他、あまり密度は高くない。遺構面の標高は北側で2.0m、南側で2.0m前後と、ほぼ水平である。調査面積は905㎡である。

検出した主な遺構は、土坑18基、溝7条である。出土遺物は土師器、陶磁器、日常雑器、土製品、石製品、金属製品である。

1) 土坑

SK-3 (図版36、第97図)

調査区北西端で検出した土坑である。径1.5mの円形プランを呈し、深さは1.3mを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は下層に暗青灰色粘土、中・上層に暗灰色粘土および暗褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (第98図)

1は土師質焼成の鍋である。口縁端部は面をなし、外端部は突帯状に肥厚させる。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。

SK-4 (第97図)

調査区北西端で検出した土坑である。SK-3の南東側に隣接した位置にある。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ1.2mを測り、平面形は比較的形狀の整った楕円形を呈す。壁の立ち上がりは垂直に近い。図示できる遺物はない。

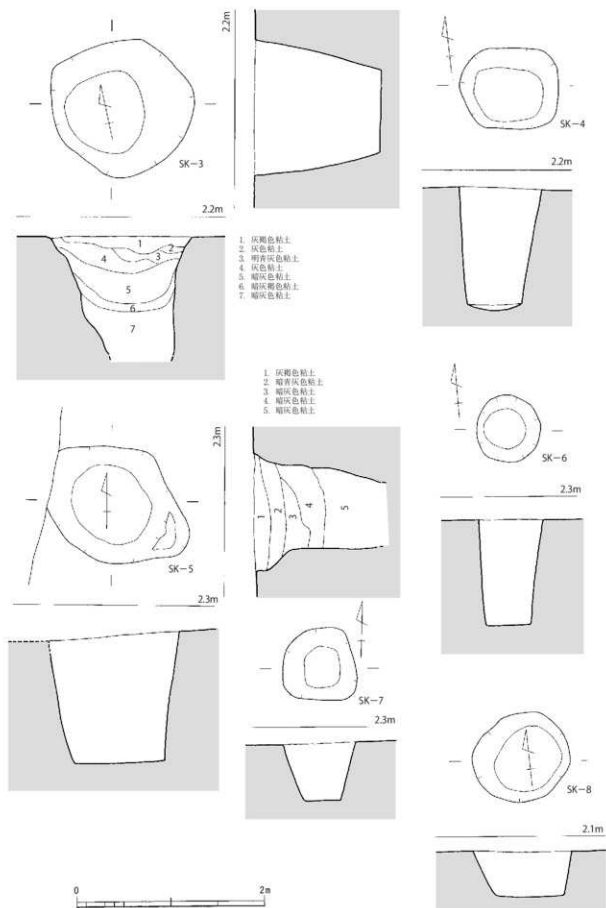
SK-5 (第97図)

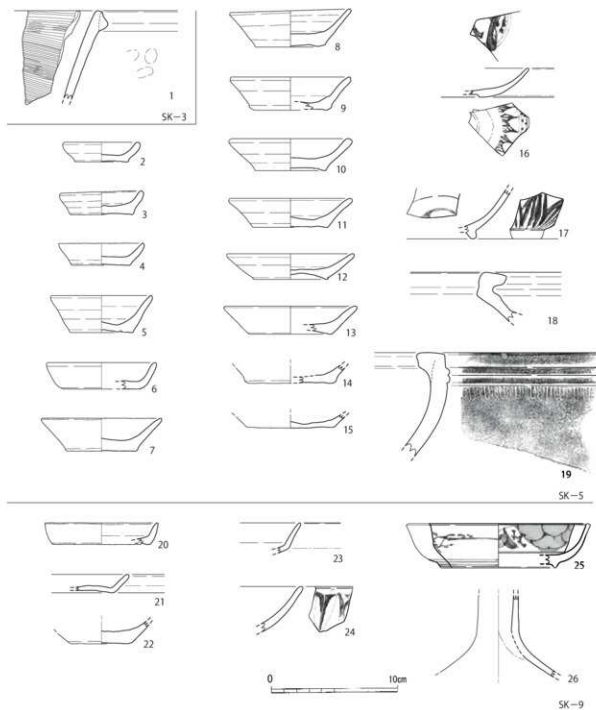
調査区西側で検出した土坑である。SK-4から8m南側に位置する。SD-2と重複しており、これに切られる。長軸1.6m、短軸1.2mを測る楕円形プランとなる。深さは1.4mを測り、壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は下層に暗灰色粘土が厚く堆積し、中層は暗灰色粘土、上層には灰褐色粘土および暗青灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版70・図版71、第98図)

2~15は土師器小皿である。2~4は径が小さく、体部は直線的にやや長く伸びる。2は口径6.2cm、器高1.5cm、底径4.2cm。5は体部があまり開かず伸びており、深い器形となる。口径8.1cm、器高2.9cm、底径5.0cm。6は底部と体部の境目の稜が不明瞭である。7~13はいずれも底部と体部の境目に明瞭な稜を有し、体部は直線的に伸びる。7は口径9.6cm、器高2.6cm、底径5.4cm。13は底部が上げ底状になる。口径10.2cm、器高2.0cm、底径6.0cm。15は器壁が薄い。16・17は染付磁器である。16は皿である。内面見込みには草花文、外面下半には芭蕉葉文を巡らせる。底部は基筒底となる。17は碗である。外面下半には芭蕉葉文を巡らせる。

18は陶器甕か。肩部は強く内傾し、頸部の立ち上がりはほとんどなく、口縁部は外側に強く外折





第 98 図 SK-3・5・9 出土遺物実測図 (1/3)

する。全面に藁灰釉を施軸する。19は瓦質焼成の火鉢である。口縁部は内側に短く伸びており、上端部は面をなす。外面口縁部下には2条の突帯があり、その下には印刻を巡らせる。

SK-6 (第 97 図)

調査区西側で検出した土坑である。SK-5から2m東側に位置する。径0.7mの円形プランで、深さは1.1mを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。

図示できる遺物はない。

SK-7 (第97図)

調査区南西端で検出した土坑である。径0.8mの不整形円形プランを呈し、深さは0.6mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。

図示できる遺物はない。

SK-8 (第97図)

調査区南西側で検出した土坑である。SK-7から5m北東に位置する。長軸1.0m、短軸0.9mの楕円形プランを呈し、深さは0.5mを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

図示できる遺物はない。

SK-9 (第99図)

調査区西側で検出した土坑である。SK-8から3m南側に位置する。SD-10と重複しており、これに切られる。長軸2.4m、短軸1.0mの不整形を呈し、深さは0.3mを測る。覆土は中層に黒色の灰層が堆積する。

出土遺物 (第98図)

20～22は土師器小皿である。20は体部の立ち上がりが短く、あまり開かない。口径9.0cm、器高1.7cm、底径7.8cm。21は器壁が薄く、体部は直線的に伸びており、端部は丸くおさめる。22は底部の器壁が厚い。底径5.0cm。23は白磁皿の口縁部である。体部中位で陵を有して屈曲し、口縁部はわずかに外反する。24は鍋蓮弁の青磁碗である。25は染付皿である。高台は小さな台形を呈す。口径14.6cm、器高3.5cm、高台径9.1cm。26は陶器壺の頸部である。外面には灰色釉を施軸する。頸部径3.2cm。

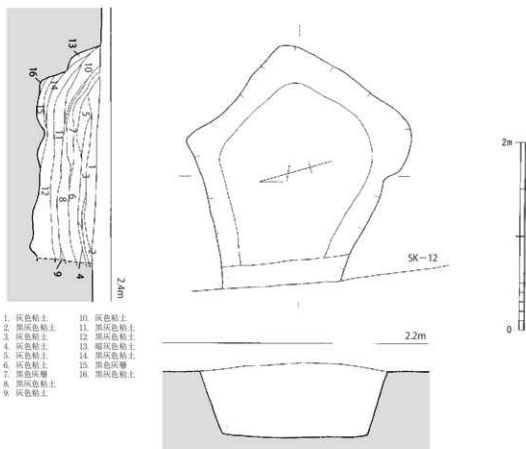
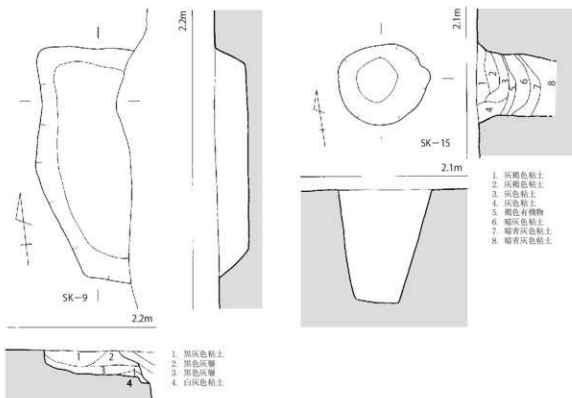
SK-12 (第99図)

調査区西端で検出した土坑である。SK-5から9m南側に位置する。西側が調査区外へと続いており、検出した範囲で長軸2.6m、短軸2.4mの不整形プランを呈す。深さは0.8mを測り、壁の立ち上がりは急角度で傾斜する。覆土は灰色粘土、黒灰色粘土が細かく堆積する。

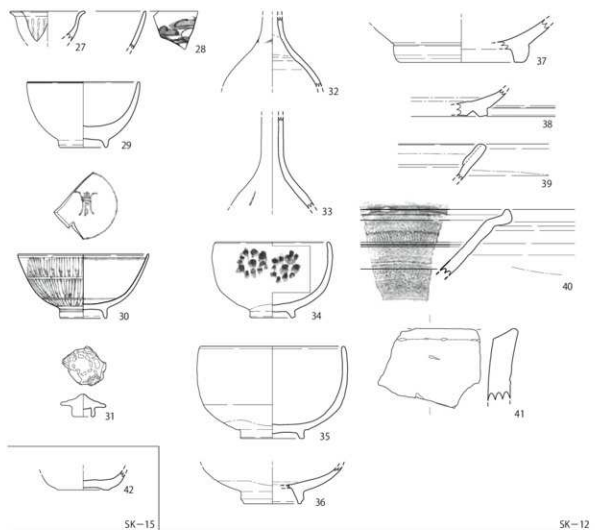
出土遺物 (図版71、第100図)

27～33は磁器である。27は白磁小坏。型押し整形か。口縁部は外反し、外面には蓮弁を配す。口径6.0cm。28は染付碗である。29は半球形の碗で、口縁端部には鉄軸を施軸する。口径4.5cm、器高5.2cm、高台径4.0cm。30は内面見込みに「寿」を描く碗。口径10.4cm、器高5.1cm、高台径3.6cm。31は白磁の小型蓋である。径3.6cm。32・33は瓶である。34～36は陶器碗である。34は全面に無色釉を施軸し、外面には青色釉による施文が行われる。口径9.0cm、器高6.0cm、高台径3.6cm。35は灰色釉を施軸し、全体的に貫入が多い。口径11.4cm、器高7.3cm、高台径5.0cm。36は無色釉を施軸する。外面は体部下半から高台部にかけて露胎となる。高台径5.0cm。

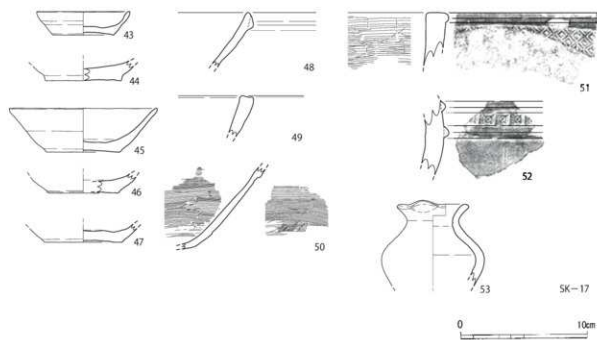
37～40は陶器鉢である。37は灰白色釉を刷毛で施軸する。高台径10.0cm。38は無色釉を施軸する。39は口縁部内面を肥厚させる。鉄軸塗布。40は口縁部が開き、端部が上方に立ち上がる。



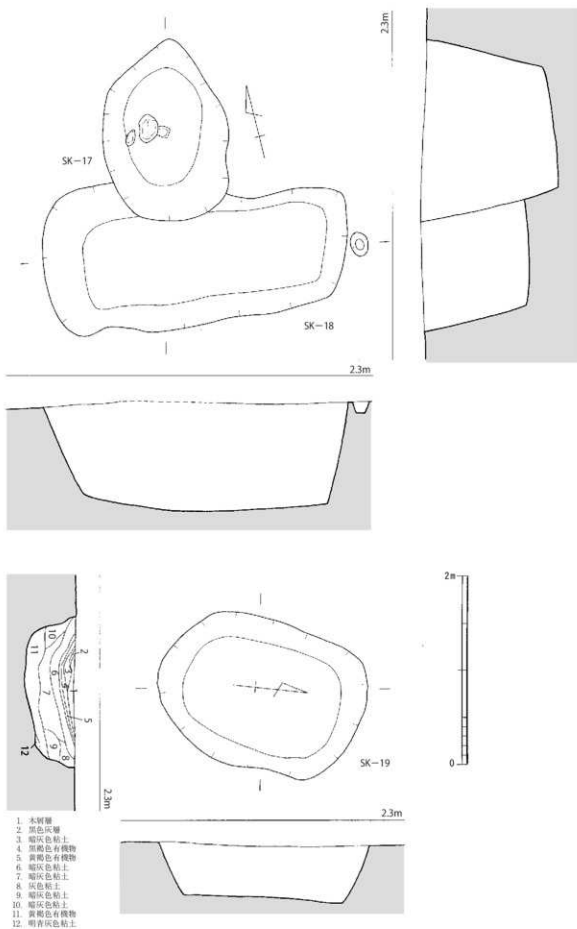
第 99 图 SK-9·12·15 实测图 (1/40)



SK-12



第 100 图 SK-12·15·17 出土遺物実測図 (1/3)



第 101 圖 SK-17·18·19 實測圖 (1/40)

内面には沈線と当て具状の文様があり、外面には炭化物が付着する。41は平瓦片。

SK-15 (図版36、第99図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-6から5m東側に位置する。長軸1.0m、短軸0.8mの楕円形プランを呈す。深さは1.2mを測り、壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に灰褐色土、中層に暗灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。

出土遺物 (第100図)

42は土師器小皿である。底部は上げ底状になり、端部は陵を有す。底径4.0cm。

SK-17 (第101図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-15から8m南側に位置する。SK-18と重複しており、これを切って営まれる。長軸2.0m、短軸1.3mの不整楕円形プランで、深さは1.4mを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

出土遺物 (第100図)

43・44は土師器小皿である。43は口径7.4cm、器高1.8cm、底径5.0cm。44は底径6.0cm。45～47は土師器坏である。45は底部と体部の境目が明瞭で、体部は直線的に開く。口径11.8cm、器高3.4cm、底径5.8cm。46は底径5.8cm、47は6.2cm。48は須恵質焼成の鉢である。口縁部は断面三角形状に尖る。49・50は瓦質焼成の鍋であろう。49は端部が面をなす。50は体部下半と上半の境目に稜を有す。内外面横ハケ目調整。51・52は瓦質焼成の火鉢である。51は口縁外端部に突帯を巡らせ、上端は面をなす。52は二つの突帯間に印刻を連続で施文する。53は無軸の陶器壺である。口縁部は片口となる。口径5.8cm、胴部径8.2cm。

SK-18 (第101図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-17と重複しており、これに切られる。長軸3.2m、短軸1.6mを測り、比較的形狀の整った長方形プランとなる。深さは1.1mを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

出土遺物 (第102図)

54は土師器坏である。底部と体部の境目には明瞭な稜を有し、体部はあまり開かず立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部の重み大きい。口径12.2cm、器高3.6cm、底径10.0cm。

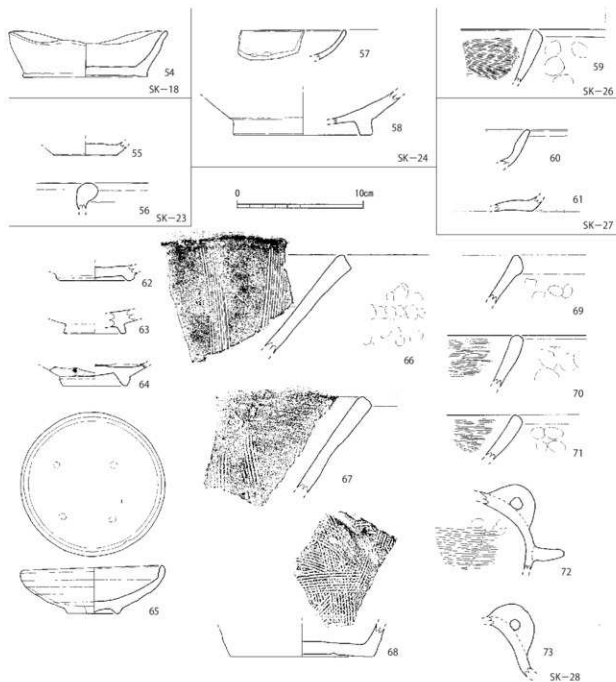
SK-19 (第101図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-18から3m東側に位置する。SD-20と重複しており、これを切って営まれる。長軸2.2m、短軸1.6mを測る楕円形プランで、深さは0.6mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。

図示できる遺物はない。

SK-22 (第103図)

調査区北西側で検出した土坑である。SK-4から3m東側に位置する。長軸1.2m、短軸0.9m



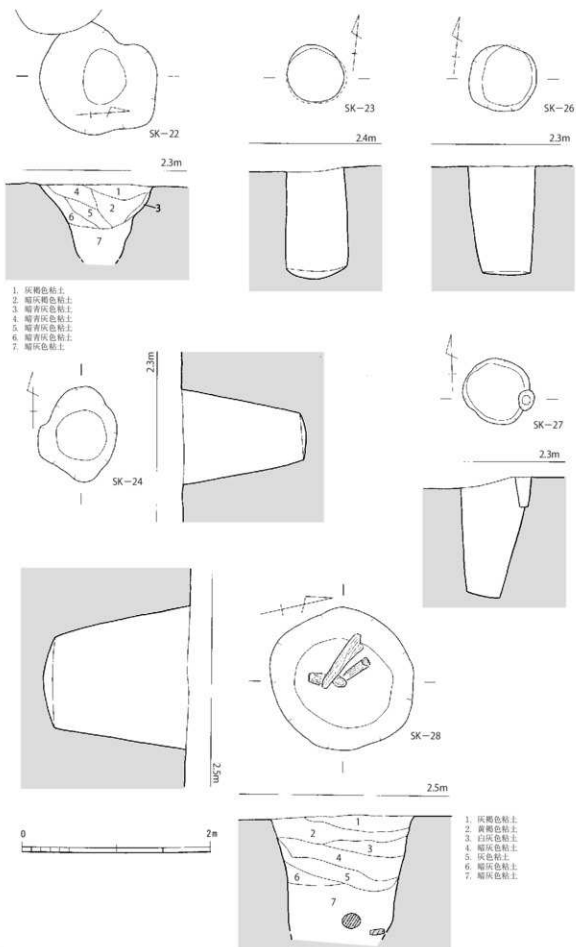
第 102 図 SK-18・23・24・26・27・28 出土遺物実測図 (1/3)

の不整楕円形プランを呈す。深さは1.0mを測り、壁は底面に向かって挿鉢状に傾斜している。覆土は下層に暗灰色粘土、上層に灰褐色粘土や暗青灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物はない。

SK-23 (図版 36、第 103 図)

調査区東側で検出した土坑である。径0.6mの円形プランを呈し、深さは1.2mを測る。壁の立



ち上がりはほぼ垂直となる。

出土遺物 (第 102 図)

55 は土師器小皿である。底部と体部の境目には明瞭な稜がある。底径 5.0cm。56 は陶器壺の口縁部であろう。端部は丸く肥厚しており、全面に鉄釉を施す。

SK-24 (図版 37、第 103 図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-15 から 8m 東側に位置する。長軸 1.0m、短軸 0.8m の不整形円形を呈し、深さは 1.3m を測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。

出土遺物 (第 102 図)

57 は染付磁器皿であろう。58 は陶器皿の底部片である。高台は断面四角形で器壁が厚く、内面には灰白色釉を刷毛で施す。高台径 11.0cm。

SK-26 (図版 37、第 103 図)

調査区北東側で検出した土坑である。直径 0.7m の円形プランを呈し、深さは 1.2m を測る。壁の立ち上がりはほぼ垂直となる。

出土遺物 (第 102 図)

59 は瓦質焼成の鍋であろう。口縁部付近は若干肥厚し、端部は外傾する面をなす。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。

SK-27 (第 103 図)

調査区東側で検出した土坑である。SK-23 から 2m 北東側に位置する。直径 0.7m の円形プランを呈し、深さは 1.3m を測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。

出土遺物 (第 102 図)

60・61 は土師器杯である。60 は体部の中位で不明瞭に屈曲し、口縁部は直線的に開く。61 は底部と体部の境目に稜を有す。

SK-28 (図版 37、第 103 図)

調査区南東側で検出した土坑である。SK-27 から 3m 南側に位置する。直径 1.5m の比較的形整った円形プランで、深さは 1.5m を測る。覆土は下層に暗灰色粘土、上層に灰褐色粘土や黄褐色粘土が堆積し、下層からは数点の木材が出土した。

出土遺物 (図版 71、第 102 図)

62 は白磁碗の底部片である。高台は低い台形状を呈し、内面見込みの軸は輪状に掻き取られる。外面は露胎で赤褐色を呈す。高台径 6.2cm。63 は青白磁碗の底部片である。高台は裾部が開いた形状をなす。高台径 5.0cm。64 は染付碗の底部である。高台は器壁が厚く、端部が丸みを有した形状となる。高台径 5.0cm。65 は陶器皿である。体部の丸みが少ない器形で、口縁部は短く上方に立ち上がる。内面には 4ヶ所の目跡が見られる。釉色は透明で外面の高台部から内側は露胎となる。口径 11.6cm、器高 3.9cm、高台径 4.2cm。

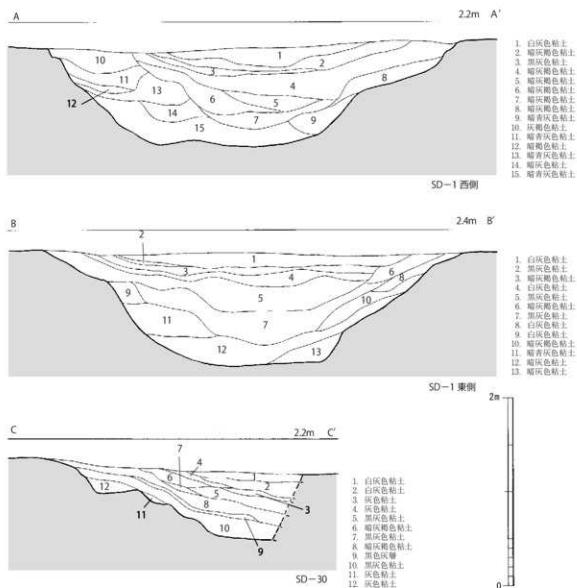
66 は須恵質焼成の播鉢である。口縁部は外傾する面をなす。67 は瓦質焼成の播鉢である。口縁

端部は面をなす。68は備前焼掘鉢の底部片である。掘目は8本。底径11.2cm。69は瓦質焼成の鉢か。口縁部が若干肥厚し、玉縁状を呈す。70・71は瓦質焼成の鍋である。どちらも口縁端部は丸みを帯び、内面は横ハケ目、外面はナデ調整を行う。72・73は瓦質焼成の釜である。72は水平方向に短く伸びる鈎部を有す。内面には横ハケ目が見られる。73は内面横ナデ調整で外面には炭化物が付着する。

2) 溝

SD-1 (図版 38、第 104 図)

調査区中央を東西方向に直線的に伸びる溝で、調査した範囲で33mを測る。東端、西端とも調査区外へと続いている。幅4.4m、深さ1.1~1.2mを測り、壁の立ち上がりは緩やかな傾斜となる。調査にあたっては溝をA~Fの6つの区に区分し、掘削を行った。覆土は暗青灰色粘土、灰褐色粘



第 104 図 SD-1・30 土層断面実測図 (1/40)

土、黒灰色粘土、白灰色粘土等がレンズ状に堆積する。

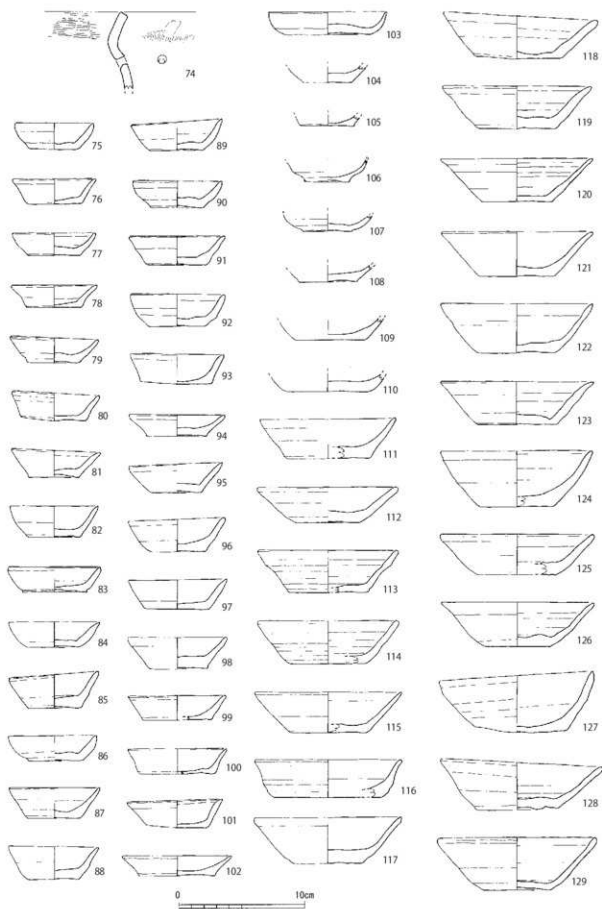
出土遺物が多いため、調査区分毎に報告する。

B区出土遺物 (図版 71～図版 73、第 105 図～第 109 図)

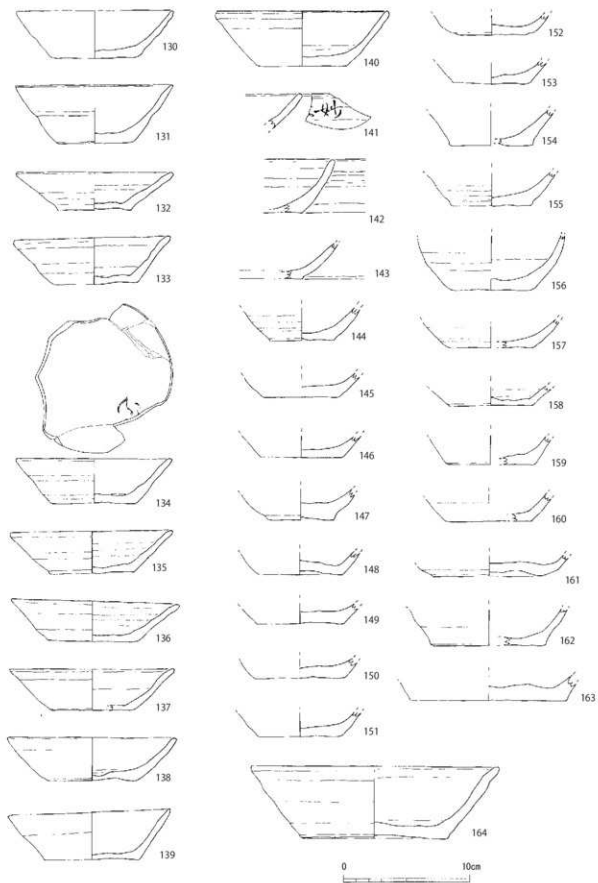
74 は古墳時代の土師器壺である。肩部はあまり張らず、口縁部は直線的に外傾する。口縁部は面をなす。肩部には穿孔が 1ヶ所ある。口縁部内面横ハケ目、外面には縦ハケ目が見られる。75～110 は土師器小皿である。底部と体部の境目には明瞭な稜を有し、体部は直線的にあまり開かずにやや長く伸び、端部は器壁が薄く尖り気味に仕上げるものが多い。75 は口径 6.2cm、器高 2.1cm、底径 4.0cm。101 は口径 8.0cm、器高 2.3cm、底径 4.6cm。102 は器壁が薄く、径がやや大きい。口径 8.6cm、器高 1.6cm、底径 6.0cm。103 は径が大きく、底部と体部の境目が稜をなさない。口径 9.2cm、器高 1.8cm、底径 6.6cm。104～110 は底部片である。111～160 は土師器坏である。小皿と同様、底部と体部の境目に稜を有し、体部は直線的にあまり開かずに長く伸びる器形のものが多い。111 は口径 10.6cm、器高 3.1cm、底径 6.8cm。130 は口径 12.4cm、器高 3.8cm、底径 7.0cm。140 は口径 13.8cm、器高 4.3cm、底径 7.2cm。134・141 は墨書が見られる。161～163 は径が大きく、鉢となるかもしれない。164 は土師器鉢である。口径 19.6cm、器高 5.7cm、底径 11.6cm。

165・166・168～172 は白磁である。165 は器壁が薄く、体部が丸みを有して大きく開く小皿である。166 は多角坏である。高台部の器壁は厚く、体部は器壁が薄くなる。体部は外反しながら開き、底部との境目には稜を有す。外面の屈曲部から内側は露胎となる。内面には 4ヶ所に目跡が見られる。口径 8.0cm、器高 3.0cm、高台径 3.8cm。167 は体部が直線的に開く土師器坏である。168～172 は小型の碗である。168 は口縁部が上方に立ち上がる碗。口径 7.0cm、器高 2.8cm、高台径 3.0cm。169・170 は口縁部が外反する碗である。169 は口径 8.2cm、器高 3.7cm、高台径 3.4cm。170 は口径 8.6cm、器高 3.9cm、高台径 3.3cm。171・172 は高台端部外側を削っており、169・170 と共通する。171 は高台径 3.4cm、172 は 3.6cm。173～186 は青磁である。173 は口縁部が上方を向く皿である。口縁部付近は器壁が薄くなる。高台径 5.0cm。174 は口縁部が大きく外反する。内面見込みは輪状に軸剥ぎを行う。口径 10.6cm、器高 2.8cm、高台径 5.2cm。175 はやはり口縁部が大きく開いた器形で、内面見込みには草花文を印刻する。高台部内側は輪状に軸剥ぎを行う。口径 12.2cm、器高 4.3cm、高台径 6.6cm。176～184 は碗である。176 は内面見込みに花文状の印刻を行う。外面には蓮弁を配す。高台径 5.0cm。177 は口縁端部が外反する。内面見込みに花文を印刻するが、外面は無文。口径 15.8cm、器高 6.3cm、高台径 6.4cm。178 は外面口縁部下に雷文帯を巡らせ、その下には蓮弁を配す。内面にも草花文状の文様が見える。口径 14.6cm。179 は外反する口縁部片。180 はわずかに外反し、端部が丸く若干肥厚する口縁部片。181 は器壁が薄く、口縁部がわずかに外反気味に伸びる。182 は鏝のない蓮弁を外面に配す。183 は高台径 6.6cm。184 は外面に蓮弁を配す。高台径 5.4cm。185・186 は盤である。185 は口縁部が面をなし、内面にへら彫りの草花文を描く。186 は口縁部が外側に折れ、さらに端部は上方に立ち上がる。内面には櫛描文を施文する。

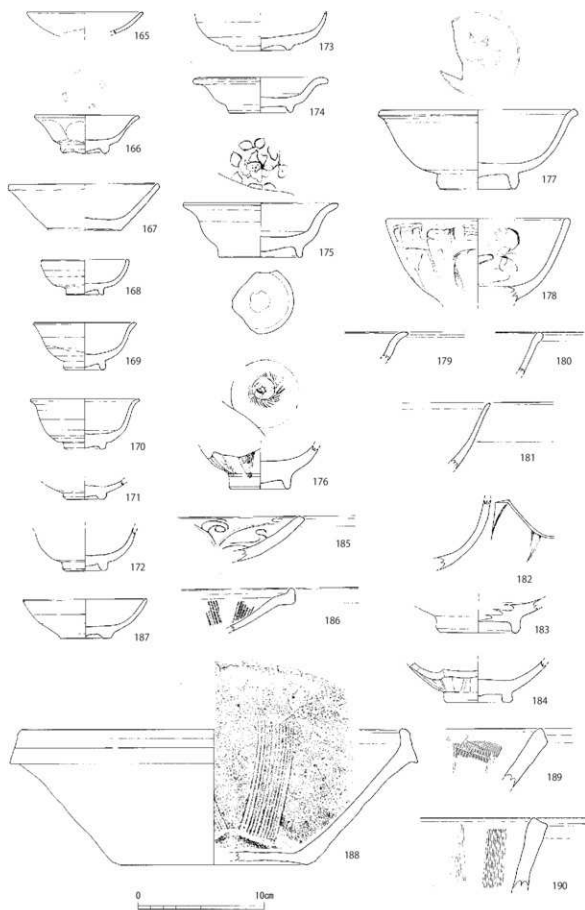
188～193 は播鉢である。188 は備前焼の播鉢。口縁部は下端が突帯状に垂下し、立ち上がりは短い。内面の播目は 11 本。口径 32.2cm、器高 10.7cm、底径 15.0cm。189～193 は瓦質焼成である。189 は端部が外傾する面を有し、内面には播目に先行するハケ目が見える。190 は上端が面を



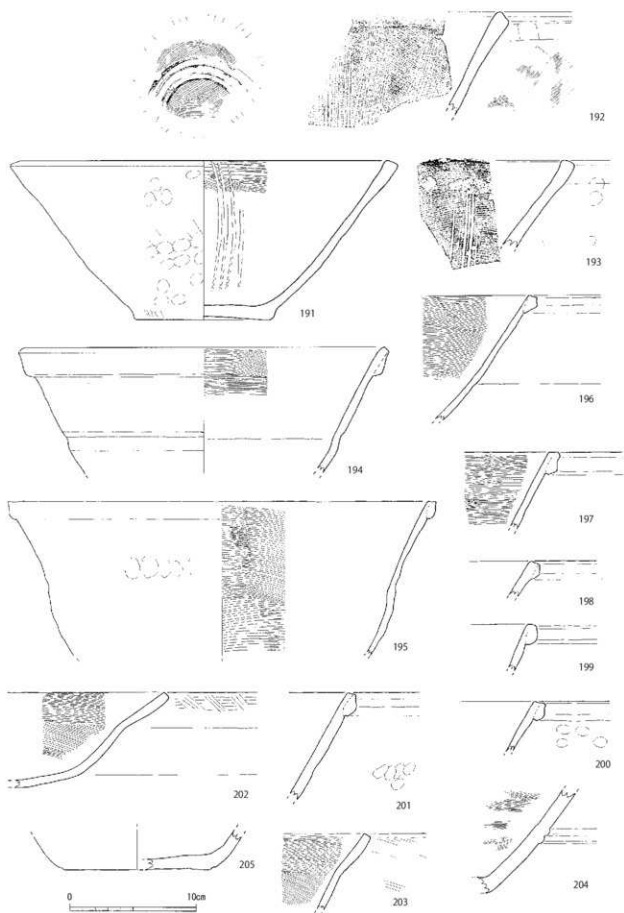
第 105 图 SD-1B 区出土文物实测图① (1/3)



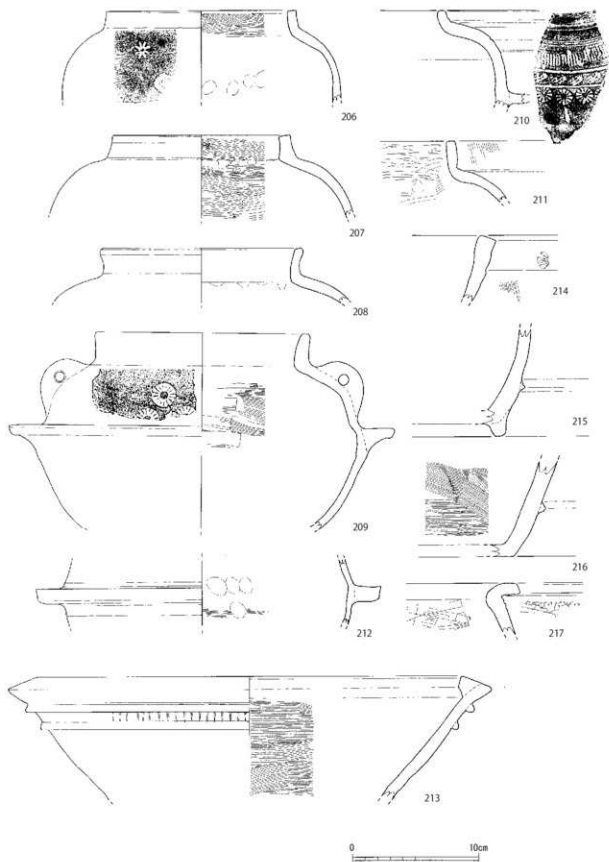
第 106 图 SD-1B 区出土文物实测图② (1/3)



第107图 SD-1B区出土文物实测图③(1/3)



第 108 图 SD-1B区出土遗物实测图④(1/3)



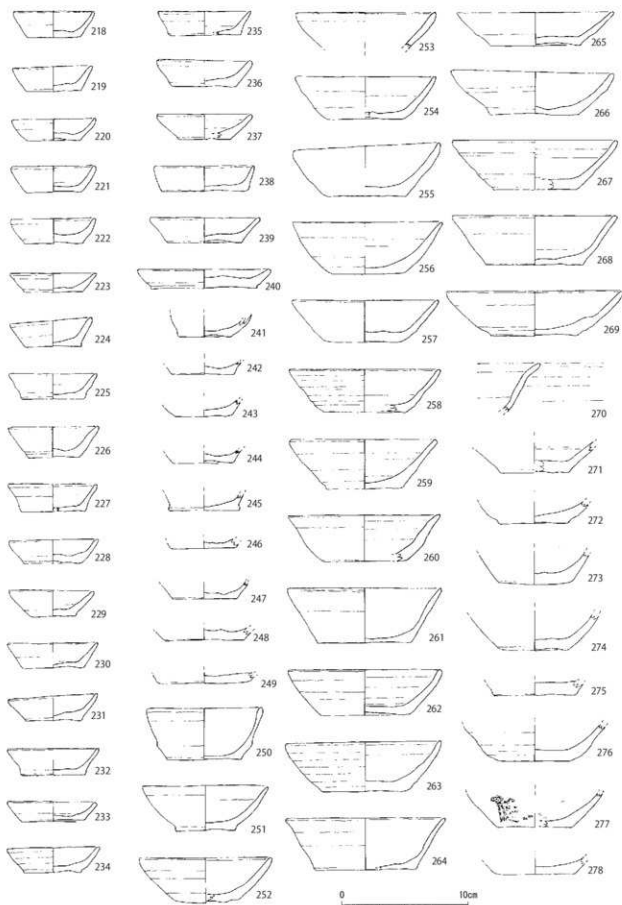
第 109 图 SD-1B 区出土遗物实测图⑤ (1/3)

なす。191は完形に復元される播鉢である。体部は直線的に開き、端部は面をなす。描目は4本を一単位とする。口径30.6cm、器高12.6cm、底径11.0cm。192は口縁端部が外傾する面をなす。外面にもハケ目が見られる。193は口縁上端部が面をなす。194～205は鍋である。194は口縁部外面が垂下した玉縁状に薄く肥厚し、体部の上半と下半の境目には段を有す。口径29.2cm。195は端部が小さな玉縁状に肥厚し、上端部は凹面をなす。口径33.8cm。196は器壁が薄く、口縁端部は小さな玉縁状に肥厚しており、外端部に強い横ナアを加えるため明瞭な稜を有す。197は端部が水平面をなす。198～201も口縁部が玉縁状に肥厚する。202・203は瓦質焼成の鍋である。口縁部は緩やかに屈折して外側に開いており、端部は素口縁となる。204は瓦質焼成の体部片。底部からやや上に2条の不明瞭な突帯があり、その上部に印刻を行うことから火鉢であろう。205は瓦質焼成鍋の底部片か。底径11.6cm。206～212は瓦質焼成の釜である。206は口縁部がやや内傾して短く立ち上がる。口縁端部は面をなす。口縁部内面は横ハケ目を行っており、外面の肩部には印刻が見られる。口径15.0cm。207は口径14.0cm。208は口縁部が若干外反する。口径16.0cm。209は口縁部が若干外反し、端部は水平面をなす。鈔部は短く伸びる。肩部には印刻が見られる。口径16.8cm、鈔部径30.6cm。210は口縁部の立ち上がりが短い。211は口縁部が直立し、やや長めに伸びる。212は鈔部が短く水平に伸びる。鈔部径26.2cm。213～216は瓦質焼成の火鉢である。213は体部が大きく開いた器形となる。口縁部は内面に短く伸びており、端部は面をなす。外面口縁部下には2条の突帯が見られ、その間には連続する刺突文を巡らせる。口径38.2cm。214はあまり開かない器形の火鉢で、口縁部下には印刻が見られる。215は脚部が付く底部片で、底部からやや上の位置に三角突帯を巡らせる。216もやはり三角突帯を巡らせる。217は瓦質焼成で甕か。頸部は内傾し、口縁部は短く強く水平方向に外反する。

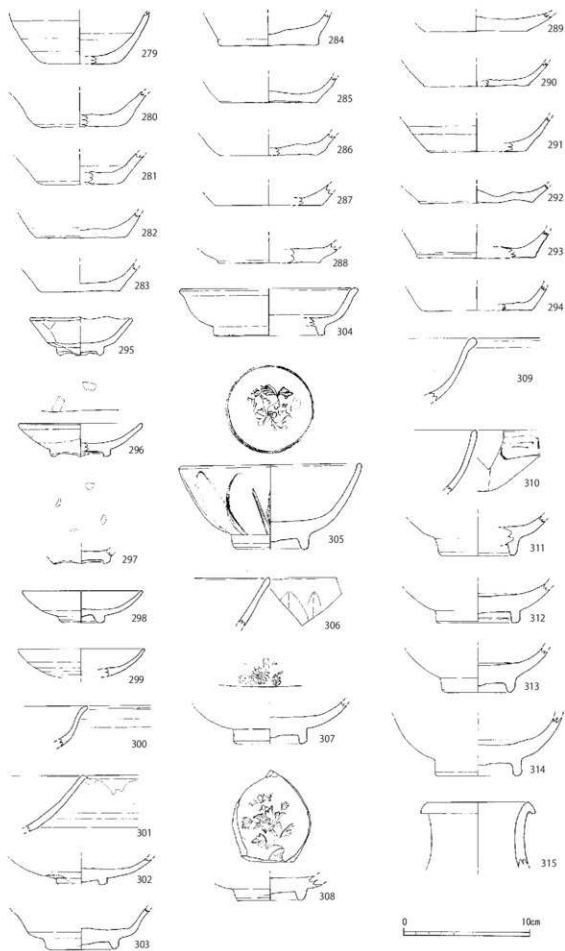
C区出土遺物 (図版73、第110～第113図)

218～249は土師器小皿である。底部と体部の境は明瞭な稜を有し、体部は直線的に長く伸びるものが多い。218は口径6.4cm、器高2.1cm、底径4.2cm。225は口径7.0cm、器高2.0cm、底径5.0cm。234は口径7.4cm、器高2.0cm、底径4.6cm。239は口径8.6cm、器高2.0cm、底径5.8cm。240は径がやや大きい。口径10.6cm、器高1.5cm、底径8.4cm。250～294は土師器坏である。小皿と同様、底部と体部の境に明瞭な稜を有し、体部は直線的に開くものが多い。250は体部があまり開かず深い器形となる。口径9.4cm、器高4.1cm、底径6.0cm。251は口径10.0cm、器高3.8cm、底径4.8cm。260は口径12.0cm、器高3.6cm、底径6.4cm。269は口径14.0cm、器高3.5cm、底径7.0cm。277は外面に墨書があるが不明瞭で判読できない。

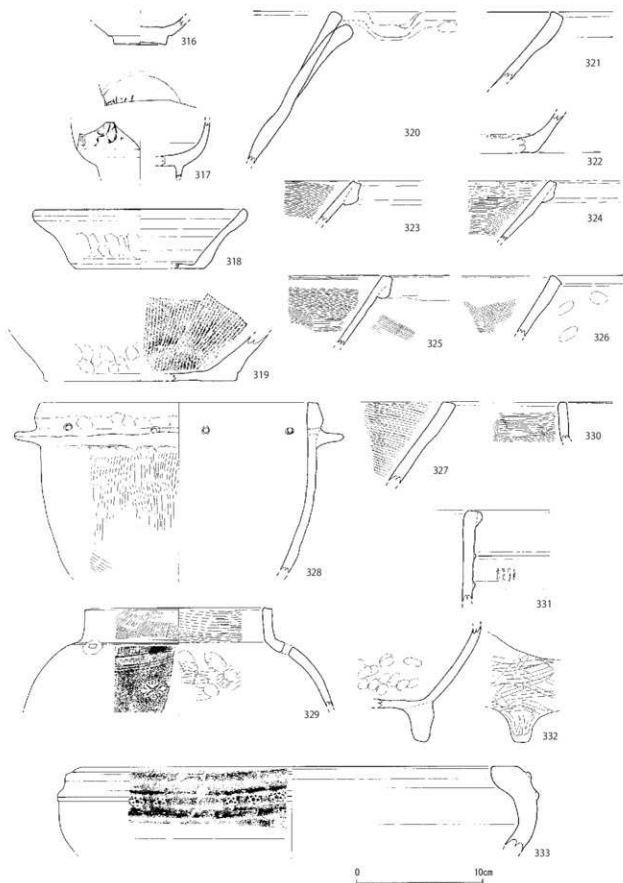
295～302は白磁である。295は型押し整形の多角皿である。外面の体部下半は露胎となる。高台には挟り込みを入れる。内面見込みには目跡が残る。口径9.8cm、器高2.6cm、高台径2.4cm。297も296と同様の皿であろう。内面には4カ所に目跡が見られる。高台径4.4cm。298は小皿である。器壁が比較的薄い。口径9.5cm、器高3.0cm、高台径3.6cm。299は298とほぼ同形となるだろう。口径10.0cm。300～302は碗か。300は口縁部が外反する。301は端部が三角形に尖る。302は高台径4.0cm。303～315は青磁である。303は体部下方で折れており、体部は外反するようである。おそらく皿であろう。高台径5.8cm。304は口径14.2cm、器高3.7cm、高台径8.8cm。305は蓮弁の碗で内面見込みに花文を印刻する。口径14.4cm、器高6.5cm、高台径6.0cm。306は外面に蓮蓮弁を配す。307・308は内面見込みに花文を印刻する。307は高台径5.8cm。308



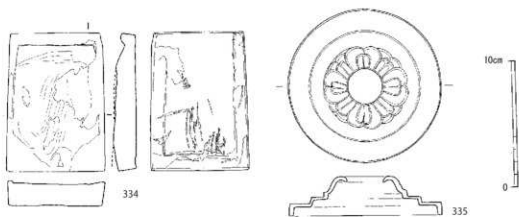
第110图 SD-1C区出土遗物实测图①(1/3)



第111图 SD-1C区出土遗物实测图②(1/3)



第 112 图 SD-1C 区出土文物实测图③ (1/3)



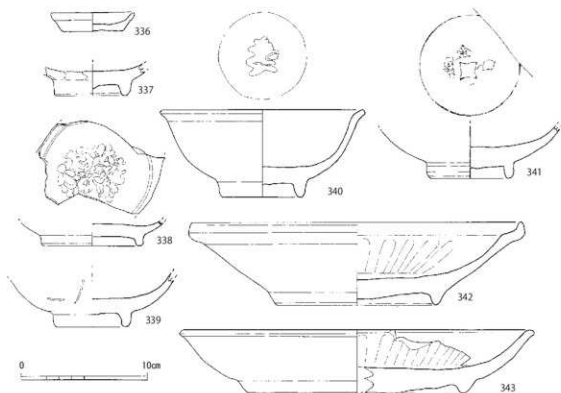
第113図 SD-1C区出土遺物実測図④(1/3)

は高台径5.2cm。309は端部が外反し、丸く肥厚する。310は外面口縁部下に雷文帯を巡らせる。311～314は無文の底部片である。315は壺の頸部である。口縁部は外側に折り返しており、端部は垂下する。口径9.0cm。316は天目碗である。高台径4.2cm。317は染付碗である。体部下半に重心があり、上半は直立気味に立ち上がる。

318は土師質焼成の鉢である。体部は外反気味に開き、端部は丸くおさめる。口径17.0cm、器高4.6cm、底径10.0cm。319は須恵質の播鉢である。底径15.2cm。320は瓦質焼成の片口鉢である。321は瓦質焼成の鉢で、口縁内端部をつまみ出す。322は瓦質焼成の播鉢である。323～325は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚し、外端部に強い横ナデを加えて明瞭な稜を作り出す。内面は横ハケ目を行う。326・327は瓦質焼成の鍋であろう。口縁部は素口縁で端部は面をなす。内面は横ハケ目を行う。328は瓦質焼成の鍔付鍋である。口縁部付近は直立し、端部は水平面をなす。口縁部下には鍔が一巡し、その直上に二つの穿孔が行われる。内面横ナデ、外面縦ハケ目。口径22.0cm。329・330は瓦質焼成の釜である。329の肩部は丸く、口縁部は直立する。肩部に1カ所穿孔があり、また印刻による施文も行われる。口径14.8cm。330はやや内傾する口縁部で端部は水平面をなす。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。331～333は瓦質焼成の火鉢である。331は体部上半が直立し、口縁外端部は玉縁状に肥厚する。体部にも2条の突帯が巡り、その間には印刻による施文が行われる。332は脚部片である。333は口縁部付近が強く内傾し、上端部は水平面をなす。外面の口縁部下には2条の突帯が巡り、その間に印刻を巡らせる。口径33.4cm。334は石製碗である。長さ11.0cm、幅7.8cm、厚さ2.0cm。335は鉄製品で、仏具の台座であろうか。中央の円孔周辺には花卉が巡らされる。径12.2cm、孔径2.8cm、高さ3.1cm。

D区出土遺物(図版73、第114図)

336は土師器小皿である。口径6.6cm、器高1.5cm、底径4.8cm。337～341は青磁碗である。337は外面蓮弁文。高台径6.2cm。338は内面見込みに花文を印刻する。339は高台径5.6cm。340は完形に復元できる。体部はやや開き、口縁部付近はさらに外反する。内面見込みに印刻があるが不鮮明である。口径16.2cm、器高6.9cm、高台径6.2cm。341の内面見込みは吉祥句のようだが不鮮明。高台径6.2cm。342・343は青磁皿である。342は口縁部付近が外折し、さらに端部が上方に立ち上がる。内面には蓮弁文を施文する。口径26.0cm、器高6.5cm、高台径12.6cm。343は口縁部がゆるやかに外反する。内面にはやはり蓮弁文を施文する。口径28.0cm、器高



第114図 SD-1D区出土遺物実測図(1/3)

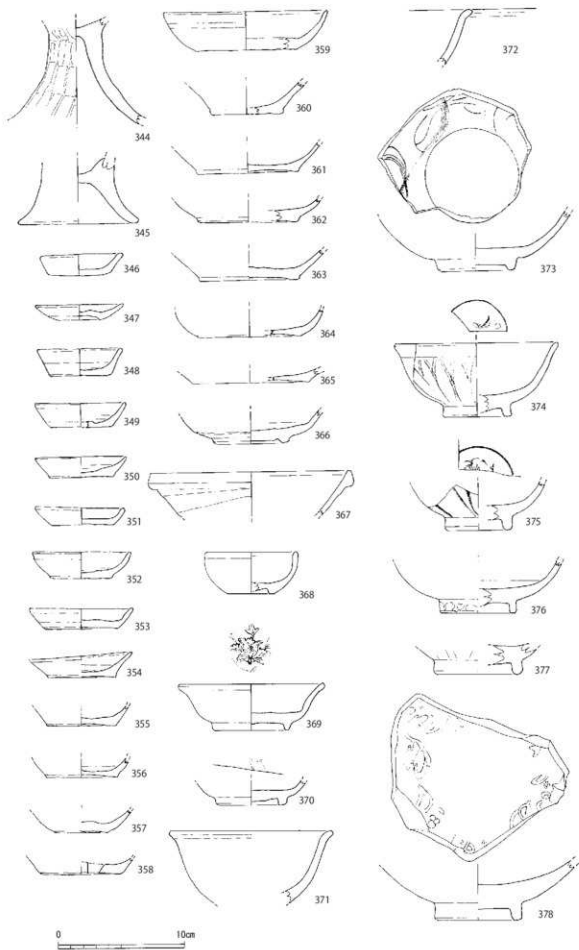
5.0cm、高台径17.0cm。

E区出土遺物 (図版74、第115・第116図)

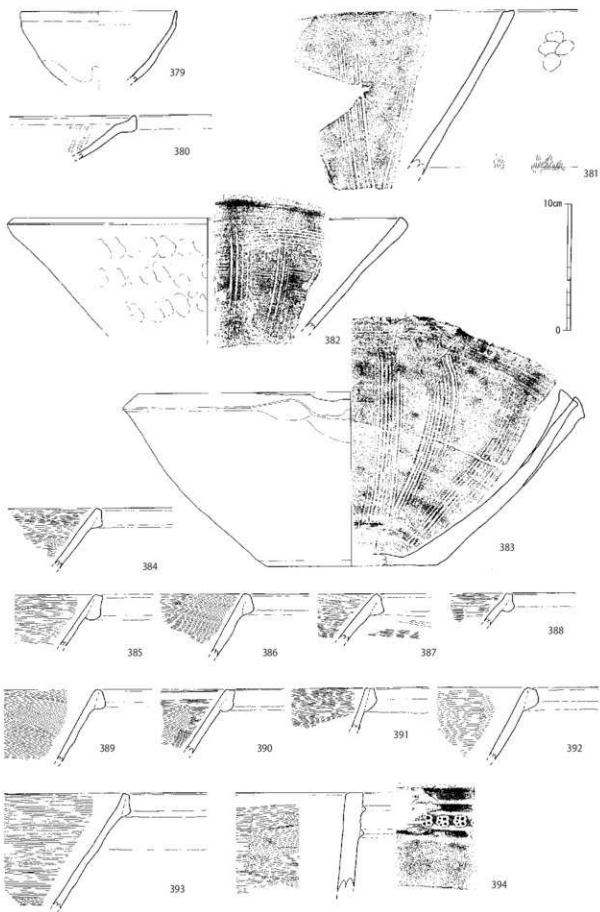
344は古墳時代前期頃の土師器高坏である。脚部は太く、外面には縦方向のナデの稜線が残る。345もやはり土師器脚付碗または鉢であろう。底径9.6cm。

346～358は土師器小皿である。346は口径6.2cm、器高1.7cm、底径5.0cm。347は器壁が薄い。348は体部が外反気味に伸びており、あまり開かない器形となる。350は口縁部付近の器壁が薄くなる。口径7.2cm、器高1.6cm、底径5.0cm。354は器壁が薄く、体部は外反気味に開く。口径8.4cm、器高2.0cm、底径5.4cm。358は底部に穿孔がある。底径6.2cm。359～365は土師器坏である。359は口径13.0cm、器高3.1cm、底径8.0cm。360は体部が外反しながら伸びるようである。底径5.8cm。364は体部が内湾しながら伸びる。底径8.0cm。

366・367は白磁碗である。366は高台が低い。高台径6.0cm。367は玉縁となる。口径15.8cm。368～378は青磁である。368は青磁小碗。体部は丸みを帯び、口縁部は直立する。口径7.4cm、器高3.3cm、高台径3.8cm。369は小型の皿である。体部は下方で緩やかに屈曲し、上半は外反する。内面見込みには花文を印刻する。口径11.6cm、器高3.7cm、高台径6.2cm。370は碗か。高台径5.6cm。371は口縁部が外反する無文の碗である。口径13.0cm。372もやはり口縁部が外反する。373は体部内面に櫛描きで施文する。高台径6.2cm。374は外面に蓮弁を配す。口径13.0cm、器高5.8cm、高台径5.4cm。375は外面に蓮弁、内面見込みに花文を印刻する。高台径5.2cm。376は発色が悪く白濁する。軸は高台外面まで施軸される。高台径6.0cm。377は外面に



第115图 SD-1E区出土器物实测图①(1/3)



第116图 SD-1E区出土文物实测图②(1/3)

鐘蓮弁が配される。軸は高台の内側まで施軸される。高台径7.0cm。378は鉢か。内面見込みの外側には草花文が環状に配される。軸は高台内面まで施軸する。高台径7.0cm。379は天目境である。口縁部は器壁が薄くなり、上方を向く。口径12.4cm。380は青磁皿である。口縁部付近で一度外折し、さらに端部は上方を向く。内面には桃描状の花弁を配す。

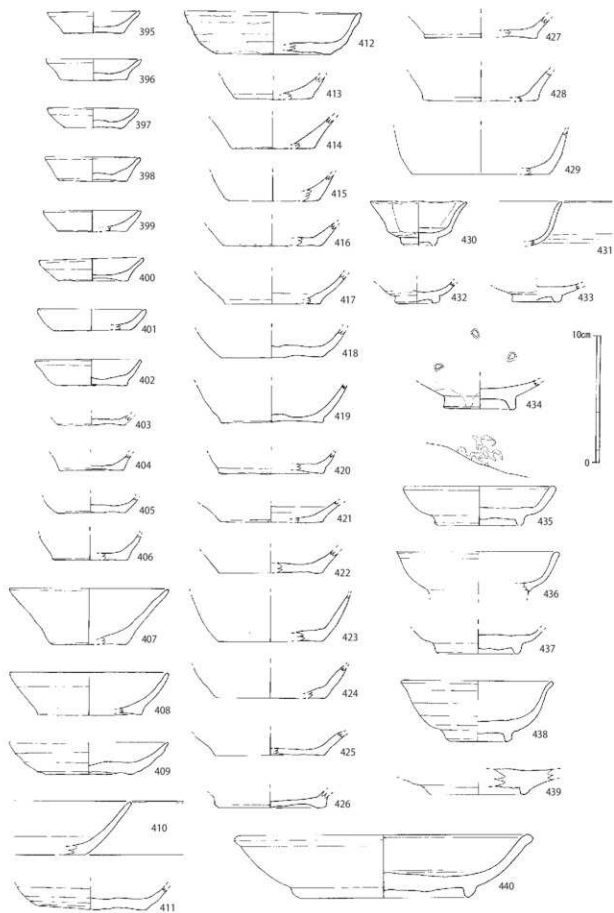
381・382は瓦質焼成の播鉢である。381の口縁部は水平面をなす。382は外面に整形時の指圧痕が多く残る。383は須恵質焼成の片口播鉢である。恐らく備前焼の類であろう。体部はやや丸みを有して開いており、口縁端部は上方に尖り、また下端も突帯状に尖る。口径36.0cm、器高13.7cm、底径13.6cm。384～393は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚しており、外端部に強い横ナデを加えて明瞭な稜線を形成するものも多い。内面はすべて細かい横ハケ目調整を行う。394は瓦質焼成の火鉢である。口縁部はやや外傾しており、端部は水平面をなす。外面には2条の突帯が巡り、その間には花文の印刻を巡らせている。内面横ハケ目調整。

F区出土遺物(図版74、第117～第119図)

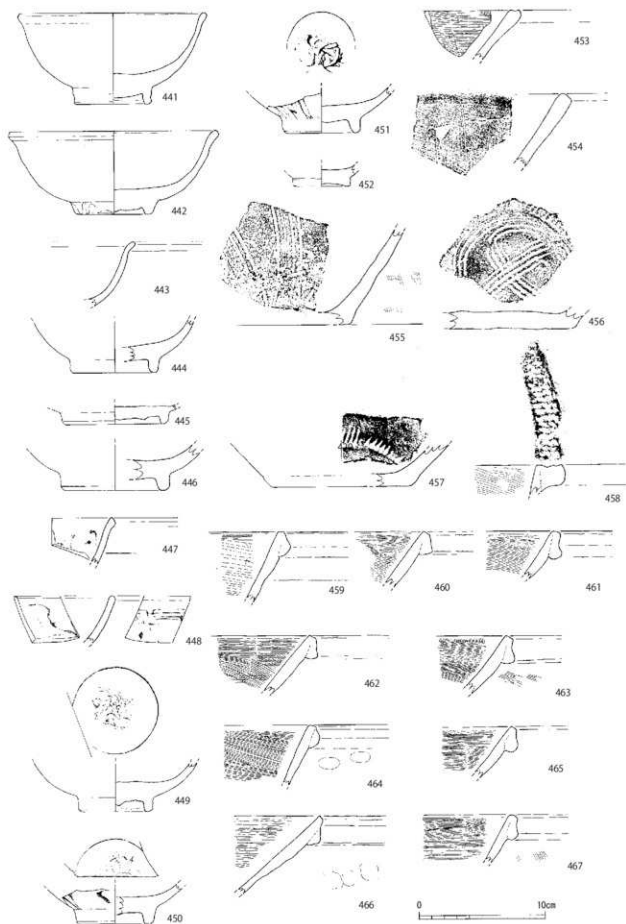
395～406は土師器小皿である。器壁は薄く、体部は直線的に開くものが多い。また底部と体部の境は明瞭な稜を有するものが多い。395は口径7.4cm、器高1.8cm、底径4.8cm。400は口径8.4cm、器高1.95cm、底径5.6cm。401は丸みを帯びた器形となる。口径8.6cm、器高1.7cm、底径6.0cm。402は口径9.0cm、器高2.1cm、底径5.6cm。407～429は土師器杯である。407は底部が小さく体部はあまり開かず直線的に長く伸びる。口径12.6cm、器高4.4cm、底径6.0cm。409は体部が丸みを帯び、口縁端部は薄く尖る。口径12.6cm、器高2.5cm、底径7.0cm。412は底部と体部の境が不明瞭で、体部は直線的に開く。口径14.0cm、器高3.3cm、底径9.0cm。427は底径11.0cmに還元される。

430～434は白磁である。430は型押し整形の鉢。体部下半で明瞭な稜を有し、体部は外反しながら開く。口径7.6cm、器高3.5cm、高台径2.8cm。431はやや外反する口縁部で、小型の坏か。432は体部下半から露胎となる。高台径3.6cm。433もやはり体部下半から露胎となる。高台径4.0cm。434は碗の底部片である。内面見込みに目跡が見られる。高台径5.8cm。435～452は青磁である。435・436は小皿である。435は体部下半で屈曲しており、体部は直線的に開く。内面見込みには不明瞭な印刻がある。口径12.0cm、器高3.1cm、高台径7.0cm。436は口径12.8cm。437・438は小碗である。437は高台畳付まで施軸される。高台径6.6cm。438は口縁部付近が外反する。口径12.2cm、器高4.8cm、高台径5.0cm。439・440は皿である。439は高台径7.6cm。440は軸の発色が悪く白濁する。口径23.6cm、器高5.0cm、高台径13.2cm。441～451は碗である。441・442は無文。体部は丸みを帯び口縁部付近は若干外反する。441は口径15.0cm、器高7.2cm、高台径6.0cm。442はやや浅い器形となる。口径16.6cm、器高6.6cm、高台径6.2cm。443もやはり内外面無文。444～446は高台畳付まで施軸される。447は内面に施文、448は内外面に施文される。449は内面見込みに花文と圏線が見られる。高台径6.0cm。450・451は外面に細線の連弁文、内面見込みに圏線と花文の印刻を行う。軸は高台畳付まで施軸される。450は高台径6.0cm。452は天目境である。高台径4.6cm。

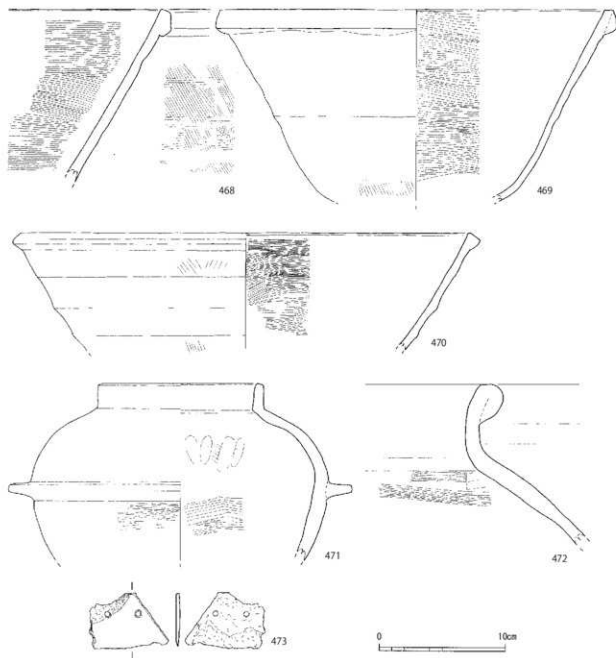
453～457は瓦質焼成の播鉢である。453は播目に先行する横ハケ目が見られる。口縁部は若干肥厚し、端部は水平面をなす。454は口縁端部に不明瞭な面を有す。457は底径11.0cm。458～469は土師質焼成の鍋である。458は口縁部が外側に短く伸び、上端に縄目押圧による施文を行う。



第117图 SD-1F区出土器物实测图①(1/3)



第118图 SD-1F区出土遗物实测图②(1/3)



第119図 SD-1F区出土遺物実測図③(1/3)

459～469は口縁端部が玉縁状に肥厚し、外端部に強い横ナデを加えて明瞭な稜を形成するものが多い。内面は細かい横ハケ目を行う。469は体部下半と上半の境に不明瞭な段を有し、上半は直線的に伸びている。底部と体部との境は不明瞭に移行するようである。口径31.8cm。470は瓦質焼成の鍋である。口縁端部は若干肥厚するが、土師質焼成の鍋のように粘土帯を添付して玉縁状にするわけではない。端部は面をなす。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行い、外面にはナデに先行する粗いハケ目が見られる。口径35.8cm。471は瓦質焼成の釜である。体部は丸みを帯び、口縁部は短く直立する。口縁端部は水平面をなし、内面の頸部と体部の境には明瞭な稜が見られる。鈎部は

水平方向に短く伸びる。口径 13.0cm、胴径 27.2cm。472 は備前焼の甕である。頸部はあまり開かず、外反しており、口縁部は丸く肥厚する。内面にはハケ目調整が残る。473 は凝灰岩製の石包丁である。剥離が著しい。

SD-1 出土遺物 (図版 74・図版 75、第 120～第 122 図)

ここでは区分から外れた遺物を報告する。

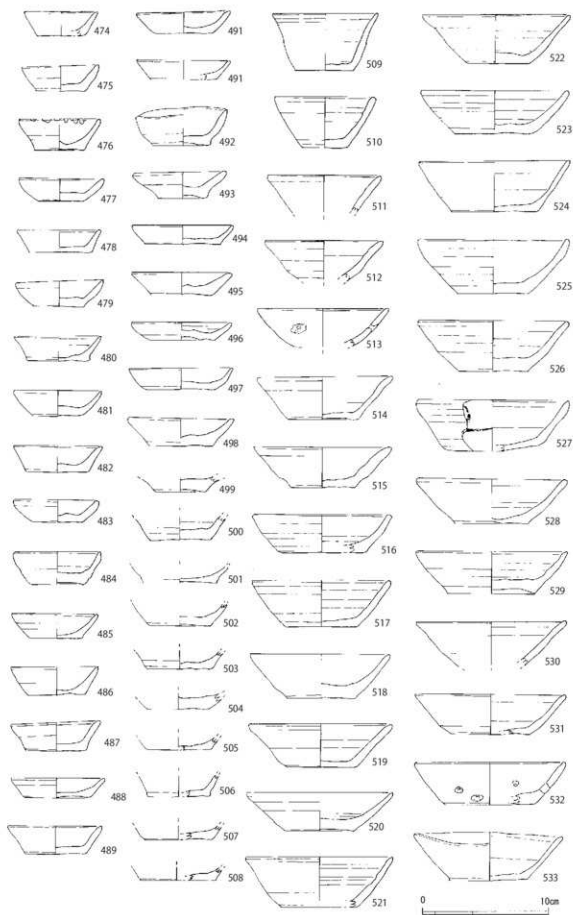
474～508 は土師器小皿である。底部と体部の境には明瞭な稜を有し、体部は直線のあるいは外反気味に伸び、口縁部は尖り気味に仕上げるものが多い。474 は口径 5.8cm、器高 1.9cm、底径 4.0cm。476 は口縁部に油煙が付着する。481 は体部が内湾気味に立ち上がる。口径 7.0cm、器高 2.0cm、底径 4.0cm。484 や 486・492 はやや深い器形となる。493 は口径 8.0cm、器高 2.2cm、底径 4.0cm。498 は口径 8.4cm、器高 2.2cm、底径 5.0cm。509～566 は土師器坏である。509 は底径が小さく体部はあまり開かず、長く伸び、上半がやや外反する鉢状の器形となる。口径 8.4cm、器高 4.5cm、底径 4.4cm。510 もやはり底径が小さく体部はあまり開かず、長く伸びる。口径 8.0cm、器高 4.1cm、底径 5.4cm。513 は体部に焼成後穿孔が見られる。514 は体部があまり開かず若干外反気味に伸びる。口径 10.4cm、器高 3.5cm、底径 5.6cm。他の坏も大半が同様な器形となる。522 は口径 11.6cm、器高 3.9cm、底径 4.4cm。527 は外面に墨書があるが、破片資料のため判読できない。533 は口径 12.0cm、器高 3.8cm、底径 6.4cm。540 は口径 12.6cm、器高 4.0cm、底径 6.8cm。547 は口径 13.0cm、器高 3.9cm、底径 7.0cm。567 は土師器鉢である。径は大きい器形は坏に類似する。口径 18.2cm、器高 6.0cm、底径 11.0cm。

568・569 は白磁である。568 は小皿。体部は内湾しながら大きく開く。内面見込みには 4 つの目跡が残る。口径 10.2cm、器高 2.7cm、高台径 4.6cm。569 も皿か。高台径 5.6cm。570～584 は青磁である。570 は小皿。体部下半には不明瞭な稜を有し、上半は強く外反する。口径 10.2cm、器高 2.9cm、高台径 4.8cm。571 は鍋連弁の碗である。口径 12.8cm。572 は型押し整形の小型坏または香炉の類か。高台径 3.2cm。573～576 は無文で口縁部が外反する。576 は口径 15.4cm、器高 6.7cm、高台径 6.6cm。577 は外面に細線の蓮弁文を配す。578 は内面に花文を施文する。579 も 577 と同様、細線の蓮弁文を配す。高台径 5.0cm。581 は高台径 6.0cm。582 は内面見込みに花文を印刻する。高台径 6.6cm。583・584 は皿の底部片である。軸は高台内面まで施軸される。585 は天目碗である。586・587 は無色釉を施軸する陶器である。586 は小坏か。外面に灰色の釉で施文する。

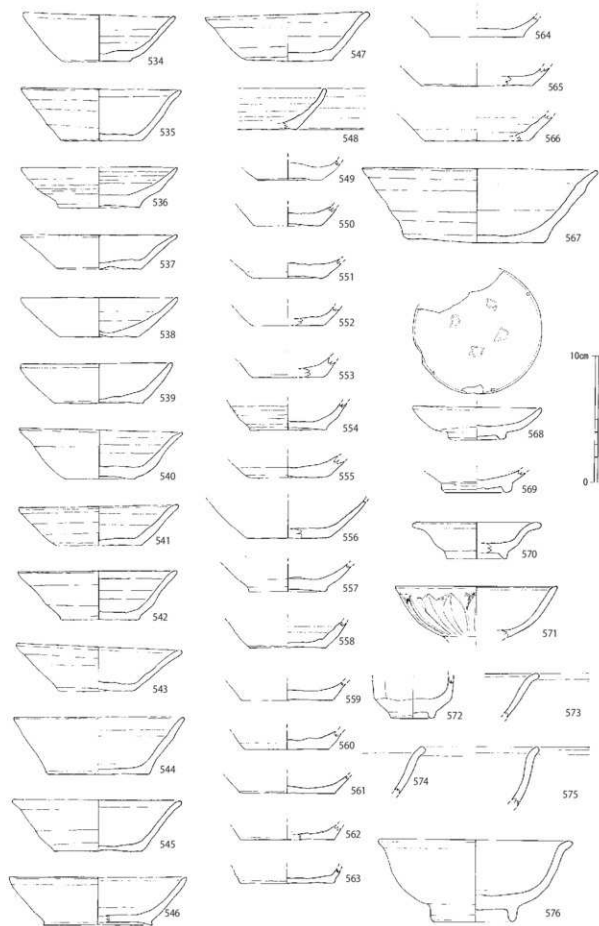
588～591 は擂鉢である。588 は土師質焼成。589・590 は瓦質焼成である。589 は底径 16.4cm。590 は底径 12.0cm。591 は備前焼の擂鉢である。底径 16.0cm。592～595 は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚する。596・597 は瓦質焼成で釜の口縁部か。596 は緩やかに外反している。597 は短く直立する。598・599 は瓦質焼成の火鉢である。598 は体部上半が強く内湾し、口縁上端部は水平面をなす。外面口縁部下には 2 条の突帯が巡り、その間に印刻を巡らせる。599 は脚部である。やはり 2 条の突帯の間に印刻を行う。

SD-2 (第 123 図)

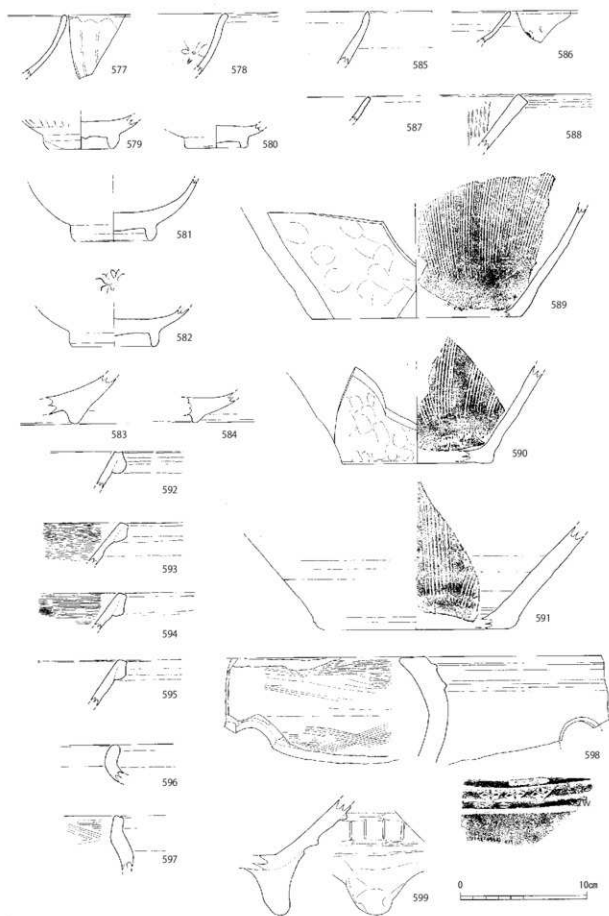
調査区西側で検出した溝である。南北方向に 19m の長さで直線的に伸びており、北端は調査区



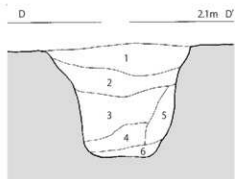
第 120 图 SD-1 出土遗物实测图①(1/3)



第 121 图 SD-1 出土遗物实测图②(1/3)

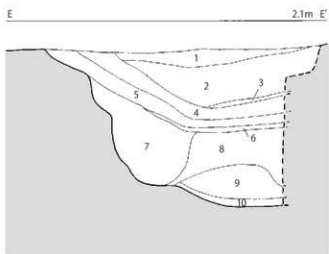


第 122 图 SD-1 出土遺物実測図③ (1/3)



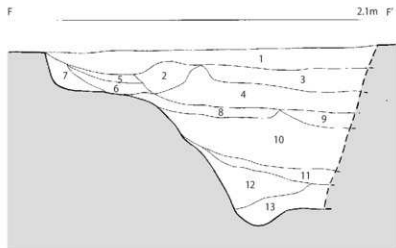
1. 灰褐色粘土
2. 灰色粘土
3. 暗灰色粘土
4. 暗青灰色粘土
5. 暗灰色粘土
6. 暗灰色粘土

SD-2



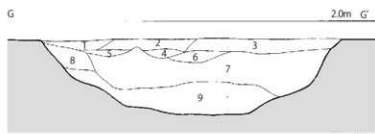
1. 灰褐色粘土
2. 白灰色粘土
3. 黑色灰層
4. 黑灰色粘土
5. 灰色粘土
6. 黑色灰層
7. 灰色粘土 + 暗灰色粘土
8. 暗灰褐色粘土
9. 暗灰色粘土
10. 暗灰褐色粘土

SD-10



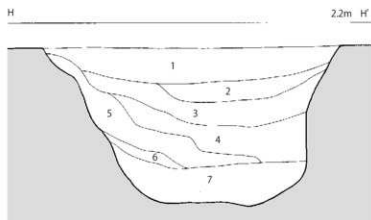
1. 灰褐色粘土
2. 暗灰褐色粘土
3. 黑色灰層
4. 黑色灰層
5. 黑灰色粘土
6. 黑色灰層
7. 灰色粘土
8. 白灰色粘土
9. 白色灰層
10. 暗灰褐色粘土
11. 暗灰色粘土
12. 暗灰色粘土
13. 暗青灰色粘土

SD-11



1. 灰褐色粘土
2. 灰褐色粘土 + 白灰色粘土
3. 灰褐色粘土
4. 白灰色粘土
5. 白灰色粘土
6. 白灰色粘土 + 灰褐色粘土
7. 暗灰色粘土
8. 白灰色粘土
9. 暗灰色粘土

SD-20



1. 灰褐色粘土
2. 灰色粘土
3. 灰色粘土
4. 暗灰色粘土
5. 黑灰色粘土
6. 黑灰色粘土
7. 暗灰色粘土

SD-25



第 123 图 SD-2·10·11·20·25 土层断面实测图 (1/20)

外へと続いている。幅0.8m、深さ0.6mを測り、壁は急な角度で傾斜する。覆土は下層に暗灰色粘土、上層に灰色粘土および灰褐色粘土が堆積する。

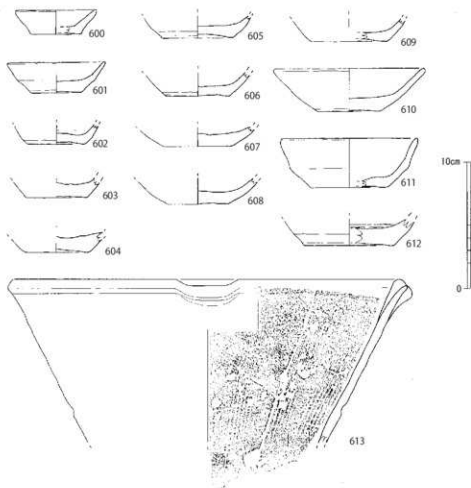
図示できる出土遺物はなかった。

SD-10 (第123図)

調査区南西側で検出した溝である。南側が攪乱を受け、東側が調査区外へと続いているため全体の形状に不明な点が残るが、検出した範囲では南北方向に5m伸びる溝状を呈す。幅は現状で1.5m、深さは0.85mを測る。壁の立ち上がりは小さな段を有しながら急な角度で傾斜している。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に暗褐色粘土、上層に黒灰色粘土や白灰色粘土が堆積しており、壁際の第7層は壁面崩落土かと思われる。

出土遺物 (第124図)

600～609は土師器小皿であろう。600は底部と体部の境が明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。端部は薄く尖る。口径6.4cm、器高1.9cm、底径4.0cm。601はやや内湾しながら開く。口径7.8cm、器高2.4cm、底径4.0cm。605はやや上げ底となる。底径5.6cm。607～609は坏かもしれない。609は底径6.0cm。610～612は土師器坏である。610は底径が小さく、体部は直線的に



第124図 SD-10 出土遺物実測図(1/3)

大きく開いて伸びる。口径12.0cm、器高3.4cm、底径5.0cm。611は丸みを帯びた器形となる。口径10.8cm、器高3.9cm、底径6.0cm。612は器壁が厚い。底径7.2cm。613は瓦質焼成の片口摺鉢である。体部はあまり開かず直線的に伸びており、口縁端部は丸みを帯びる。内面には罫目に先行するハケ目が見られる。口径31.6cm。

SD-11 (第123図)

調査区南西側で検出した溝である。北側が擾乱を受け、東側が調査区外へと続いているため全体の形状に不明な点が残るが、検出した範囲では南北方向に4.5m伸びる溝状を呈す。またSD-10と関連のある遺構であるようにも思われるが、接続はしていない。幅は現状で1.8m、深さは0.9mを測る。壁の立ち上がりは下層では急傾斜となり、上層付近の20cmの深さでテラス状の段を有している。覆土は下層に暗青灰色粘土、中層に暗灰褐色粘土、上層に灰褐色粘土と黒灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版75、第125図)

614・615は土師器小皿である。614はやや深い器形となる。口径6.6cm、器高3.1cm、底径4.0cm。615もやはり深い器形となる。口径7.2cm、器高2.2cm、底径5.0cm。616～628は土師器杯である。616は口径10.4cm。618は体部が内湾せず直線的に開く。口径11.0cm、器高3.2cm、底径5.2cm。620は口径12.0cm、器高3.2cm、底径7.0cm。623は器壁が薄く、体部は外反気味に開く。口径13.0cm、器高3.7cm、底径7.0cm。624は浅い器形。口径14.4cm、器高2.7cm、底径9.4cm。628は底部と体部の境に明瞭な稜を有し、体部はあまり開かず立ち上がるようである。底径10.2cm。

629～632は青磁碗である。629は無文となる。口径9.8cm。630は外面に蓮弁を配す。口径14.0cm、器高7.3cm、高台径5.4cm。631は器壁がやや厚い。632は外面に蓮弁を配し、内面見込みに花文を印刻する。軸は高台内側にまで施軸される。高台径6.2cm。

SD-20 (図版39、第123図)

調査区中央付近で検出した溝である。東西方向に7m直線的に伸びる東西溝と、南北方向に4m伸びる南北溝とからなり、両者は鈍角に接合している。幅1.6m、深さ0.4mを測り、壁は緩やかな傾斜となる。覆土は下層・中層に暗灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (第125図)

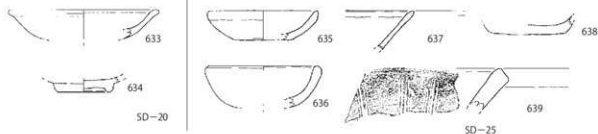
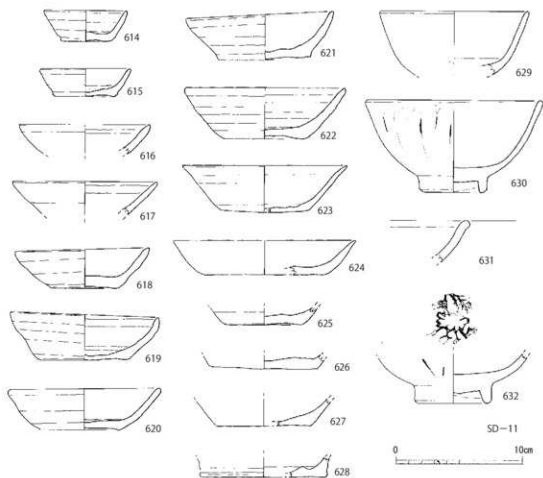
633は青磁小皿である。体部は大きく開き、口縁端部はわずかに外反する。口径12.0cm。634は白磁小皿か。高台径4.6cm。

SD-25 (第123図)

調査区北東端で検出した溝である。南北方向に3mほど不整形に伸びており、北側でSD-30に接続している。幅1.6m、深さ0.8mを測り、壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に灰褐色粘土が堆積する。

出土遺物 (第125図)

635～638は土師器小皿であろう。635は口縁部付近が立ち上がり、丸みを帯びた器形となる。口径8.8cm、器高2.3cm、底径4.8cm。636は器壁が厚く、丸みを帯びた器形となる。口径9.2cm。

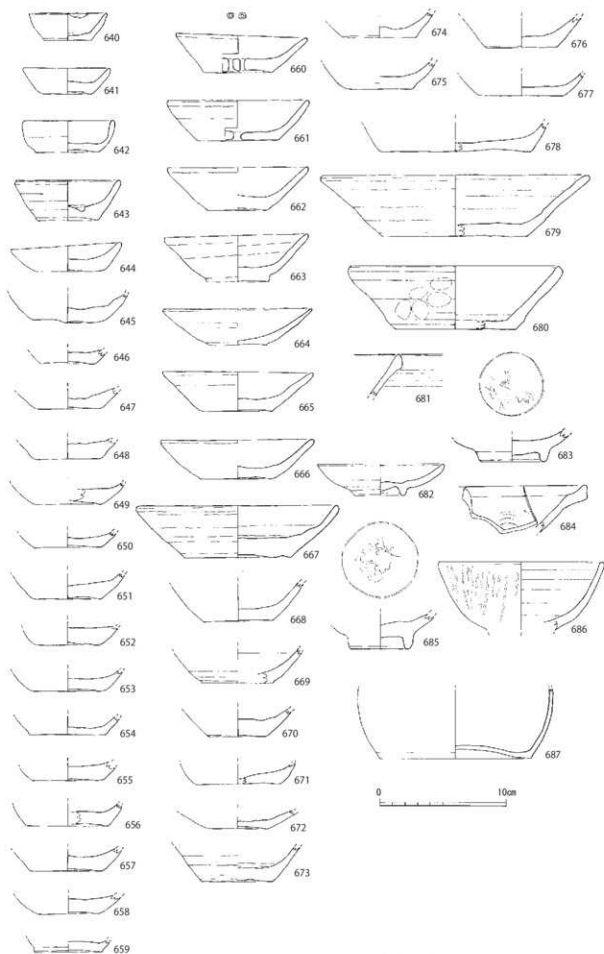


第 125 図 SD-11・20・25 出土遺物実測図 (1/3)

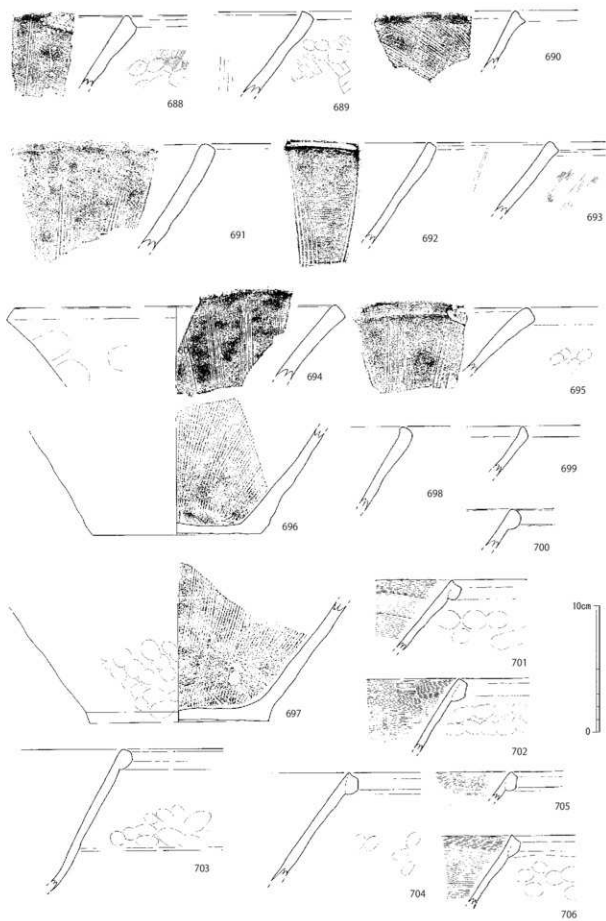
637 は器壁が薄く、直線的に伸びているため坏かもしれない。638 は底径 6.0cm。639 は瓦質焼成の楕鉢である。口縁端部は面をなす。

SD-30 (図版 39、第 104 図)

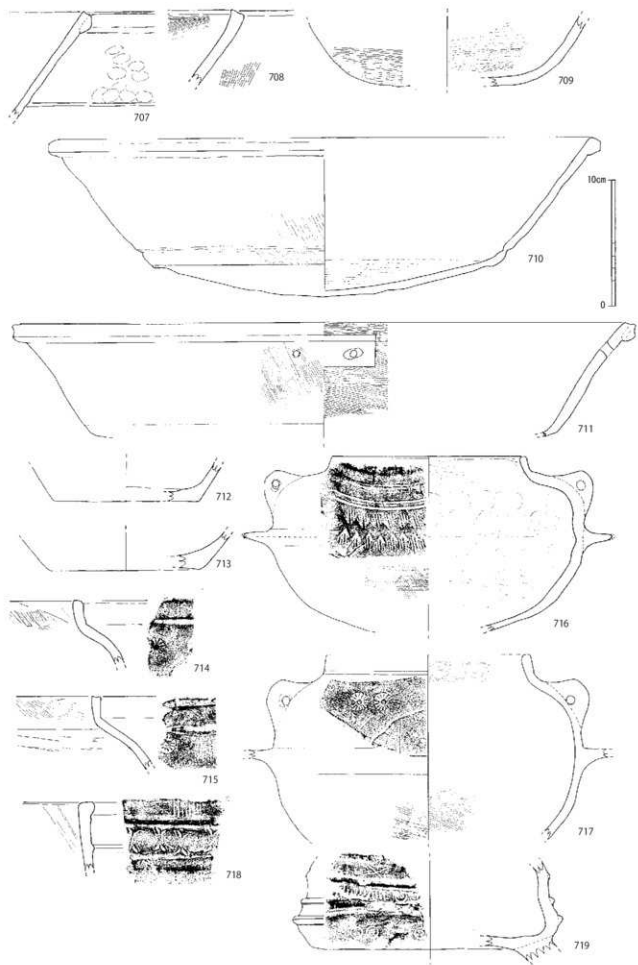
調査区北端で検出した溝である。東西方向に 30m の長さにわたって検出しており、東西両端はそれぞれ調査区外へと続く。また北側も調査区外へと続いているため溝の幅や深さは分からない。検出した範囲では深さ 0.7m を測り、壁は段を有しながら緩やかに傾斜するようである。覆土は下層に黒灰色粘土が多く堆積する。



第 126 图 SD-30 出土遗物实测图① (1/3)



第 127 图 SD-30 出土遗物实测图② (1/3)



第 128 图 SD-30 出土遺物実測図③ (1/3)

出土遺物 (図版 75、第 126～第 128 図)

640～659 は土師器小皿である。640～643 は深みのある器形となる。640 は口縁端部に油煙が付着する。口径 6.2cm、器高 2.1cm、底径 3.8cm。642 は体部が上方に立ち上がっている。口径 7.2cm、器高 2.5cm、底径 5.0cm。643 は底部と体部の境に明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。口径 8.4cm、器高 3.2cm、底径 4.6cm。644 は底部と体部の境が不明瞭で、体部は内湾気味に開いている。口径 8.8cm、器高 2.3cm、底径 5.4cm。650 は底径 5.2cm。659 は底径 5.6cm。660～677 は土師器坏である。底部と体部の境に明瞭な稜を有し、体部は直線的に開くものが多い。660 は底部には 2 つの穿孔がある。口径 10.2cm、器高 3.1cm、底径 5.8cm。661 は底部に 1 つ穿孔がみられる。664 は器壁が薄い。口径 11.8cm、器高 2.9cm、底径 4.6cm。667 は口径 16.0cm、器高 4.1cm、底径 8.6cm。678・679 はやや大型の類で、鉢と称すべきか。678 は底径 10.0cm。679 は口径 21.4cm、器高 4.8cm、底径 11.4cm。680 は瓦質焼成の鉢である。体部は直線的に開き、端部は上方にやや尖る。口径 17.0cm、器高 5.0cm、底径 9.6cm。

681 は玉縁の白磁碗口縁部片である。682～684 は青磁である。682・683 は碗で、内面見込みに印刻を行う。682 は高台径 5.0cm。683 は高台径 5.2cm。684 は皿である。口縁部付近で外折し、さらに端部は上方を向く。内面には撫描による施文が見られる。685～687 は陶器である。685 は小皿である。体部はやや丸みを有し、大きく開く。軸色は白色。口径 10.0cm、器高 2.5cm、高台径 4.2cm。686 は碗である。外面には縦方向の線刻による施文が行われる。口径 13.2cm。687 は瓶の底部か。底部は若干上げ底となり、体部は丸みを有して立ち上がる。器壁は薄い。軸は薬灰釉を施軸する。底径 12.0cm。

688～697 は描鉢である。688 は須恵質焼成。端部は上方に丸くつまみ出される。外面にはハケ目が行われ、内面にも描目に先行するハケ目が見られる。689～697 は瓦質焼成。689 は上端部が明瞭に尖る。690 は外端部を鋭く尖らせる。691 はやや丸みを帯びる。694 は口径 25.0cm。696 は底径 13.2cm。697 は外面に指圧痕が多く見られる。底径 14.2cm。698・699 は土師質焼成の鉢である。どちらも上端部がやや内側に向けてつまみ出している。700～711 は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚し、端部に強いナデを加えて明瞭な稜を作り出している。内面は横ハケ目、外面はナデ仕上げで指圧痕が多く残る。底部は 709 のように明瞭な境をなさず丸底となるようである。710 は完形に復元できる資料である。底部は丸底に近く、底部と体部の境には不明瞭な段を有している。体部は直線的に開いており、口縁部は玉縁状に肥厚する。外端部に強い横ナデを加えており、その部分が明瞭な稜を有す。内外面ともハケ目後にナデを行っている。口径 43.6cm、器高 12.7cm。711 は体部上半が若干外反する。口縁端部の横ナデは強く、明瞭につまみ出されている。口縁部下に 2 つの穿孔がある。調整は内外面ともハケ目調整を行う。口径 49.2cm。712・713 は土師質焼成で坏または鉢であろう。712 は底径 11.2cm、713 は 12.2cm。

714～717 は瓦質焼成の釜である。714 は口縁部がやや内傾して立ち上がる。端部は水平面をなす。内面にはハケ目が見られ、外面の片部には印刻が行われる。715 もほぼ同様。716 は全体の形状が分かる好例である。扁平な球形をなし、肩部が張った器形となる。口縁部は短く内傾して伸び、端部は水平面をなす。肩部に二カ所、半環形の把手を有す。鐔は体部のほぼ中位にあり、水平方向に短く伸びる。肩部には沈線と印刻による文様を施文する。口径 15.4cm、鐔径 29.4cm。717 も概ね器形が把握できる。体部は 716 と比べて丸みを有しており、肩はあまり張らない。口縁部はや

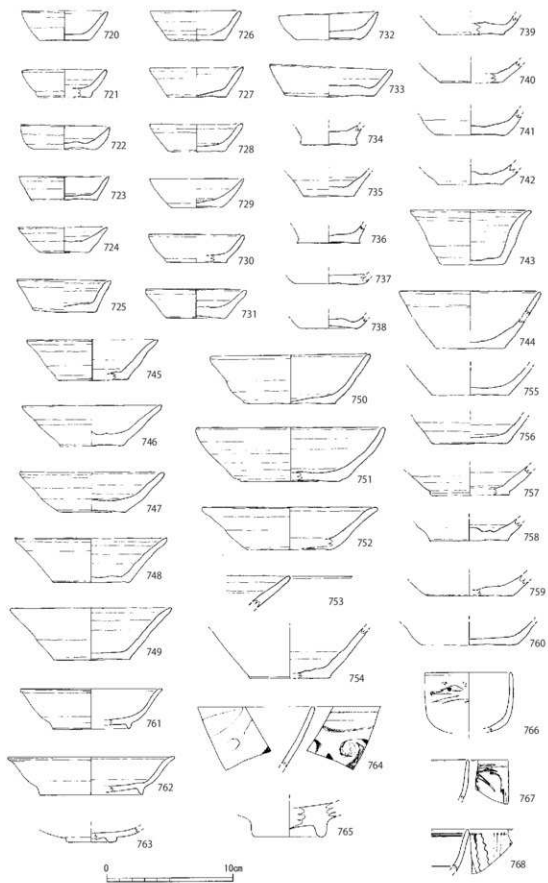
や内傾して短く伸びる。肩部の二カ所に半環形把手を有し、肩部に沈線と印刻による文様を施文する。口径16.0cm。718は瓦質焼成の火鉢である。口縁部付近はやや内傾しており、端部は面をなす。外端部とそこからやや下に突帯を巡らせ、両者の間に印刻を巡らせる。また口縁外側部にも描沈線による施文を行う。719は土師質焼成で、火鉢か。体部は下方が膨らんだ形状で、外面には数条の突帯が巡るようである。突帯間には印刻と線刻による文様を描く。体部最大径21.4cm。

3) その他の出土遺物 (図版75、第129・第130図)

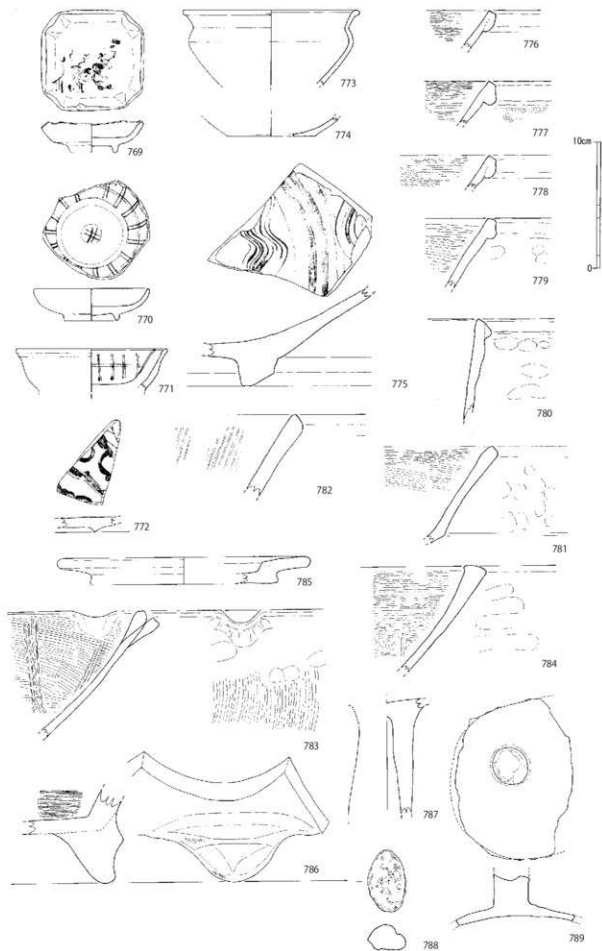
720～742は土師器小皿である。底部と体部の境には明瞭な稜を有し、体部は直線的に伸び、口縁部付近は器壁が薄くなるものが多い。器壁は比較的薄い。720は口径6.8cm、器高2.3cm、底径4.0cm。726は口径7.4cm、器高2.3cm、底径4.4cm。732は体部が丸みを帯びる。口径8.0cm、器高2.2cm、底径5.0cm。733は径がやや大きい。口径9.4cm、器高2.6cm、底径7.0cm。743～760は土師器杯である。743は体部があまり開かず、外反気味に長く伸びる。口径9.6cm、器高4.3cm、底径4.4cm。744もあまり開かず長く伸びる器形となるようである。口径11.2cm、底径5.4cm。750は口径12.8cm、器高3.9cm、底径7.2cm。751は体部がやや内湾する。口径15.0cm、器高4.2cm、底径7.8cm。752は体部が若干外反する。口径14.0cm、器高3.4cm、底径6.6cm。

761～763は白磁である。761・762は白磁皿である。体部下半に不明瞭な屈曲を有し、口縁部は外反気味に開く。全体的に器壁が薄い。761は口径11.2cm、器高3.2cm、高台径6.0cm。762は口径13.2cm、器高3.0cm、高台径8.2cm。763も皿か。高台径4.0cm。764・765は青磁碗である。764は内外面に施文が見られる。765は高台内側まで施釉される。高台径5.6cm。766～772は染付磁器である。766～768は碗である。766は外面に風景を描く。口径7.0cm。767は外面に草文、768は内面に圈線文、外面に波線と直線の幾何学文を描く。769は角皿である。口縁部は輪花となる。内面には植物を描く。口径8.0cm、器高2.4cm、高台径3.4cm。770・771は皿である。どちらも内面に摺文を描く。770は口径9.2cm、器高2.6cm、高台径4.2cm。771は口径12.0cm。772は中型の皿であろう。773～775は陶器である。773は鉢か。肩が張り、口縁部が外反する器形となる。軸は鉄軸である。口径14.0cm。774は773の底部か。底径7.0cm。775は大型の皿である。高台は内側で接地している。赤茶色の胎土の上に白色釉で文様を描き、全体に無色釉をかけている。

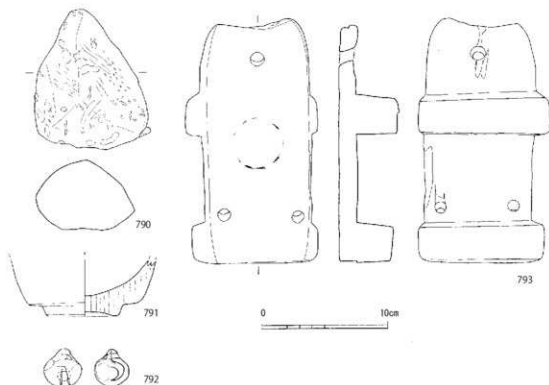
776～779は土師質焼成の鍋である。いずれも口縁端部は玉縁状に肥厚し、外端部を強くナデて明瞭な稜を有している。内面は横ハケ目、外面はハケ目後にナデ調整を行う。780はかなり立った器形となるが、鍋または火鉢か。口縁部は三角形状に肥厚するが端部の強い横ナデは行われない。内外面ナデ仕上げを行う。781は瓦質焼成の鍋である。下方には稜を有し、体部上半はやや外反する。端部は面をなす。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。782～784は瓦質焼成の播鉢である。782は内端部がやや尖る。783は片口となる。内外面にハケ目が見られる。784はない端部が明瞭に突出する。785は無軸の壺蓋である。おそらく骨壺の蓋として製作されたものであろう。径20.0cm。786は瓦質焼成の火鉢脚部片である。787は古墳時代の土師器高坏脚部片であろう。表面の風化が著しい。788は軽石である。長さ5.0cm、幅3.1cm。789は鉄製品である。撮部を有した蓋を想定したが、本来の形状はよく分からない。現状で長さ12.9cm、高さ4.0cm。



第 129 図 その他の出土遺物実測図① (1/3)



第130図 その他の出土遺物実測図②(1/3)



第131図 石製品・土製品・木製品実測図(1/3)

4) 石製品、土製品、木製品(第131図)

790は軽石である。長さ11.2cm、幅9.2cm、高さ5.6cm。791は漆塗碗である。外面の体部下半には明瞭な稜を有す。高台径5.8cm。792は土鈴である。793は二本歯の下駄である。長さ19.5cm、幅10.5cm。

5) 小結

下百町屋敷ノ内遺跡第3次調査では、土坑18基と溝7条を検出した。土坑はあまりまとまった分布の様相ではないが、SK-3・4・22などは規模、形状が似通っており、恐らく近世・近代の墓壇であろうと思われる。SK-5も同様かもしれない。その他の土坑については、廃棄土坑等の用途が想定されるが詳細は不明である。

溝のうち、SD-1やSD-30は大規模な区画溝、SD-2やSD-20は区画内を仕切る小区画溝として機能したものと思われる。

出土遺物のうち、SK-5からは、底部と体部の境が明瞭で体部が直線的または外反気味に開く土師器小皿、坏がまとめて出土している。口径や器形が比較的揃っており、時期幅はあまりないように思われる。供伴する遺物には明染付、陶器甕、瓦質火鉢があり、16世紀代のものである。SK-9には蓮弁文青磁碗と17世紀後半以降の染付皿とが出土しており、混入がみられる。SK-12は近世の遺物で占められる。SK-28は16世紀代として良いだろう。

SD-1からは大量の遺物が出土したため、区毎に分けて報告したが、区によって明確に差がある訳ではない。土師器小皿は底部と体部の境が明瞭で体部が直線的に伸び、口径は8-9cmのものが

多い。土師器杯も小皿と同様の器形で、口径 12～13cm のものが多い。似た器形で口径が大きな鉢状のものもある。

白磁には小型の多角杯、口縁部が外反する小碗がある。碗には良好な資料に恵まれなかったが、434 は内面見込みに目跡が残る白磁碗である。青磁には口縁部が外反する皿、同様の器形で内面に印花文がある皿、蓮弁碗、外面に細蓮弁を配し内面見込みに印花文のある碗、外面無文で内面に花文や吉祥文の印刻のある碗、外面に雷文帯のある碗、無文で素口縁の盤、内面にへら描き草花文があり素口縁の盤、口縁部が屈曲して立ち上がり内面に幅広の蓮弁文を描く盤、同様に内面に櫛描きで施文する盤がある。378 は鉢としたが、内面見込みの周縁に草花文を環状に配したものである。

その他の供伴遺物には、備前焼播鉢、甕、瓦質播鉢、口縁部を玉縁状にする土師質鍋、素口縁の瓦質焼成鍋、瓦質釜、火鉢などがある。中には古墳時代の遺物や玉縁の白磁碗など明らかに遡る時期の遺物もわずかにあるが、上記の遺物は 14 世紀後半から 15 世紀前半に位置づけられる遺物であり、混入も少なく時期的に限定され、質、量ともにまとまった良好な遺物群として重要である。その他、SD-10、SD-11、SD-30 からほぼ同時期の遺物が多く出土している。遺構の同時期性を示すと同時に、良好な遺物群として特筆される。

その他の遺構から出土した遺物の中には、16 世紀の白磁皿や近世陶磁器などが見られる。

7 下百町神の前遺跡第2次調査

下百町神の前遺跡(略称SKA)は、今回の区画整理事業地の北西側を占める。当該事業で発掘調査を行ったのは、第2次調査、第3次調査、第4次調査であり、第2次調査は調査区の都合上、3つの区画に分けて調査を行うこととなったため、1区、2区、3区と呼称することとした。

第2次調査 第1区

下百町神の前遺跡第2次調査第1区は、平成22年7月1日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、11月30日に機材を撤収して現地での作業を終了した。

調査区は概ね長方形を呈し、南北35m、東西27mと南北にやや長い。調査面積は約2,130㎡である。遺構密度はそれ程高くはなく、北西部と南東部に偏って分布する。北西部には東西または南北方向に伸びる溝が分布し、南東部には数条の溝と土坑が分布している。遺構面の標高は1.8m～2.0mである。

検出した主な遺構は、土坑5基、溝10条である。出土遺物は土師器、陶磁器、日常雑器、木製品、土製品、鉄製品である。

1) 土坑

SK-29 (図版40・図版41、第133図)

調査区南側に位置する土坑である。直径80cmの不整形円形を呈す。深さは120cmを測り、壁の立ち上がりはほぼ垂直で、一部オーバーハングするところもある。

覆土は灰色粘土や暗灰色粘土がレンズ状に堆積する。

出土遺物 (図版76、第134図)

1は青磁碗である。高台は外端部を削っており、高台内側まで施釉を行う。高台径6.8cm。2は陶器皿である。高台は低く体部との境は不明瞭である。全面に薬灰釉、口縁部には鉄釉を施す。口径11.0cm、器高3.5cm、高台径3.9cm。

SK-46 (図版41、第133図)

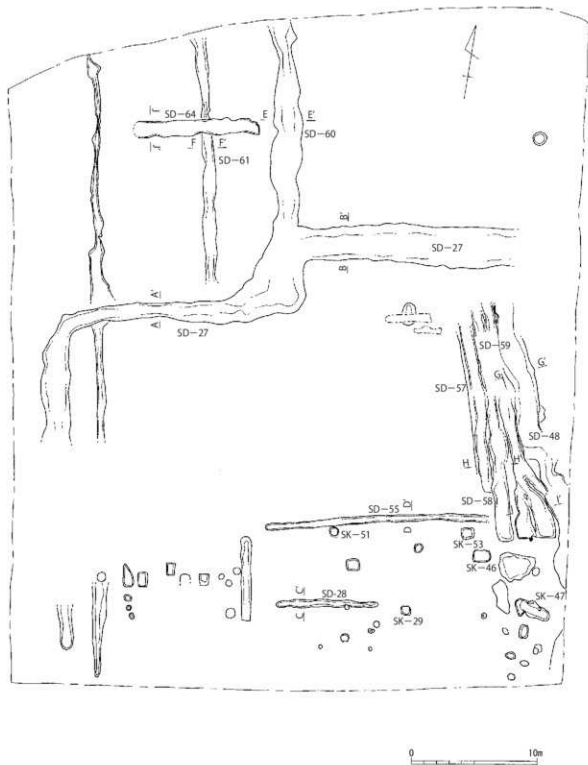
調査区南東側にあり、SK-29から6m北東に位置する土坑である。長軸140cm、短軸90cmの不整形長方形を呈す。底面は北側が深くなっており、深さは35cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。

覆土は下層に淡青灰色粘土、中層に淡灰色粘土、上層に白灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物はなかった。

SK-47 (図版41、第135図)

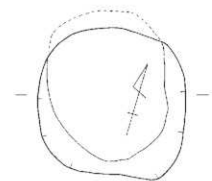
調査区南東隅にあり、SK-29から9m東側に位置する土坑である。長軸2.9m、短軸1.2mの不整形長方形を呈し、深さは1.4mを測る。壁の立ち上がりは急角度で傾斜している。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に灰色粘土と明青灰色粘土、上層に白灰色粘土と灰褐色粘土が堆積する。



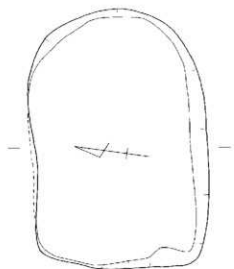
第132図 下百町神の前遺跡第2次調査第1区遺構配置図(1/300)

出土遺物(図版76、第134図)

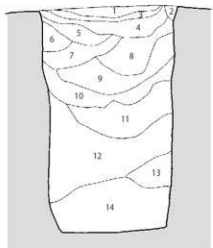
3・4は土師器坏である。どちらも底部が小さく、体部は直線的に開く。3は底径5.1cm。4は口径11.0cm、器高3.3cm、底径5.2cm。5は青磁碗である。内面見込みには「願氏」銘らしき印刻が



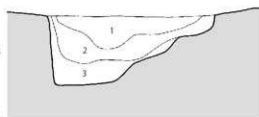
SK-29
2.2m



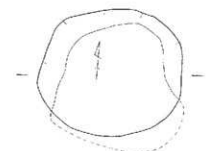
SK-46
2.1m



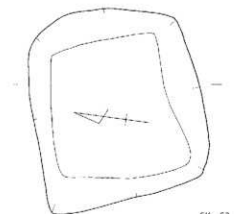
1. 青灰色粘土
2. 暗灰色粘土
3. 暗白灰色粘土
4. 暗灰色粘土
5. 灰色粘土
6. 暗灰色粘土
7. 暗白色粘土
8. 暗灰色粘土
9. 暗灰色粘土
10. 暗绿白色粘土
11. 灰色粘土
12. 灰色粘土
13. 暗白灰色粘土
14. 暗青灰色粘土



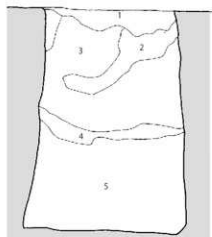
1. 白灰色粘土
2. 淡灰色粘土
3. 淡白色粘土



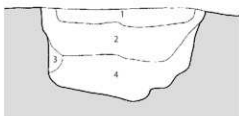
SK-51
2.1m



SK-53
2.1m



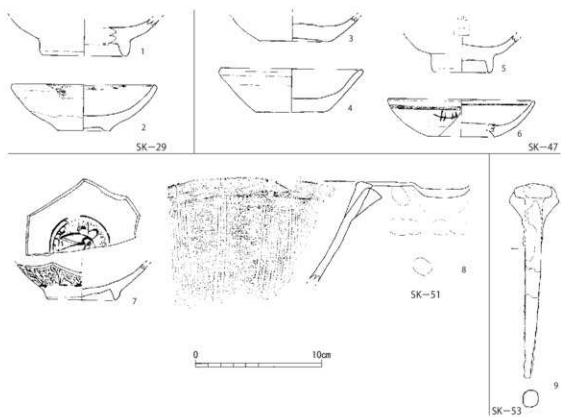
1. 灰色粘土
2. 白灰色粘土
3. 灰色粘土
4. 灰色粘土
5. 灰色粘土



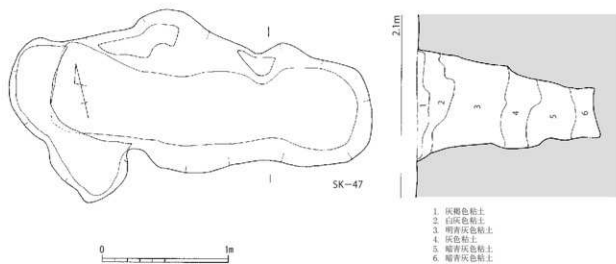
1. 灰色粘土
2. 灰色粘土
3. 淡青灰色粘土
4. 淡青灰色粘土



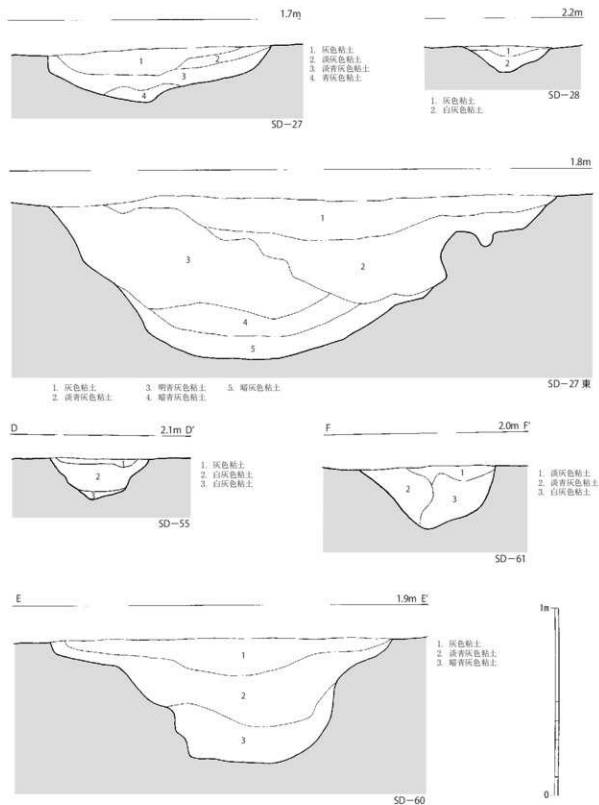
第 133 图 SK-29·46·51·53 实测图 (1/20)



第 134 图 SK-29·47·51·53 出土遗物实测图 (1/3)



第 135 图 SK-47 实测图 (1/30)



第 136 图 SD-27·28·55·60·61 土层断面实测图 (1/20)

ある。高台部内面露胎。高台径4.4cm。6は染付皿である。底部は恐らく碁笥底となるであろう。口径11.4cm。

SK-51 (図版42、第133図)

調査区南側にあり、SK-29から4m北西に位置する土坑である。直径70cmの円形を呈し、深さは120cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、南側はオーバーハングしている。土坑南側からは陶製甕が正位で出土し、墓壙であったことがわかる。

覆土はほぼ灰色粘土で占められる。

出土遺物 (図版76、第134図)

7は明朝染付碗である。外面には芭蕉葉文、内面見込みには花文を描く。高台径5.2cm。8は瓦質焼成の播鉢である。口縁部は面をなし、内面には播目に先行する横ハケ目が見られる。

SK-53 (第133図)

調査区南東側にあり、SK-51から11m東側に位置する土坑である。長軸100cm、短軸90cmの長方形を呈す。底面は中央が深く凹凸が顕著で、底面までの深さは50cmを測る。

覆土は下層に淡灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版76、第134図)

9は鉄釘である。断面は円形を呈す。長さ15.5cm。

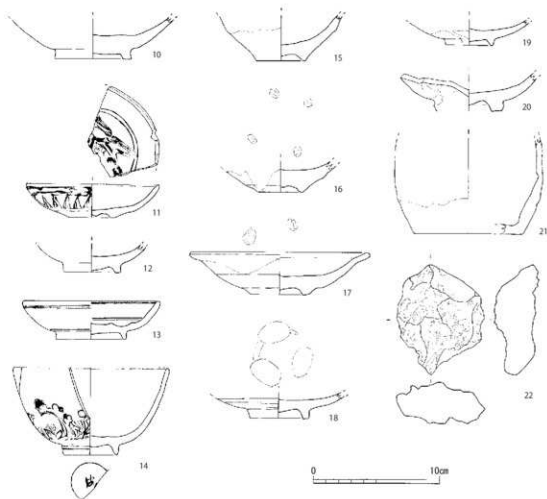
2) 溝

SD-27 (図版42、第136図)

調査区北西側に位置する溝である。ほぼ直角にクランク状に屈曲しており、検出した長さは57mを測る。中央付近でSD-60と接続しており、本来は一連の溝として掘削されたものである。西側では幅1.7m、深さ0.3mを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に青灰色粘土、中層に淡青灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。東側では幅2.7m、深さ0.85mを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に暗灰色粘土、中層に青灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版76～図版78、第137図)

10は青磁碗である。高台は低く、断面は四角形を呈す。高台径5.8cm。11～14は染付磁器である。11・12は明朝染付である。11は碁笥底の皿で、外面には芭蕉葉文、内面見込みには草花文を描く。口径10.0cm、器高2.5cm、高台径3.4cm。12は破片のため文様が不明瞭である。高台径4.2cm。13は内外面に圈線を巡らせる皿である。口径10.4cm、器高2.9cm、高台径5.4cm。14は深みのある碗である。外面には草花文を描く。口径11.8cm、器高6.5cm、高台径4.0cm。15～21は陶器である。15は天目碗。高台径3.6cm。16～20は皿または碗である。16は体部と高台部の境が不明瞭である。内面には4ヶ所に目跡が見られる。釉は緑灰色を呈す。高台径3.2cm。17は口縁部が外折する皿である。内面には目跡が残る。口径13.6cm、器高3.3cm、高台径4.4cm。18は高台部が比較的シャープな作りである。内面には三つの大きな目跡と、重ね焼きの際の高台痕が見られる。釉色は薄黄緑色を呈す。高台径4.4cm。19も高台部の器壁が薄くシャープな作りであ



第137図 SD-27 出土遺物実測図(1/3)

る。軸は鉄軸を施軸する。高台径3.6cm。20は高台の器壁が厚く、外端部を削る。釉色は白灰色を呈す。高台径5.4cm。21は瓶である。底部と体部の境は明瞭な稜を有し、体部は丸みを有している。高台径8.0cm。22は軽石である。長さ8.7cm、幅7.0cm。

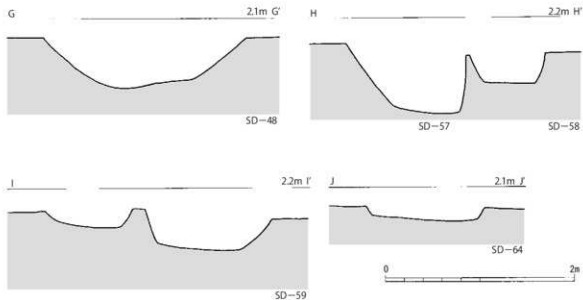
SD-28 (第136図)

調査区南側に位置する溝である。8mの長さで東西方向に直線的に伸びており、後述するSD-55と並走している。幅0.5m、深さ0.15mを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は下層に白灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SD-48 (第138図)

調査区東側に位置する溝である。後述するSD-57～59と並走し、一部重複している。南北方向に直線的に伸びており、長さ23mを測る。幅2.1m、深さ0.5mを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。



第 138 図 SD-48・57・58・59・64 断面実測図 (1/40)

出土遺物 (図版 78、第 139 図)

23～25 は青磁碗である。23 は無文。口径 10.4cm。24・25 は内面見込みに草花文を彫る。24 は高台径 6.0cm。25 は 5.6cm。26・27 は白磁である。26 は体部下半に不明瞭な屈曲を有す小碗。高台径 4.6cm。27 は皿で、器壁が薄い。内面見込みと高台端部に 4ヶ所の目跡が残る。高台径 4.8cm。28 は碁笥底の明朝染付皿である。29～34 は陶器である。29 は薬灰釉を施軸する火入れ。30～32 は皿である。30 は灰白色の釉を施軸し、底部は碁笥底となる。口径 12.9cm、器高 3.0cm、底径 4.0cm。31 は灰色釉を施軸し、口縁部付近が短く直立した器形となる。口径 12.0cm、器高 3.8cm、高台径 4.0cm。32 もやはり口縁部が直立した器形となる。釉は褐色釉。口径 11.4cm、器高 4.5cm、底径 4.4cm。33 は天目碗である。高台径 4.4cm。34 は無色釉の地に白色釉でハケ目施文する甌。高台径 7.0cm。35 は瓦質焼成の火鉢である。

SD-55 (第 136 図)

調査区南側で検出した溝である。東西方向に直線的に伸びており、SD-28 と並走する。長さは 26m を測る。幅 55cm、深さ 20cm で、壁の立ち上がりは緩やかである。

覆土は下層・中層に白灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SD-57 (第 138 図)

調査区南東側で検出した溝である。南北方向に直線的に伸びており、SD-48・58・59 と並走する。SD-58 と重複しており、これに切られている。長さ 14m、幅 1.2m、深さ 60cm を測る。壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SD-58 (第138図)

調査区南東側で検出した溝である。南北方向に直線的に伸びており、SD-48・57・59と並走する。SD-57と重複しており、これを切っている。またSD-59との前後関係は確認できなかった。長さ19m、幅80cm、深さ30cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急角度で傾斜する。

出土遺物 (図版78、第139図)

36・37は陶器皿である。36は暗灰白色釉を全面に、口縁部には鉄釉を施釉する。口径11.0cm、器高3.3cm、底径3.8cm。37は無色釉を施釉する。高台は外側に張った形状となる。口径11.4cm、器高3.7cm、高台径4.6cm。

SD-59 (第138図)

調査区南東側で検出した溝である。南北方向に直線的に伸びており、SD-48・57・58と並走する。SD-58との前後関係は確認できなかった。南端が2条に分かれているが、一連の遺構として扱った。長さ20m、西側溝で幅90cm、深さ20cmを測る。東側溝で幅130cm、深さ30cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物 (図版78、第139図)

38は土師質焼成の管状土錘である。両端部が細くなった形状となる。長さ5.6cm、径1.8cm、孔径0.6cm。

SD-60 (図版42、第136図)

調査区北側で検出した溝である。南北方向に直線的に伸びており、南側はSD-27に接続する。長さ17m、幅1.8m、深さ65cmを測る。壁の立ち上がりはテラス状の段を形成しながら比較的急な角度で傾斜する。覆土は下層に暗青色粘土、中層に淡青灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

図示できる出土遺物はなかった。

SD-61 (第136図)

調査区北西側で検出した溝である。南北方向に直線的に伸びており、長さ20mを測る。SD-64と重複しており、これに切られている。幅70cm、深さ30cmで、壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は白色粘土と淡青灰色粘土が厚く堆積し、上層に淡灰色粘土が薄く堆積する。

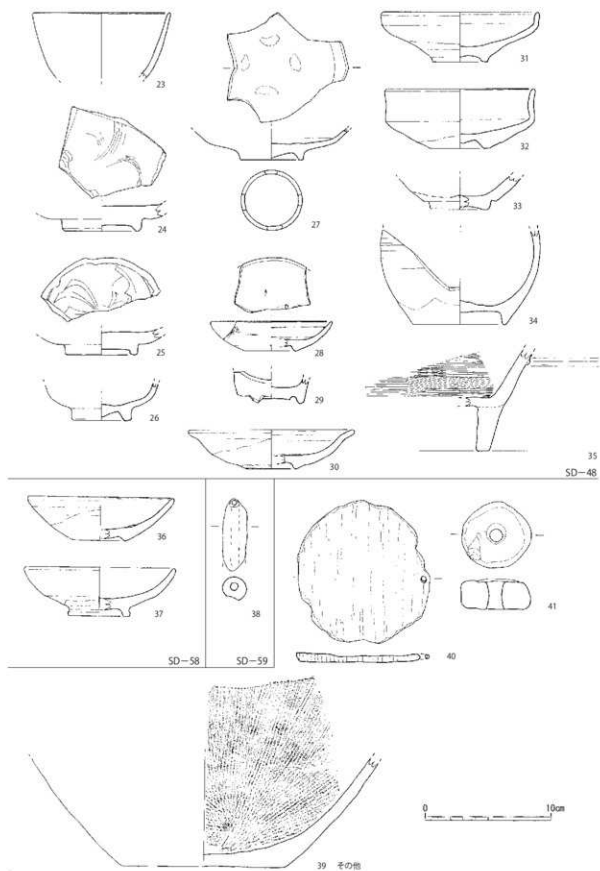
図示できる遺物は出土しなかった。

SD-64 (第138図)

調査区北西側で検出した溝である。東西方向に直線的に伸びており、長さ10mを測る。SD-61と重複しており、これを切っている。幅1.2m、深さ10cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。図示できる遺物は出土しなかった。

3) その他の出土遺物 (図版78、第139図)

39は陶器播鉢である。内面の播目は密に施され、全面露胎となる。底径12.0cm。40は木製の円板である。桶の底板として使用されたものか。径9.9~10.7cm、厚さ0.5~0.7cm。円孔が1ヶ所



第 139 図 SD-48・58・59、その他の出土遺物実測図(1/3)

に穿孔されており、円孔の径は0.4cmを測る。41は円盤状の土製品である。径5.2cm、厚さ2.5cm、孔径1.0～1.4cm。

4) 小結

この調査区では、土坑5基と溝10条を検出した。土坑は調査区南東側に分布しており、中でもSK-46とSK-53は近い位置にあって形状も似ており、掘り直しが行われたものと思われる。SK-29やSK-51は比較的形状の整った円形プランで深さもあり、恐らく井戸として使用されたのであろう。溝のうち、SD-27・60は区画溝として使用されたものと思われる。SD-28やSD-55、SD-64は区画内をさらに仕切る小区画溝であろう。SD-48・57～59は数度の掘り直しによって形成された遺構と思われる。

出土遺物のうち、SK-29から出土した陶器皿は16世紀のものか。SK-47やSK-51から出土した明染付磁器もやはり16世紀代のものである。SD-27からは明染付磁器、天目碗、陶器皿、碗が出土しており、16・17世紀代に位置づけられる。SD-48からは13世紀の青磁碗と16・17世紀頃の陶磁器とが出土しており混入が見られる。SD-58の陶器皿も16・17世紀代のものであろう。

第2次調査 第2区

調査区は東西6m、南北41mを測り、南北に長い長方形形状を呈す。調査面積は約245㎡である。遺構密度はそれ程高くはなく、全域に亘って遺構が分布する。調査区の中央付近には土坑が複数あり、北端には2条の溝がある。後述する通り、当調査区と下百町神の前遺跡第3次調査区とは隣接しているため、第149図のように調査区を重複させて発掘調査を行った。当調査区で特筆すべき点として、今回の区画整理事業地では数少ない掘立柱建物が検出されたことがある。遺構面の標高は1.7m～1.8mである。

検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟、土坑4基、溝2条である。出土遺物には近世陶磁器がある。

1) 掘立柱建物

SB-22 (図版43・図版44、第141図)

調査区北側で検出した遺構である。調査区内では梁行1間、桁行3間の側柱建物に復元されるが、西側は調査区外へと続いているため本来の形状は不明である。また、西側桁筋の南側には一つのピットがあり、これも関連する遺構の可能性がある。

柱間は梁側で380cm、桁側で190cm～200cmを測り、間隔は概ね等間隔である。西側桁筋南側のピットまでは柱間240cmを測り、やや離れた位置にある。多くのピットで柱痕が確認された。

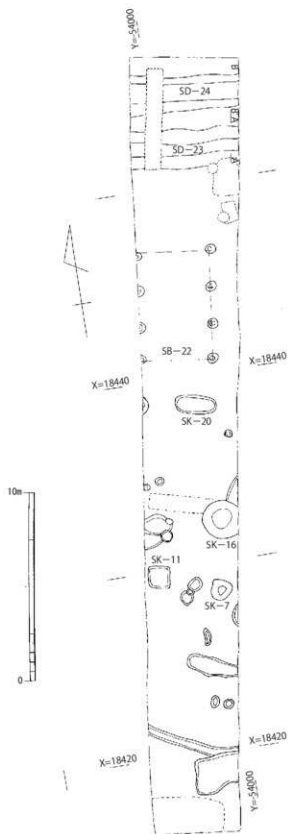
図示できる出土遺物はなかった。

2) 土坑

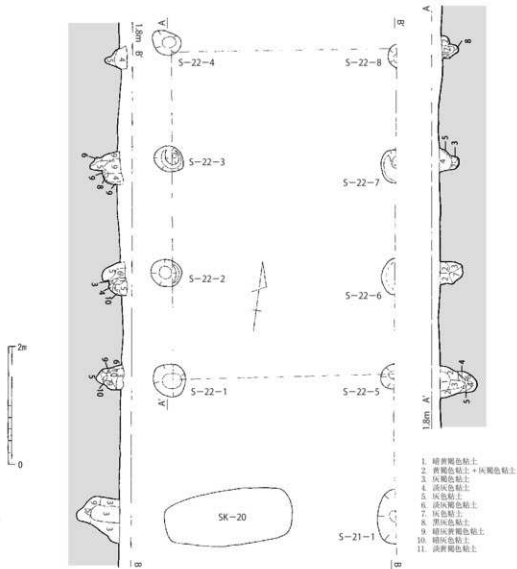
SK-7 (図版44、第142図)

調査区中央付近に位置する土坑である。東西110cm、南北120cmの不整形を呈し、深さは100cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は最下層に橙色の砂層が堆積し、中・上層には灰褐色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。



第 140 図 下百町神の前遺跡第 2 次調査第 2 区遺構配置図 (1/200)



第 141 図 SB-22 実測図 (1/60)

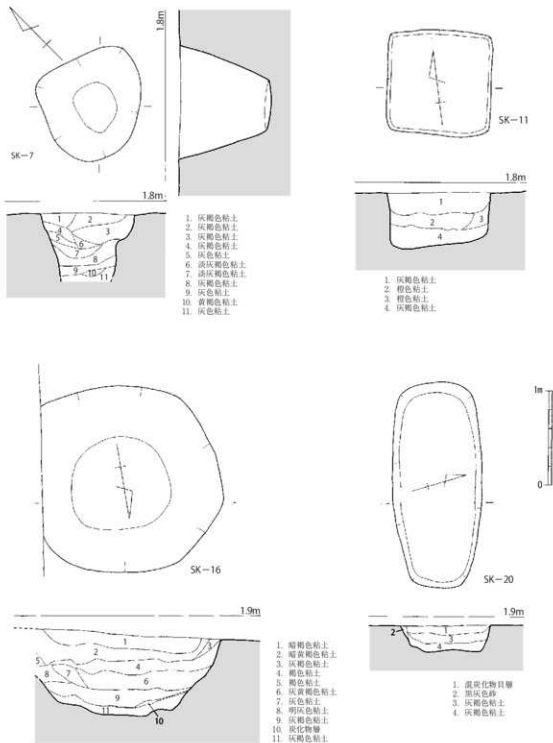
SK-11 (第 142 図)

調査区中央付近にあり、SK-7 から 3m 西側に位置する土坑である。一辺 110cm の方形を呈し、深さは 60cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は灰褐色粘土で占められ、層によっては橙色粘土を含む。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-16 (図版 45、第 142 図)

調査区中央付近にあり、SK-7 から 3m 北側に位置する土坑である。東端が調査区外へと続いているが、およそ径 2m の円形プランを呈している。深さは 90cm を測り、壁の立ち上がりは緩やかに傾斜している。覆土は下層に灰褐色粘土、中層に黄色や橙色を含んだ灰褐色粘土、上層に暗褐色粘土が堆積する。



第 142 図 SK-7・11・16・20 実測図 (1/40)

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-20 (図版 45、第 142 図)

調査区中央付近にあり、SK-16 から 6m 北側に位置する土坑である。長軸 220cm、短軸 90cm

の丸みを帯びた長方形プランを呈す。深さは30cmで、壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は下層に灰褐色粘土、上層は炭化物を含んだ貝層となる。貝層にはバイガイ、シジミ、巻貝が見られる。

図示できる出土遺物はなかった。

3) 溝

SD-23 (図版 45、第 143 図)

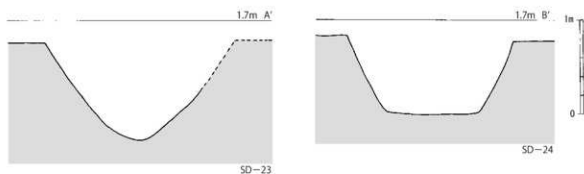
調査区北側で検出した溝である。東西方向に直線的に伸びており、両端は調査区外へと続いている。後述するSD-24はほぼ並行している。検出した範囲で長さ6mを測る。幅2m、深さ1mを測り、底部は面をなさず断面三角形になる。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。

出土遺物 (図版 79、第 144 図)

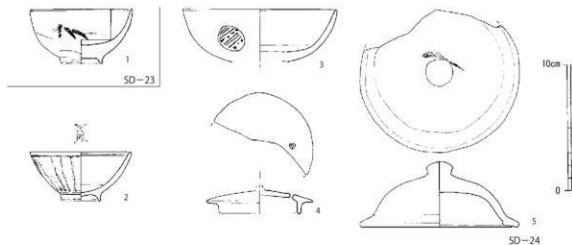
1は染付小碗である。外面に笹葉文を施文する。口径7.8cm、器高4.1cm、高台径3.2cm。

SD-24 (図版 45、第 143 図)

調査区北側で検出した溝である。東西方向に直線的に伸びており、両端は調査区外へと続いている。



第 143 図 SD-23・24 断面実測図 (1/40)



第 144 図 SD-23・24 出土遺物実測図 (1/3)

る。SD-23 とほぼ並行している。検出した範囲で長さ 6m を測る。幅 1.8m、深さ 0.8m を測り、底面が水平面をなしているため断面形状は逆台形を呈す。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。

出土遺物 (図版 79、第 144 図)

2~4 は磁器である。2 は染付小碗。内面見込みには吉祥文字を、外面には鎖状の幾何学文を施文する。口径 7.6cm、器高 3.7cm、高台径 3.0cm。3 は丸形の碗である。口径 11.6cm。4 は蓋である。口径 6.2cm、鋳部径 8.0cm。5 は陶器蓋である。口径 12.0cm、器高 4.9cm、撮部径 2.0cm。

4) 小結

この調査区で検出した遺構は掘立柱建物 1 棟、土坑 4 基、溝 2 条である。掘立柱建物は調査区外へと続くのかもしれないが、現状では 1 間×3 間に復元される。柱穴の規模は径 30~40cm で柱痕は 20cm に満たない小規模なものである。桁行の柱間は 100cm 程度で均等に配置され、梁側に棟持柱がないのが特徴的である。溝のうち、東西方向に直線的に伸びる SD-23・24 は幅も広く深さもあり、区画溝として使用されたものと思われる。

出土遺物は少ないが、17 世紀後半から 18 世紀前半頃の遺物が見られる。

第 2 次調査 第 3 区

調査区は東西 24m、南北 40m を測り、南北に長い長方形を呈す。調査面積は約 960m² である。遺構密度は非常に低く、特に北半部はほぼ遺構がない。南側には土坑等が幾つか見られる程度である。特記事項として、井戸枠を設けた井戸が検出されたことがある。今回の区画整理事業地では同種のもの他に確認されなかった。遺構面の標高は 1.8m~2.0m である。

検出した主な遺構は、井戸 1 基、土坑 4 基である。出土遺物には近世陶磁器、木製品がある。

1) 井戸

SE-16 (図版 46、第 146 図)

調査区北東側で検出した遺構である。掘り方は直径 1.3m の円形を呈し、その内側には木製の井戸枠が検出された。井戸枠は径 75cm、高さ 140cm を測り、針葉樹の板材を使用している。井戸枠には底板を設ける他、計 3ヶ所にタガが巡らされる。裏込め土には淡青色粘土を使用する。

図示できる遺物は出土しなかった。

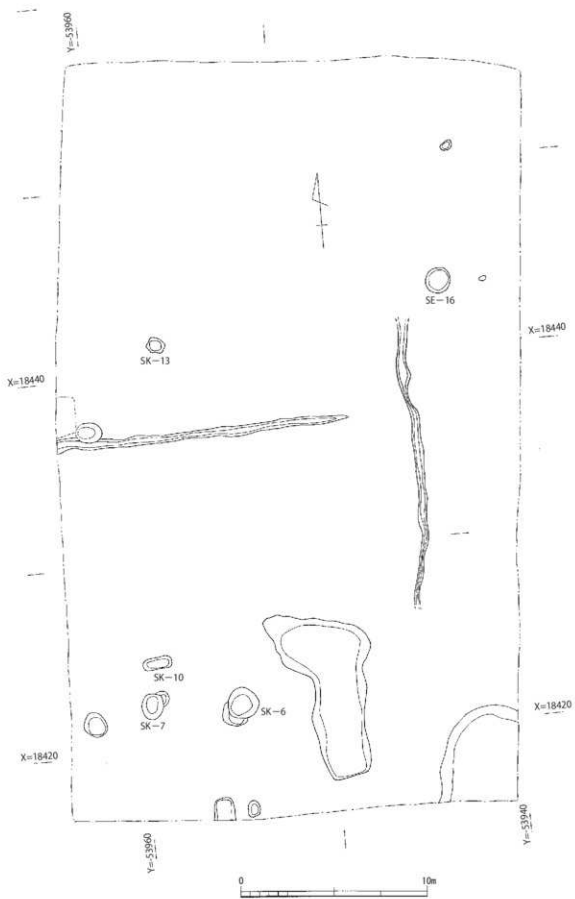
2) 土坑

SK-6 (図版 47、第 147 図)

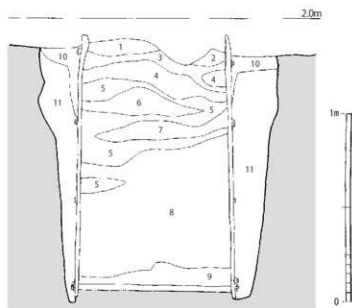
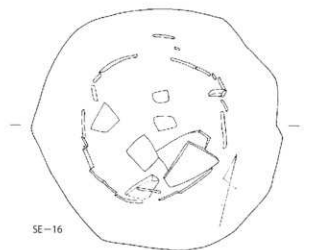
調査区南側に位置する土坑である。直径 1.8m の円形を呈し、深さは 90cm を測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は下・中層には黒灰色粘土と青灰色粘土が互層で堆積し、上層には黒色細砂や白灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第 148 図)

1 は内面見込みに五弁花文を施文する染付碗。内外面に圏線を巡らせ、外面には円文も見える。高台径 4.8cm。



第145図 下百町神の前遺跡第2次調査第3区遺構配置図(1/200)



- | | |
|----------|-----------|
| 1. 暗灰色粘土 | 7. 暗灰色粘土 |
| 2. 暗灰色粘土 | 8. 暗灰色粘土 |
| 3. 砂利層 | 9. 砂利層 |
| 4. 暗灰色粘土 | 10. 暗灰色粘土 |
| 5. 砂利層 | 11. 淡灰色粘土 |
| 6. 暗灰色粘土 | |

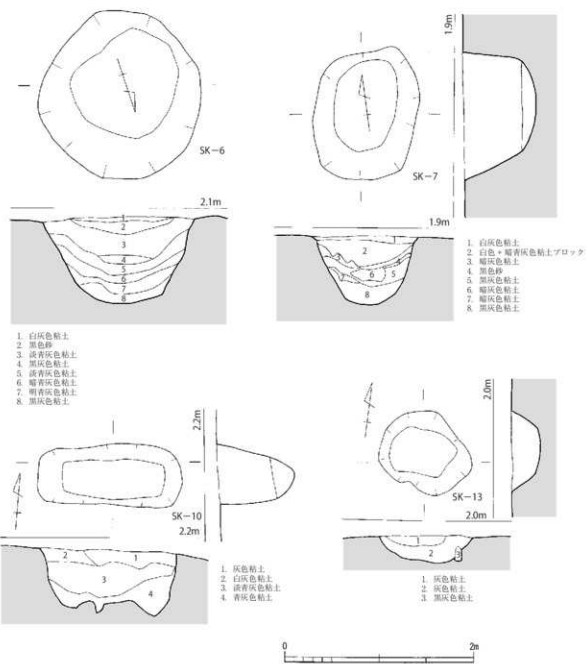
第146図 SE-16 実測図 (1/20)

SK-7 (図版 47、第 147 図)

調査区南側で検出した土坑で、SK-6 から 4m 西側に位置する。長軸 140cm、短軸 110cm の楕円形を呈す。深さは 80cm を測り、壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は下層に黒灰色粘土、中層に暗灰色粘土、上層は粘土やシルト、細砂が互層で堆積する。

出土遺物 (第 148 図)

2 は白磁小碗である。発色が悪く黄味がかっている。口径 6.6cm、器高 3.1cm、高台径 2.2cm。3 は円弧状の木製品である。現存で長さ 13.3cm、幅 5.4cm、厚さ 0.8cm。桶の底部であろう。



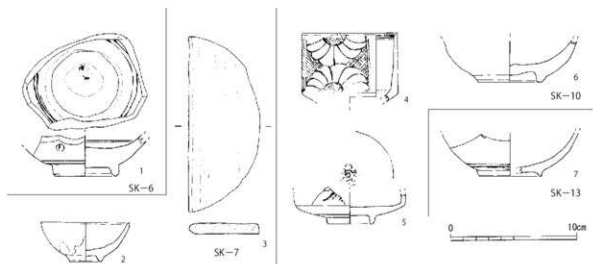
第 147 図 SK-6・7・10・13 実測図 (1/40)

SK-10 (第 147 図)

調査区南側で検出した土坑で、SK-7 から 2m 北側に位置する。長軸 150cm、短軸 70cm の丸みを帯びた方形プランを呈し、深さは 80cm を測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は下層に青灰色粘土、中層に淡青灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版 79、第 148 図)

4・5 は筒状の染付碗である。接合しないが文様構成から同一個体かもしれない。外面には菊花



第 148 図 SK-6・7・10・13 出土遺物実測図 (1/3)

文と斜格子文を描き、5の内面見込みには五弁花文を施文する。4は口径7.2cm、5は高台径3.4cm。6は陶器碗である。釉は灰白色に発色する。高台径4.8cm。

SK-13 (図版 47、第 147 図)

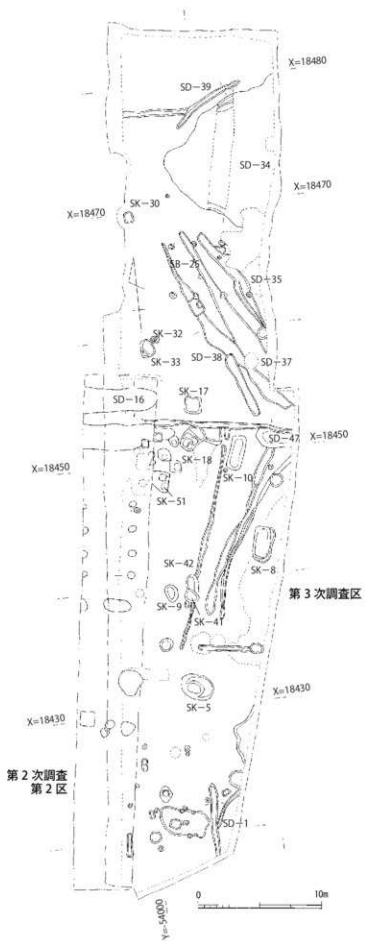
調査区中央付近に単独で位置する土坑である。長軸 100cm、短軸 80cm の不整楕円形を呈し、深さは 30cm を測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (第 148 図)

7 は染付碗である。外面高台部に圈線が巡っている。高台径 4.6cm。

3) 小結

この調査区では井戸 1 基と土坑 4 基を検出した。小区画溝と思われる溝状遺構も検出したが、個別報告は行っていない。井戸は井戸杵を使用した丁寧な作りのものである。出土品には恵まれなかったが、近世～近代の遺構と考えて良いようである。他の土坑は規模も小さく、あまり深くないため、土坑の性格を推察するのは難しい。出土遺物は近世のものに限られる。



第 149 図 下百町神の前遺跡第3次調査区遺構配置図 (1/300)

8 下百町神の前遺跡第3次調査

下百町神の前遺跡第3次調査は、平成23年8月5日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、12月1日に機材を撤収して現地での作業を終了した。

調査区は南北に長く、南北69m、東西17mを測る。調査区の南西側は同遺跡第2次調査第2区に隣接しており、一部重複して掘削を行っている。遺構密度はあまり高くなく、散漫に分布する。溝に関しては、今回報告する区画整理事業で発掘調査を行った一連の遺跡で検出されたような、南北または東西に直線的に伸びる大規模な溝は検出されず、地形に沿った形で掘削された数条の細い溝が大半である。土坑は調査区中央付近から数基検出された。また近世・近代に属する木桶土壙墓群が、調査区中央西側でまとまって検出された。他に、掘立柱建物が1棟、調査区北寄りの位置で検出された。

検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟、土坑11基、溝8条、近世・近代墓5基である。出土遺物は近世陶磁器である。

1) 掘立柱建物

SB-25 (図版49、第150図)

調査区中央からやや北寄りの位置で検出した遺構である。棟を東西にとり、桁間3間、梁間1間分を検出した。東側は調査区外へと続いており、本来の桁間は不明である。またS-22に対応する柱穴は攪乱を受けており失われる。確認できた範囲で、桁行6.2m、梁行4.1mを測る。柱間は、S-22とS-23の間で2.1m、S-23とS-24の間で2.3m、S-24とS-25の間で1.9m、S-26とS-27の間で2.2m、S-27とS-28の間で1.8mを測り、ややばらつきがみられる。柱穴は径45～55cm、深さ25～40cmを測り、S-24とS-27では径20cmの柱痕を確認することができた。S-24では柱痕に灰橙色粘土、掘り方覆土に灰色粘土が堆積する。S-27では柱痕に茶灰色粘土、灰色粘土、灰色シルトが堆積し、掘り方には灰色粘土、黄灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

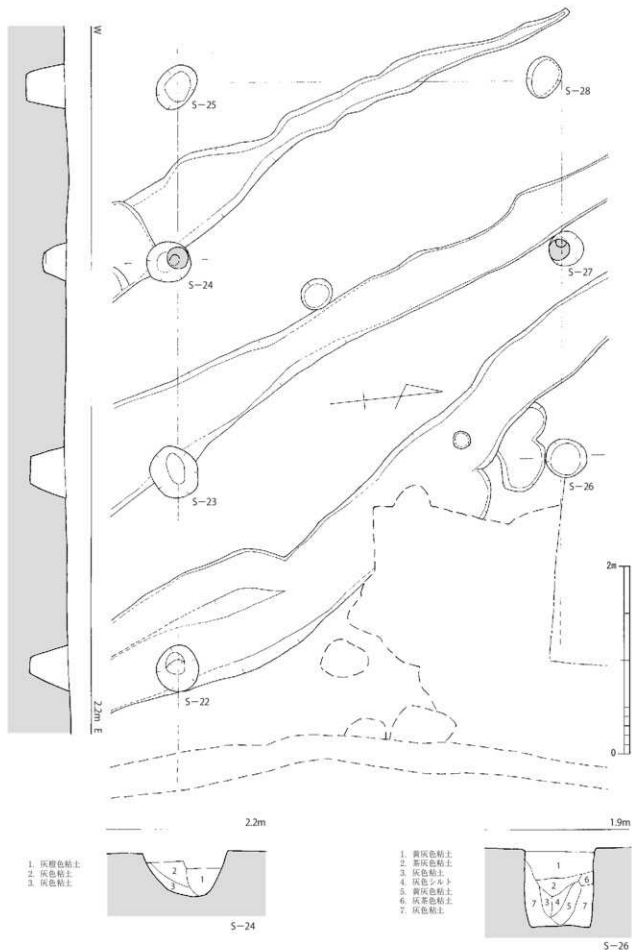
2) 土坑

SK-5 (図版50、第151図)

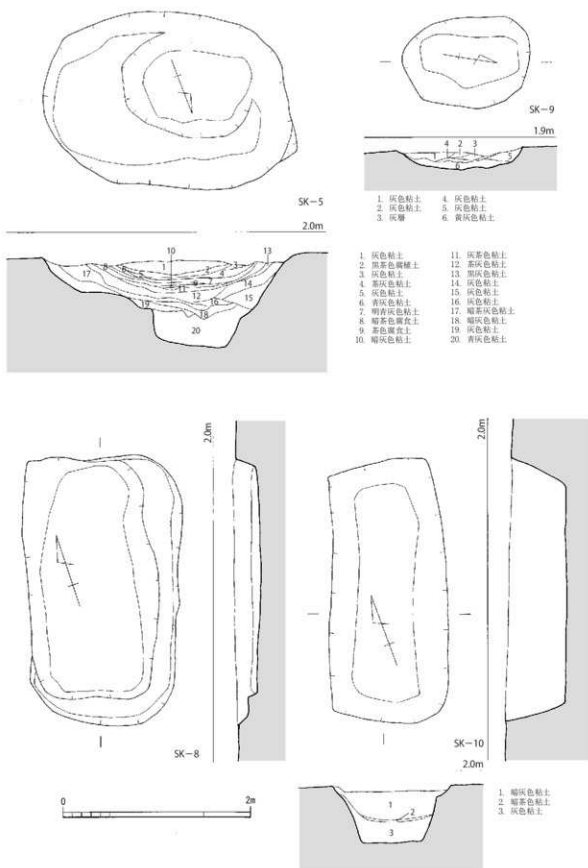
調査区中央からやや南に寄った位置で検出した土坑である。長軸2.6m、短軸1.9mの楕円形を呈し、土坑内部は南西側が最も深く、深さ0.9mを測る。壁は掘鉢状に窪んでおり、東側から北側にかけてはテラス状の段を有している。覆土は下層に青灰色粘土、中層から上層にかけてはレンズ状に薄い堆積が連続しており、間に腐食土層を挟んでいる。

出土遺物 (図版79、第152図)

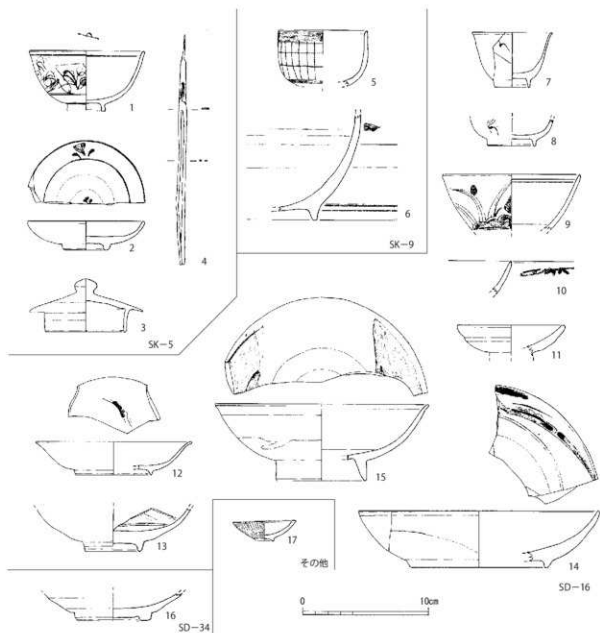
1・2は染付磁器である。1は丸みを有した碗である。外面には線繪と花文を描き、内面見込みに記号のような文様を描く。口径9.1cm、器高4.8cm、高台径3.0cm。2は小型の皿である。内面に文様を描く。口径9.4cm、器高2.3cm、高台径3.4cm。3は陶器の蓋である。撮部は若干扁平だが丸みを有し、かえりは長く伸びる。受け部径9.0cm、器高4.2cm。4は銅製の簪である。頭部の飾りは失われる。長さ18.3cm、幅0.7cm。



第 150 图 SB-25 实测图 (1/40)



第 151 图 SK-5·8·9·10 实测图 (1/40)



第152図 SK-5・9、SD-16・34、その他出土遺物実測図(1/3)

SK-8 (第151図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-5から12m北側に位置する。長軸2.8m、短軸1.6mの長方形プランを呈し、深さは20cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、土坑内の東側から南側にかけて深さ15cm程のテラスを有している。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-9 (図版50、第151図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-5から7m北側に位置する。長軸1.3m、短軸1.0m

の楕円形を呈し、深さは20cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。覆土は下層に黄灰色粘土、中層に灰色粘土、上層のうち第1層には黄灰色粘土が混ざった灰色粘土が堆積する。

出土遺物 (図版 79、第 152 図)

5・6は染付磁器である。5は丸く深みのある碗である。外面には格子文を描く。口径7.2cm。6は瓶であろう。高台部外面と体部に圏線を巡らせる。

SK-10 (第 151 図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-8から6m北側に位置する。長軸2.8m、短軸1.2mの長方形を呈し、深さは0.6mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は下層に灰色粘土、上層に暗灰色粘土が堆積し、間層に炭化物と焼土が混じった暗赤灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-17 (図版 50、第 153 図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-10から5m北西に位置する。一辺1.2～1.3mの方形プランを呈しており、深さは40cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い急な角度で傾斜する。土坑の底面付近には腐食土や焼土が広がっており、その直上には第2層灰色粘土が堆積し、覆土の大半は黄灰色粘土が厚く堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-18 (第 153 図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-17から2m南側に位置する。長軸2.2m、短軸1.5mの不整長方形を呈しており、土坑内部は南西側が最も深く0.6mを測る。壁の立ち上がりは緩やかな段を形成しながら底部へと続いている。覆土は下層に明青灰色粘土、上層に暗青灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-30 (図版 51、第 153 図)

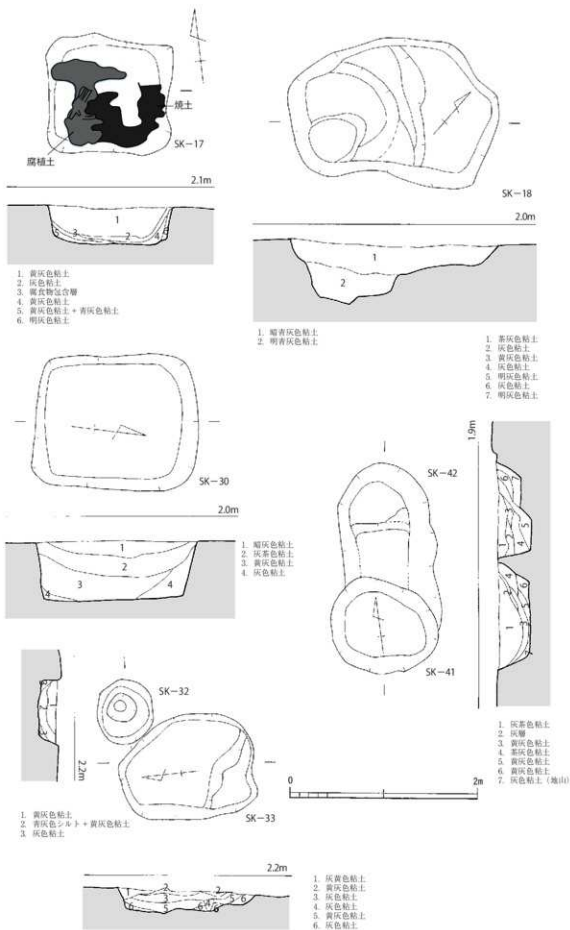
調査区北側で検出した土坑で、SK-17から16m北西に位置する。当初調査区外へと続いていたため、調査区を若干拡張して掘削を行った。長軸1.7m、短軸1.4mの長方形を呈しており、深さは0.65mを測る。壁の立ち上がりは直角に近い急な角度で傾斜する。覆土は下層に黄灰色粘土、中層に灰茶色粘土、上層に暗灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-32 (図版 51、第 153 図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-17から6m北西に位置する。直径0.7mの円形を呈し、深さは0.2mを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は下層に青灰色シルト、上層に黄灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。



第 153 图 SK-17·18·30·32·33·41·42 实测图 (1/40)

SK-33 (図版51、第153図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-32の南西側に接して位置する。長軸1.5m、短軸1.1mの不整楕円形を呈し、深さは0.3mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかに傾斜する。覆土は下層に黄灰色粘土、中層に灰色粘土、上層に黄灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-41 (第153図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-9から1m東側に位置する。後述するSK-42と重複しており、これを切って営まれる。長軸1.1m、短軸1mの楕円形を呈し、深さは0.35mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は下層に黄灰色粘土、上層に灰茶色粘土が堆積し、間層に炭化物を多く含んだ灰色粘土層が薄く堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

SK-42 (第153図)

調査区中央付近で検出した土坑である。SK-41と重複しており、これに切られているため本来の形状は不明だが、現状では長軸1.2m、短軸1mの楕円形を呈す。底面は南側が段を有して深くなっており、この部分で深さ0.35mを測る。北側のテラス部で深さ0.25mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。覆土は下層に明灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積する。

図示できる遺物は出土しなかった。

3) 溝

SD-1 (第154図)

調査区南端で検出した溝である。南北方向に直線的に伸びており、南側は調査区外へと続く。検出した範囲で長さ6mを測る。深さは10～15cmと非常に浅い。

図示できる遺物は出土しなかった。

SD-16 (第154図)

調査区中央付近で検出した溝である。第2次調査第2区で検出したSD-24と一連の遺構であり、この部分も含めて長さ6mを測る。幅は1.8m、深さは0.8mを測る。溝の断面は逆台形を呈し、壁の立ち上がりは比較的急な角度で傾斜する。

出土遺物 (図版79、第152図)

7～10は染付磁器である。7は口縁部が外反する小坏。口径6.4cm、器高4.4cm、高台径2.8cm。8は小坏または小碗。高台径3.8cm。9は口縁部が開いた器形となる碗である。口径11.0cm。10も碗である。11～15は皿である。11は陶器小皿。浅い器形で器壁は厚い。内外面に鉄釉を塗布する。口径8.6cm。12～14は染付磁器である。12は口縁部が外反する。器壁は薄い。口径12.4cm、器高2.7cm、高台径6.0cm。13は内面に文様を描く。高台径4.4cm。14は口径19.2cm、器高4.6cm、高台径11.0cm。15は陶器皿である。高台は高く、深みのある器形となる。内面には鉄釉を施し、ハケを用いて白色釉で文様を描く。口径17.0cm、器高6.1cm、高台径7.2cm。

SD-34 (図版51、第154図)

調査区北側で検出した遺構である。東西9m、南北12mの範囲で不整形に落ち込んだ形状をなし、東側は調査区外へと続いているため本来の形状は不明だが、溝よりもむしろ落ち込みと称した方が適当かもしれない。トレンチ状に掘削した範囲では、深さ1.1mを測り、壁の立ち上がりは段を有して緩やかに傾斜する。覆土は下層に灰色粘土、中層に明青灰色シルト、上層に暗茶灰色粘土、灰色粘土が堆積し、上層と中層の間には鉄分の沈着が見られる。

出土遺物 (第152図)

16は白磁皿の底部片であろう。高台径5.6cm。

SD-35 (第154図)

調査区中央付近に位置する溝である。北西-南東方向へと伸びており、検出した範囲で長さ9m、幅0.9mを測る。深さは10cm程度と非常に浅い。

図示できる遺物は出土しなかった。

SD-37 (第154図)

調査区中央付近に位置する溝である。SD-35、38とはほぼ並行しており、一連の遺構としてみることができる。検出した範囲で長さ17m、幅1.3mを測る。深さは10cm程度と非常に浅い。

図示できる遺物は出土しなかった。

SD-38 (第154図)

調査区中央付近に位置する溝である。戦術のSD-35、37とはほぼ並行しており、一連の遺構としてみることができる。検出した範囲で長さ17m、幅0.8mを測る。深さは10cmに満たず、非常に浅い。

図示できる遺物は出土しなかった。

SD-39 (第154図)

調査区北側で検出した遺構である。SD-34の縁に沿うような形で伸びており、長さ6.5mを測る。幅0.45m、深さ10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

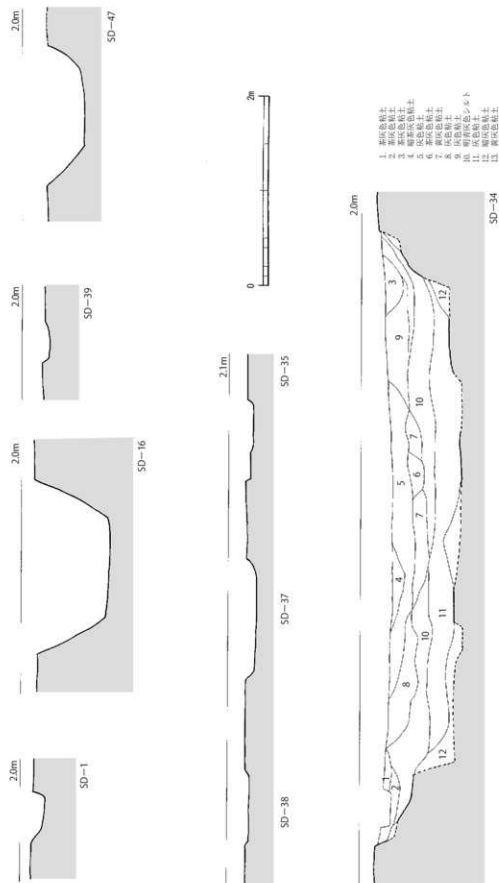
SD-47 (図版52、第154図)

調査区中央付近で検出した溝である。東側が調査区外へと続くため本来の形状は不明だが、検出した範囲で長さ3m、幅1.5m、深さ0.4mを測る。溝の断面は逆台形を呈し、壁の立ち上がりは比較的緩やかな角度で傾斜する。

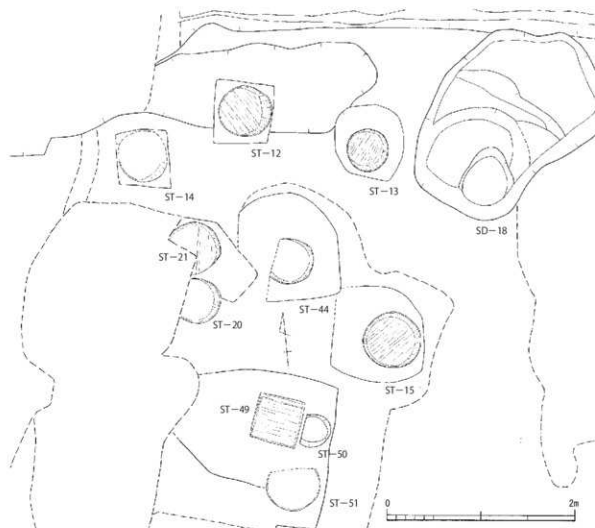
図示できる遺物は出土しなかった。

4) 近世・近代墓 (第155図)

調査区中央から西側にかけて、近世・近代墓群を検出した。確認できた限りで11基を数えるが、



第 154 图 SD-1·16·30·34·35·37·38·39·47 断面示意图 (1/40, 1/60)



第155図 近世・近代墓群実測図(1/40)

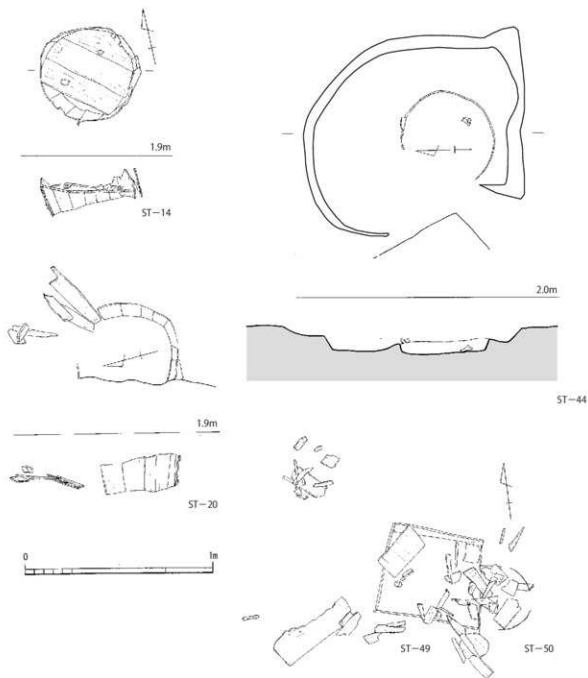
改葬によって既に失われたものも相当数あったものと思われる。ここでは比較的遺存状態の良いものに限って個別に報告する。

ST-14 (第156図)

近世・近代墓群中の北西側に位置する墓である。掘り方は一辺50cm前後の方形を呈し、その掘り方の壁に接するようにして木桶が置かれていた。木桶は直径50cmを測り、上部が削平を受けるため遺存する高さは20cm程である。桶の内部からは円礫が数個検出された。

ST-20 (第156図)

近世・近代墓群中の西側に位置する墓である。掘り方は不明で、木桶の存在によって墓であることが判明した。木桶は直径50cm程に復元される。上部が削平を受けており、高さは20cm程である。



第156図 ST-14・20・44・49・50実測図(1/20)

ST-44 (第156図)

近世・近代墓群中の中央付近に位置する墓である。掘り方は長軸115cm、短軸100cmの規模を有し、そのほぼ中央に木桶が配置されている。木桶は腐食が進んでおり、また削平も著しいが、直径50cm、高さは5cmを測ることができる。

ST-49 (図版52、第156図)

近世・近代墓群中の南側に位置する墓である。後述するST-50とともに一体の掘り方を有し

ており、規模は長軸 1.7m、短軸 1.2mを測る。この掘り方のほぼ中央に、長軸 55cm、短軸 45cmの大きさで方形に囲まれた木枠が配置されていた。付近には関連する板材が広がっており、また木枠内には人骨も確認された。

ST-50 (第 156 図)

近世・近代墓群中の南側に位置する墓である。先述の ST-49 の東側に接した位置にあり、掘り方を共有している。上面には関連する板材や木桶のタガ材が見られたが、腐食が進んでおり本来の形状には不明な点が多い。遺存するタガ材や掘り方からすると、直径 35cm 程の円形の木桶だったと思われる。

5) その他の出土遺物 (図版 79、第 152 図)

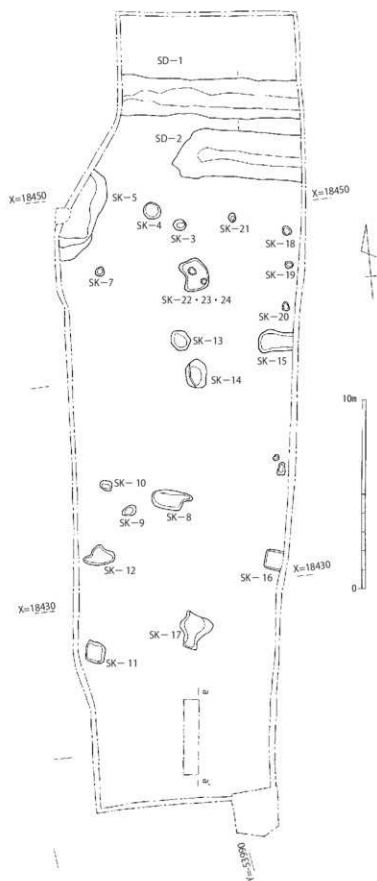
17 は型押し整形による白磁紅皿。外面の花弁は幅が狭い。口径 5.0cm、器高 1.6cm、高台径 1.3cm。ST-51 出土。

6) 小結

ここでは掘立柱建物 1 棟、土坑 11 基、溝 8 条、近世・近代墓群を検出した。掘立柱建物は東側に伸びている可能性もあるので桁行は不明だが、梁行は 1 間以上伸びないようである。柱間は 1.8m～2.2m の間で若干のばらつきがあり、柱穴は径 45～55cm、柱痕は径 20cm とあまり大きな建物ではない。第 2 次調査第 2 区で検出した掘立柱建物跡と規模や柱間構成がよく似ており、両者を同様と考えると、1 間×3 間として良いのかもしれない。

土坑については決め手に欠けるが、廃棄土坑等であろうか。中には近世・近代墓の墓塚もあるものと思われる。出土遺物は大半が近世のものであり、掘立柱建物も含め、検出された遺構は近世に属するとみて良いだろう。

近世・近代墓は調査区の中央付近にまとまっている。大半が円形の木桶だが、中には方形の箱を用いたものもある。ST-12 や ST-14 の掘り方を見ると、木桶が円形であるにもかかわらず掘り方を方形に掘削する点が特徴的である。



第 157 図 下百町神の前遺跡第 4 次調査区遺構配置図 (1/100)

9 下百町神の前遺跡第4次調査

下百町神の前遺跡第4次調査は、平成25年3月6日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構図の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、平成25年5月30日に機材を撤収して現地での作業を完了した。

調査区は南北に長い形状であり、東西12m、南北44mを測る。

検出した主な遺構は、土坑14基、溝2条、ピット6基である。出土遺物は中・近世の土師器、陶磁器、陶器、石製品、銅銭である。

1) 基本層序

第158図は調査区南に設定したトレンチの東側壁面の土層図である。最上層に暗黄灰色粘土層(遺構検出面)、その下層に茶灰色粘土、暗灰色粘土が厚く堆積している。最下層は灰色粘土層で、しまりが強い。

2) 土坑

SK-5 (図版54、第159図)

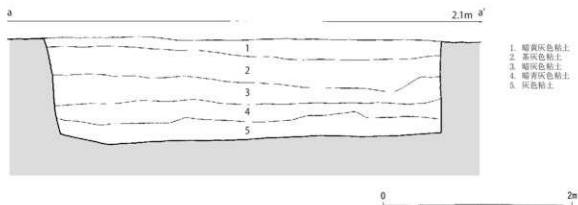
調査区北西に位置する土坑である。プランは西側の調査区外へ伸びているため、全容は不明である。南北軸5.3m、東西軸1.7m以上、深さは最深部で0.9mを測る。壁の立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ水平である。覆土は上層に暗灰色粘土、中層に暗青灰色粘土、下層に暗灰色粘が堆積する。

出土遺物 (図版80、第160図)

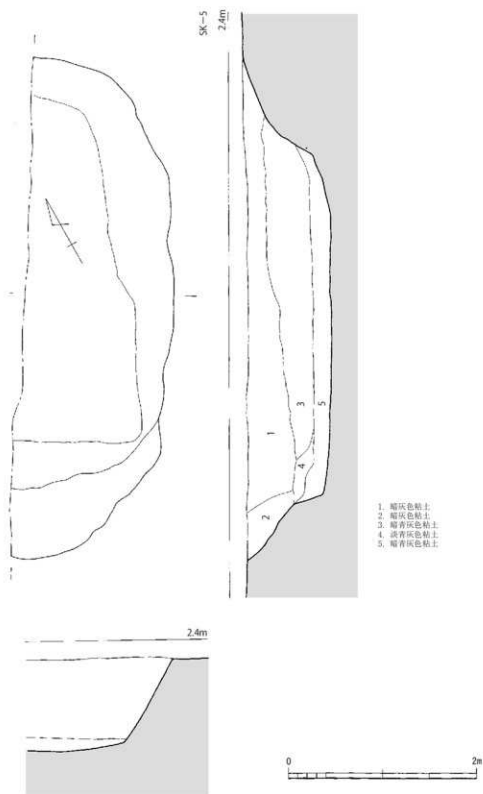
1は陶器搨鉢である。内面及び外面に鉄軸が施され、見込みに砂目跡が残る。高台径13cm。2と3は丸みを帯びた軽石で、2は長さ5.7cm、幅3.7cm、厚さ3.2cm。3は長さ8.9cm、幅6.8cm、厚さ4.5cm。

SK-14 (図版54、第161図)

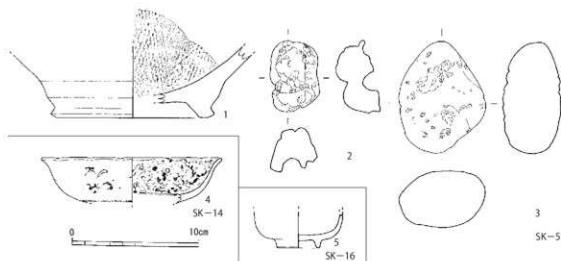
調査区中央に位置する楕円形の土坑である。南北軸1.7m、東西軸1.2m、深さは最深部で0.7m



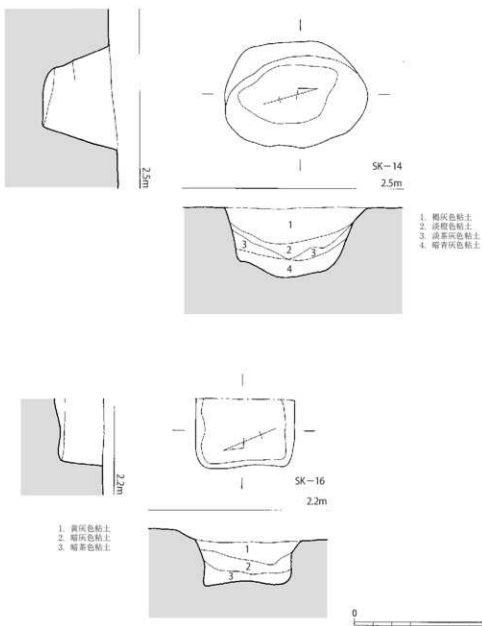
第158図 基本土層図(1/40)



第 159 图 SK-5 实测图 (1/40)



第 160 图 SK-5·14·16 出土遗物实测图 (1/3)



第 161 图 SK-14·16 实测图 (1/40)

を測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となり、底面は中央に向かって楕円状に深くなる。覆土は上層に褐灰色粘土、中層に淡茶灰色粘土、下層に暗青灰色粘が堆積する。

出土遺物 (図版 80、第 160 図)

4 は染付磁器の皿で、高台部分は欠損する。外面に草花文、内面に唐草文が描かれる。口縁部は輪花となる。器高 3.6cm 以上、口径 14.4cm。

SK-16 (第 161 図)

調査区南東に位置する方形の土坑である。プランは東側の調査区外へ伸びているため、全容は不明である。南北軸 1.2m、東西軸 1m 以上、深さは最深部で 0.5m を測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となり、底面はほぼ水平。覆土は上層に黄灰色粘土、中層に暗灰色粘土、下層に暗茶色粘土が堆積する。

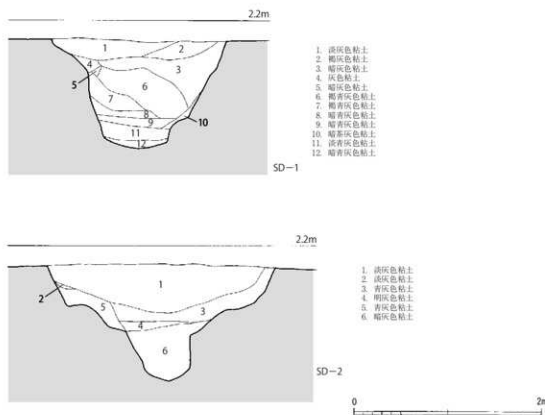
出土遺物 (第 160 図)

5 は染付磁器の小碗で、口縁部は欠損する。全体に施釉されているが、畳付けは軸剥ぎが施される。器高 2.5cm 以上、高台径 3.4cm。

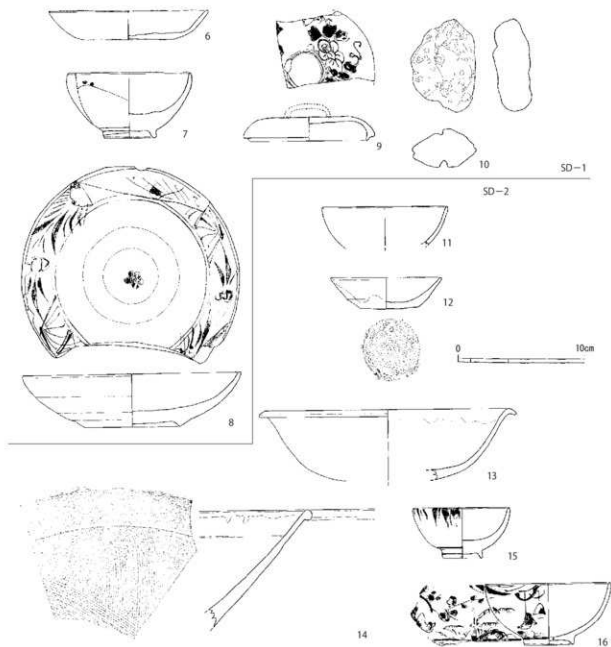
3) 溝

SD-1・2 (第 162 図)

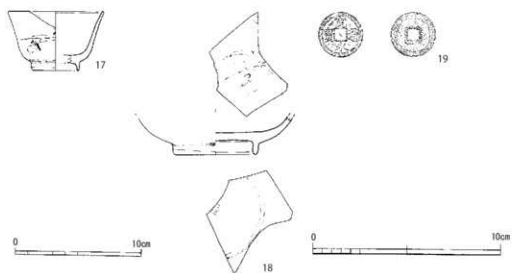
調査区北に位置する溝である。プランは調査区外の西側及び東側へ伸びているため、全容は不明



第 162 図 SD-1・2 土層断面実測図 (1/40)



第 163 図 SD-1・2 出土遺物実測図 (1/3)



第 164 図 その他の出土遺物実測図 (1/2、1/3)

である。南北軸 2.2m、東西軸 9.4m 以上、深さは最深部で 1.1m を測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となり、底面は面をなさない。覆土は上層に淡灰色粘土、中層に褐青灰色粘土、下層に暗青灰色粘土が堆積する。

SD-1 出土遺物 (図版 80、第 163 図)

6 は土師器小皿である。内面及び外面に煤が付着し、外面底部は回転糸切が施される。口径 12.7cm、器高 2.3cm、底径 7.0cm。

7 は染付碗で、胎土は白灰色土である。高台外面に二条の圏線、外面に草花文が描かれる。口径 12.7cm、器高 2.3cm、底径 7.0cm。8 は染付の皿で、胎土は淡青灰色土である。内面に、草花文、見込みに 5 弁花のコンニャク印判が施される。見込みに、蛇ノ目軸剥ぎが施され、底部は萁筍底を呈す。口径 17.4cm、器高 4.2cm、底径 4.2cm。9 は、染付の蓋で、胎土は白色土。外面に蔓草文、が描かれ。10 は軽石、長径 7.4cm、幅 5.1cm、厚さ 3.0cm。

SD-2 出土遺物 (図版 80、第 163 図)

11 は陶器の碗で、胎土は淡黄灰色土。無色釉薬が、施される。口径 10.0cm、器高 3.1cm 以上。12 は陶器の小皿で、内面及び外面に煤が付着する灯明皿の可能性はある。口径 8.8cm、器高 2.5cm、底径 2.5cm。13 は陶器の鉢で、こね鉢か。見込みに蛇ノ目軸剥ぎが施され、内面及び外面に白色釉が掛けられる。口径 20.4cm、器高 5.6cm 以上。14 は陶器の播鉢で、内面口縁部に鉄釉が施される。15 は染付の碗で、胎土は淡青白色土。外面に雨降文、高台外面に二条の圏線が描かれる。16 は、染付けの碗で、胎土は灰白色土。外面に、竹笹文、梅文が描かれる。口径 10.0cm、器高 4.9cm、底径 4.9cm。

4) その他の出土遺物 (図版 80、第 164 図)

17 は染付の小坏で、胎土は淡灰白色。外面に草花文、高台外面に二条の圏線が描かれる。口径 7.6cm、器高 4.7cm。18 は染付の皿。見込みに葉が描かれ、高台外面に三条の圏線、高台内面に文字が描かれる。

5) 小結

下百町屋神の前遺跡第 4 次調査では、主な遺構として、溝 2 条、土坑 14 基、小穴 6 基を検出した。

本調査区からは隣接する下百町神の前遺跡 3 次調査に続く遺構として、溝と小穴等が検出された。溝については、調査区北側に 2 条並行して検出されており他の調査区で見られた様な区画溝であるとは明確に断言しがたい。

土坑については、調査区の中央付近にまんべんなく配置され、形状としては、長方形、不整形を呈する物が多い。

溝及び土坑の出土遺物から、本遺跡は中世から近世の遺跡と考える。

IV その他の出土遺物

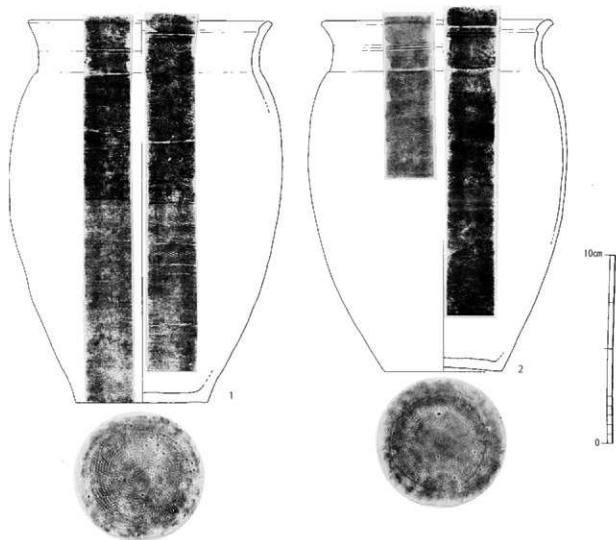
ここでは、今回の区画整理事業区内の発掘調査で出土したが、調査区や出土遺構が判らなくなってしまった遺物や、追補遺物、試掘調査時に出土した遺物について報告する。

1) 大型甕 (第165図)

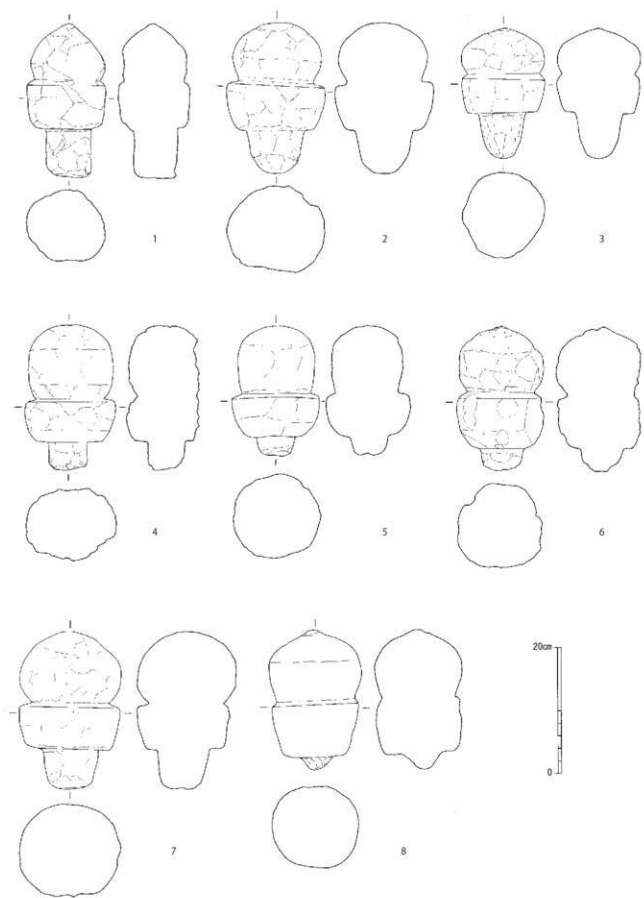
1・2は甕棺に使用された陶器大型甕である。どちらも外面に鉄釉を施釉し、内面や底部外面に格子目タタキを残す。器形も相似しており、口縁部内面には低い突帯を巡らせ、肩は頸部の締りは弱く、体部の最大径は上位にある。2は外面の肩部に陰刻がみられる。1は口径50.0cm、器高81.2cm、底径28.0cm。2は口径51.0cm、器高74.3cm、底径25.0cm。

2) 石製品 (図版81、第166～第170図)

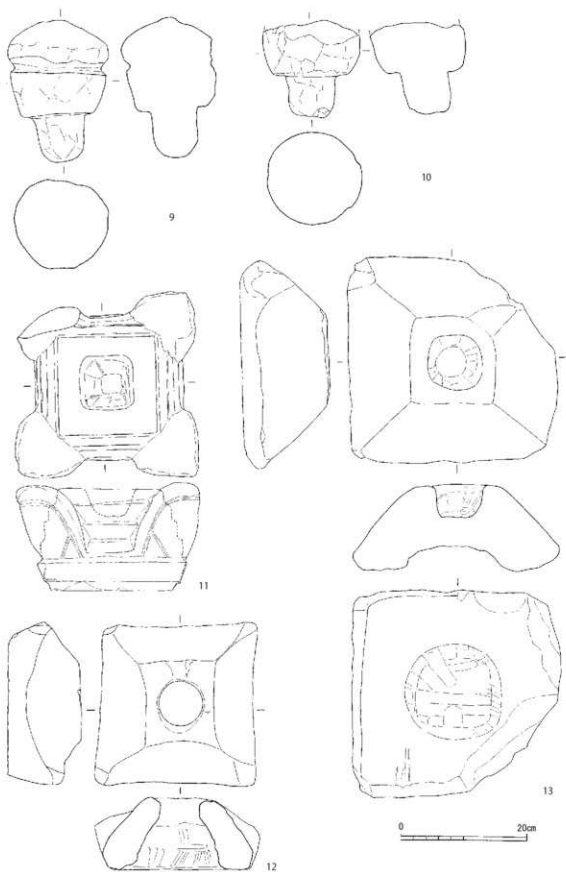
1～10は五輪塔の空風輪である。1はやや縦長で頂部も尖り気味である。長さ24.6cm。2・3は空輪の部分が扁平な擬宝珠様を呈す。2は長さ24.8cm。4・5は空輪がやや縦に長く、頂部は丸みを帯びる。4は長さ23.0cm。6は整形時の調整がやや残っており、またその後の劣化も進んでい



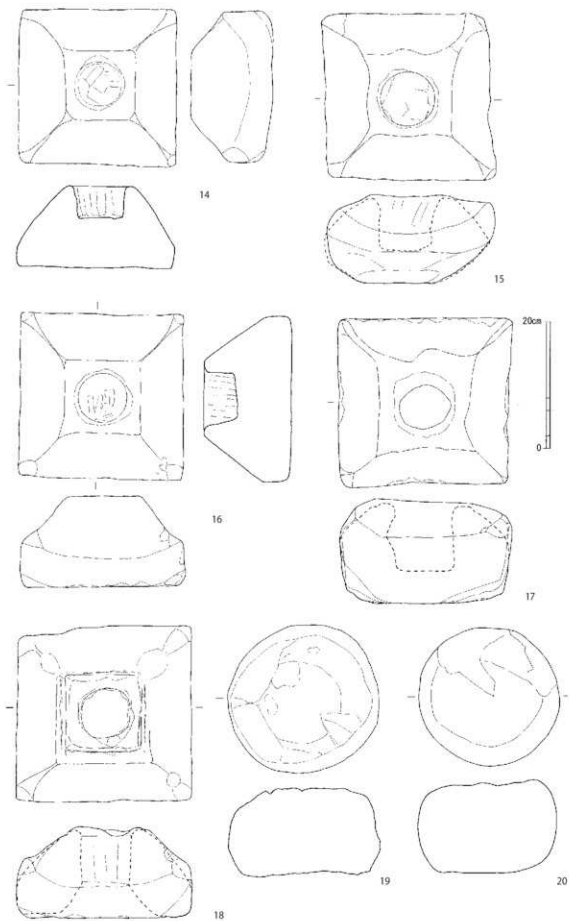
第165図 大型甕実測図(1/8)



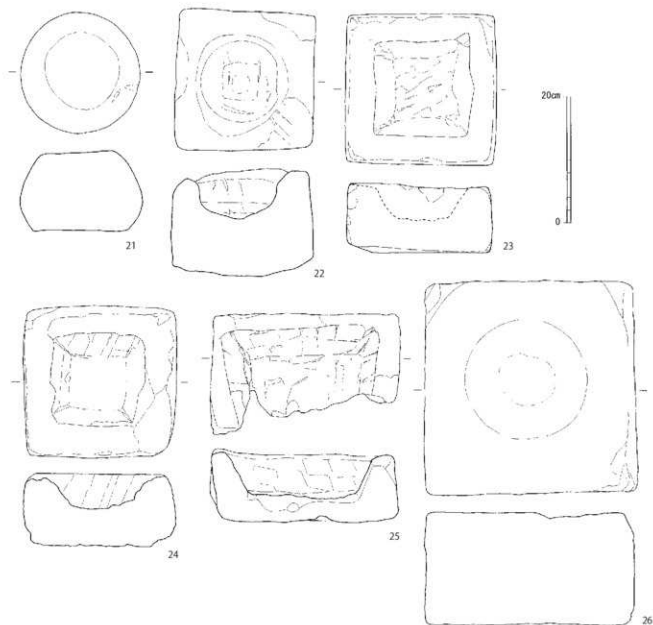
第 166 图 石製品実測図①(1/6)



第 167 图 石製品実測図②(1/6)



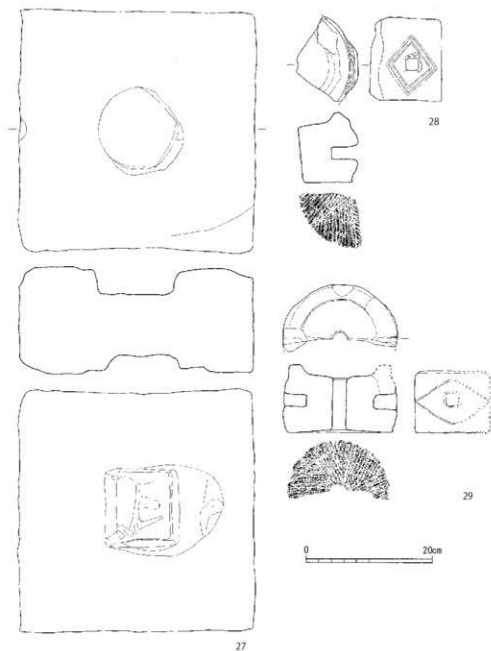
第 168 图 石製品実測図③(1/6)



第169図 石製品実測図④(1/6)

る。長さ22.9cm。7はやや大型品。薄赤茶色の石材を使用する。8は風輪の高さが高い。石材に緻密な凝灰岩を使用しており、重量がある。長さ22.2cm。9は空輪の径が風輪よりも大きく、空輪は扁平な擬宝珠様を呈す。10は空輪が欠損する。

11は宝篋印塔の隅飾部である。欠損や風化が進んでいる。12～18は五輪塔の火輪である。12は臍部に穿孔が貫通する。13は水輪との接合部にも挟りを加えている。18もやはり穿孔が貫通する。19～21は水輪で、どれも扁球形を呈す。20は緻密な凝灰岩を使用する。22～27は方形の石材に大きな割り込みを入れたもので、五輪塔の地輪または石塔の台座となるものであろう。27はかなり大型品だが両面に挟りがあり、台座ではないようである。28・29は茶臼である。

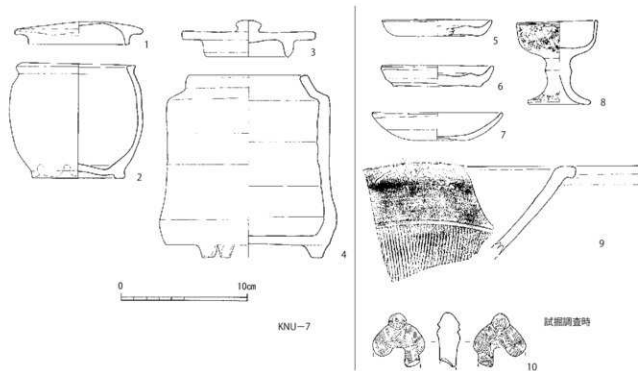


第170図 石製品実測図⑤(1/6)

3) 追補・試掘調査時出土遺物(第171図)

1~4は平成28年に報告した、蒲船津西ノ内遺跡第7次調査ST21出土遺物である。1・2はセットとなる陶器壺蓋と壺である。外面には鉄釉を施軸し、1は扁平で撮部をもたない。2は体部が丸みを帯び、頭部は締まらず口縁部は短く外側に肥厚する。3・4はやはりセットとなる陶器壺蓋と壺である。どちらも無軸で外面に化粧土を塗布する。3は低い撮部を有し、4は中央でわずかに括れ、肩に稜を有した形状となる。底部には3つの小さな脚部を有す。

5~10は試掘調査時に出土したものである。5・6は土師器小皿である。5は口径8.8cm、6は口



第 171 図 追補・試掘調査時出土遺物実測図 (1/3)

径 9.0cm。7 は透明釉を施軸する陶器皿である。8 は外面に菊花文を描いた染付仏飯器である。9 は陶器播鉢で鉄軸を施軸する。10 は狼形の素焼土製人形である。

V 出土人骨の分析

蒲船津西ノ内遺跡・下百町神の前遺跡第3次調査・下百町屋敷の内遺跡調査出土人骨

舟橋京子¹・米元史織²・富田啓貴³・梶佐古幸謙³

1: 九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

2: 九州大学総合研究博物館・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

3: 九州大学地球社会統合科学府

1 はじめに

福岡県柳川市三橋町蒲船津西ノ内遺跡3次・7次調査、下百町神の前遺跡第3次調査、および下百町屋敷の内遺跡3次調査において、中世～近世墓から人骨が出土した。人骨は柳川市教育委員会から九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に搬送され、本講座および九州大学アジア埋蔵文化財研究センターにおいて、整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。分析にあたって、人骨の年齢推定は、恥骨結合面はSakaue (2006)を、耳状面はLovejoy (1985)、歯牙の咬耗は栃原 (1957)を用い、性判定には、骨盤はBuikstra and Ubelaker (1994)を頭蓋はBuikstra and Ubelaker (1994)の方法を用いた。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成2』(九州大学医学部第二解剖学教室編、1988)記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人は20歳以上(詳細は不明)とする。

なお、人骨資料は現在、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座・九州大学アジア埋蔵文化財研究センターの古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

2 人骨出土状態

蒲船津西ノ内遺跡3次ST-77号墓

本人骨は、楕円形の墓壇内から頭位を北にした屈葬の状態で出土している。

墓壇内北側からは頭蓋が出土しており、その南側からは椎骨が前面を西にし解剖学的位置関係を保った状態で墓壇中央にかけて出土している。これらの椎骨の東西からは左右肋骨が出土している。椎骨南側からは骨盤及び大腿骨片が出土している。肋骨の西側からは右上肢が肘関節を強屈した状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は頭位を北にした屈葬と推定される。

蒲船津西ノ内遺跡3次ST-78号墓

本人骨は、隅丸方形の墓壇内から頭位を北にした右側臥屈葬の状態で出土している。

墓壇内北側からは頭蓋が顔面を南に向け左側を上にした状態で出土しており、下顎直下からは右上腕骨が出土している。頭蓋の南側からは軀幹骨および左上肢が解剖学的位置関係をほぼ保った状態で出土している。上肢は左右ともに肘関節を軽屈、前腕を回内し、手首付近で左右の前腕部が交差した状態で出土している。下肢骨はこれらの上肢骨の南側から股関節・膝関節・脛距間

節ともに関節状態で出土している。左右下肢骨ともに股関節を屈曲し、膝関節を強屈した状態で出土している。右下肢の上に左下肢がのった状態で出土しており、左踵骨は左寛骨の南側に近接した位置から出土している。左右大腿骨骨頭の間隔は5センチ程度である。

以上の出土状況から、本個体は頭位を北にし顔面を南に向けた右側臥屈葬と推定される。

3 人骨所見

蒲船津西ノ内遺跡3次調査1号人骨

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くなく、肋骨・椎骨片・長管骨片が多数遺存している。

〔年齢性別〕年齢・性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

蒲船津西ノ内遺跡3次調査2号人骨

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くなく、頭蓋片及び長管骨片が遺存しているのみである。

頭蓋骨は、左右頭頂骨片、左上顎骨と下顎骨の歯槽付近片のほか部位同定困難な破片が遺存している。歯牙も一部残存しており、残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

$\begin{array}{cccccccc} / & / & / & / & / & C & / & / \\ / & / & / & / & / & / & / & / \end{array}$	$\begin{array}{cccccccc} I^1 & I^2 & C & P^1 & P^2 & M^1 & / & / \\ / & / & C & P_1 & P_2 & M_1 & / & / \end{array}$
--	--

歯牙咬耗度は、枡原(1957)の2°bである。上肢骨は右上腕骨骨体部片、遠位端片が遺存している。下肢骨は左右大腿骨骨体部が遺存しており大腿骨の粗線は発達している。この他にも長管骨片が多数遺存している。

〔年齢性別〕年齢は歯牙咬耗度から熟年と推定される。性別は、大腿骨粗線が発達していることから男性と推定される。

蒲船津西ノ内遺跡3次調査13号近世墓出土人骨

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くなく、肩甲骨片及び寛骨片が遺存しているのみである。

〔年齢性別〕年齢・性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

蒲船津西ノ内遺跡3次調査16号近世墓出土人骨

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くない。本個体は左脛骨の脛骨粗面付近片および部位同定困難な破片が遺存しているのみである。

〔年齢性別〕年齢・性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

蒲船津西ノ内遺跡3次ST-77号墓出土人骨

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くない。本個体は頭蓋片及び椎骨・肋骨、不明長管骨片が遺存しているのみである。頭蓋骨は、前頭骨の左眼窩上縁付近片、側頭骨の左右外耳道付近片、後頭骨の外後頭隆起付近片が遺存している。下顎のオトガイ付近片が遺存している。残存している下顎左右側切歯・中切歯の歯槽窩はすべて閉鎖している。外後頭隆起・乳様突起は発達している。

下肢骨は左右不明大腿骨片が遺存しており、この他にも上肢及び下肢と推定される長管骨片が多数遺存している。

〔年齢・性別〕年齢及び歯槽の閉鎖状況から熟年後半以上と推定される。性別は、外後頭隆起及び乳様突起が発達していることから男性と推定される。

蒲船津西ノ内遺跡3次ST-78号墓出土人骨

〔保存状態〕本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、前頭骨の左眼窩上縁付近片、左右頭頂骨のアステリオン付近片および左右側頭骨の乳様突起付近片、頭蓋底付近を除く後頭骨片が遺存している。乳様突起および外後頭隆起は発達していない。下顎骨は下顎体の右第一小臼歯から左大歯にかけて遺存しており、左右犬歯部以外の歯槽高はすべて閉鎖している。

軀幹骨は左右肋骨および椎骨が遺存している。上肢骨は左上腕骨・橈骨・尺骨の骨体部が遺存している。下肢骨は左右寛骨片及び左右大腿骨・脛骨・腓骨骨体部片が遺存している。

〔年齢・性別〕年齢は歯槽の閉鎖状況から熟年後半以上と推定される。性別は、外後頭隆起及び乳様突起が発達していないことから女性と推定される。

〔特記事項〕左右脛骨に軽度の骨膜炎の所見が見られる。

蒲船津西ノ内遺跡3次調査93号近世墓出土人骨

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くない。本個体側頭骨の乳様突起から外耳付近の破片、後頭骨の外後頭隆起付近片が遺存している。乳様突起の基部の厚みは厚い。

上肢骨は右肩甲骨の関節窩、肩峰付近片右上腕骨骨体部が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達している。

下肢骨は右大腿骨の近位部及び骨体部が遺存している。大腿骨の粗線はやや発達している。

〔年齢・性別〕年齢は大腿骨の骨端が癒合していることから成人と推定される。性別は上腕骨三角筋粗面・大腿骨粗線が発達しており乳様突起基部の厚みも厚いことから男性と判定される。

蒲船津西ノ内遺跡3次調査南東端近世墓出土人骨

〔保存状態〕本個体の保存状態は比較的良好である。頭蓋は、左頬骨・左上顎骨および頭蓋底を除いた部分が遺存している。外後頭隆起及び乳様突起は発達している。歯牙も残存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	C	○	P ²	M ¹	M ²	M ³
○	○	○	P ₂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	P ₂	M ₁	×	×

歯牙咬耗度は、橋原(1957)の2°aである。

軀幹骨は軸椎および頸椎片が遺存している。

上肢骨は、遠位端を除く右上腕骨が遺存している。三角筋粗面は発達している。

〔性別・年齢〕性別は乳様突起および外後頭隆起、上腕骨三角筋粗面が発達していることから男性と判定される。年齢は歯牙咬耗度から熟年と推定される。

蒲船津西ノ内遺跡3次調査 番外人骨

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くなく、頭蓋片及び長管骨片が遺存しているのみである。

頭蓋骨は、後頭骨の外後頭隆起付近および下顎骨の左下顎頭、左オトガイ孔付近片、右下顎角付近が遺存している。この他にも部位同定困難な破片が多数遺存している。外後頭隆起は発達している。歯牙は右下顎第二小臼歯、第一大臼歯が遺存しており、この他に左右不明下顎M3も遺存している。歯牙咬耗度は、橋原(1957)の3°である。

軀幹骨は環椎・軸椎および頸椎1点、胸椎4点が遺存している。この他にも多数の肋骨片が遺存

している。上肢骨は右鎖骨肩峰端と左鎖骨胸骨端付近および左右肩甲骨の関節窩付近が遺存している。下肢骨は左大腿骨骨頭付近および外顆付近が遺存している。

なお、本個体は出土遺構等が不明であり以上の出土部位が同一個体に帰属するかどうか不明なため、年齢・性別の判定は行わない。

蒲船津西ノ内遺跡 7 次調査 32 号人骨

〔保存状態〕本個体の保存状態はやや良好である。上肢骨は、右肩甲骨の肩峰基部付近片、左上腕骨骨体部、遠位端を除く右橈骨、左尺骨・橈骨骨体部が遺存している。三角筋粗面はやや発達している。下肢骨は、左右大腿骨骨体部、左右脛骨および腓骨の骨体部が遺存している。大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達していない。

〔年齢・性別〕年齢は、右橈骨近位端が癒合していること及び下肢骨の骨体部の厚さから成人と推定される。性別は、三角筋粗面はやや発達しているものの、大腿骨粗線および脛骨ヒラメ筋線は発達していないことから、女性と判定される。

下百町神の前遺跡 3 次調査 ST-12 号人骨

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良好である。頭蓋骨は顔面頭蓋・頭蓋底を除いた部分が遺存しており、体部骨は頸椎・肋骨・手足の指骨の一部を除いてほぼ完存している。上腕骨三角筋粗面・大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達しており、大坐骨切痕角は小さい。

〔性別・年齢〕年齢は耳状面および恥骨結合面、歯牙咬耗度から熟年後半以上と推定される。性別は大坐骨切痕角および四肢の発達状態から男性と判定される。

〔特記事項〕当該人骨の筋付着部は、全身どの部位も概して発達している。

上肢で観察できた部分としては、左上腕骨の大胸筋付着部である大結節後、三角筋粗面、左右尺骨の尺骨粗面、左右橈骨の橈骨粗面のどれも明瞭な発達が見られた。しかし肋鎖靭帯圧痕は左右ともにはほとんど発達していない。一方、下肢骨は大腿骨の内側広筋付着部・粗線・内転筋結節、脛骨のヒラメ筋線の発達が明瞭であり、これらに付着する筋の発達が想定される。特にヒラメ筋線の後方への突出は著しい。ヒラメ筋は足関節底屈に作用する筋であり、歩行、とくにぬかるんだ・足場の悪い場所で足を上方に引き上げる動きに作用する筋である。一方で、脛骨背面に付着する後脛骨筋・長趾屈筋の付着部の発達は顕著でない。下腿において後脛骨筋と長趾屈筋よりもヒラメ筋のほうが筋発達が明瞭という傾向を示す集団としては弥生時代の木桶農耕適応地域の諸集団があげられ、一方でこの逆の筋発達パターンを示すのは縄文時代の各集団である(米元 2016ab)。しかし、弥生時代の、すなわち水田での作業において発達する重要な部位として腸腰筋の付着部も指摘されており、本人骨ではこの部分が観察できないため、このパターンから行動の類似を確定することはできない。

しかし、最初に述べたようにこの人骨の筋発達は基本的にはどの部位も極めて明瞭であり、活動負荷が高かったことが示唆される。

下百町神の前遺跡 3 次調査 ST-14 号人骨

〔保存状態〕本個体の保存状態は良くない。頭蓋骨は左ラムダ縫合付近の後頭骨片が遺存している。軀幹骨は環椎及び軸椎の歯突起付近が遺存している。下肢骨は左右不明中足骨片が遺存している。この他にも部位同定困難な不明骨片が複数遺存している。

〔年齢・性別〕年齢・性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

下百町神の前遺跡3次調査 S-44号人骨

〔保存状態〕本個体の保存状態は良くない。

頭蓋骨は前頭骨の右眼窩上縁付近および後頭骨の外後頭隆起付近が遺存している。この他に下顎左第二小臼歯が遺存している。歯牙咬耗度は、栃原（1957）の1⁺cである。

軀幹骨は軸椎の歯突起付近および胸椎椎体片が複数、仙骨片が遺存している。

上肢は右鎖骨頰骨端、左右不明肩甲骨片、左右上腕骨骨体部、右尺骨肘頭付近が遺存している。

下肢骨は右大腿骨骨体部後面、左脛骨骨体部が遺存している。大腿骨粗線は発達している。

〔年齢・性別〕年齢は歯牙咬耗度及び大腿骨の厚みから成人と推定される。性別は、大腿骨粗線が発達していることから男性と判定される。

〔特記事項〕胸椎椎体は楔状を呈する。

下百町神の前遺跡3次調査 S-49号人骨

〔保存状態〕本個体の保存状態は良くなく、左肩甲骨と左第一中足骨・基節骨が遺存している。

〔年齢・性別〕年齢・性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

〔特記事項〕左第一中足骨遠位外側にリッピングが見られる。

下百町屋敷の内遺跡3次調査 21号近世墓出土人骨

〔保存状態〕本個体の保存状態は良くなく、左右大腿骨骨体部が遺存しているのみである。大腿骨の粗線は発達している。

〔年齢・性別〕年齢は大腿骨の厚さから成人の可能性が高い。性別は大腿骨粗線が発達していることから男性と判定される。

4 おわりに

蒲船津西ノ内遺跡・下百町神の前遺跡・下百町屋敷の内遺跡において中世～近世の人骨が出土した。当該地域・時期の出土人骨の事例は少なく、今後も出土人骨の増加が望まれる。

謝辞

本報告を行うにあたり、柳川市教育委員会の堤伴治氏・橋本清美氏に多くのご配慮を賜りました。深謝いたします。

参考文献

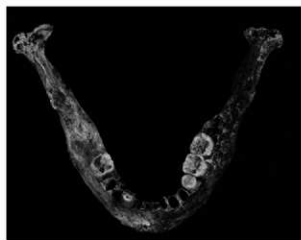
- Buikstra, J. E. Ubelaker, D. H (1994) Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains. *Fayetteville, Arkansas: Arkansas Archaeological Survey Report Number 44.*
- 九州大学医学部解剖第二講座編 (1988) 日本民族・文化の生成2. 九州大学医学部解剖第二講座所蔵個人骨資料集成、六興出版。
- Lovejoy, C. Owen, R. S. Meindl, R. Mensforth, and T. J. Barton (1985) Multifactorial Determination of Skeletal age at Death. *American Journal of Physical Anthropology* 68.
- Martin-Saller (1957) *Lehrbuch der Anthropologie*. Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- Sakaue K. (2006) Application of suchey-brooks system of pubicage estimation to recent Japanese skeletal material. *Anthropological Science*, 114.
- 米元史織 2016 筋付着部の発達度からみる縄文時代の生業様式の地域的多様性. 九州大学総合研究博物館研究報告, 14.
- 米元史織 2016 筋付着部の発達度からみる弥生時代の身体活動の地域的多様性. 考古学は科学か、田中良之先生追悼論文集.



下百町神の前遺跡3次調査ST-12号 頭蓋骨



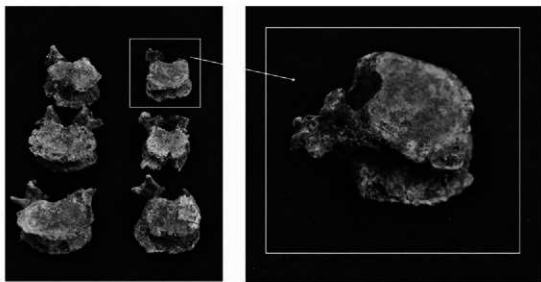
下百町神の前遺跡3次調査ST-12号 上肢骨



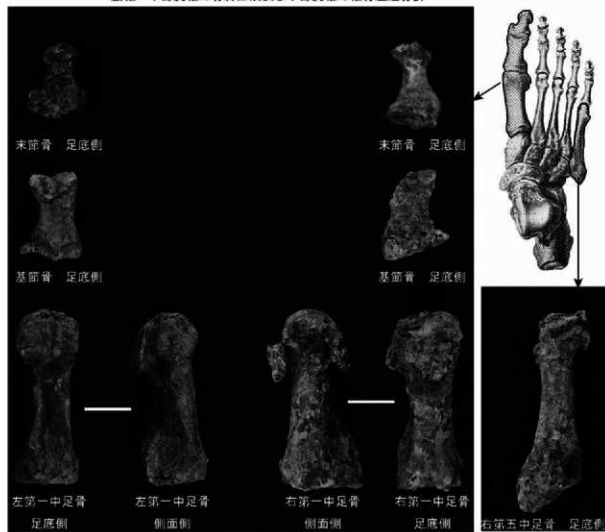
下百町神の前遺跡3次調査ST-44 下顎骨



下百町神の前遺跡3次調査ST-12号 下肢骨



腰椎・下部胸椎の骨棘形成及び下部胸椎の椎骨圧迫骨折



趾骨の骨棘形成

下百町神の前遺跡3次調査ST-12号 骨病変

VI おわりに

今回の報告では、平成19年度から24年度にかけて柳川市教育委員会が発掘調査を実施した、柳川駅東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査のうち、下百町鬼童遺跡第1次～第3次調査と下百町屋敷の内遺跡第1次～第3次、下百町神の前遺跡第2次調査～第4調査の、合計9調査区の調査成果について掲載した。調査成果の詳細は前述のとおりであるが、ここでは今回の報告及び前年度に刊行を行った下百町遺跡群Iを併せた概括を行う。

1) 下百町遺跡群の概要

本遺跡の調査において検出した主な遺構は、土坑、井戸、溝、掘立柱建物、ピット等を検出した。土坑の形は、長方形、方形、楕円形を呈し、深さがそれほど深くない土坑については廃棄土坑と考えられる。また、土坑の中に円形を呈し、深さが深く壁面が垂直に立ち上がったものについては、井戸の可能性を考える。その他に、土坑の用途として土坑墓として用いられたものも若干存在する。

溝については、大小の様々な大きさのものを検出した。大型の溝については、居住域を区画するための区画溝と、居住域の排水溝の機能を持つ溝の可能性が考えられる。この、大型溝については、必ずと言って良いほど、どの調査区からも検出するがこれは、低地である柳川地域で集落を営む場合には、土地の乾地化が必須条件だったからであろうと考えられる。また、大型の溝の中には、規模が大きく形状の整っていないものがあるが、これは自然流路の可能性もある。小型の溝については、居住区の中を区切る溝としての機能を持つものと、排水機能をもつものがあると考えられる。

ピットについては、区画溝で区切られた空間の中から多く検出する。用途としては、柱穴の可能性が考えられるが、掘立柱建物と考えられるものは少ない。

今回の出土遺物は、土師器、瓦器、陶磁器、陶器、石製品、木製品、金属器を出土した。土師器の主な器種としては、皿や坏が確認できる。瓦器の主な器種としては、塊、羽釜、鍋、播鉢、火鉢等が確認できる。鍋については、肥前系の物も確認できる。陶磁器については、青磁や白磁などの輸入陶磁器の碗や皿等が出土しており、青磁については、龍泉窯系、同安窯系のものが確認できる。また、肥前系の染付などの近世陶磁器も出土している。陶器については、皿、播鉢等が出土している。播鉢については、東播系、備前系のものを確認できる。

石製品の主な出土遺物としては、滑石製の石鍋、硯、五輪塔等が出土している。

木製品については、桶、杵、井戸杵が出土している。

金属製品については、銅銭が出土している。

今回の調査の中で最も時期が遡るのが、蒲船津西古賀遺跡SK-11である。それほどまとまった遺物量があった訳ではないが、12世紀後半に位置付けられるものがある。その後13世紀の遺構や遺物は、蒲船津西ノ内遺跡第1次、3次～6次、8次調査区で確認されている。その後、14世紀から17世紀まで集落に伴う遺構や遺物が続いている。

2) 遺構の特徴

本遺跡における遺構の特徴としては、大型の溝を用いた区画を行った空間の中に、土坑や小穴など集落を形成する遺構が展開されている。区画溝については、低地である柳川地域で集落を営む場合には、土

地の乾地化が必須条件だったからであろう。今回は土坑を中心に深い遺構を確認することができたが、建物跡は1基のみの確認であった。恐らく後世の削平等によって、地表面に近い浅い遺構は残らなかったものと思われる。

3) 遺物の特徴

今回の調査で出土した遺物は、全体的に見れば、13世紀から17世紀の遺物がほぼ途切れることなく出土しており。今回の出土遺物は、土師器、瓦器、陶磁器、陶器、石製品、木製品、金属器等の集落に付随する遺物を出土した。

4) 遺跡の性格

全体的に見れば、13世紀から17世紀の遺物がほぼ途切れることなく出土しており。従来特に中世後期から戦国期の遺跡に恵まれていなかった福岡県においては、寄与するところは大きい。今回の調査成果は、地域的に見れば下百町地区の集落形成過程を知ることができる貴重な成果となり、また近世柳川藩の前段階の遺跡として、あるいは柳川城下町との比較資料として重要な成果となった。大きく見れば、中世後期から戦国期の遺跡が少なかった福岡県にとって、良好な調査事例を加えることとなった貴重な調査成果となった。

【引用・参考文献】

- 『角川日本地名大辞典 40 福岡県』1988 角川書店
『大川市誌』1977 大川市
『磯島フネ遺跡』柳川市文化財調査報告書 第1集 2006 柳川市教育委員会
『東蒲池大内曲り遺跡』柳川市文化財調査報告書 第2集 柳川市教育委員会
『徳益八枝遺跡』柳川市文化財調査報告書 第6集 2008 柳川市教育委員会
『京町遺跡』柳川市文化財調査報告書 第7集 2009 柳川市教育委員会
『蓮池遺跡』柳川市文化財調査報告書 第9集 2015 柳川市教育委員会
『上町遺跡 第1次調査』柳川市文化財調査報告書 第10集 2015 柳川市教育委員会
『下百町遺跡群Ⅰ』柳川駅東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第1集 柳川市文化財調査報告書 第11集 2016 柳川市教育委員会
『下木佐木安堂遺跡・東蒲池蓮池遺跡・西蒲池池田遺跡』福岡県文化財調査報告書 第236集 2012 九州歴史資料館
『西蒲池池田遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書 第239集 2013 九州歴史資料館
『西蒲池門前遺跡』福岡県文化財調査報告書 第240集 2013 九州歴史資料館
『西蒲池池田遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書 第243集 2014 九州歴史資料館
『東蒲池規町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 2005 福岡県教育委員会
『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集 2007 福岡県教育委員会
『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集 2007 福岡県教育委員会
『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集 2009 福岡県教育委員会
『蒲船津江頭遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集 2009 福岡県教育委員会
『蒲船津江頭遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集 2010 福岡県教育委員会
『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第10集 2011 福岡県教育委員会
『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第12集 2012 九州歴史資料館

图 版



1. 下百町鬼童遺跡第1次調査区遠景
(南上空から)



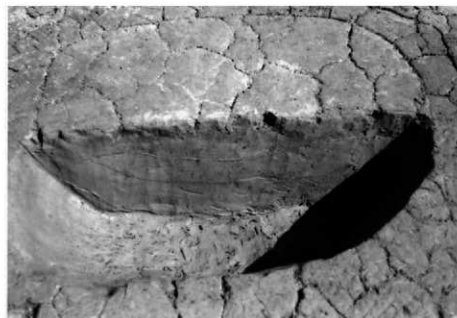
2. 下百町鬼童遺跡第1次調査区全景
(南上空から)



1. 重機による表土掘削



2. 西側表土掘削状況（北から）



3. SK-7土層（西から）

1. SK-7 (西から)



2. SK-8 (西から)



3. SK-22 (北から)





1. SK-23 (北から)



2. SK-24 土層 (北から)



3. SD-1 土層 (東から)

1. SD-4 (北から)



2. SD-9土層 (南西から)



3. SD-13土層 (東から)





1. SD-28 (東から)



2. SD-31 土層 (西から)



3. SD-32 土層 (西から)



1. 下百町鬼童遺跡第二次調査区全景
(南上空から)



2. SK-1 (北東から)



3. SK-2 (東から)



1. SK-6 (北から)

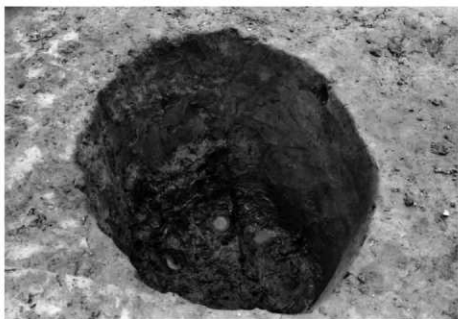


2. SK-7 (東から)



3. SK-9 (北西から)

1. SK-11 (東から)



2. SK-14 (北から)



3. SK-15 (南から)





1. SK-20 (南から)



2. SK-25 (北から)



3. SK-26 (東から)

1. SK-27 (南から)

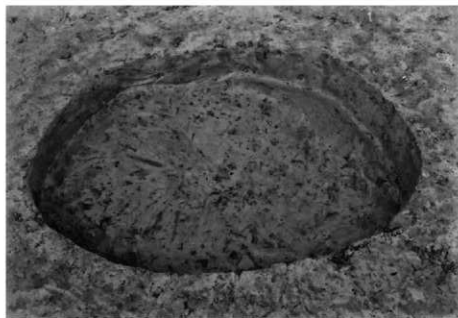


2. SK-28 (南から)



3. SK-29 (南から)

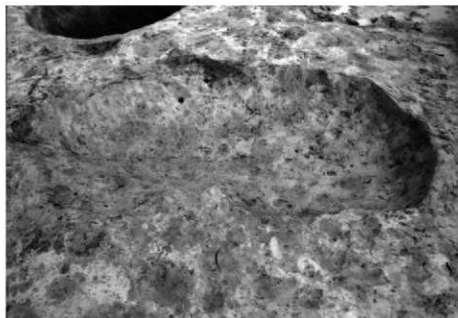




1. SK-30 (南から)



2. SK-34 (東から)



3. SK-35 (西から)

1. SK-36 (北から)



2. SK-38 (南から)



3. SK-42 (北から)





1. SK-45 (西から)



2. SK-51 (東から)



3. SK-55 (北から)

1. SK-56 (南から)



2. SK-57 (東から)



3. SK-59 (西から)





1. SD-12 (東から)



2. SD-12 土層 (東から)

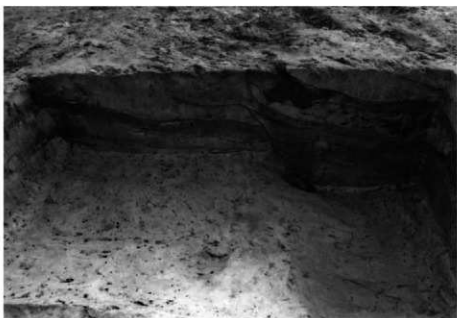


3. SD-18 土層 (東から)

1. SD-21土層 (東から)



2. SD-23・44 (北から)



3. SD-44土層 (北から)





1. SD-44 竪井出土状況 (南から)



2. SD-46 土層 (北から)



3. SD-47 土層 (西から)

1. SD-53土層 (東から)



2. SA-43 (南から)





1. SA-43 礎石 P2



2. SA-43 礎石 P3



3. 中央区整地層獣骨出土状況
(北西から)

1. 下百町鬼童遺跡第3次調査区遠景
(南上空から)



2. 下百町鬼童遺跡第3次調査区全景
(南上空から)





1. 調査区全景（西から）



2. SK-3（北から）



3. SD-1（北から）

1. SD-4土層 (東から)



2. SD-4 (北東から)



3. SD-6土層 (北から)





1. 下百町屋敷の内遺跡第1次調査区
全景（北上空から）



2. 下百町屋敷の内遺跡第1次調査区
南側全景（北上空から）

1. SK-7 (南から)



2. SK-13 (北から)



3. SK-14 (北から)





1. SK-16 (南から)



2. SK-20 (北から)



3. SK-21 (北から)

1. SK-22 (北から)



2. SK-23 (北から)



3. SD-6 土層 (南東から)





1. 下百町屋敷の内遺跡第2次調査区
全景（西上空から）



2. 下百町屋敷の内遺跡第2次北調査区
全景（東上空から）

1. SK-4 (北から)



2. SK-17 (北から)



3. SK-27 (東から)





1. SK-31 (東から)



2. SK-34 (東から)



3. SK-46 (南から)

1. SK-48 (南から)



2. SK-51 (北東から)



3. SK-52 (南から)





1. SK-56 (南から)



2. SK-69 (南から)



3. SD-2土層 (東から)

1. SD-2五輪塔出土状況（南東から）



2. SD-15土層（東から）



3. SD-33土層断面（東から）





1. SD-39 土層 (北から)



2. SD-41 土層 (東から)



3. SD-43 土層 (東から)



1. 下百町屋敷の内遺跡第3次調査区
全景（北上空から）



2. 調査区全景（南西から）



3. 北側近世・近代墓群（北から）



1. SK-3 (北から)

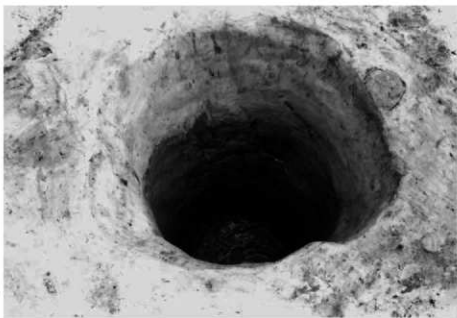


2. SK-15 (西から)



3. SK-23 (東から)

1. SK-24 (北から)



2. SK-26 (西から)



3. SK-28 (西から)





1. SD-1B 区土層 (南東から)



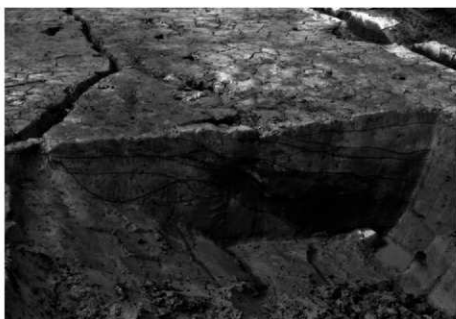
2. SD-1E 区土層 (東から)



3. SD-1F 区土層 (西から)



1. SD-20土層 (西から)



2. SD-30土層 (東から)



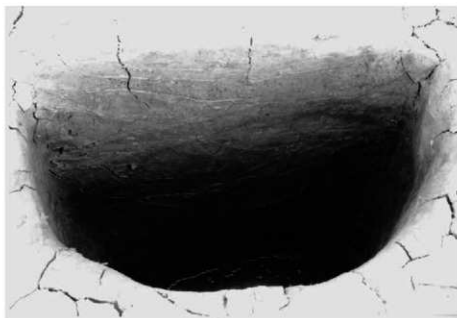
3. SD-30石塔群出土状況



1. 下百町神の前遺跡第2次調査第1区
全景（北上空から）

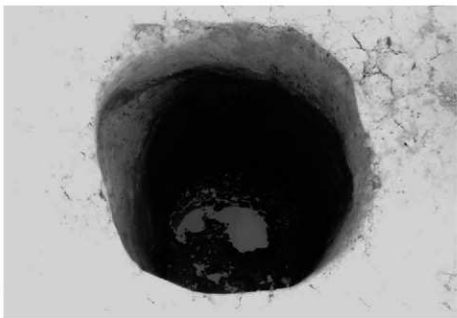


2. 調査区全景（北西から）



3. SK-29 土層（北から）

1. SK-29 (北から)



2. SK-46 (西から)



3. SK-47 (東から)





1. SK-51 (北から)



2. SD-27 土層 (東から)



3. SD-60 土層 (南から)



1. 下百町神の前遺跡第2次調査区第2区全景
(南から)



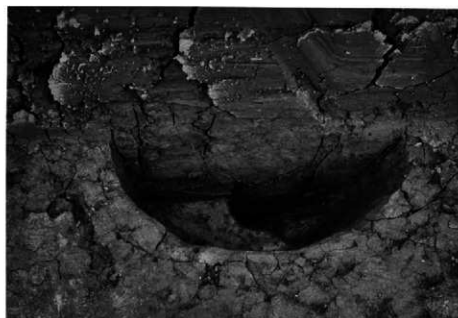
2. 下百町神の前遺跡第2次調査区第2区全景
(北から)



3. SB-22-P-4 (東から)



1. SB-22-P-5 (東から)



2. SB-22-P-7 (東から)



3. SK-7土層 (北から)

1. SK-16 (南西から)



2. SK-20 (南から)



3. SD-23・24土層 (東から)





1. 下百町神の前遺跡第2次調査
第3調査区全景（南東から）



2. SE-16 検出状況（南から）



3. SE-16（南から）

1. SK-6 (北東から)



2. SK-7 (北から)



3. SK-13 (西から)





1. 下百町神の前遺跡第3次調査区
全景（北上空から）



2. 北側調査区全景（南西から）



3. 北側調査区全景（北西から）

1. SB-25 (西から)



2. SB-25 P-22 (南から)



3. SB-25 P-25 (北から)





1. SK-5 (北から)



2. SK-9 (東から)

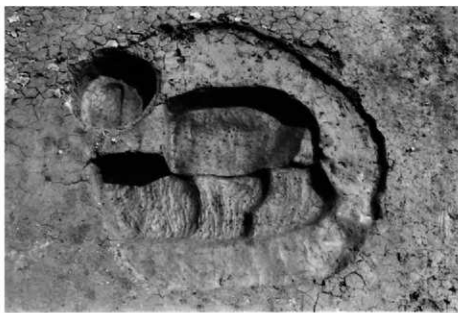


3. SK-17 (北から)

1. SK-30 (西から)



2. SK-32・33 (西から)

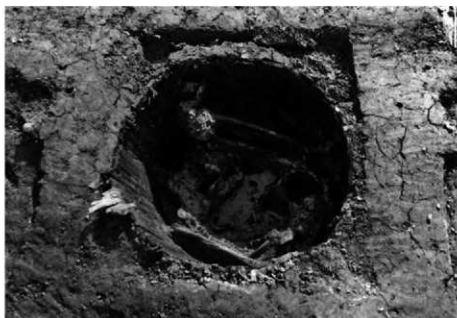


3. SD-34 土層 (南西から)





1. SD-47 土層 (西から)



2. ST-12 (北から)



3. ST-49 (南から)



1. 下百町神の前遺跡第4次調査区
全景（東から）



2. 下百町神の前遺跡第4次調査区
全景（南上空から）



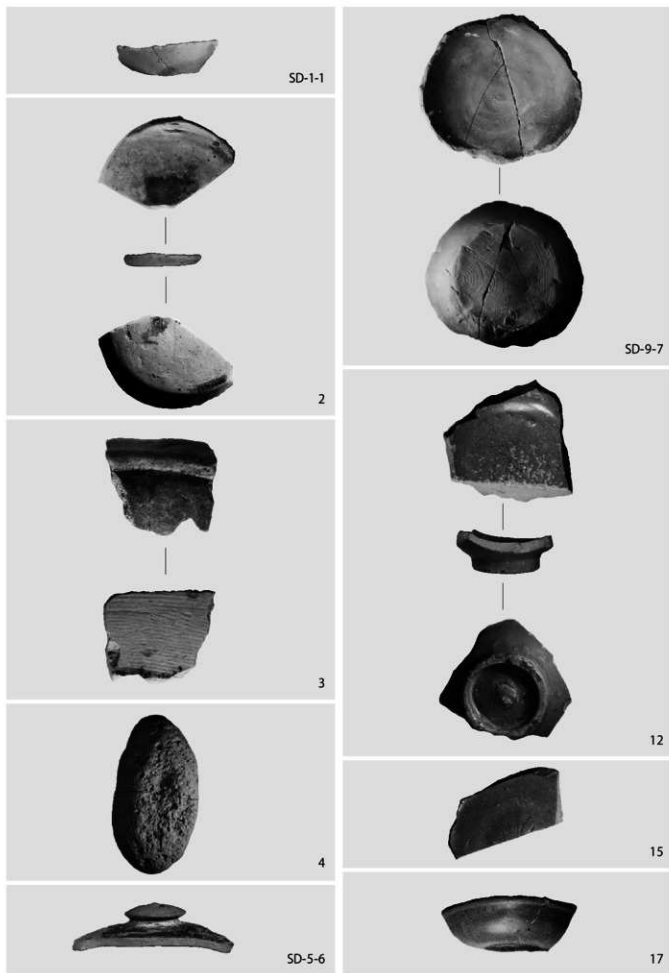
1. 基本土層（西から）



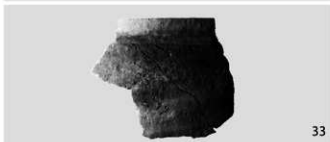
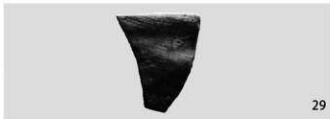
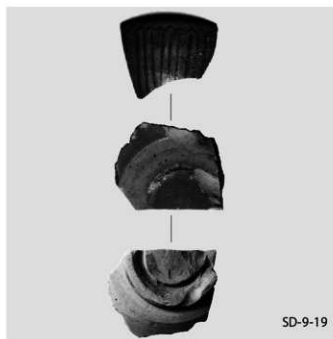
2. SK-5（南から）

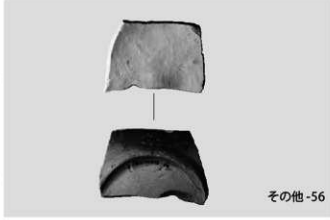
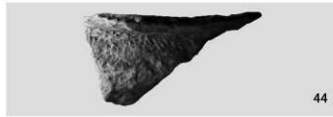
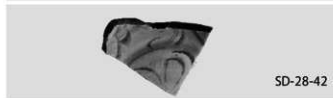
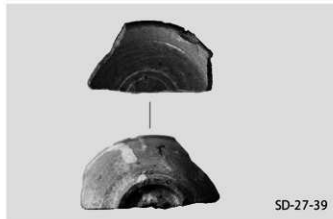


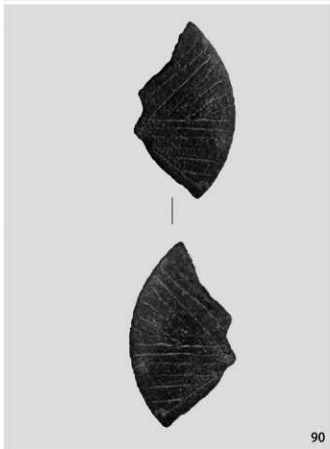
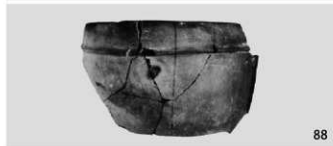
3. SK-14（東から）

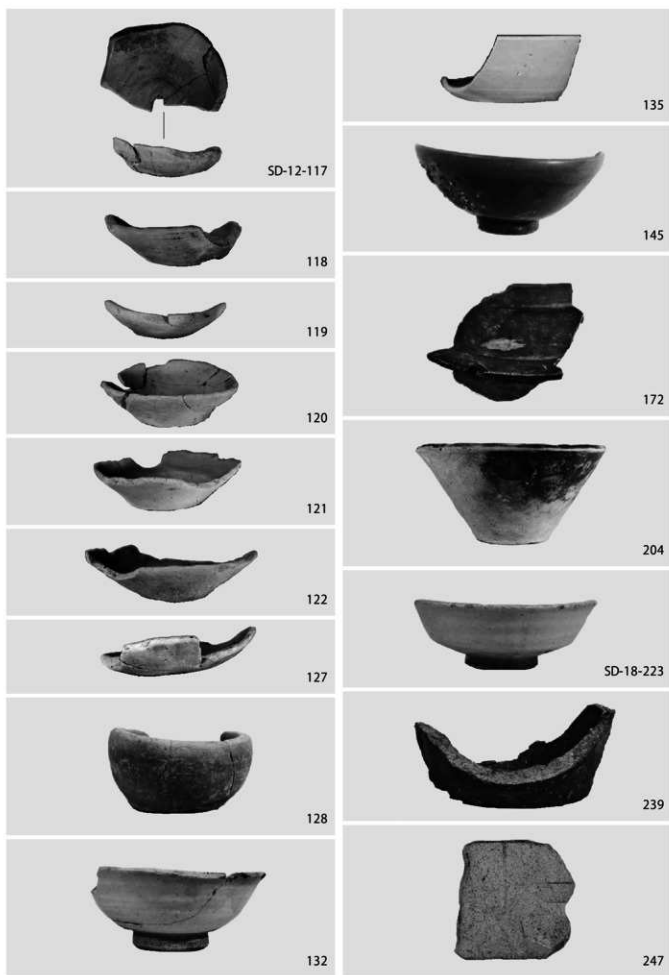


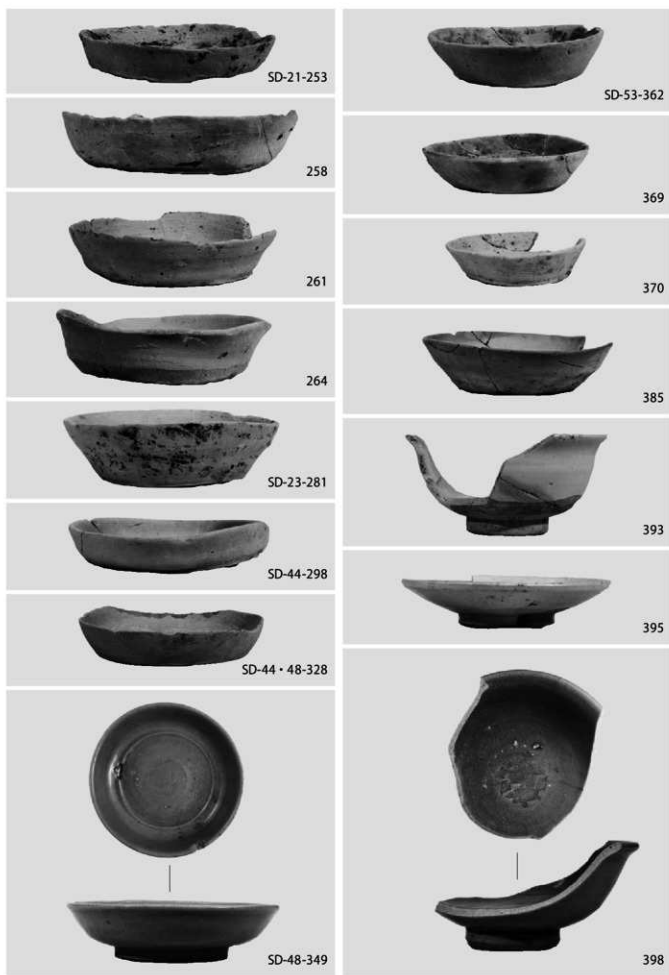
下百町鬼童遺跡第1次調査区出土遺物①

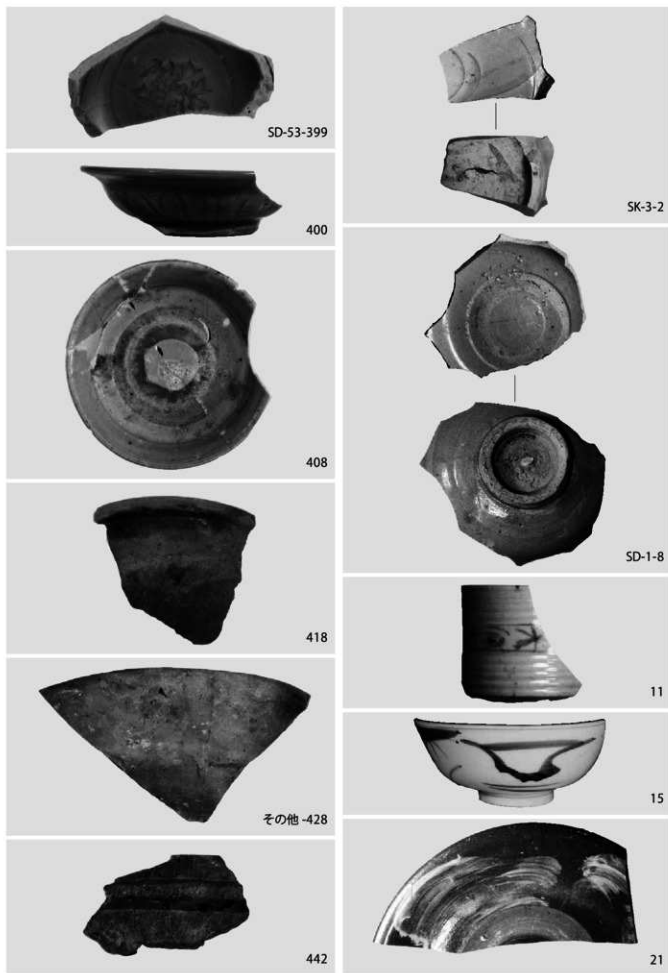




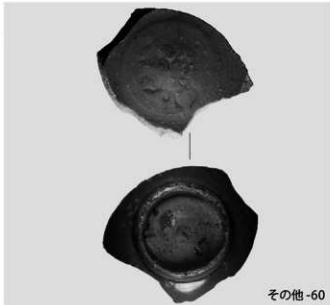
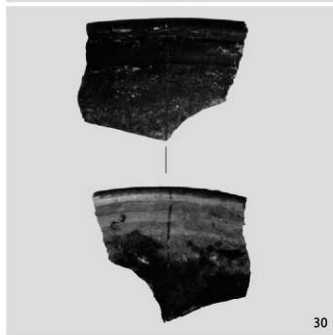


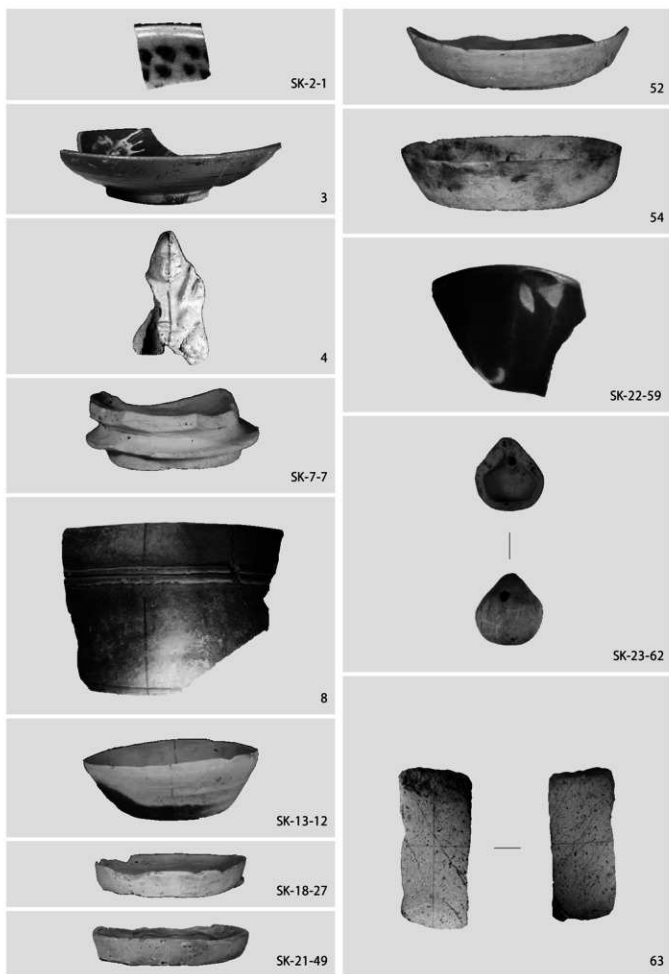


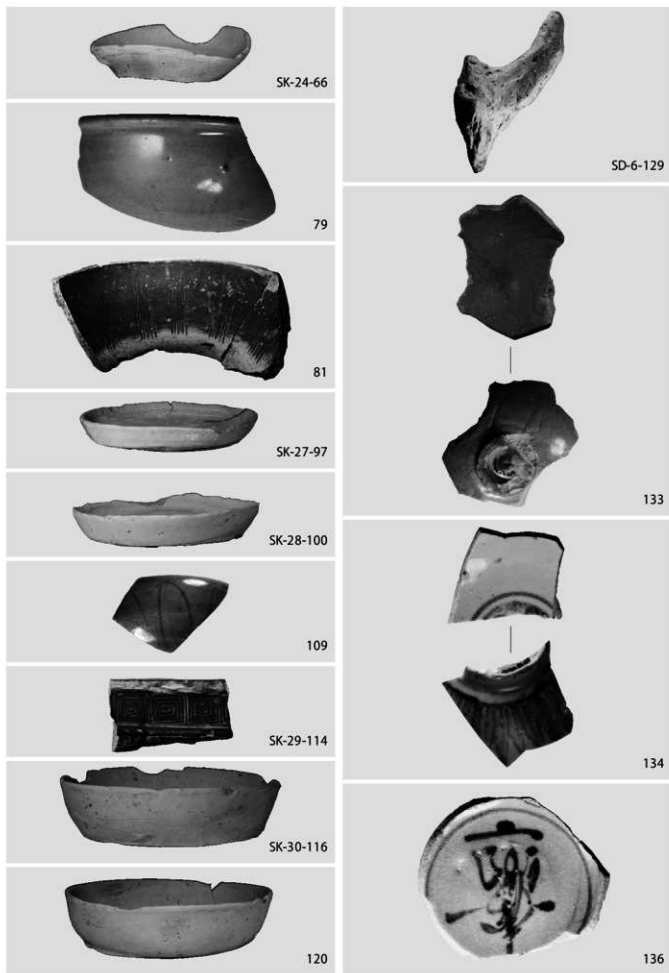


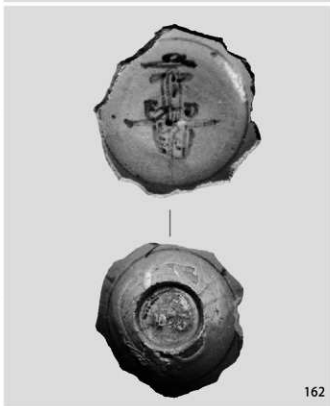
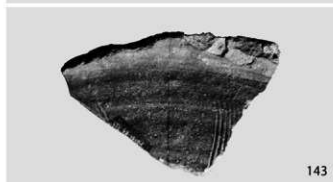
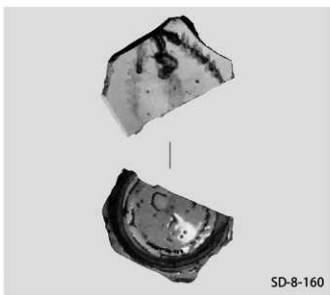
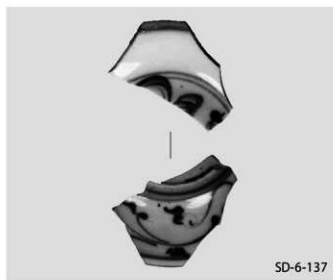


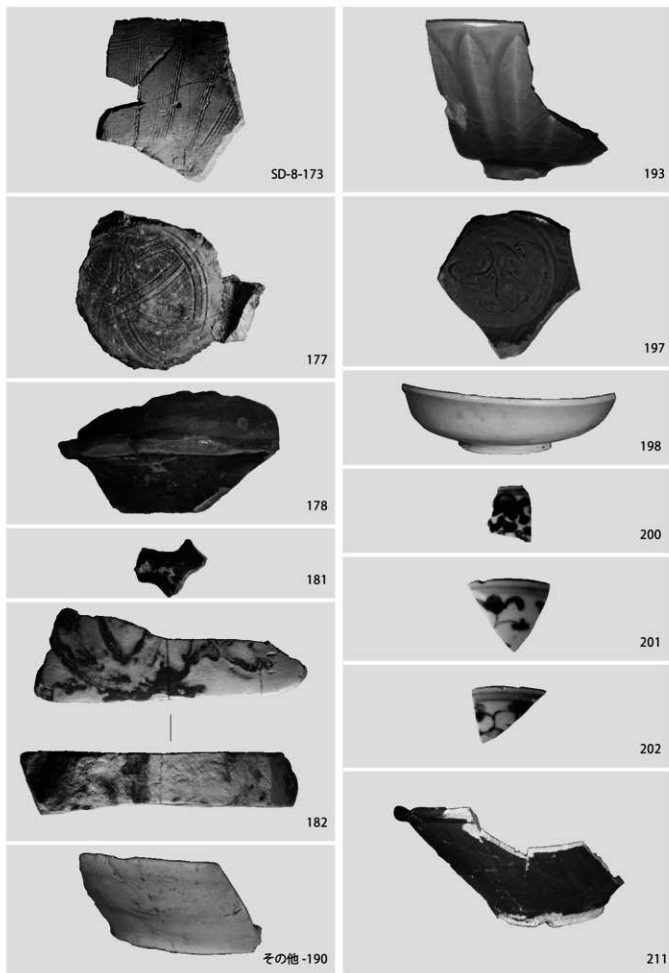
下百町鬼童遺跡第2次調査区出土遺物④・下百町鬼童遺跡第3次調査区出土遺物①



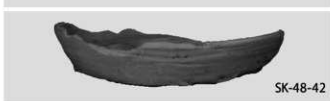
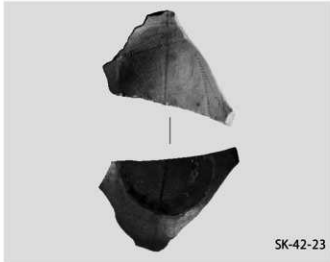
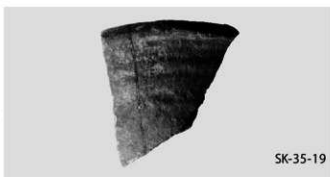
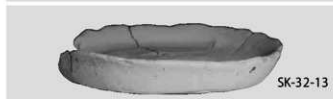
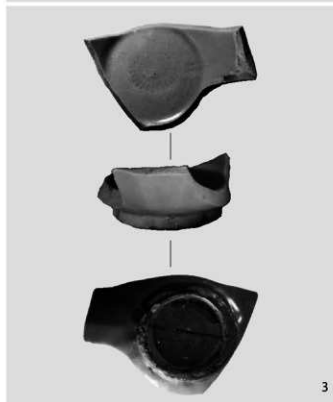


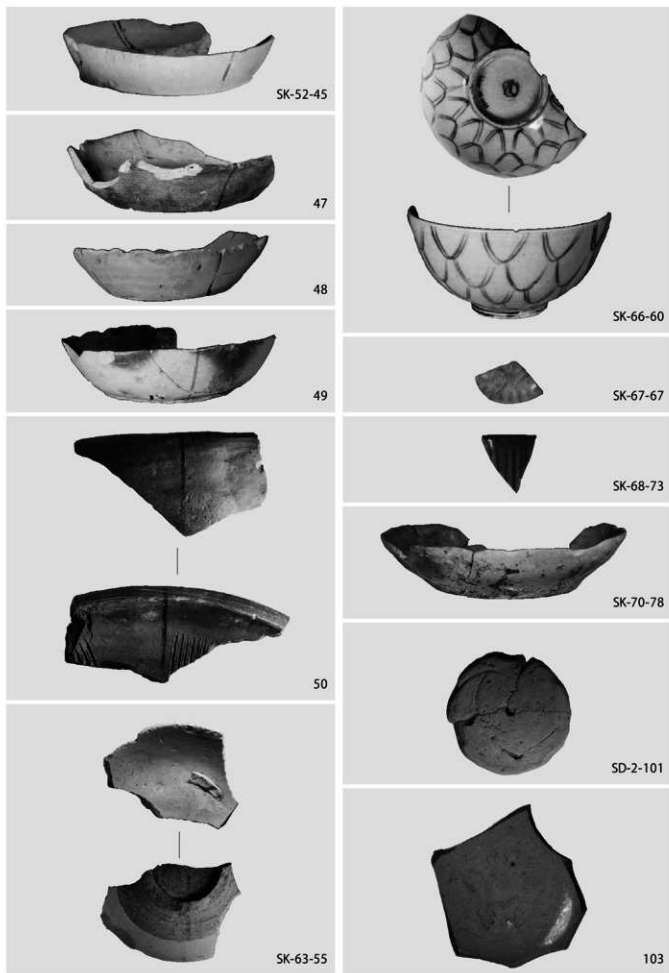


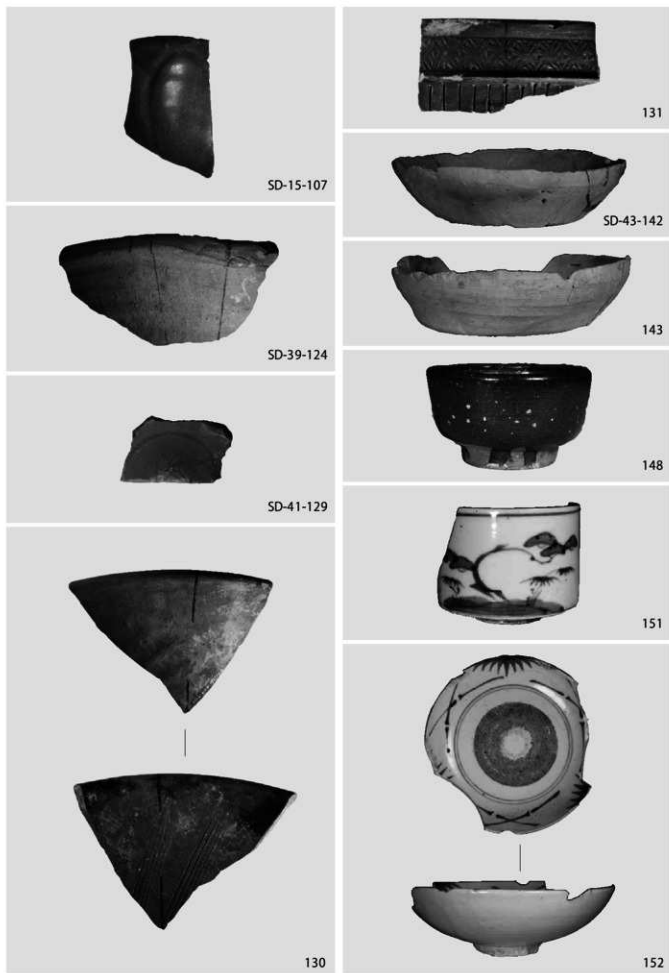




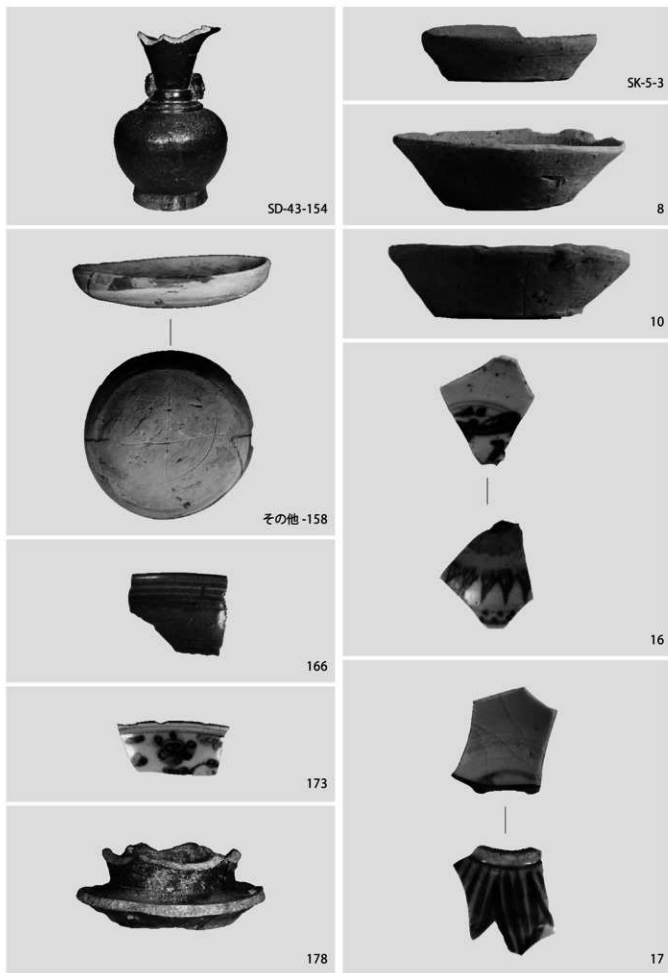
下百町屋敷の内遺跡第1次調査区出土遺物④





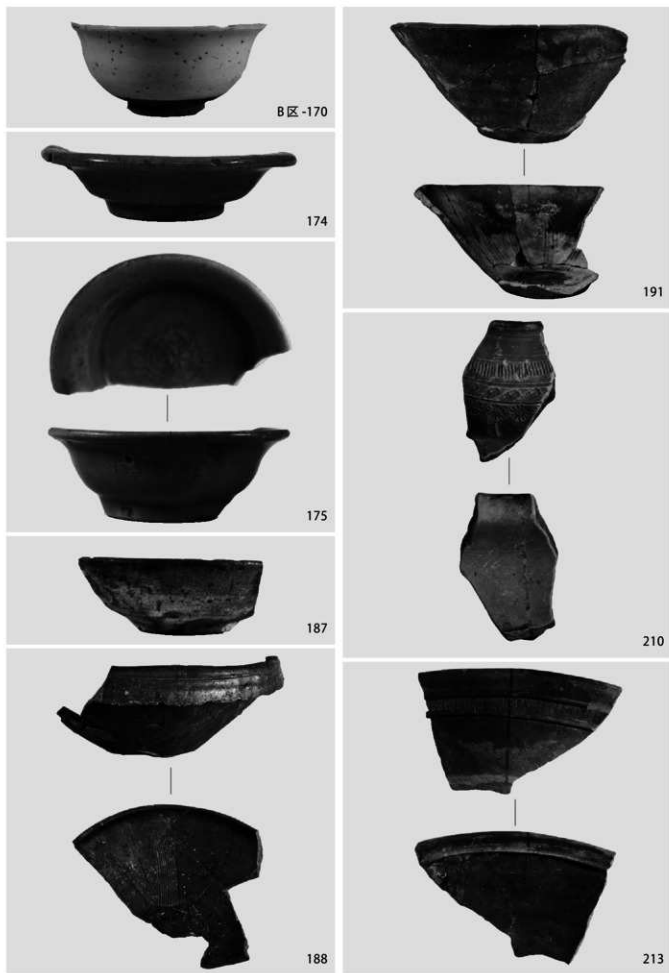


下百町屋敷の内遺跡第2次調査区出土遺物③

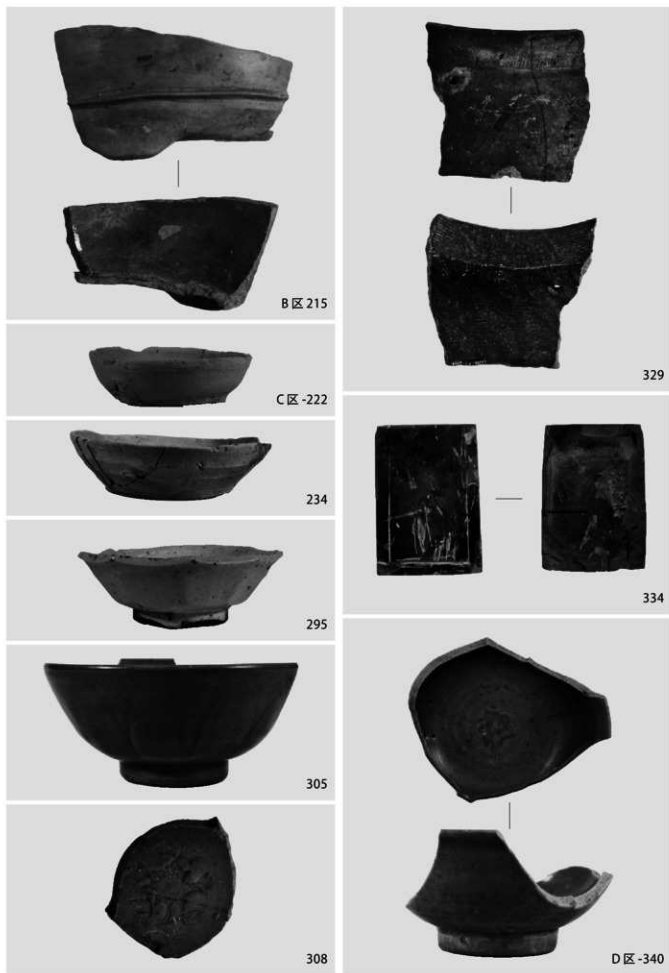


下百町屋敷の内遺跡第2次調査区出土遺物④・下百町屋敷の内遺跡第3次調査区出土遺物①

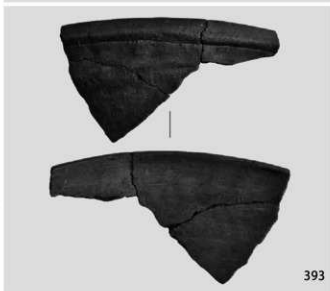
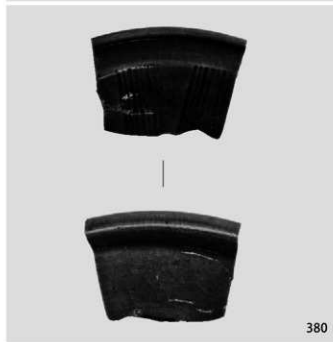


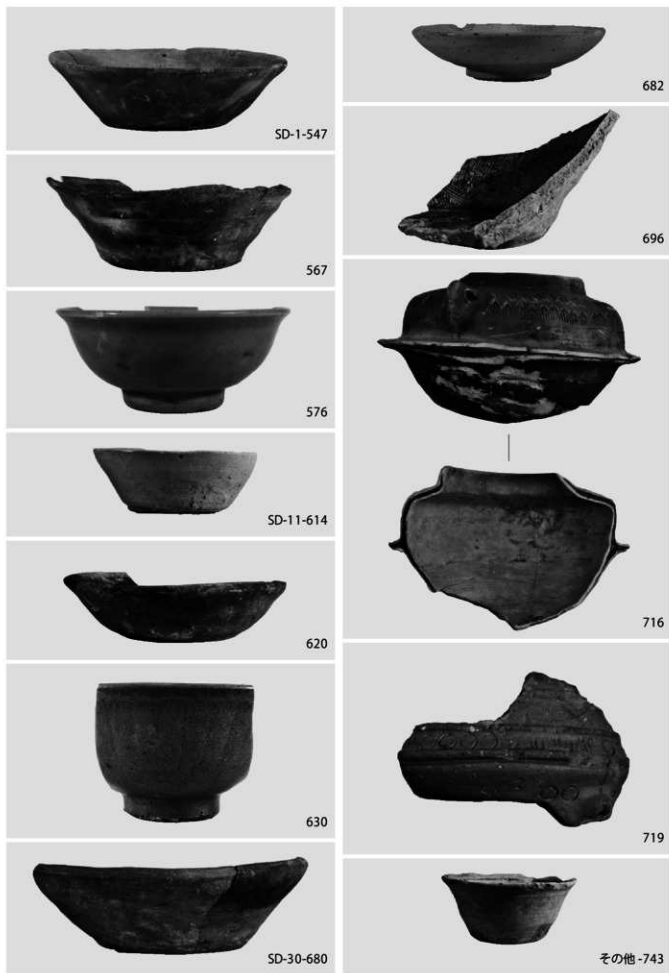


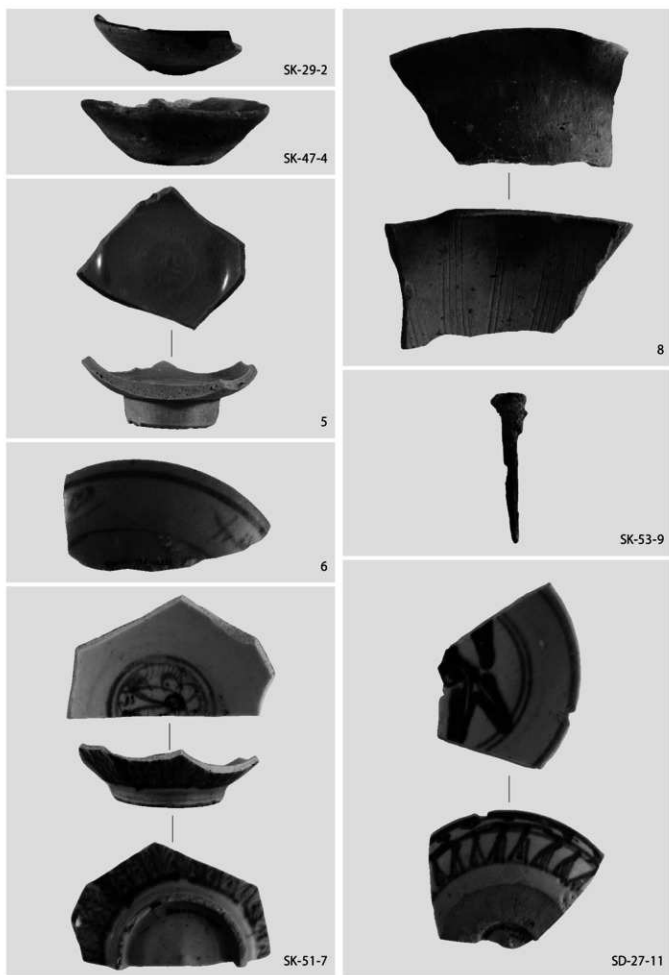
下百町屋敷の内遺跡第3次調査区出土遺物③



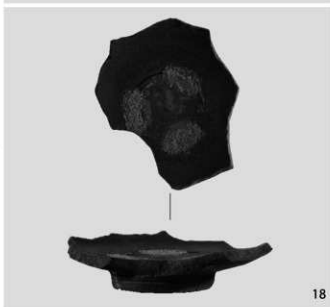
下百町屋敷の内遺跡第3次調査区出土遺物④

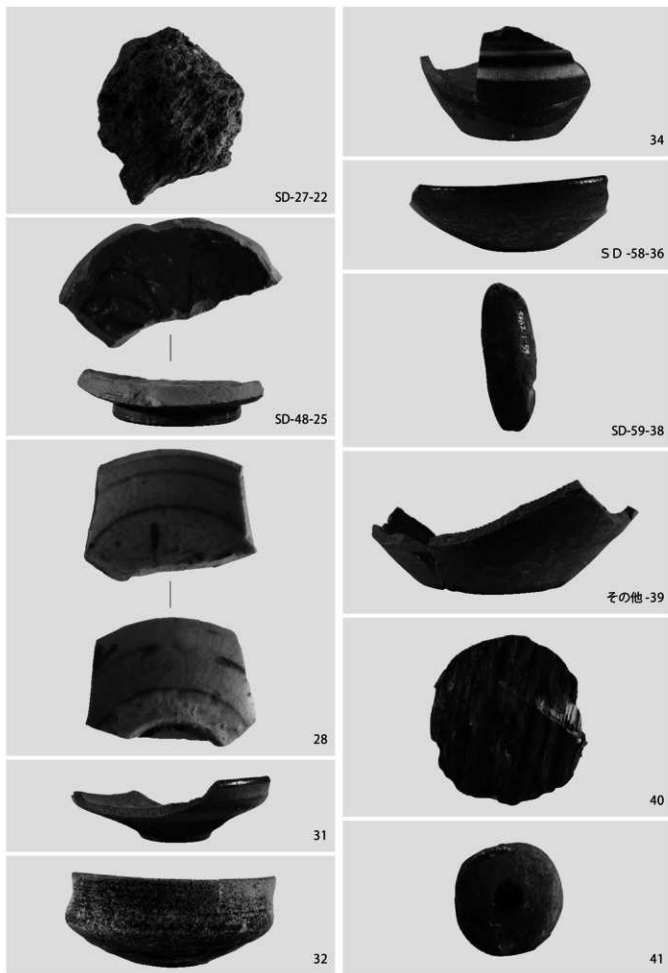


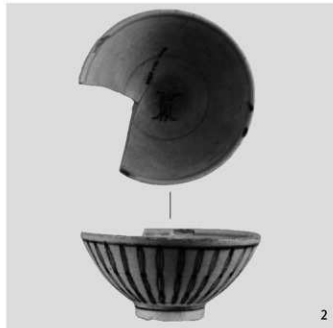


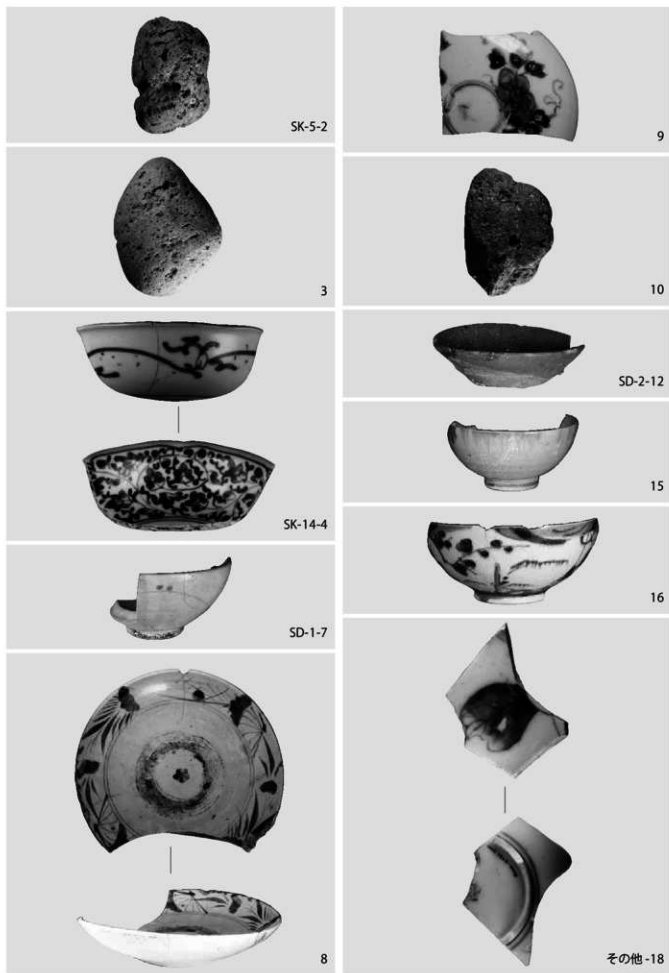


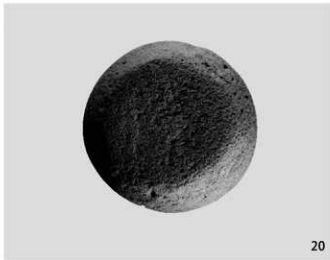
下百町神の前遺跡第2次調査第1区出土遺物①











報告書抄録

ふりがな	やながわえきとうぶとちくかくせいりじぎょうかんけいまいぞうぶんかざいはいくつちょうさほうこくしょ だいにしゅう								
書名	柳川駅東部土地区画整理事業関係係属文化財発掘調査報告書 第2集								
副書名	下百町遺跡群								
巻次	Ⅱ								
シリーズ名	柳川市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第12集								
編著者名	橋本 清美								
編集機関	柳川市教育委員会								
所在地	〒 832-8555 福岡県柳川市三橋町正行 431								
発行年月日	2017年3月31日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査面積	調査原因		
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° ' "	° ° ' "	(㎡)			
しもひゃくちようおんどういせきだいらち 下百町鬼童遺跡第1次	福岡県柳川市三橋町下百町	40207		33° 130' 9" 47"	130° 25' 18"	H19.08.25 H20.01.24	2,570		
しもひゃくちようおんどういせきだいらち 下百町鬼童遺跡第2次				33° 9' 47"	130° 25' 20"	H20.11.09 H20.11.26		2,460	
しもひゃくちようおんどういせきだいらち 下百町鬼童遺跡第3次				33° 9' 48"	130° 25' 18"	H21.05.28 H21.06.25	400		
しもひゃくちようやしきのうちいせきだいらち 下百町屋敷の内遺跡第1次				33° 9' 49"	130° 25' 20"	H20.08.25 H20.10.10		965	
しもひゃくちようやしきのうちいせきだいらち 下百町屋敷の内遺跡第2次				33° 9' 51"	130° 25' 21"	H21.07.09 H22.01.04	1,690		
しもひゃくちようやしきのうちいせきだいらち 下百町屋敷の内遺跡第3次				33° 9' 52"	130° 25' 19"	H21.10.01 H21.03.01		905	
しもひゃくちようかみのまえいせきだいらち 下百町神の前遺跡2次 (1区)、(2区)、(3区)				33° 9' 53"	130° 25' 16"	H22.07.01 H23.02.04	3,335		
しもひゃくちようかみのまえいせきだいらち 下百町神の前遺跡3次				33° 9' 54"	130° 25' 15"	H23.08.05 H23.12.01		1,173	
しもひゃくちようかみのまえだいらち 下百町神の前遺跡4次				33° 9' 54"	130° 25' 14"	H25.3.6 H25.5.30	530		
所収遺跡名				種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	
下百町 鬼童遺跡第1次				集落	中世・戦国・近世	土坑・溝	土師器・須恵器・陶磁器・石製品		
下百町 鬼童遺跡第2次				集落	中世・戦国・近世	土坑・溝・横列	土師器・陶磁器・雑器・土製品		
下百町 鬼童遺跡第3次	集落	中世・近世	土坑・溝	土師器・陶磁器・土製品・石製品					
下百町屋敷の内遺跡第1次	集落	中世	土坑・溝	土師器・陶磁器・石製品					
下百町屋敷の内遺跡第2次	集落	中世・戦国・近世	土坑・溝	土師器・陶磁器・雑器・石製品					
下百町屋敷の内遺跡第3次	集落	中世・戦国・近世	土坑・溝	土師器・陶磁器・雑器・土製品・石製品・金属製品					
下百町神の前遺跡2次	集落	中世・近世・近代	土坑・	土師器・陶磁器・木製品・土製品・鉄製品					
下百町神の前遺跡3次	集落	中世・戦国・近世・近代	土坑・溝・墓	土師器・陶磁器・雑器					
下百町神の前遺跡4次	集落	中世・戦国・近世	土坑・溝	土師器・陶磁器・陶器・石製品・銅銭					
要約	柳川市教育委員会では平成19～25年度に柳川駅東部土地区画整理事業に伴う発掘調査を実施。本書ではそのうち下百町地区の9遺跡を所収。検出した遺構は主に方位に沿って配置される方形区画溝、および区画内に位置する土坑である。出土遺物は中世・戦国期・近世(14世紀～17世紀)の土師器、輸入陶磁器、国産陶磁器、日常雑器をはじめ、石製品や土製品、金属製品、銅銭などがある。近世・近代墓からは磁骨器や陶磁器もある。中世土坑墓からは人骨も見つかった。								

柳川駅東部土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

下百町遺跡群Ⅱ

柳川市文化財調査報告書
第12集

平成29年(2017)3月31日

発行 柳川市教育委員会
〒832-8555 福岡県柳川市三橋町正行431
電話 0944-77-8832

印刷 ダイヤモンド秀巧社印刷㈱
〒812-0064 福岡市東区松田3丁目9-32
電話 092-621-8711